

鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告

1998

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会

序

東大阪市は、古代より栄えた河内の一画を占めています。市内には、旧石器時代から中世にいたる各時代の遺跡が現在約140箇所が確認されています。なかでも、市域の生駒山の山麓には、今回報告します鬼虎川遺跡をはじめ鬼塚遺跡・西ノ辻遺跡など全国的にも著名な弥生時代の大集落が存在し、原始時代の繁栄の様子を今に示しています。

また弥生時代だけではなく、近畿地方では数少ない縄文時代早期の遺物が多量に出土した神並遺跡をはじめ縄文時代の遺跡も数多く知られています。もとより古墳時代や後の歴史時代の遺跡も数多く存在しています。埋蔵文化財の宝庫と言われる所以です。

本市はかつて商都大阪の近郊農村地帯でありましたが、現在は市域の大半が住宅・工場などに変わり水田地帯はわずかになり、市街化が進んでおります。

今回報告する鬼虎川遺跡第25次調査は、近鉄奈良線の乗客の増大を緩和するため新たに計画された鉄道の新線と、国道308号線拡幅工事により遺跡が破壊されるのに伴い実施したものです。

鬼虎川遺跡は、西ノ辻遺跡の西に隣接した遺跡で銅鋸鋤型をはじめとする豊富で質の高い遺物や、環濠・方形周溝墓などの存在から弥生時代の河内の様子を知るうえに重要な遺跡と考えられていますが、その実態はまだ不明な点が少なくありません。

この度の調査では、旧石器・縄文・弥生・古墳時代と中世に関する新たな発見が多くありました。

本書が、原始・古代の社会を解明するうえでお役に立てれば幸いです。また、地域の文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査および整理を実施するうえに、多大なご協力をいただきました大阪府八尾土木事務所や当時の東大阪生駒電鉄株式会社（現近畿日本鉄道株式会社）、阪神高速道路公団をはじめとする関係機関、方々に心より謝意を表します。

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 日吉亘

例　　言

1. 本書は東大阪市西石切町3丁目地内において東大阪生駒電鉄株式会社などが計画した都市高速鉄道東大阪線建設工事に伴う、鬼虎川遺跡第25次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪生駒電鉄株式会社、阪神高速道路公団、大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施した。
3. 主要な現地調査は、昭和59年4月18日から翌3月31日まで実施した。調査面積は2,043m²である。
4. 現場担当の調査員は、奈良英弘(故人)・福永信雄・勝田邦夫・宇治原靖泰(現門真市教育委員会)である。
5. 本書はV章3・VI章5を勝田が、附編のVII章を除くその他の執筆と編集は福永が行なった。VII章の自然科学分析は、パリノサーベイ株式会社及び藻科哲男氏他に委託した。VII章1は金原正明氏に原稿を依頼した。VII章は勝田と福永が協議して作成した。観察表については、整理部嘱託の津田美智子が作成した。
6. 遺構写真は現場担当の調査員が撮影し、遺物写真撮影はG・Fプロに委託した。
7. 現地調査実施にあたっては、大成建設株式会社をはじめとする多くのの方々から多大なご協力いただいた。記して謝意を表する。
8. 遺構実測図は調査に参加した全員で作成し、整図は百合藤厚子・津田が担当した。遺物実測図及び整図は山本祐子・芦田尚子・津田が行なった。なお、本書掲載の遺物の挿図番号は、国版番号と一致させている。
9. 調査および本書作成にあたって、下記の方々から多くの教示を得た。心より謝意を表する。(敬称省略・順不同)
西谷真治・金関 惇・梶山彦太郎・泉拓 良・樽野博之・那須孝悌・多賀谷昭・山内紀嗣
10. 現地調査および整理作業には、下記の方々の参加を得た。
越野一郎・川口容弘・藤田伸一・堀内正巳・小林秀隆・矢野功士・佐藤裕之・小野健次・米谷公平・田中稔二・永江淳志・島田浩之・開樂 悟・知野見章・矢部倫弘・広尾 匠・愛甲武志・高田貴彦・秦 元彦・森田浩史・苦米地義之・岩崎 誠・森本 聰・奥野義人・岡本真由美・石渡玲子・松井朋子・上田佳子・国分政子・清水香里・川越菊美・山田由加里・山田敦子・山脇陽子・島田和美・西村知恵・萬谷祥子・岩井真弓・石井洋子・飛田博美・堀江奈津子・天津正代・遠藤理香・奥村正美・松岡 緑・川本理恵・黒田季子・長谷川喜子・東 律子

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 従前の調査	1
II.位置と環境	2
1. 位置	2
2. 地理的環境	2
3. 歴史的環境	4
III.調査概要	8
1. 調査方法と目的	8
IV.層序	10
V.遺構	17
1. A～C地区の遺構	17
2. D～J地区の遺構	22
3. 平安時代から室町時代の遺構	25
VI.出土遺物	48
1. 旧石器時代の遺物	48
2. 縄文時代の遺物	48
3. 弥生時代の遺物	51
4. 古墳時代の遺物	59
5. 中世遺構出土遺物	77
VII.附編	122
1. 鬼虎川遺跡第25次調査を主とする河内平野の環境と植生の変遷	122
2. 鬼虎川遺跡第25次調査試料花粉及び珪藻分析報告	140
3. 鬼虎川遺跡第25次調査出土石器の材質鑑定報告	157
4. 鬼虎川遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析	161
VIII.まとめ	171
1. 旧石器時代	173
2. 縄文時代	173
3. 弥生時代	175
4. 古墳時代	175
5. 中世	176

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	調査地点位置図	8
第3図	調査地区割図	9
第4図	A地区基本層序	11
第5図	A～C地区土層断面図(折り込み)	13・14
第6図	D～J地区土層断面図(折り込み)	15・16
第7図	弥生時代遺構実測図(折り込み)	19・20
第8図	土壤墓実測図	21
第9図	壺棺・遺構堆積土断面図	24
第10図	井戸4実測図	26
第11図	井戸5実測図	27
第12図	井戸8実測図	28
第13図	井戸9実測図	28
第14図	井戸10実測図	29
第15図	井戸11実測図	30
第16図	井戸12実測図	31
第17図	井戸13実測図	31
第18図	井戸14実測図	32
第19図	井戸15実測図	33
第20図	井戸16実測図	34
第21図	溝22実測図	35
第22図	溝153実測図	35
第23図	溝192実測図	35
第24図	溝203実測図	36
第25図	溝209実測図	36
第26図	中世遺構平面図(折り込み)	37・38
第27図	中世遺構平面図(折り込み)	39・40
第28図	溝213実測図	41
第29図	溝215実測図	41
第30図	土坑実測図	43
第31図	土坑102実測図	44
第32図	ピット実測図	47
第33図	旧石器実測図	49
第34図	縄文・弥生土器実測図	51

第35図	S D196出土弥生土器実測図	52
第36図	S D196出土弥生土器実測図	53
第37図	S D214出土弥生土器実測図	54
第38図	遺構（土壤・溝）弥生土器実測図	55
第39図	包含層出土弥生土器実測図	56
第40図	甕棺墓・包含層出土弥生土器・土製品実測図	57
第41図	遺構（SD102）包含層出土土師器・韓式土器実測図	58
第42図	遺構（溝他）出土須恵器実測図	59
第43図	包含層出土須恵器実測図	60
第44図	遺構（溝）包含層出土製塙土器・韓式土器実測図	61
第45図	弥生時代石器実測図	73
第46図	弥生時代石器・古墳時代石製品実測図	74
第47図	井戸2～11出土遺物実測図	79
第48図	井戸4出土遺物実測図	80
第49図	井戸12出土遺物実測図	83
第50図	井戸12出土遺物実測図	84
第51図	井戸14出土遺物実測図	85
第52図	溝43・51・108・145出土遺物実測図	85
第53図	溝153出土遺物実測図	86
第54図	溝192出土遺物実測図	88
第55図	溝195出土遺物実測図	89
第56図	溝203出土遺物実測図	89
第57図	溝209出土遺物実測図	91
第58図	溝209出土遺物実測図	92
第59図	溝209出土遺物実測図	93
第60図	溝215出土遺物実測図	94
第61図	河川出土遺物実測図	95
第62図	河川出土遺物実測図	96
第63図	河川出土遺物実測図	97
第64図	河川出土遺物実測図	98
第65図	ピット・土坑出土遺物	99
第66図	木製品実測図	114
第67図	木製品実測図	115
第68図	木製品実測図	116
第69図	中世石器実測図	120

図版目次

- 図版 1 調査地 C 地区より東を臨む（西より）
- 図版 2 土層断面 上. A 地区北壁断面（南より）
下. A 地区中央トレンチ火山灰検出状況（南より）
- 図版 3 土層断面 上. A 地区海底面と西壁断面（東より）
下. A 地区海底面と北壁断面（南より）
- 図版 4 土層断面 上. A 地区北壁断面（南より）
下. B 地区北壁断面（南より）
- 図版 5 土層断面 上. B 地区北壁断面（南より）
下. B 地区北壁断面（南より）
- 図版 6 土層断面 上. B 地区北壁断面（南より）
下. D～E 地区南壁断面（北より）
- 図版 7 土層断面他 上. F～G 地区南壁断面（北より）
下. A～C 地区海食崖検出状況（西より）
- 図版 8 遺構 上. B・C 地区海食崖検出状況（西より）
下. B・C 地区海食崖検出状況（西より）
- 図版 9 遺構 上. A 地区海底面検出状況（南より）
下. A 地区海岸縄文土器（大歳山式）出土状況（南より）
- 図版 10 遺構 上. A 地区海岸縄文土器出土状況
中. A 地区海岸縄文時代土製品出土状況
下. B 地区海岸旧石器出土状況
- 図版 11 遺構 上. A 地区海岸出土状況
中. A 地区海岸獸骨（イノシシ）出土状況
下. A 地区海岸獸骨（イヌ）出土状況
- 図版 12 遺構 上. A 地区海岸獸骨（クジラ）出土状況
中. A 地区海岸獸骨（イルカ肩甲骨）出土状況
下. A 地区海岸獸骨（イルカ脊椎骨）出土状況
- 図版 13 遺構 上. A 地区SD201堆積土断面（東より）
下. A 地区SD201完掘状況（東より）
- 図版 14 遺構 上. A・B 地区弥生時代遺構検出状況（西より）
下. A 地区SD139弥生土器出土状況（北より）
- 図版 15 遺構 上. B 地区SD188検出状況（南より）
下. B 地区SK61（壺棺）検出状況（西より）
- 図版 16 遺構 上. A 地区弥生土器出土状況（南より）

- 下. A地区土壌墓検出状況（南西より）
- 図版 17 遺構 上. A地区土壌墓内人骨（上半身）検出状況（南西より）
下. A地区土壌墓内人骨（下半身）検出状況（南西より）
- 図版 18 遺構 上. H～J地区弥生・古墳時代遺構検出状況（西より）
下. G・H地区弥生・古墳時代遺構検出状況（南より）
- 図版 19 遺構 上. G・H地区弥生・古墳時代遺構検出状況（北西より）
下. E・F地区弥生時代遺構（SD206）検出状況（西より）
- 図版 20 遺構 上. G地区弥生時代遺構（SD206）検出状況（南より）
下. E・F地区弥生時代遺構（SD102）検出状況（南より）
- 図版 21 遺構 上. G・H地区弥生時代遺構（SD158）検出状況（南西より）
下. G・H地区弥生時代遺構（SD158）弥生土器出土状況（東より）
- 図版 22 遺構 上. F地区弥生時代遺構（SK15）弥生土器出土状況（西より）
下. G地区弥生時代遺構（SD214）弥生土器出土状況（東より）
- 図版 23 遺構 上. I・J地区弥生時代遺構（SD196他）検出状況（西より）
下. I地区弥生時代遺構（SD196）弥生土器出土状況（北より）
- 図版 24 遺構 上. A地区古墳時代遺構（SD106）検出状況（西より）
下. A地区古墳時代遺構（SD46他）検出状況（西より）
- 図版 25 遺構 上. C地区古墳時代遺構（SK9・SX2）検出状況（北東より）
下. G地区古墳時代遺構（SD214・215）検出状況（南より）
- 図版 26 遺構 上. C地区古墳時代遺構（SD23）検出状況（西より）
下. B地区古墳時代遺構（SD35）検出状況（西より）
- 図版 27 遺構 上. G地区古墳時代遺構（SD213）土師器・須恵器出土状況
下. G地区古墳時代遺構（SD213）土師器・須恵器出土状況
- 図版 28 遺構 上. Fト 井戸4全景 下. Fト 井戸4東側断面
- 図版 29 遺構 上. Fト 井戸4第7層 下. Fト 井戸4断ち割り西側断面
- 図版 30 遺構 上. Fヌ 井戸6石材出土状況 下. Fヌ 井戸6石材出土状況
- 図版 31 遺構 上. Fヌ 井戸6獸骨出土状況 下. Fヘ 井戸6断ち割り西側断面
- 図版 32 遺構 上. Hイ～ロ 井戸8北側断面 下. Iハ 井戸9東側断面
- 図版 33 遺構 上. Iニ 井戸9断ち割り南側断面 下. Hヌ～Hヨ 手前から井戸10・11・12
- 図版 34 遺構 上. Hカ 井戸10南側断面 下. Hカ 井戸10掘削状況
- 図版 35 遺構 上. Hカ～ヨ 井戸10カメ出土状況 下. Hカ～ヨ 井戸10断ち割り南側断面
- 図版 36 遺構 上. Hリ～ヨ 井戸10・11・12全景 下. Hヌ 井戸11南側断面
- 図版 37 遺構 上. Hヌ 井戸12井戸側検出状況 下. Hヌ 井戸12遺物出土状況

- 図版 38 遺構 上. Hヌ 井戸12曲物底板出土状況 下. Hヌ～ヨ 井戸12南側断面
- 図版 39 遺構 上. Hヌ～ヨ 南側断面井戸11・12 下. Hホ～Iホ 断ち割り全景
- 図版 40 遺構 上. Iニ 井戸13南側断面 下. Iニ 井戸13断ち割り南側断面
- 図版 41 遺構 上. Iニ 井戸14全景 下. Iニ 井戸14五輪塔出土状況
- 図版 42 遺構 上. Iニ 井戸14土器出土状況 下. Iニ 井戸14遺物出土状況
- 図版 43 遺構 上. Iチ 井戸15北側断面 下. Iチ 井戸15北側断面下層
- 図版 44 遺構 上. Hホ～Jハ 井戸、河川、溝 下. Fヌ～Gニ 井戸16全景
- 図版 45 遺構 上. Fル～Gハ 井戸16北側断面上層 下. Gハ 井戸16北側断面下層
- 図版 46 遺構 上. Hカ～Iニ 溝135 杖列 下. Hホ 溝153 遺物出土状況
- 図版 47 遺構 上. Hホ 溝153 遺物出土状況 下. Bハ～ニ 溝188 板出土状況
- 図版 48 遺構 上. Hヨ～Iホ 溝192 全景北より 下. Iニ～ホ 溝192 東より
- 図版 49 遺構 上. Iニ～ホ 溝192 完掘状況 下. Iホ 溝192 南側断面
- 図版 50 遺構 上. Iニ～ホ 溝195 全景 下. Iニ～ホ 溝195 遺物出土状況
- 図版 51 遺構 上. Iニ～ホ 溝192・195 完掘状況 下. Hヨ～Iホ 溝192・195 南側断面
- 図版 52 遺構 上. Iチ 溝203 石列及び遺物出土状況 下. Iハ～チ 溝203 石列及び遺物出土状況
- 図版 53 遺構 上. Iハ～チ 溝203 全景西より 下. Iハ～チ 溝203 北西より
- 図版 54 遺構 上. Iト～Jハ 溝209 全景 下. Jハ 溝209 獣骨出土状況
- 図版 55 遺構 上. Jハ 溝209 獣骨出土状況 下. Jハ 溝209 獣骨出土状況
- 図版 56 遺構 上. Jハ 溝209 獣骨出土状況 下. Jハ～ニ 溝209 東側断面
- 図版 57 遺構 上. Iチ～Jハ 河川全景 下. Iロ～ト 河川遺物出土状況
- 図版 58 遺構 上. Jハ 河川瓦器碗出土状況 下. Iロ～ト 河川遺物出土状況
- 図版 59 遺構 上. Iロ～ト 河川遺物出土状況 下. Jハ 河川東側断面
- 図版 60 遺構 上. Iホ 土壙101 全景 下. Iホ 土壙101 南側断面
- 図版 61 遺構 上. Iホ 土壙101 遺物出土状況 下. Iロ 土壙102 全景
- 図版 62 遺構 上. Fト ピット96 下. Fト ピット114
- 図版 63 遺構 上. Fヘ ピット397 下. Fヘ ピット476
- 図版 64 遺構 上. Hロ ピット539 下. Hオ ピット572
- 図版 65 遺構 上. Hオ ピット571 下. Hオ ピット572
- 図版 66 遺構 上. Hオ ピット574 下. Hニ ピット590・591
- 図版 67 遺構 上. Hホ ピット598 下. Hホ ピット598
- 図版 68 遺物 (旧石器) ナイフ形石器(1～6・8) 橢形削器(7)
- 図版 69 遺物 (旧石器) ナイフ形石器(1～6・8) 橢形削器(7)
- 図版 70 遺物 (縄文・弥生土器) 上. 縄文土器(1～9) 下. 弥生土器(10～18)

- 图版 71 遗物 (溝196 出土弥生土器) 上. 壺(19) 把手付鉢(29) 下. 壺(21~23)
細頸壺(24) 短頸壺(25) 壺(27) 大型壺(26·28)
- 图版 72 遗物 (溝196 出土弥生土器) 上. 鉢(30) 高杯(31) 壺蓋(38·39) 下. 壺(32·36·37) 壺(33~35)
- 图版 73 遗物 (溝214 出土弥生土器) 上. 壺(41~44·51) 下. 壺(45~50·52·53)
- 图版 74 遗物 (溝158·206·214、土壤15出土弥生土器) 短頸壺(40·61) 壺(50) 高杯(64) 壺·鉢(75)
- 图版 75 遺物 (溝出土弥生土器) 上. 壺(54~56·59·60·62) 下. 壺(65~71)
- 图版 76 遺物 (溝·包含層出土弥生土器) 上. 壺蓋(57) 高杯(63) 壺(72~74) 下. 壺(77~81)
- 图版 77 遺物 (包含層出土弥生土器) 上. 鉢(82~85) 高杯(89~92) 下. 壺蓋(86~88) 壺(93·94·97~100) 壺·鉢(95)
- 图版 78 遺物 (包含層出土弥生土器) 上. 壺(76) 壺(96) 下. 壺(101·103)
- 图版 79 遺物 (包含層出土弥生土器、土師器) 上. 壺(102·104~106) 土製円盤(107) 下. 壺(108~111·118~121)
- 图版 80 遺物 (土師器、須恵器) 上. 土師器把手付鉢(112) 鉢(113·115) 小型壺(114) 壺(116·117) 壺(122) 下. 須恵器把手付無蓋高杯(123) 擾鉢(139) 壺(146)
- 图版 81 遺物 (溝、土壤、井戸、包含層出土土器) 上. 須恵器杯蓋(126·127·134·140·141) 杯身(129·130·135·138·142·144·145) 下. 須恵器杯蓋(148·153·154·163·164) 杯身(155·156·165)
- 图版 82 遺物 (溝、土壤、包含層出土須恵器) 杯蓋(124·125·132·133·147) 杯身(128·137·143·150·151·166)
- 图版 83 遺物 (包含層出土須恵器) 上. 高杯(151·157~161·173~175) 下. 有蓋高杯(152) 壺(167·168)
- 图版 84 遺物 (須恵器、製塙土器) 上. 須恵器壺(169~172·177~180) 下. 製塙土器(181~190)
- 图版 85 遺物 (土師器、韓式土器) 上. 韩式土器(191~195·198·202~204) 下. 壺(196·197·199~201·205~207·209) 壺(208)
- 图版 86 遺物 (弥生時代石器) 上. 石鎚(1~6) 石槍(7~9) 石小刀(10) 下. 石鎚(1~6) 石槍(7~9) 石小刀(10)
- 图版 87 遺物 (弥生時代石器) 上. 細部調整剥片(11) 楔形石器(12) 削器(13~15) 下. 細部調整剥片(11) 楔形石器(12) 削器(13~15)
- 图版 88 遺物 (弥生時代、中世石器) 上. 蛤刃石斧(16) 扇平片刃石斧(17) 双孔円板(18) 敲き石(1) 下. 砥石(2·6·7·1000)
- 图版 89 遺物 (中世石器) 粉挽き臼(4) 滑石製石鍋(5) 砥石(3·8) 五輪塔(9)

- 図版 90 遺物（井戸 2・3・4・6 出土土器）上、井戸 2 土師器小皿（1）井戸 3 土師器小皿（2）井戸 6 土師器大皿（3）瓦器香炉（4）羽釜（8）青磁碗（5・6）瀬戸・美濃焼鉢皿（7）下、井戸 4 小皿（20・28～34・36・38・41）中皿（21・25・37・42・46・47）大皿（44・49）
- 図版 91 遺物（井戸 4 出土土器）上、土師器小皿（22・35・40）中皿（23・24・26・27・43・45）大皿（48）下、白磁碗（50・51）土師器羽釜（52）瓦器搔鉢（53）
- 図版 92 遺物（井戸 12 出土土器）上、土師器中皿（55・57～60・62～66・68）下、土師器中皿（74～77・79）大皿（81～83・85～87・91・92）羽釜（93）
- 図版 93 遺物（井戸 12 出土土器）土師器中皿（54・56・61・67・69～73・78）大皿（84・88～90）台付中皿（80）瓦器小皿（107）
- 図版 94 遺物（井戸 12 出土土器）上、瓦器椀（98・100）下、瓦器椀（94～97・99・101～103）小皿（104～106）
- 図版 95 遺物（井戸 14・落ち込み 2 出土土器）上、井戸 14 土師器小皿（111）中皿（109・112）ミニチュア壺（115）落ち込み 2 瓦器椀（275・283・286）下、井戸 14 土師器小皿（108・110）中皿（113）瓦器椀（114）火舎（116）
- 図版 96 遺物（溝 43・153・195 出土土器）上、溝 43 土師器小皿（307）溝 153 土師器小皿（119）中皿（117）大皿（120・121）溝 195 土師器小皿（156）大皿（157）下、溝 153 土師器小皿（118）大皿（122～124）
- 図版 97 遺物（溝 192 出土土器）上、土師器小皿（125・126）中皿（134）大皿（139）瓦器椀（143）下、瓦器椀（142・144）
- 図版 98 遺物（溝 192 出土土器）上、土師器小皿（128～133・136～138）中皿（127・135）大皿（140・141）下、瓦器羽釜（145・146）青磁碗（147）
- 図版 99 遺物（溝 195 出土土器）上、土師器小皿（148）中皿（149・150・152～155・158）瓦器小皿（160）椀（162）下、土師器中皿（151）大皿（159）瓦器椀（161）
- 図版 100 遺物（溝 203、ピット出土土器）上、溝 203 土師器中皿（167）瓦器椀（168）ピット 397 土師器小皿（314・315）ピット 671 土師器大皿（317）ピット 715 土師器小皿（319）下、溝 203 土師器小皿（166）中皿（163～165）瓦器椀（169～171・173～175）小皿（172）白磁碗（176）
- 図版 101 遺物（溝 209 出土土器）上、土師器小皿（191）中皿（183・185・186・188）大皿（182・192・194）下、土師器小皿（181・184・190）中皿（177～180・187・189）大皿（193・196・198）
- 図版 102 遺物（溝 209 出土土器）土師器大皿（195・197・199）羽釜（200・201）瓦器椀（208～210）東播系須恵器程鉢（216）
- 図版 103 遺物（溝 209 出土土器）上、瓦器椀（202・203）下、瓦器椀（204・205）
- 図版 104 遺物（溝 209 出土土器）上、瓦器椀（206・207）下、瓦器小皿（212・213）

- 図版105 遺物 (溝209 出土土器) 上. 瓦器小皿 (214・215) 下. 東播系須恵器捏鉢 (217~220)
- 図版106 遺物 (溝、ピット、落ち込み、土壤出土土器) 上. 溝215 土師器中皿 (221・222) 大皿 (223) 瓦器椀 (224・225) 下. 溝土師器小皿 (308・310) 中皿 (311・313) 大皿 (309) 瓦器椀 (312) ピット土師器小皿 (318) 瓦器小皿 (316) 楓 (320) 落ち込み3土師器大皿 (321) 白磁皿 (322) 土壤土師器中皿 (323・324) 瓦器椀 (325・326)
- 図版107 遺物 (落ち込み2出土土器) 土師器小皿 (235・236・249~251) 中皿 (230~232・241・257・259) 羽釜 (270)
- 図版108 遺物 (落ち込み2出土土器) 上. 土師器中皿 (254~256・258・260~262・264) 大皿 (263・265~269) 下. 土師器小皿 (229・233・234・238~240・246~248) 中皿 (226~228・237・242~245・252・253)
- 図版109 遺物 (落ち込み2出土土器) 上. 瓦器椀 (277・279) 下. 瓦器椀 (278・282)
- 図版110 遺物 (落ち込み2出土土器) 上. 瓦器椀 (276・280・281・285) 下. 瓦器椀 (271~274・284・287)
- 図版111 遺物 (落ち込み2出土土器) 瓦器羽釜 (288・289・291・293・297・298) 土師器 羽釜 (299)
- 図版112 遺物 (落ち込み2出土土器) 上. 白磁碗 (301~305) 青磁碗 (306) 下. 瓦器 羽釜 (290・292・294~296) 捶鉢 (300)
- 図版113 遺物 木製品 錐 (1) 柳 (2) 木鍤 (3) 草履状木製品 (4・5)
- 図版114 遺物 木製品 漆器椀 (6・7・8) 柱根 (10) 用途不明 (9・11)
- 図版115 遺物 木製品 用途不明 (12~16)
- 図版116 遺物 木製品 柄杓 (17) 曲物 (18・20) 曲物底板 (23)
- 図版117 遺物 木製品 曲物 (19) 曲物底板 (21・22・24~26)
- 図版118 遺物 木製品 杭 (27~36) 木簡 (39・40)
- 図版119 遺物 木製品 桶 (37) 木簡 (38) 鉄釘 (41) キセル (42)
- 図版120 珪藻化石
- 図版121 珪藻化石
- 図版122 珪藻化石
- 図版123 珪藻化石

表 目 次

表 1	旧石器観察表	50
表 2	縄文時代～古墳時代土器・土製品観察表	62～72
表 3	弥生時代・古墳時代石器・石製品観察表	75・76
表 4	土師器皿分類表	77
表 5	中世遺物観察表	100～113
表 6	中世木製品観察表	117～119
表 7	中世石製品観察表	121
表 8	珪藻の生態分類	146
表 9	淡水生種の各生態性に対する適応性	146
表 10	鬼虎川遺跡 (KTR25A) 西壁断面における珪藻分析結果	147～149
表 11	鬼虎川遺跡 (KTR25A) 西壁断面における花粉分析結果	153
表 12-1	岩石分類一覧	159
表 12-2	岩石名一覧	160
表 13	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差差	166
表 14	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	167
表 15	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	167
表 16	和歌山梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	165
表 17	鬼虎川遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果	167
表 18	鬼虎川遺跡出土のサヌカイト製石器、石片の原材产地推定結果	169・170

図 目 次

図 1	河内平野の地形と遺跡の位置	122
図 2	鬼虎川第25次調査 Y = -32.875付近における層序、出土土器、放射性炭素年代値	123
図 3	鬼虎川遺跡における河内湾東岸の堆積分布	126
図 4	鬼虎川遺跡第33次調査～第35次調査の海域～汽水成層分布	127
図 5	鬼虎川第35-1次調査第2ピット北壁における主要珪藻ダイアグラム	132
図 6	河内平野（河内湾）における相対的海面変化	133
図 7	鬼虎川遺跡第33次調査第2ピット北壁の花粉ダイアグラム	135
図 8	河内平野の遺跡における古環境変遷	136
図 9	鬼虎川遺跡の位置	141
図 10	鬼虎川遺跡 (KTR25A) 西壁断面と試料採取位置	142
図 11	鬼虎川遺跡 (KTR25A) 西壁断面における主要珪藻化石群集の変遷	150
図 12	鬼虎川遺跡 (KTR25A) 西壁断面における花粉化石群集の変遷	154
図 13	鬼虎川遺跡 (KTR25A) 西壁断面地点における珪藻化石・花粉化石からみた 低地の環境と森林植生	156
図 14	サヌカイトの原産地	165

I. はじめに

1. 調査に至る経過

奈良県北部が大阪のベッドタウンとして開発が進んだ結果、この間を結ぶ既存の阪奈道路の渋滞が激しくなってきた。これを緩和するためと東大阪市の北部開発のために鉄道の新線が計画された。鉄道予定地とこれに合わせて計画された国道308号線拡幅予定地内には、今回の調査地から東に周知の遺跡として西ノ辻・神並遺跡が存在している。

これらの遺跡は、近鉄東大阪線の開設と道路拡幅工事に伴い継続して大規模な発掘調査が、大阪府教育委員会と本協会により実施されている。今回の調査も、この一連の事前調査の一つである。今回は、国道170号線と308号線の交差点の東側、現在の近畿日本鉄道東大阪線新石切駅の西端部分付近(調査面積2043m²)を東大阪市教育委員会の指導を受け、本協会が実施した。

2. 従前の調査

鬼虎川遺跡は生駒山の西麓、現在の東大阪市西石切町から弥生町付近に広がる遺跡である。昭和38年に現在の国道170号線沿いで大阪府水道管埋設工事が実施され、これに伴い弥生土器などが出土、採集されたことから遺跡の存在がしらされた。昭和50年にガス管埋設工事に伴い実施された第1次調査以降、今までに24回の調査が実施されている。

第1次調査が実施された地点は、今回の調査地東端の西約100mである。この調査において多量の弥生土器や木製品・石器などが出土した。特に通常では腐朽しつつ残らない木製品・骨製品の残りの良さが注目された。これは、本遺跡が低湿地に有り、その埋没条件が木製品の保存に適しているためである。今回の調査地点の南西約300mで行われた病院建設に伴い実施された第7次調査では、銅鐸の鋳型などが出土している。その後、今回報告する調査も含めて近鉄東大阪線の開設に伴う事前調査が実施された。この調査は、結果的に本遺跡の北端付近を東西に細長く大規模なトレンチを設定する形となった。これらの調査の結果、ほぼ集落北端の範囲が判明するとともに、縄文時代前期に起こったわゆる縄文海進に伴う海岸と考えられる自然の傾斜が確認されている。

今回の調査地西端から約100m離れた西側で弥生時代中期(畿内第Ⅱ様式)の集落を開む環濠と思われる大溝とこれに伴う柵列が検出されている。環濠は、約90mに亘って東西に掘られている。環濠の外側にあたる東側から方形周溝墓・壙棺が発見されている。方形周溝墓などの上層からは、古墳時代中期末から後期初頭の掘立柱建物・土塙・溝なども検出されている。

柵列を伴う大規模な環濠の存在や、銅鐸の鋳型などの出土遺物の豊富さと遺構の広がりの大きさなどから本遺跡は、弥生時代における河内を代表する拠点的集落の一つと考えられている。

今回の調査地の南に隣接して実施された第18次調査では、縄文海進に伴う傾斜地とその東側は西ノ辻遺跡から続く弥生時代の方形周溝墓や中世の集落址が検出されている。また、古墳時代中期後半から後期にかけての集落が傾斜地の東と西にまたがって広がることも明らかにされている。

II. 位置と環境

1. 位置

本遺跡は、現在の行政上の地名では東大阪市弥生町、西石切町二丁目、宝町に所在する。国土地理院発行の1/25000地形図「生駒山」では、左下隅付近にある。

遺跡の現状は、西よりの地を南北に通る旧国道170号線沿いに工場が立ち並ぶ。北端付近を東西に通る国道308号線沿いは、10年ほど前まで水田などの耕作地であったが現在は商店や住宅が立ち並び、水田や畠地はわずかに残るだけである。

今回の調査地の西端は、国道308号線と国道170号線の交差点より東約200mの国道308号線上（西石切町3丁目地内）で、同道路上の東西約150m南北約10mの範囲を調査した。

2. 地理的環境

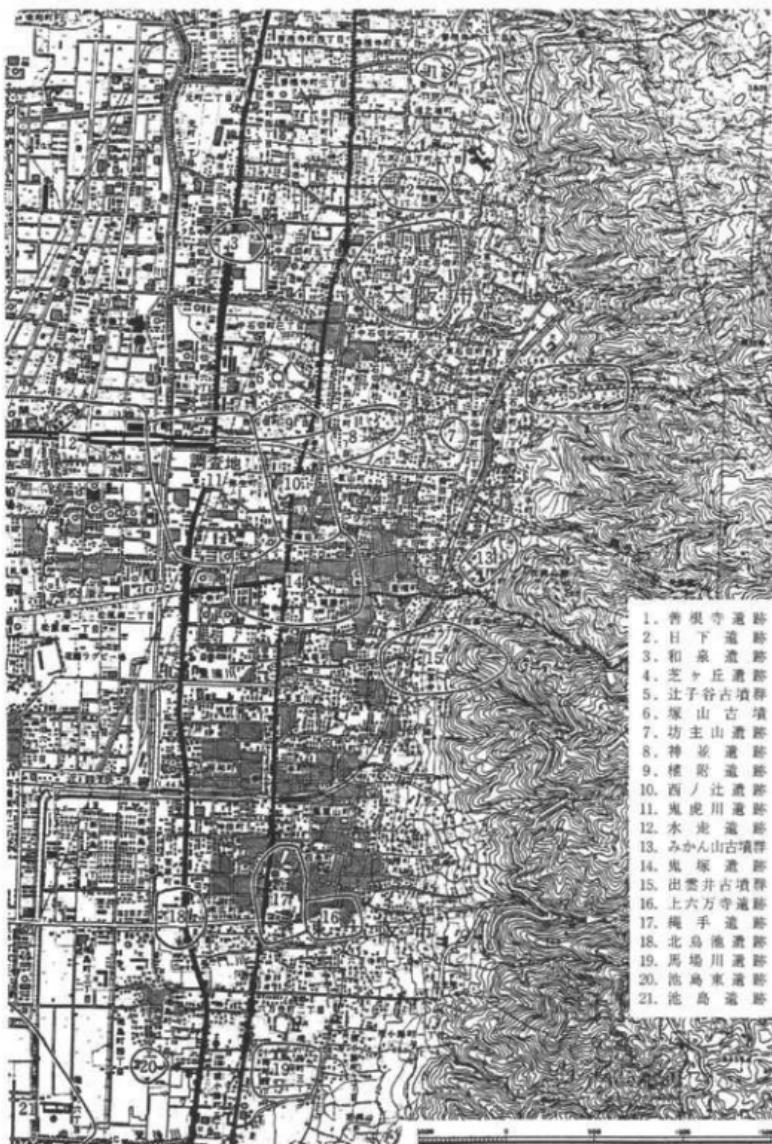
東大阪市域は地理的に見ると東より西に、最高峰の生駒山（標高643.3m）を頂点に南北に延びる標高150m以上の山岳部、標高10m～150mの山麓部、標高5～10mの平野部の3つに大別される。

山岳部の稜線は、ほぼ大阪府と奈良県を画している。山腹は奈良県側の傾斜が緩やかなのに対して、大阪府側は急傾斜である。山岳部を構成する基盤岩類のうち、東大阪市上石切町から横小路町にかけて存在する閃緑岩は、角閃石・長石・雲母などの鉱物からなる。閃緑岩が風化して形成された粘土には上記の鉱物が多量に含まれる。この粘土を用いて作られた縄文から平安時代の土器は、角閃石などを含む特徴的な胎土と褐色をした色調から他地域産の土器と容易に識別でき、「生駒産西麓の土器」あるいは「河内の土器」と呼ばれる。この土器は縄文時代以降、平安時代前期まで製作され、時代により量に異なりはあるものの、畿内を中心にその周辺地域にもたらされており、各時代の土器の流通や背後の社会を考えるうえで重要な指標の一つとされている。

山麓部は、生駒山西麓に広がる扇状地の性格をもつ低位段丘が発達している。山岳部から西下する中小の河川が、0.7～1kmの間をおいて段丘を開析している。これら中小の河川は山麓部や平野部では、時代によって流れを変えることが今回の調査も含め最近の調査で検出される埋没河川の存在により明らかになりつつある。

標高20m前後を東高野街道が南北に通る。この道がいつから存在したか明らかではないが沿道に縄文時代以降、各時期の遺跡が存在し早くから利用されたことは間違いない。市域で最も多くの遺跡が分布する地帯である。

玉串川など複数の河川からなる旧大和川が運ぶ土砂により形成された平野部は、標高から明らかなように低湿で水はけの悪い地である。特に山麓部に隣接する平野部ではその傾向が高く、耕作を行なうため「掘り上げ田」と言われる耕作形態が盛んに取られた。「掘り上げ田」は平野部にも存在したことが瓜生堂遺跡の調査で明らかになっているが、山麓に比べて発達していない。「掘り上げ田」は1枚の田の一部を掘り下げ排水用の溝とし、残りの部分に溝を掘



第1図 周辺道路分布図

る際に出る堆土を盛り上げて高くし、高い部分を耕作地とするものである。現在市内では本遺跡付近にわずかに残るだけであるが、かつては、恩智川沿いの石切～河内町にかけて存在した。近世以降の耕作形態と言われるが、最近の調査成果から初源形態は平安時代後半まで遡ることが判明している。

本遺跡の弥生時代の旧地形を現在明らかになっている事実などから復元すれば以下のようなになる。東側の段丘西端は本報告で詳述する繩文海進に伴う海食崖に起因する高さ約2mの急な崖である。西側は南から北に流れる恩智川が存在する。恩智川は、新しい時代に流路が固定されているが、当時この付近を流れていた河川の後身と考えられる。北は、西ノ辻9次調査や今回の調査などで発見された現在の鬼虎川の前身と考えられる繩文時代後期から中世までの河川が本遺跡の北端を南東から北西にかけて流れていたことが想定される。南側は不明であるが現在、鬼虎川の南約1kmを額田谷から西に向かって流れ、恩智川に合流する番匠川の前身の川が流れていたことは間違いない。

これらの崖や河川により本遺跡の範囲（東西約400m、南北約500m前後）が画されていたと考えられる。従前の調査は、北辺部分を中心に実施されており居住区・墓域の一画が検出されている。水田などの耕作地は、地理的に見て遺跡の周辺の低湿地に存在したとおもわれる。

本遺跡は、標高5m前後の平野部に位置するがすぐ東に段丘（山麓部）が存在する地に営まれた集落跡といえる。

3. 歴史的環境

本遺跡の位置する山麓部および山麓部に隣接する平野部を中心に歴史的な環境を述べる。

旧石器時代は、明確な遺構は現在のところ知られていないが人々が活動していたことは山麓から点々と出土する旧石器により明らかである。

繩文時代早期は、山麓の鬼塚遺跡（南に隣接）や山畑遺跡（南東2.3km）などで少量の土器が出土しているほか本遺跡の東に所在する神並遺跡（旧石器・繩文時代早期）からは膨大な量の土器・石器とともに土偶、屋外炉も検出されている。この遺跡は、生駒山地全体を生活圏とし移動しながら生活した当時の人々の何代にもわたる主要拠点（キャンプ地）と考えられる。

いわゆる繩文海進の起こった繩文時代前期の実態は明らかではないが、中期～晚期前半の遺跡も、地理的条件から居住地は山麓部に存在する。中期後半以降、生駒山地から西下する小河川により南と北を画された段丘上（標高15～25m）にはほぼ1ヶ所ずつ集落が存在する。北から南に善根寺（中期末・北2.7km）日下（後期末～晚期・北1.5km）芝ヶ丘（後期末～晚期・北1km）鬼塚（中期末～晚期）繩手（中期末～晚期・南2km）馬場川（中期～晚期・南3.3km）遺跡である。出土土器から見ると同一遺跡に継続して居住するのではなく、この地域に同時に存在したのは中期後半～後期が1～2遺跡、晚期が2～3遺跡程度と考えられる。例えば、馬場川遺跡は晚期前半に、鬼塚遺跡は晚期後半に存在する。遺跡の分布状況から見ておそらく、現在の市域の北半と南半で2ないし3集団が時期により自然条件の変化などに対応して居住域を変えたものと考えられる。

いずれにしても東日本に比してこの時代の遺跡の数少ない、言いかえれば人口の少ない畿内にあって一定数の人々が常に居住した地ということができる。早期はともかくとして、これを支えた経済的背景は、いうまでもなく前面に広がる河内湾ないし潟と背後の生駒山地の自然の恵みである。

縄文時代晩期末から弥生時代初頭（畿内第Ⅰ様式古・中段階）、山麓部に存在した主な遺跡は、本遺跡の西に隣接する水走遺跡と南0.5kmに所在する鬼塚遺跡ならびに北東に隣接する植附遺跡がある。水走遺跡は、河内湖線辺の低湿な地に晩期後半以降に営まれた集落である。1割に満たない少量の弥生土器と多量の縄文土器が同時に使用されている。土器の比率や他の出土遺物と貝塚の存在などから、当初は漁村として存在したと考えられる。鬼塚遺跡は、前代から引き続き人々が居住した地であることが出土土器などから明らかになっている。晩期後半の土器に認められる玄米圧痕や、同時に使用された縄文（3割）・弥生土器（7割）の比率から見て一早く稲作を受け入れた在来の集落と考えられる。植附遺跡は、1割に満たないごくわずかな縄文土器と多量の弥生土器が出土していることと、突然出現することから見て、弥生文化をもたらした人々の集落の可能性が高い。

本遺跡は、これらの遺跡に遅れて畿内第Ⅰ様式中から新段階の土器がごくわずかな縄文土器とともに出土することから、西に隣接する水走遺跡ないしは、南東に位置する鬼塚遺跡から一部の人が移住したと考えられる。

瀬戸内海の東側終着点としての地理的条件から、畿内において最も早く弥生文化を受け入れ縄文から弥生時代に移行する状況をよく示す地ということができる。

弥生時代中期には、山麓部に植附（北に隣接）鬼塚・撻手、山麓に近い平野部には本遺跡・水走遺跡が存在する。本遺跡と植附・西ノ辻遺跡は、それぞれ河川・海食崖などの自然地形で囲まれているが隣接して存在する。出土遺物から見て、遺跡の開始順序は、植附→鬼虎川→西ノ辻遺跡の順であるが、遅くとも畿内第Ⅱ様式の終り頃から畿内第Ⅳ様式まで3遺跡が同時に存在していたことは確実である。一つの集落と見れば東西1.4km、南北1.6kmの大集落が想定される。河内における最大規模の集落としても過言ではない。それぞれの集落は、独自の墓域と居住域をもつことから、一定の独自性を保ちながら密接なつながりを保持していたと考えられる。また、鬼塚遺跡も独自の墓域を持つけれども位置から見て上記3遺跡と密接な関係を保っていたと考えられる。

大集落を支えたのは、河内湖線辺の耕作地の存在のみでは後の時代の遺跡が縮小することから見て考えられない。おそらく、平野部の瓜生堂・山賀遺跡も同じであるが水運など他の富を得る手段が存在したものと考える。本遺跡で出土した銅鐸などの鋳型の存在も、この背景を踏まえて考える必要がある。

畿内第Ⅲ様式の終り頃から畿内第Ⅳ様式の時期には、標高約90mの山麓に山畠遺跡が営まれる。傾斜の急な斜面で生活適地とは考えられない場所であり、見晴らしの良い立地から見ても高地性集落としてよい。この遺跡の出現は、弥生時代後期に本遺跡などが廃絶すること

と関係するかもしれない。

弥生時代後期は西ノ辻遺跡と鬼塚遺跡を残し、本遺跡と植附遺跡が廃絶する。この時期は、山麓に近い平野部で本遺跡の南2.5kmに北島池遺跡が知られるが、小規模な集落と考えられる。むしろ、馬場川遺跡など主な居住地は山麓部に移動し、平野部は耕作地となるようである。また、中期後半に高地性集落として出現した山畠遺跡は廃絶するが、この遺跡の南約800m離れた地に岩滝山遺跡が、ほぼ同一の標高100mの地に出現する。このような動きは、自然条件などの変化に対する対応だけでなく社会体制の変化と関連していると思われる。

古墳時代の集落は、平野部で西岩田遺跡などが知られるが日下・鬼塚・神並・繩手遺跡など山麓部が中心である。これらの集落は、現状では5世紀後半から営まれるものが多く、古墳時代の全期間にわたる遺物が出土しているのは鬼塚遺跡のみである。しかし、今後の調査が進めば後述する背後の群集墳の存在などから居住地点を替えながら、全期間にわたって存在したいくつかの遺跡が明らかになると思われる。

平野部では本遺跡と西ノ辻遺跡にまたがり5世紀中葉から6世紀前半の集落が営まれ、南約3kmに池島東遺跡にもわずかに同時期の集落が認められるが短期間のものである。

この時代の集落は、5世紀後半に出現し、6世紀初頭の短期間のみ営まれるものと全時期を通じて存在するものの2タイプがあり、短期間しか存在しない集落の背後には渡来人による河内平野の開拓という大和政権の政策があると考える。

古墳は、大型の前方後円墳は知られていない。前期末に本遺跡の南2.5kmにえの木塚古墳（径約30mの円墳）、南東約2.7kmに客坊山1号墳が、北0.5kmに中期前半の塚山古墳（径約20mの円墳）が知られるほか、市域南半の山麓、標高50～150mの間の各河川沿いに横穴式石室を主体とする後期群集墳が存在する。市域の北半は、後期の単独墳は存在するが、群集墳は認められない。6世紀初頭の築造と考えられる東大阪市で唯一の前方後円墳（主体部は初期横穴式石室）の芝山古墳（北東1.4km・全長28m）もその一つである。

後期群集墳の大半は、5～10基程度でそれぞれの河川を利用する在地の有力家長の墳墓と考えられる。例外は、南東2.3kmに位置する山畠古墳群で、隣接する客坊・花草山古墳群と合わせ約100基からなる中規模群集墳である。山畠古墳群は調査された古墳中、約5割から馬具の副葬が確認され、大和政権に馬に関する職掌で仕えた氏族の墳墓群と考えられる。

終末期の群集墳は、7世紀前半に築造された幕尾古墳群（北東1.5km）がある。単独墳は、標高約360mの山岳部に営まれた切石造の石室をもつイノラムキ古墳が存在する。

また、植附遺跡で5世紀後半から7世紀後半にかけての小型低方墳や小石室を検出した。従前、平野部で検出されていたこの種の古墳が山麓部においても存在したことが明らかになると同時に、横穴式石室の被葬者との階層差を示している。このような古墳や集落の有様は、当時の東大阪市域が大和政権の直轄地となっていたためではないかと考える。

飛鳥時代の集落はまだ知られていないが、奈良時代の集落は神並遺跡と鬼塚遺跡で検出されている。鬼塚遺跡では、奈良時代前期から平安時代初頭までの下級貴族の屋敷跡が検出さ

れており、出土遺物などから法通寺と関係していたことが推定される。

水走遺跡からは遺構は検出されていないが奈良時代、河内湖の縁辺で行なわれた祭祀に用いられたミニチュアの竈など多数が出土している。本遺跡周辺は、位置や出土遺物から見て都の近郊農村地帯であった。

飛鳥時代から奈良時代にかけては山麓に石凝寺（北東1.5km）・法通寺（北東0.7km）・河内寺（南1.5km）が造営される。石凝寺は行基が建立し、残る2寺は在地豪族の氏寺と想定される。河内寺は、郡名を冠することから郡衙に付属した郡寺の性格もあわせもつ。

寺院を建立した氏族が関係すると思われる火葬墓が、墓尾古墳群周辺など山麓部上位付近で発見されている。群集する墓尾古墳群隣接地検出例もあるが、現状はほとんど単独で出土している。また、生駒西麓産の羽釜を転用した飛鳥から奈良時代の羽釜棺墓が神並遺跡などで検出されている。

平安時代中期の集落は明確でないが平安時代後期以降、室町時代の集落は本遺跡や神並・鬼塚・水走・上六万寺遺跡（南2.7km）などで検出されている。なかでも本遺跡と神並遺跡は、11世紀後半から16世紀まで地点を替えて集落が営まれていることが従前の調査で明らかになっている。各時代に属す多量の遺物が出土している。大和に隣接する河内の一画に位置するため、出土土器は、当時の両地域で用いられた日常雑器が共存しており、地域色の強い遺物の並行関係を知るうえに欠くことのできないものである。これらの遺跡は、農村と考えられる。検出された墓を含む遺構や出土遺物の分析は今後の課題であるが、これが進めば中世の畿内の農村状況を端的に示すものと考えられる。

近世以降の説明は省略するが、以上のように本遺跡の位置する山麓部は、旧石器時代から現代に至るまで人々が居住した地域と言える。

注1) 福永信雄他「鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告」財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1988年

2) 下村晴文他「鬼虎川遺跡－東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要(その2)」国道308号線関係遺跡調査会 1981年

III. 調査概要

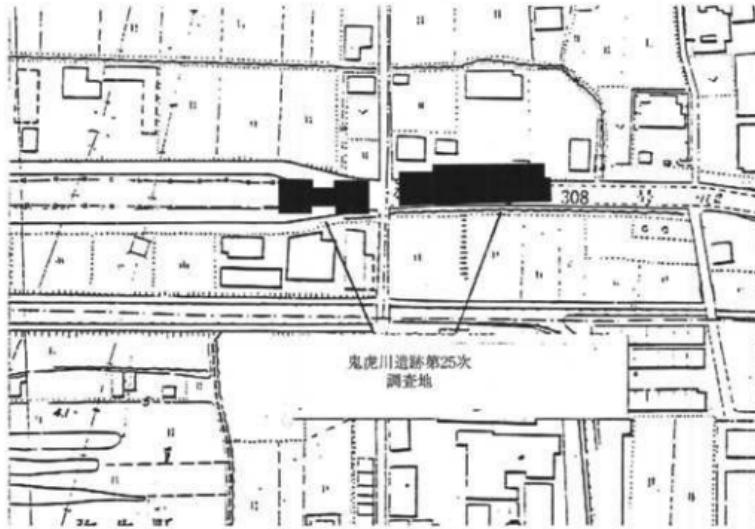
1. 調査方法と目的

今回の調査地（第2図）は、国道に沿って東西に細長いため、ほぼ15mごとに地区を区切り西よりA～J地区と仮称した。調査地のやや西よりに南北に通る道（この道は今回の調査対象から外れる）があり、これを境に傾斜地にあたる西側がA～C地区、段丘上に位置する東側がD～J地区である。今回の調査地点は、A地区の西に隣接して第12次調査、J地区の東に隣接して西ノ辻遺跡第9次調査、各地区的南に隣接して第18次調査、北に隣接して大阪府教育委員会が担当した第23・24・26次調査が既に実施された場所である。今回、調査を行った総面積は約2,043m²である。

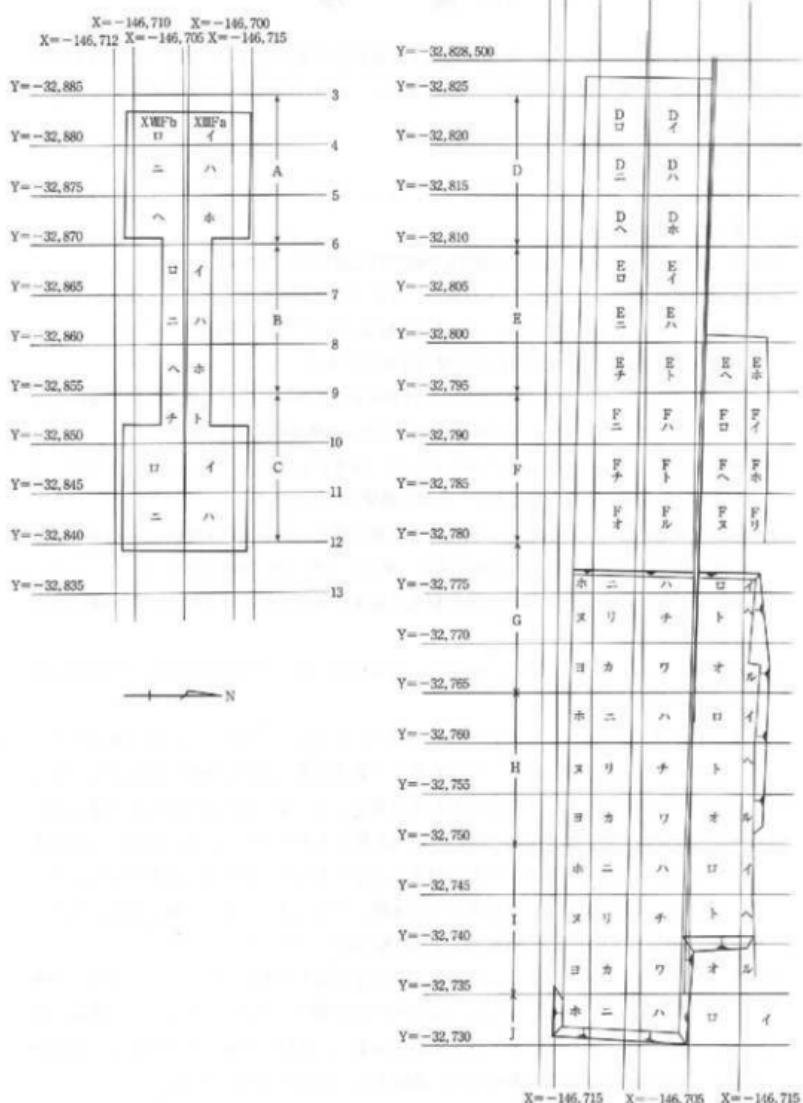
A～C地区の調査は傾斜地から平野部にあたるため周りに土留の鋼矢板を打設した後、盛土を機械を用いて掘削した後、耕土以下を人力で掘り下げ行なった。必要な深さに応じて仕保工を入れ、A・B地区2段C地区1段梁とした。D～J地区は、現行道路に影響を与えることのないよう道路に面する部分にのみ鋼矢板を打設した。

調査の目的は、従前の隣接地の調査結果などから下記の事柄を明らかにすることを主とした。

- 1) 縄文海進に伴う傾斜地と考えられる地点の状況を具体的に明らかにする。
- 2) 弥生時代中期の方形周溝墓の広がりや大溝の確認。
- 3) 古墳時代中期後半の集落址の広がりの確認。
- 4) 中世の集落址の広がりと埋没河川の流れの確認。



第2図 調査地位図



第3図 調査地区剖面

V. 層序

調査地の層序は、後述する縄文海進に起因する傾斜地にあたるA～C地区と低位段丘面にあたるD～J地区では大きく異なる。したがってA～C地区の層序を初めに説明し、次にD～J地区について述べる。

A～C地区の層序

層序の概略説明を旧耕土以下、順に述べる。なお、C地区は段丘先端部にあたり後述するD～J地区とはほぼ同様である。

第1層 旧耕土、厚さ約30cmで、国道308号線開設以前の耕土である。

第2層 赤褐色土（床土）厚さ10cm前後で、弥生土器から瓦器まで含まれるが、いずれも細片で中世に属す遺物が多い。中世の遺物は、西ノ辻遺跡関連のものである。

第3層 暗緑灰色粘質土、鎌倉時代の遺構内堆積土である。

第4層 暗緑灰色小礫混じりシルト、厚さ10cm前後で、6世紀後半の須恵器・土師器を含み、古墳時代後期後半の包含層である。上面に遺構が存在する。

第5層 緑黒色砂混じり粘土、厚さ10cm前後で、6世紀前半の須恵器・土師器を含み、古墳時代後期前半の包含層である。上面に遺構が存在する。

第6層～第9層 厚さ60cm前後で、畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式（以下畿内を略す）に属す土器含む。弥生時代中期後半の包含層である。第6・7層上面に遺構存在する。

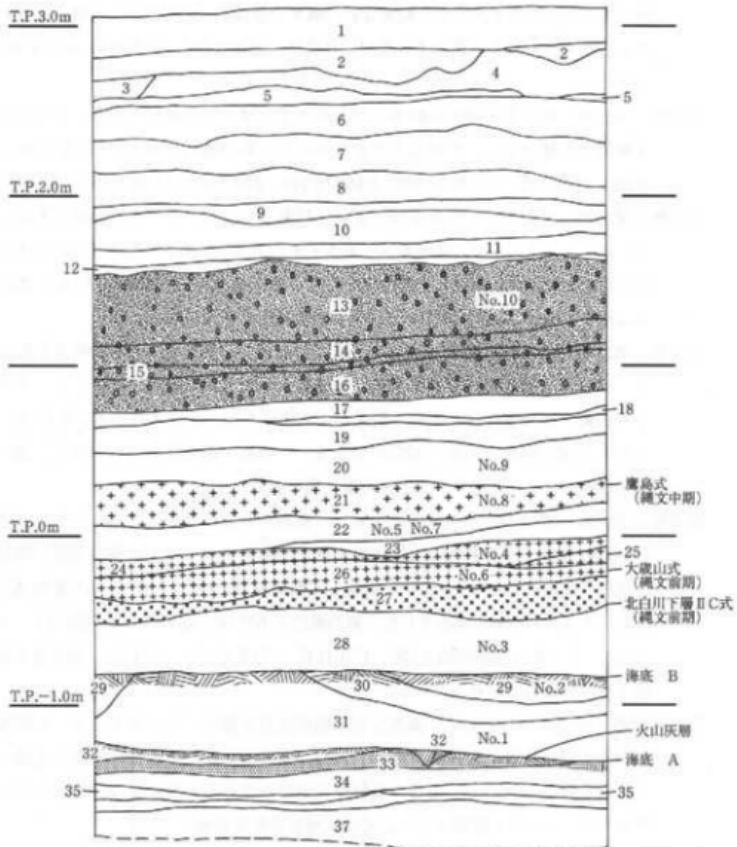
第10層～第11層 厚さ30cm前後で、第Ⅱ様式に属す土器を含む。弥生時代中期中頃の包含層である。

第12層 暗緑灰色シルト、厚さ5cm前後で、第Ⅱ様式に属す土器を微量含む。弥生時代初期頭の生活面と考えられる。

第13層～第16層 黒色を呈し、第13層は粘土以下シルトないし砂混じりシルト層である。厚さ80cm前後で、第13層の上部から第Ⅰ・第Ⅱ様式の土器が微量に含まれる。東大阪市内の平野部では、一般的に存在する層で、アシなどの植物遺存体を多量に含むことなどから河内潟から河内湖の段階の堆積土と考えられている。第29次・30次調査では、下部から縄文時代後期の縁帯文土器や上部から長原式土器が出土しており、縄文時代後期中頃以降、晩期末までに堆積した層と考えられる。第13層出土木片の¹⁴C年代は、 304 ± 140 、1090B.C. (GaK-12258) である。

第17層～20層 緑がかかった灰色ないし褐色を呈するシルトを中心とするそうである。本地点の西約800mの水走遺跡では、これに相当する層の上部から完形に近い中津式土器が単独で出土している。縄文時代後期中頃までに堆積した層と考えられる。第20層出土木片の¹⁴C年代は、 5480 ± 150 、3530B.C. (GaK-12257) である。

第21層 淡緑灰色砂混じりシルト、厚さ20cm前後で、縄文時代中期初頭の鷹島式に属す土器1点、シカ・イノシシなどの獸骨なども出土。この時期の堆積と考えられる。第



- | | | |
|----------------------|---------------------|--------------------------------|
| 1. 耕土 | 14. 黒緑色砂質シルト | 27. 暗緑褐色微砂混りシルト
(北白川下層 II式) |
| 2. 赤褐色土 | 15. 黒緑色シルト | 28. 暗緑褐色砂質シルト |
| 3. 暗緑灰色粘質土 | 16. 黒灰色砂混りシルト | 29. 暗灰色砂層 |
| 4. 暗緑灰色小理混りシルト | 17. 緑褐色砂質シルト | 30. 暗緑灰色粗砂混りシルト |
| 5. 緑黒色砂混り粘土 | 18. 黒褐色粘質シルト | 31. 暗青褐色微砂混りシルト |
| 6. 緑黒色砂混り粘土 | 19. 淡黒灰色粘土 | 32. 淡灰色粘質シルト |
| 7. 暗灰色粗砂混りシルト | 20. 淡灰綠色シルト | 33. 淡黃灰色シルト(火山灰) |
| 8. 暗灰色シルト | 21. 淡綠灰色砂混りシルト(鷹島式) | 34. 黒色粘質シルト |
| 9. 暗灰黃色シルト | 22. 淡灰褐色砂混りシルト | 35. 暗青褐色中砂混りシルト |
| 10. 淡綠灰色中砂混りシルト | 23. 暗灰色砂混りシルト | 36. 緑灰色粗砂混りシルト |
| 11. 淡綠灰色シルト | 24. 細灰色シルト | 37. 淡綠灰色粘質シルト |
| 12. 暗綠灰色シルト(踏込面) | 25. 細灰色細砂混りシルト | |
| 13. 黑灰色粘土(I~II様式生活面) | 26. 緑灰色砂質シルト(大歳山式) | |

第4図 A地区基本層序

18・29・30次調査で出土した船元II式に属す土器は、この層ないし上層に含まれていたものと考えられる。出土木片の¹⁴C年代は、5970±180、4020B.C. (GaK 12256)である。

第22層～第23層 暗灰色を呈する砂混じりシルトで、厚さ20cm前後である。シカなどの動物・植物遺存体が出土。土器は出土しなかった。第22層出土木片の¹⁴C年代は、4500±130、2550B.C. (GaK 12253) と4680±140、2730B.C. (GaK 12255) である。

第24層～第26層 緑灰色を呈するシルトないし砂混じりシルトで厚さ30cm弱である。シカ・イノシシ・クジラや、アカガシ・トチ・オニグルミ・カシ、コナラなどの木の実が出土し、大歳山式に属する土器も出土した。第24層出土木片は4920±150、2970B.C. (GaK 12254) である。縄文時代前期末の堆積土と考えられる。

第27層～第28層 暗緑褐色砂混じりシルト厚さ20cm弱で、東部では、淡灰褐色粗砂に変わる。北白川下層II式に属す土器が少量出土したほか、シカ・イノシシ・トチの実などの動物・植物遺存体と不明土製品が1点出土した。出土木片の¹⁴C年代は、5550±150、3600B.C. (GaK-12251) である。一時期の海底面と考えられる。第29・第30次調査ではタヌキの骨が出土した層と思われる。

第29層～第31層 暗い灰色から緑灰色を呈し、粗砂から砂混じりシルトになる、厚さ50cmである。後述する第33層の火山灰層を部分的に切っている。矢板の強度の関係で第29層以下は幅約1mのトレンチを設定して断面観察を行なった。土器や動物遺存体は出土せず、自然木が少量出土した。第29層出土木片は、5300±150、3350B.C. (GaK-12550) で、第31層が6660±170、4710B.C. (GaK-12249) である。第31層下面が、縄文海進の海底面と考えられる。

第32層～第37層 厚さ約50cmまで調査した。低位段丘を構成する土層である。第33層は、T.P.-1.3m付近に存在し、東(T.P. 2.5m付近)まで、段丘の下部に連続して続くことを確認している。山麓の低位段丘中にかなりの傾斜をもって存在していると思われる。火山灰の性格等については、現在分析を依頼している。

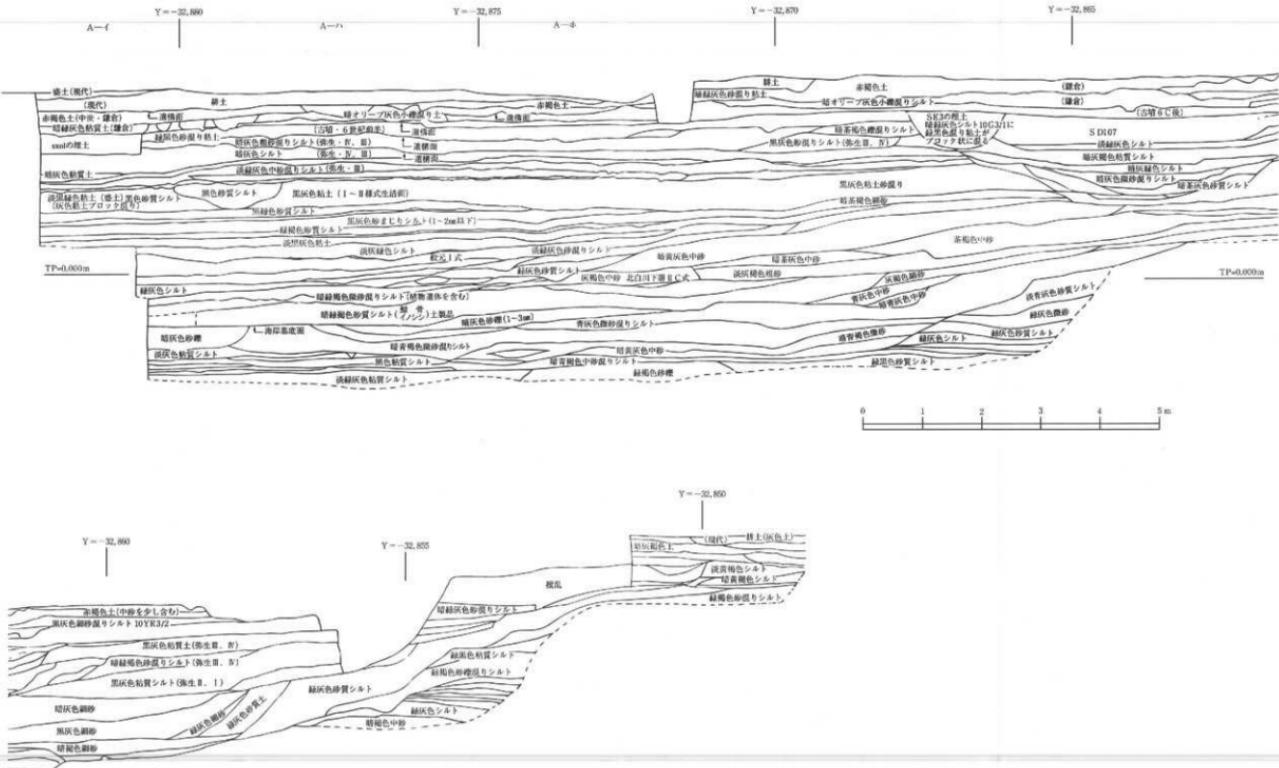
D～J地区の層序

第1層 旧耕土、厚さ約30cmで、国道308号線開設以前の耕土である。

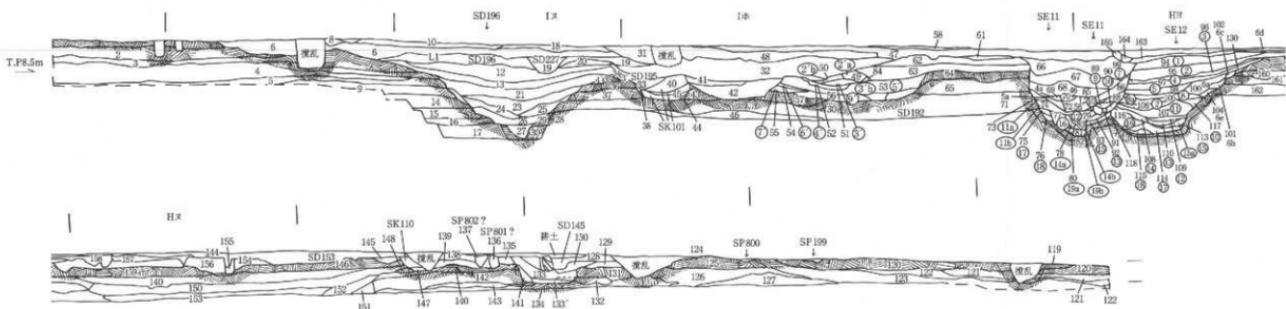
第2層 淡赤褐色土(床土) 厚さ20cm前後で、弥生土器から瓦器まで含まれるが、いずれも細片で中世に属す遺物が多い。

第3層 茶褐色砂質土(地山) 厚さ約20cmである。上面に弥生時代中期・古墳時代中期・中世の遺構が切り込む。

いずれの地区でも包含層は認められなかった。第1層と第2層は、道路開設時に削平を受けており調査地の一部でしか存在しなかった。耕作に伴う地下げが行われていたD地区を除き、第3層上面で弥生から中世にいたる各時期の遺構が検出された。



第5圖 A~C 地區土層斷面圖



- 5.YR黒褐色3/1土
- 2.7.5Y黒黒褐色3/2土
- 3.7.5Y黒褐色3/3土
- 4.7.5Y黒黒褐色3/1小穢泥り土
- 5.10YRにべ・黄褐色5/4シルト
- 6.5YR黒褐色2/1土
- 7.7.5Y黒褐色3/2土
- 8.2.5Yオーピーライト褐色4/3土
- 9.10YRにべ・黄褐色4/3シルト
- 10.2.5Yオーピーライト4/3土
- 11.10YR黒褐色3/3土
- 12.2.5Y黒褐色3/2土
- 13.10YR黒褐色3/2土
- 14.10YR黒褐色3/2シルト
- 15.2.5Y明黄褐色5/3シルト
- 16.10YR暗褐色4/3シルト
- 17.10YR黑色2/1シルト
- 18.2.5Y黒オーピーライト褐色3/3土
- 19.10YR黒褐色3/2土
- 20.7.5Y黒褐色4/4土
- 21.N黒色1/1土
- 22.7.5Y黒褐色4/4土
- 23.7.5Y黒褐色3/3シルト
- 24.10YR黒褐色4/4シルト
- 25.2.5Yオーピーライト4/3シルト
- 26.2.5Y黒オーピーライト褐色3/3シルト
- 27.5GY暗オーピーライト3/1シルト
- 28.2.5Y暗灰褐色4/2シルト
- 29.10YR黒褐色2/2シルト
- 30.10YR黒褐色2/1シルト
- 31.5YRオーピーライト4/3土
- 32.10YR黒褐色3/3土
- 33.10YR暗褐色3/3土

- 34.2.5Y黒褐色3/2シルト
- 35.7.5Y黒褐色4/3シルト
- 36.7.5Y黒褐色3/1砂混シルト
- 37.10YR黒褐色5/6粘土
- 38.10YR暗褐色3/4シルト
- 39.2.5Y黒褐色3/2シルト
- 40.10YRにべ・黄褐色3/3シルト
- 41.2.5Y暗褐色3/2小穢泥り土
- 42.10YR黒褐色2/2シルト
- 43.2.5Yオーピーライト褐色4/3シルト
- 44.10YR黒褐色3/1シルト
- 45.10YR暗褐色3/2シルト
- 46.2.5Y明黄褐色3/3シルト
- 47.10YR暗褐色3/2シルト
- 48.2.5Y暗オーピーライト褐色3/3土
- 49.10YR暗褐色4/4砂混り土
- 50.10YR暗褐色3/4砂混り土
- 51.10YR黒褐色4/4砂混り土
- 52.10YR黒褐色2/2シルト
- 53.7.5Y黒褐色3/2砂混りシルト
- 54.10YR黒褐色2/2シルト
- 55.10YR黒褐色4/6小穢泥りシルト
- 56.2.5Y暗褐色3/2小穢泥り土
- 57.2.5Y黒オーピーライト褐色3/3粘土
- 58.
- 59.10YR黒褐色3/2小穢泥り土
- 60.10YR黒褐色2/2小穢泥り土
- 61.5YR暗褐色1/1
- 62.5YR暗褐色1/1
- 63.10YR黒褐色3/2小穢泥り土
- 64.10YR黒褐色3/2
- 65.10YR黒褐色2/1小穢泥りシルト
- 66.2.5Y暗オーピーライト褐色3/3シルト
- 67.10YR黒褐色4/4シルト
- 68.2.5Y黒オーピーライト褐色4/3シルト
- 69.5Yオーピーライト褐色3/1(植物遺体を含む)シルト
- 70.7.5Y黒オーピーライト褐色3/1(植物遺体を含む)シルト
- 71.5Yオーピーライト褐色3/2シルト
- 72.5Yオーピーライト褐色2/2(植物遺体を含む)シルト
- 73.7.5Y暗褐色3/4シルト
- 74.10YR黒褐色4/1シルト
- 75.7.5Yオーピーライト褐色2/2シルト
- 76.7.5Y黒オーピーライト褐色2/2シルト
- 77.5Yオーピーライト褐色2/2(植物遺体を含む)シルト
- 78.7.5Y黒褐色2/1シルト
- 79.7.5Yオーピーライト褐色3/1シルト
- 80.5GY暗褐色3/2(植物遺体を含む)シルト
- 81.2.5GY暗オーピーライト褐色3/1シルト
- 82.5GY暗褐色3/2(植物遺体を含む)シルト
- 83.10YR暗褐色4/4砂混(油山)
- 84.10YR暗褐色3/4砂混シルト
- 85.10YR暗褐色3/4砂混シルト
- 86.7.5Y黒褐色2/2シルト
- 87.5.5Y暗褐色3/1シルト
- 88.2.5Y暗褐色3/2シルト
- 89.2.5Y暗褐色4/2シルト
- 90.2.5Y暗褐色3/2シルト
- 91.2.5GY黒褐色1/1シルト
- 92.10YR暗褐色3/1シルト
- 93.7.5Y黒オーピーライト褐色2/1シルト
- 94.10YR暗褐色4/4
- 95.10YRにべ・黄褐色4/2土
- 96.10YR暗褐色3/2
- 97.10YR暗褐色3/2
- 98.10YR暗褐色3/3
- 99.10YR暗褐色4/2土

- 100.10YR暗褐色3/4土
- 101.10YR暗褐色3/3土
- 102.10YR暗褐色3/2土
- 103.10YRにべ・黄褐色4/3土
- 104.10YR暗褐色4/4土
- 105.10YR暗褐色3/2土
- 106.2.5Y黒褐色3/2シルト
- 107.5Yオーピーライト黑色2/2シルト
- 108.7.5Yオーピーライト褐色3/2シルト
- 109.5Yオーピーライト黑色2/2(植物遺体を含む)粘土
- 110.7.5Yオーピーライト黑色3/1(植物遺体を含む)粘土
- 111.7.5Yオーピーライト黑色2/2(植物遺体を含む)粘土
- 112.5Yオーピーライト黑色3/1(植物遺体を含む)粘土
- 113.2.5GY暗オーピーライト褐色3/1(植物遺体を含む)粘土
- 114.10YR暗褐色3/3粘土
- 115.10YR暗褐色4/4粘土
- 116.10YR黑色2/1粘土
- 117.2.5Y黒褐色2/2
- 118.5Yオーピーライト黑色2/2シルト
- 119.5Yオーピーライト4/2土
- 120.10YR暗褐色2/3小穢泥り土
- 121.10YR暗褐色3/3小穢泥り土
- 122.10YR暗褐色3/3
- 123.10YR黄褐色4/8シルト
- 124.5Yオーピーライト4/2土
- 125.5YR暗褐色3/1小穢泥り土
- 126.10YR暗褐色4/2小穢泥り土
- 127.10YR暗褐色3/3
- 128.2.5Y黒褐色3/2
- 129.10YR暗褐色2/1小穢泥り土
- 130.2.5Y黒褐色3/2小穢泥り土
- 131.10YR暗褐色4/4土
- 132.2.5Y黒褐色3/1小穢泥り土

- 133.5Yオーピーライト黑色3/1土
- 134.2.5Y黒褐色3/2土
- 135.10YR黒褐色3/1小穢泥り土
- 136.10YR黒褐色2/2小穢泥り土
- 137.2.5Y黒褐色3/1小穢泥り土
- 138.7.5Y黒褐色3/1土
- 139.7.5Y黒褐色4/3土
- 140.10YR黒褐色2/2シルト
- 141.10YR黒褐色3/1シルト
- 142.10YR黒褐色2/1微穢シルト
- 143.10YR黒褐色2/1
- 144.7.5Y黒褐色2/1土
- 145.10YR暗褐色3/2土
- 146.10YR黒褐色2/2土
- 147.10YR黒褐色3/1土
- 148.10YR暗褐色3/2土
- 149.10YR暗褐色3/3
- 150.10YR暗褐色2/2シルト
- 151.10YR黑色1.7/1シルト
- 152.7.5Y黒褐色2/1シルト
- 153.10YR黒褐色2/2穀穀糞シルト
- 154.10YR暗褐色3/2小穢泥り土
- 155.7.5Y黒褐色3/1小穢泥り土
- 156.10YR暗褐色3/4
- 157.2.5Y黒褐色3/1小穢泥り土
- 158.2.5Y暗オーピーライト褐色3/3小穢泥り土
- 159.7.5Y黒褐色3/2土
- 160.10YR暗褐色2/2
- 161.2.5Y黒褐色3/2小穢泥り土
- 162.10YR黄褐色5/8シルト
- 163.
- 164.
- 165.5Yオーピーライト5/3土

第6図 D～J地区土壌断面図

V. 遺構

調査地全体から、弥生時代から室町時代に属する遺構が検出された。また、近世～近代に属する耕作用の動溝なども検出した。以下、層序と同様、A～C地区とD～J地区に分け古い時期から順に分けて説明する。近世以降の耕作に伴うものの説明は割愛する。また、縄文海進に伴う海岸は遺構ではないがここで説明する。

1. A～C地区の遺構

縄文時代の海岸「図版2～12」

今回の調査地点では河内湾の岸辺は、海食崖を呈していたことが判明した。海岸の堆積物が、中粒砂ないし粗砂であることから砂浜であったことは明らかである。この砂は、旧石器を探るために水洗したところ、きれいな白砂であった。

海食崖の頂点と20m西に離れた海底では、4.8mの比高差があり、急な崖であったことを示している。今回、検出した海岸は河内湾の海岸全体の中では後浜にあたり、前浜はさらに西方に存在すると考えられる。基本層序に示した地点と、それより西へ約250m離れた地点との第13層上面の比高差は約1.2m有り、間接的にこれを示している。

海岸からは前期後半から中期前半土器が、食料とした後に捨てたシカ・イノシシなどの動物遺存体やトチ・オニグルミなどの植物遺存体とともに出土している。出土状況から見て、おそらくは海食崖上の低位段丘面に存在した集落から海岸に捨てられたものが波打際に埋没したものと思われる。

なお、この海食崖は現在も調査地付近では、傾斜地として残存していることが判明した。

弥生時代中期の遺構「図版13～17」

第11層上面で弥生時代中期初頭の大溝・溝、第8層上面で中期中頃の溝・土壤、第7層上面で中期後半の土壤墓1基と甕棺墓1基（供獻土器の可能性もある）を検出した。段丘の先端部にあたるC地区では検出していない。以下、主要な溝について説明する。

第11層上面遺構

いずれもA地区で検出した。出土遺物などからこの面で検出した遺構は畿内第IV様式に属すと考える。

溝

SD201（大溝） A地区の南西端で一部を検出した。幅1.6m以上、深さ2.7m以上で断面形は逆台形を呈すると考えられる。南東から北西に走る溝である。肩口に上場幅1.6m、下場幅3m、厚さ0.4mの盛土が認められることから土手を持つ大規模な溝と考えられる。堆積土は、黒灰色砂質シルト・暗灰色粗砂など10層以上である。少量の弥生土器が出土した。

SD202 A地区の西半部で検出した。長さ1m以上、幅0.3m、深さ0.08mで断面形は皿状を呈し、東から西に走る小さな溝である。西端は調査区外に延びる。土壤になる可能性もある。堆積土は、暗灰色砂質土である。少量の弥生土器が出土した。

第8層上面遺構

A・B地区で検出した。出土遺物などからこの面の遺構は畿内第Ⅲ様式に属すと考える。
溝

SD188 B地区のほぼ中央で検出した。長さ12m以上、幅3.8m、深さ1mで断面形は皿状を呈し、南西から北東に走る大溝である。北・南端とも調査区外に延びる。堆積土は、暗灰色粘質シルト・暗茶灰色砂質シルトなど10層に分層できる。畿内第Ⅲ様式に属す弥生土器が少量出土した。次に述べるSD107に上部を破壊されている。(55)の甕などが出土した。

土壤

SK76 A地区の西端付近で検出した。平面形は長方形を呈する。南端は、SD202に伴う盛土の一部を破壊している。幅1.7m、深さ0.48mで断面形は逆台形を呈する。堆積土は、暗灰色粘質シルト・暗茶灰色砂質シルトなど7層に分層できる。溝である可能性も考えられる。

SK78 B・C地区の境付近のB地区よりで検出した。平面形は不整円形を呈する。長軸1m短軸0.7mの規模をもつ。

第7層上面遺構

いずれも、B地区で検出した。出土遺物などからこの面の遺構は、畿内第Ⅳ様式に属すと考える。

墓

土塚墓 A・B地区の境で検出した。長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.24mの平面形が隅丸長方形の墓壙に頭を北東に向け仰臥屈葬の姿勢で埋葬されていた。墓壙内の埋土は、厚さ6~10cm前後の暗灰色土、暗茶黄色砂混じり土、淡茶灰色シルトなど3層以上が認められた。多賀谷氏の現場所見によれば、被葬者は40歳代の身長160cm前後の男性で、親不知の歯が認められないとのことであった。木棺の痕跡が認められることから土塚墓と判断した。人骨の保存状況が比較的良好であったためレプリカを作成した。

甕棺(SK61) 長軸0.8m、短軸0.6mの平面形が梢円形の掘方内に畿内第Ⅳ様式に属す甕(101)が納められていた。内部に入骨が認められなかったため甕棺墓ではなく供獻土器の可能性も考えられる。

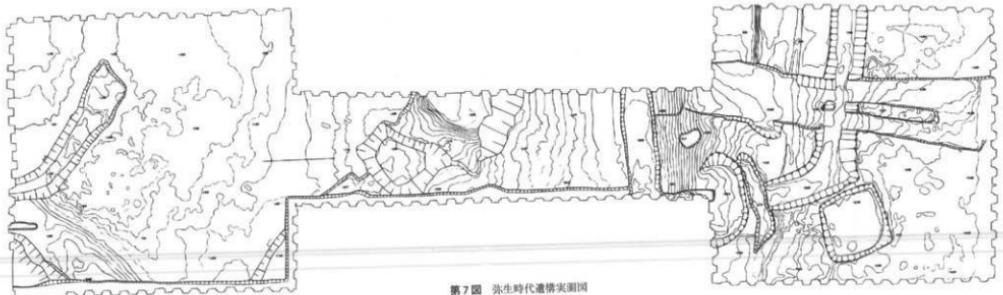
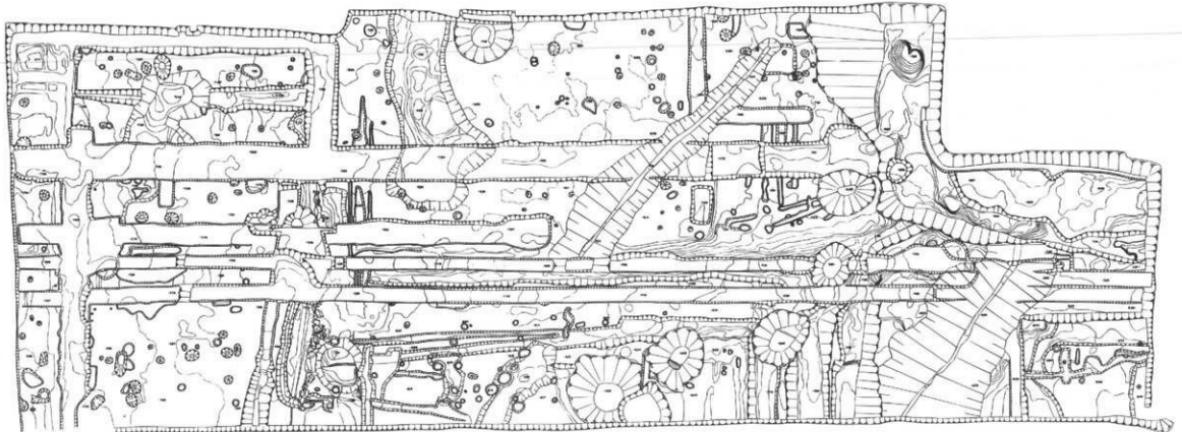
古墳時代中期から後期初頭の遺構「図版18・19・24・26」

A・B地区の第6層上面とC地区で溝・土壤・ピットを検出した。

溝

SD46 A・B地区の境付近からA地区で検出した。長さ13m以上、幅1m、深さ0.1mで断面形は皿状を呈し、南から北から西にL字状に延びる溝である。南端は調査区外に延び、西端は落ち込みに切られる。堆積土は、黒褐色粘土である。後述するSK10を切る。(136・202・206)の須恵器・韓式土器などが出土した。

SD5 C地区で検出した。長さ9m以上、幅1.8m、断面形は皿状を呈し、西から東から北にL字状に延びる溝である。南端はSK9に切られ北端は調査区外に延びる。



第7図 張生時代遺構実測図



第8図 土壌基実測図

土壤

SK10 B地区の西端、北側の矢板に北半が切られる状況で検出した。南側はSD46に一部を切られる。平面形は梢円に近い不整円形を呈すると思われる。長軸2.4m、短軸1.6mの規模をもつ。

SK6 C地区で検出した。平面形はほぼ正方形を呈する。長辺3.4m、短辺3m、深さ0.5mの規模をもつ。堆積土は、青灰色シルトなど2層である。

SK9 C地区で検出した。平面形はほぼ隅丸長方形を呈する。長辺4.2m、短辺0.8m、深さ0.1mの規模をもつ。堆積土は、暗茶褐色砂質土である。SD5を切る。

ピット

A地区で検出した。SD46周辺に散在する。径0.2m前後で深さ0.3m前後のものである。切り合うものが1個所認められた。

落ち込み

SX2 B・C地区の境の南側で検出した。平面形は梢円形を呈する。長軸4.2m、短軸3.2m、深さ0.9mの規模をもつ。堆積土は、暗灰色砂質土など6層である。南端は調査区外に延びる。SK8を切る。(130・139)の須恵器などが出土した。

2. D～J地区的遺構

弥生時代の遺構「図版18～23」

上部が削平されているため溝などの深く掘られた遺構(溝4条・土壤2基)しか検出できなかった。また、中世の遺構や搅乱により破壊されている部分が多く、全形がしれるものはない。溝2条は形態と出土遺物や隣接する調査地での検出例から方形周溝墓の周溝と考えられる。したがってE～H地区の北半に1基の方形周溝墓が存在したことになる。後期の土器を少量含むSD196を除き、いずれも中期(畿内第Ⅲ様式後半からⅣ様式)に属す。

方形周溝墓の周溝

東西の周溝を検出した。北側周溝は調査区外に南側周溝は削平ないし搅乱により破壊されて検出できていない。

SD206 E・F地区の北半で検出した。長さ10m以上、幅3m、深さ0.4mで断面形は皿状を呈し、南から北東に延びる溝である。南端は搅乱により切られる。(61)の短頸甌などが出土したことから方形周溝墓の西側周溝と考えられる。

SD158 G・H地区の北半で検出した。長さ9m以上、幅1m、深さ0.5mで断面形は皿状を呈し、南から北に延びる溝である。南端は少し西に振る。北端は調査区外に延びる。堆積土は、黒褐色シルト質土など7層である。小型甌(58)などが出土したことから方形周溝墓の東側周溝と考えられる。

溝

SD216 H・I地区の北半で検出した。長さ14m以上、幅2.8m、深さ0.8mで断面形はV字状を呈し、南西から北東に延びる溝である。南端は搅乱で切られる。搅乱で切られ先

に続かないことから本来の長さは15m前後と考えられる。(57) の壺蓋などが出土した。

SD196 I・J地区で検出した。長さ10m以上、幅5m、深さ1.6mで断面形はV字状を呈し、南西から北東に延びる溝である。南端は調査区外に延び北端は中世の川により切られる。堆積土は、暗褐色土・暗黄褐色土など7層である。(19~39) の土器や石鏃(10・12)などが出土した。土器の所属時期は上述したように少量の後期初頭の土器を含むが中期末の土器が主体である。中期末から後期にかけて機能していたと考えられる。

土壤

SK15 G地区中央で検出した。平面形は正方形を呈すると思われる。長辺1.8m以上、短辺1m以上、深さ0.3mの規模をもつ。(64) の高杯などが出土した。

SD214 G地区的南半で検出した。平面形はほぼ楕円形を呈する。長軸2.4m、短軸2.2m、深さ0.6mの規模をもつ。堆積土は、黒褐色小礫混りシルトと暗褐色シルトである。(40~53) の壺や甕などが出土した。

古墳時代中期から後期初頭の遺構「図版25・27」

少数であるがG・H地区で溝2条と土壤1基を検出した。

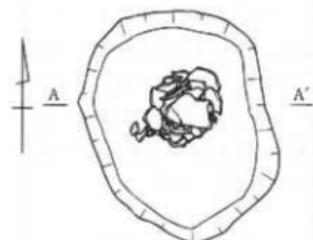
溝

SD102 H地区的南半で検出した。長さ5m以上、幅1.6m、深さ0.2mで断面形は皿状を呈し、南西から北東に延びる溝である。南端は調査区外に延び、北端は搅乱に切られる。堆積土は、茶褐色細礫混りシルトである。(123~129・132・133・135・137・140~142・144・185・187~190・208) の土師器・須恵器・韓式土器・製塩土器などが出土した。

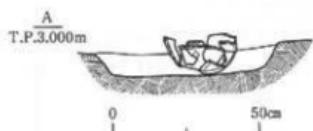
SD215 G地区的南半で検出した。長さ4m以上、幅0.4m、深さ0.2mで断面形は皿状を呈し、南から北に延びる溝である。南端は調査区外に延び、北端は搅乱に切られる。堆積土は、暗黄褐色小礫混り土と黒褐色小礫混り土である。(113) の鉢などが出土した。

土壤

SD213 G地区南半で検出した。平面形は方形を呈すると思われる。長辺2.4m以上、短辺1m、以上深さ0.2mの規模をもつ。西側をSD215に南側を中世の溝で切られる。堆積土は、黒褐色土・黒褐色シルトなど6層である。(183) の製塩土器などが出土した。

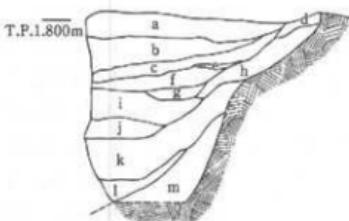


- T.P.2,000m
- a. 暗灰色粘土
 - b. 暗灰色小砾混りシルト
 - c. 暗灰色小砾混りシルト
 - d. 暗灰色シルト
 - e. 緑黄色粘土
 - f. 暗灰褐色小砾混りシルト
 - g. 暗灰褐色シルト

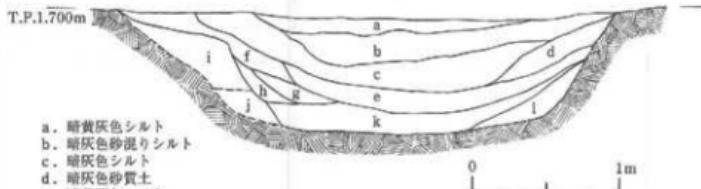


SK76堆積土断面図

棊棺実測図



SD201堆積土断面図



SD188堆積土断面図

第9図 棋棺・遺構堆積土断面図

3. 平安時代から室町時代の遺構

井戸・土坑・溝・河川・落ち込みがある。

井戸はA地区からI地区まで計16基検出した。

井戸1 (Aハ地区)

検出面での規模は、東西2.5m、南北2.1m、深さ0.3mを測る。不定形な隅丸方形を呈する素掘りの井戸である。すぐ南には土坑2や溝1、ピットなどがあり他の用途を考える方が良いと思われる。遺物は土師器皿が最も多く、以下須恵器、弥生土器、瓦器となっている。

井戸2 (Aホ地区)

検出面での規模は、東西0.7m以上、南北1.3m、深さ0.7mを測る。平面は梢円形を呈し、ほぼ直線的に掘られた素掘りの井戸である。井戸内の堆積土は、2層に分層できる。上層は暗オリーブ灰色細礫混じりシルトを中心として暗緑灰色中粒砂混じりシルトを含む。下層は緑黒色中粒砂混じりシルトを中心に暗オリーブ灰色細礫混じりシルトが混じっている。井戸廃絶時の埋土と考えられる。深さ0.7mと浅いことなどから、井戸以外の用途も考えた方がよいかもしれない。遺物が出土しなかったため時期は不明である。

井戸3 (Bイ地区)

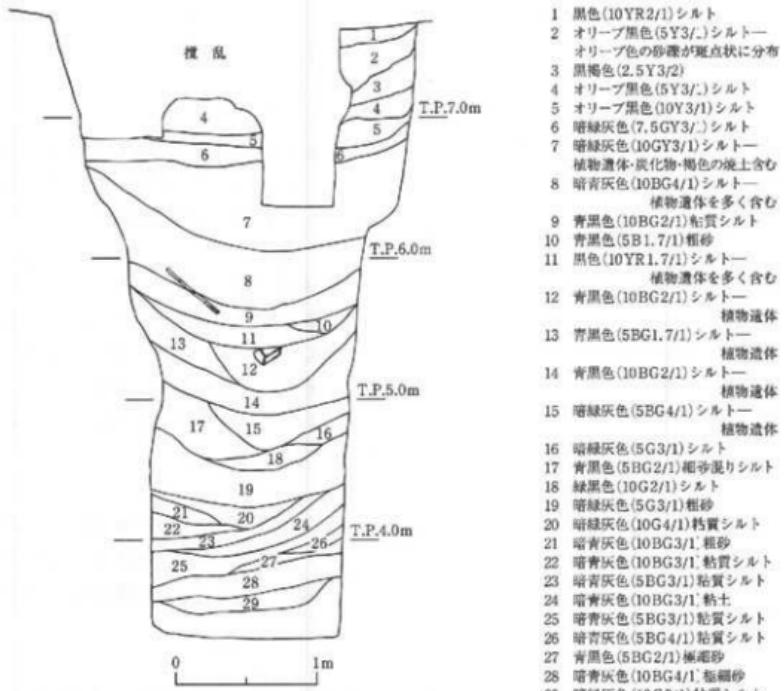
南側半分を検出した。検出面での規模は、東西1.7m、南北1.5m、深さ0.6mを測る。ほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。断面は椀状を呈する。堆積土は1層で暗緑灰色(10G3/1)シルトに緑黒色中粒砂混じり粘土がブロック状に混じっている。廃絶時の埋土と考えられる。

井戸4 (Fト地区)

井戸4は、調査区のはば中央部に位置する。検出面での規模は、東西2.9m、南北2.5m、深さ4.7mを測る。東西に長い梢円形を呈する素掘りの井戸である。上層は下水管・ガス管により一部破壊されていた。井戸の断面形は、南壁がほぼ垂直であるのに対して西および北側は、内側にやや傾斜する。堆積土は29層に分層できる。第2層と4層にはブロック土がたくさん含まれており人為的な埋め土と考えることができる。第7層には植物遺体・炭化物・焼土が、第8層には植物遺体と竹の管が、第12層には整形された立方体の石が、第13層～15層には植物遺体が多く含まれていたことから井戸廃絶後に堆積したものと考えることができる。第19層には亀の甲羅、曲物が検出された。井戸の底面の高さはT.P.3m前後である。第4層、8層、9層、11層、15層、18層、19層、24～29層から遺物が出土した。上層ほど出土量が多く、下層に行くにしたがって少なくなっていく。土師器皿が最も多く、以下瓦器楕・羽釜、土師器羽釜、須恵器、陶磁器、石器、焼土塊となっている。土師器皿から14世紀中葉に廃絶したものと考えられる。

井戸5 (Aホ地区)

検出面での規模は、東西0.9m、南北0.9m、深さ1.0mを測る。円形を呈する素掘りの井戸である。南東部ピット108によって切られている。井戸の南側には東南東から西北西にかけて



第10図 井戸F-4実測図

幅0.6~0.8mの溝46が走っている。底は平坦である。井戸内の堆積土は、暗灰色中粒砂混じり粘土である。深さ1mと他の井戸と比較して浅いことなどから、井戸以外の用途も考えた方がよいかもしれない。遺物は出土しなかった。

井戸6（Fへ地区）

井戸6は、調査区のほぼ中央北寄りに位置する。検出面での規模は、東西2.3m、南北1.4m、深さ4.7mを測る。隅丸方形を呈する素掘りの井戸である。井戸西側にたくさんのピットが検出されていることから建物のすぐ東に位置し、建物に付属するものと考えられる。井戸の断面形は、南北壁がほぼ垂直であるのに対して西および東側は、内側にやや傾斜する。堆積土は19層に分層できる。第1~7層には人頭大の花崗岩がたくさん含まれており井桁があったものと考えられる。また、第7層からは骨格が出土していることから井戸廃絶時に何等かの祭祀が行われた可能性がある。第7層までは埋め土である。第8層以下は粘土、シルトを主体とした堆積物である。井戸の底面の高さはT.P. 3 m前後で湧水層の暗緑灰色粗砂まで

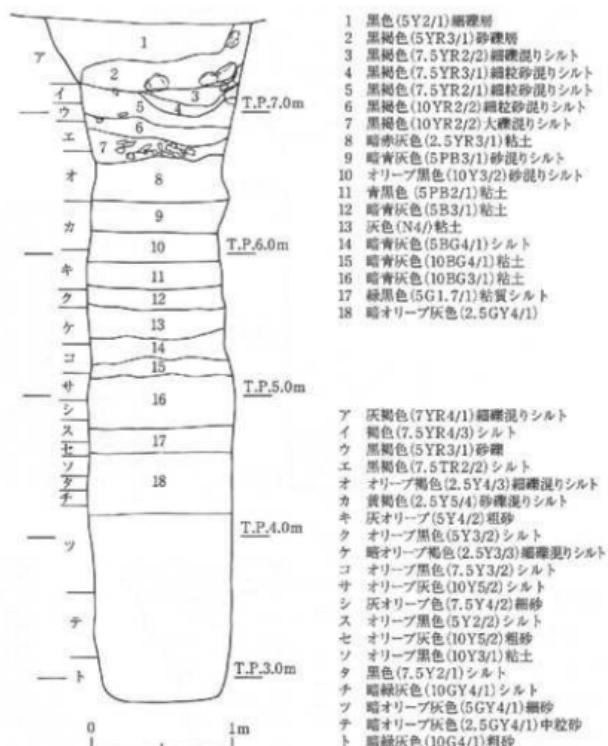
掘り込んでいる。遺物は、第5層、11層、12層、14層、15層から出土した。瓦器碗が最も多く、次いで土師器皿、瓦器羽釜・擂鉢・甕、陶磁器、須恵器、弥生土器、石器、埴輪、サヌカイトなどっている。瓦器羽釜、青磁碗、土師器皿から16世紀前半に廃絶したものと考えられる。

井戸8 (日イ
・口地区)

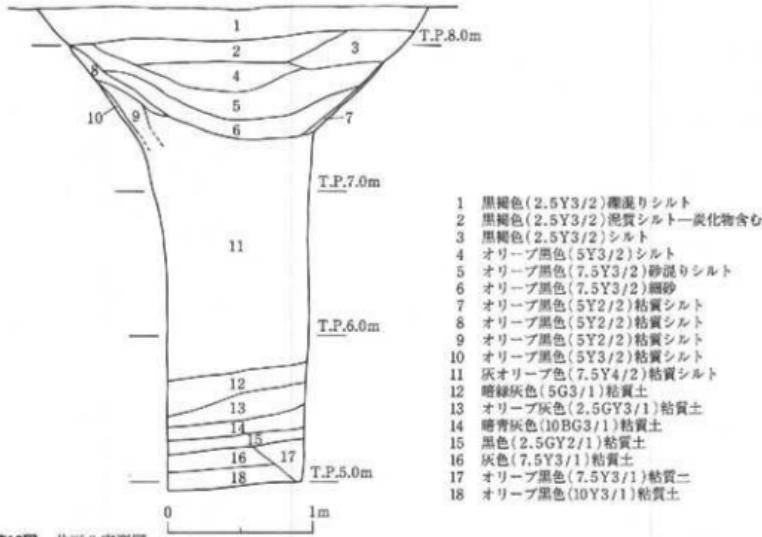
北側1／3が調査区外へ延びるもの円形を呈する素掘りの井戸である。検出面での規模は、東西2.7m、南北1.9m以上、深さ3.3mを測る。井戸の断面形は、上部1mは漏斗状を呈するがそれより以下は垂直に落ち込む。井戸の堆積層は中層が断面の崩壊で明らかではないが上層は9層、下層は7層に分層できた。上層はオリーブ黒色、黒褐色を中心とする色調で、シルトや粘質シルトを主体とした堆積物である。全体に中央部が落ち込んでいるため徐々に堆積したものと思われる。井戸の底面の高さはT.P.3m前後である。遺物は、第1～4層から出土した。土師器が最も多く、次いで瓦器、須恵器、陶磁器となっている。土師器皿から14世紀後半に廃絶したものと考えられる。

井戸9 (I八・手地区)

井戸9は、調査区の東部に位置する。検出面での規模は、東西2.6m、南北2.1m、深さ4mを測る。東西方向に長い楕円形を呈する素掘りの井戸である。井戸の断面形は、上部1.5m



第11圖 井口6米測開



第12図 井戸8実測図

はやや上部が広がり気味であるがそれより以下は垂直に落ち込む。井戸の堆積層は中層が0.6mの間が断面の崩壊で明らかでないが上層は19層、下層は12層に分層できた。上層から赤黒色、黒褐色、暗青灰色、青黒色、緑黒色と色調が変化し上層は酸化、下層に行くにつれて還元されていることがわかる。シルトを主体



とした堆積物である。井戸の南側0.4mには東西方向に長く延びる幅1.7mの溝203がある。井戸の東側には河川SX 2が東から西に流れ井戸の東側で北へ流路の向きを変えている。井戸の底面の高さはT.P.4.2mである。遺物は、第1～6層、9層から出土した。土師器が最も多く、次いで瓦器、須恵器、陶磁器、青磁、石器、木器となっている。土師器皿から15世紀末～16世紀前半に廃絶したものと考えられる。

井戸10（日カ・ヨ地区）

井戸10は、調査区の南東部に位置する。検出面での規模は、東西2.6m、南北3.0m、深さ3.9mを測る。南北方向に長い楕円形を呈する素掘りの井戸である。井戸の断面形状は、上部1mは漏斗状を呈するがそれより以下は垂直に落ち込み、最下部約1mほどは急激に幅を狭める。井戸の堆積層は中層が0.5mの間が断面の崩壊で明らかではないが上層は22層、下層は9層に分層できた。上層は黒色、黒褐色シルトを主体とした堆積物で、以下オリーブ黒色砂混じりシルト、さらに粘土へと変化し最下層は暗オリーブ灰色シルトとなっている。井戸の底面の高さはT.P.4.3mである。遺物は、第1・2層から土師器、瓦器、陶磁器、須恵器、石器、焼土塊が少量出土した。土師器皿から14世紀末～15世紀前半に廃絶したものと考えられる。

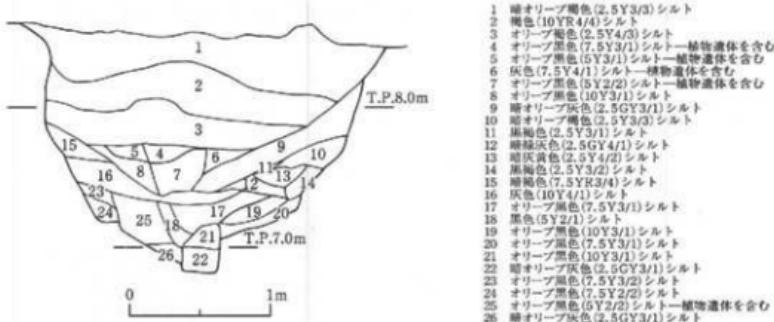
- 1 黒色(10YR 2/1)シルト
- 2 黒色(7,5YR 1,7/1)
- 3 黒褐色(5YR 2/1)シルト
- 4 黒褐色(5YR 2/1)シルト
- 5 黑褐色(5YR 2/1)シルト
- 6 黑色(2,5Y 2/1)粘土
- 7 赤黒色(2,5YR 2/1)シルト
- 8 黑褐色(10YR 3/1)シルト
- 9 黑褐色(7,5YR 2/2)シルト
- 10 黑褐色(5YR 2/2)粘土
- 11 黑色(5Y 2/1)粘土
- 12 黑色(5Y 2/1)粘土
- 13 黑色(2,5GY 2/1)砂混じりシルト
- 14 黑色(7,5Y 2/1)砂混じりシルト
- 15 オリーブ黒色(5GY 2/1)シルト
- 16 オリーブ黒色(10Y 2/1)シルト
- 17 黑色(2,5GY 2/1)シルト
- 18 オリーブ黒色(10Y 3/1)砂混じりシルト
- 19 緑黒色(10GY 2/1)砂混じりシルト
- 20 オリーブ黒色(5GY 2/1)砂混じりシルト
- 21 黑褐色(5G 2/1)砂混じりシルト
- 22 黑色(7,5Y 2/1)砂混じりシルト
- 23 緑黒色(5G 3/1)シルト
- 24 青黒色(10BG 2/1)砂混じりシルト
- 25 オリーブ黒色(7,5Y 2/2)粘土
- 26 黑色(10Y 2/1)粘土
- 27 黑褐色(7,5GY 2/1)砂混じりシルト
- 28 緑青灰黑色(5BG 3/1)網隙
- 29 網隙灰黑色(10G 4/1)粘土
- 30 網隙灰黑色(5BG 4/1)網隙
- 31 網隙灰黑色(7G 3/1)網隙
- 32 網隙灰黑色(10G 3/1)網隙
- 33 青黒色(5BG 2/1)網隙
- 34 網隙灰黑色(5G 3/1)シルト
- 35 青黑色(5B 2/1)シルト
- 36 オリーブ黒色(7,5Y 3/2)粘土
- 37 オリーブ黒色(7,5Y 2/2)粘土
- 38 オリーブ黒色(10Y 3/1)粘土
- 39 オリーブ黒色(5Y 3/2)粘土
- 40 網隙オリーブ黒色(2,5GY 3/1)砂質シルト
- 41 黑色(2,5GY 2/1)粘土
- 42 網隙オリーブ黒色(5Y 4/3)シルト
- 43 網隙オリーブ黒色(2,5GY 4/1)シルト
- 44 網隙オリーブ黒色(5GY 3/1)シルト



第14図 井戸10実測図

井戸11 (Hヌ・ヨ地区)

井戸11は、調査区の南東部に位置する。井戸11の北西側には井戸12が、北東側には井戸10がある。切りあい関係は井戸10が一番古くそれを井戸12が切っている。井戸12はこの井戸11に切られているため井戸10・12・11と変遷したことが窺える。検出面での規模は、東西2.6m、南北2.1m、深さ2m以上を測る。隅丸方形を呈する素掘りの井戸である。井戸10～12のすぐ西側にはたくさんのピットが検出されておりこの建物のすぐ東に位置し、建物に付属するものと考えられる。井戸の断面形は、上部2mを見る限りはU字状を呈するがそれより以下は不明である。井戸の堆積層は大きく11層に分層できた。上層は暗オリーブ褐色、褐色、オリーブ褐色を中心とする色調で、シルトを主体とした堆積物、中層は灰色、オリーブ黒色、下層は暗オリーブ灰色を中心とする色調でいずれもシルトを主体とした堆積物である。遺物は、第1～9層の各層、10～16層で出土した。土師器皿が最も多く、次いで瓦器碗、土師器羽釜、須恵器甕・鉢、陶磁器、弥生土器となっている。土師器皿、瓦器碗から12世紀前半～中葉に廃絶したものと考えられる。



第15図 井戸11実測図

井戸12 (Fヘ地区)

井戸12は、調査区の南東部に位置する。検出面での規模は、東西3.5m、南北3.5m、深さ1.7m以上を測る。隅丸方形を呈する井戸である。南側と北側に幅2～4cmの板材が緩方向に打たれて並んでいたり、東側にも板材が少し見られることから縦板横棟の井戸側があったものと考えられる。井戸側の一辺は0.9mである。井戸の断面形は、漏斗状を呈するが下部は垂直に落ち込む。井戸の堆積層は大きく17層に分層できた。上層は褐色、にぶい黄褐色、中層は黒褐色、暗褐色、下層はオリーブ黒色を中心とする色調で上層、中層はシルト、下層は粘土を主体とした堆積物である。遺物は、第1～3層の各層、4～5層、6～7層、8～16層で出土した。土師器皿が最も多く、次いで瓦器碗、土師器羽釜、須恵器、陶磁器となっている。土師器皿、羽釜、瓦器碗から12世紀前半～中葉に廃絶したものと考えられる。

井戸13 (Iニ地区)

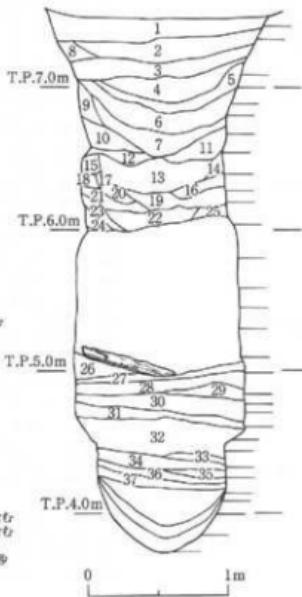
井戸13は、調査区の南東部に位置する。井戸9の南1.5m、井戸14の北東1.8mにある。上部を溝192によつて切られてい る。平面形態は、南北方向

に長い梢円形を呈する素掘りの井戸である。検出面での規模は、東西1.4m、南北1.5m、深さ3.8mを測る。井戸の断面形は、上部1mはやや漏斗状を呈するがそれより以下は垂直に落ち込む。井戸の堆積層は中層が断面の崩壊で明らかではないが上層は大きく12層、下層は15層に分層できた。上層はオリーブ黒色、灰色、暗灰色、暗緑灰色を中心とする色調で、シルトや砂混じりシルト、粘質シルト、下層は灰色、オリーブ黒色、暗オリーブ褐色を中心とする

- 1 オリーブ褐色(7.5YR3/1)シルト
- 2 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト
- 3 黒色(7.5Y1/1)シルト
- 4 灰色(10Y4/1)シルト
- 5 暗灰色(10Y3/3)シルト
- 6 緑褐色(10GY3/1)シルト
- 7 緑褐色(10GY3/1)シルト
- 8 緑褐色(10GY3/1)シルト
- 9 暗褐色(10GY3/1)シルト
- 10 暗褐色(10GY3/1)シルト
- 11 オリーブ黒色(10YR4/1)砂混じりシルト
- 12 暗オリーブ褐色(5GY3/1)砂混じりシルト
- 13 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土
- 14 黒色(7.5Y4/1)植物遺体を含む
- 15 黒色(5GY3/1)粘質土
- 16 暗オリーブ褐色(2.5GY4/1)砂混じりシルト
- 17 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土
- 18 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂混じりシルト
- 19 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土
- 20 黒色(7.5Y4/1)粘質土—植物遺体を含む
- 21 暗オリーブ褐色(2.5GY4/1)粘土
- 22 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土
- 23 オリーブ黒色(7.5Y2/2)砂混じりシルト
- 24 暗オリーブ褐色(2.5GY3/1)粘質土
- 25 暗オリーブ褐色(5GY3/1)砂混じり粘質土
- 26 灰色(5Y4/1)シルト
- 27 暗オリーブ褐色(2.5GY4/1)粘土—植物遺体を含む
- 28 灰色(10Y4/1)粘土—植物遺体を含む
- 29 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土—植物遺体を含む
- 30 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土—植物遺体を含む
- 31 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土—植物遺体を含む
- 32 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土
- 33 暗オリーブ褐色(2.5GY4/1)粘土—細粒砂
- 34 暗オリーブ褐色(2.5GY3/1)粘土
- 35 暗オリーブ褐色(5GY3/1)粘土
- 36 灰色(10Y4/1)粘土
- 37 緑褐色(10GY6/1)粘土



第16図 井戸12実測図

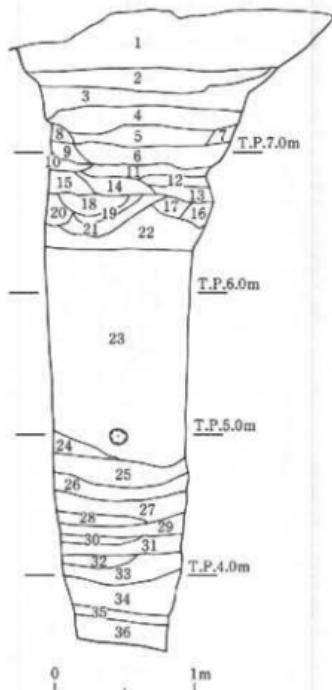


第17図 井戸13実測図

色調で粘土を主体とした堆積物である。地表面から2.4m地点で幅8cm、長さ68cmの板材が出土しており、井桁または井戸側を構成するものかもしれない。井戸の底面の高さはT.P.3.8mである。遺物は、第1層、2層、4層、5層、7層、13層、19層から出土した。瓦器椀・羽釜・擂鉢・土師器皿・羽釜・陶磁器・須恵器・弥生土器・サスカイト・砾石・骨が少量出土した。

井戸14（Iニ地区）

井戸14は、調査区南東部に位置する。検出面での規模は、東西1.4m、南北2m、深さ4.5mを測る。南北に長い椭円形を呈する素掘りの井戸である。井戸の断面形は、東壁がほぼ垂直であるのに対して西および北側は内側にやや傾斜する。堆積土は中層が断面の崩壊で明らかではないが上層は22層、下層は13層に分層できた。上層は灰色、暗オリーブ灰色、オリーブ黒色、暗褐色、下層は黒褐色、灰色、暗オリーブ灰色、オリーブ黒色を中心とする色調で上層はシルト、粘土、砂混じりシルト、粘質シルト、下層はシルト、細粒砂、粗粒砂を主体とした堆積物である。井戸の底面の高さはT.P.3.5mである。遺物は、第1層、3層、23層、25層、26層から土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・弥生土器・石製品と骨・焼土塊多数が出土



- 1 灰色(7.5Y4/1)小穂混りシルト
- 2 灰色(10Y4/1)シルト
- 3 灰色(10Y4/1)粘土
- 4 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土
- 5 灰色(7.5Y4/1)粘土
- 6 暗緑灰色(10GY3/1)粘土
- 7 灰色(N4/0)粘土
- 8 灰色(N4/0)粘土
- 9 暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト
- 10 暗オリーブ灰色(2.5GY2/1)砂混りシルト
- 11 オリーブ黒色(5GY2/1)砂混りシルト—植物遺体を含む
- 12 黒色(7.5Y2/1)シルト
- 13 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)小穂混りシルト
- 14 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土
- 15 黒色(2.5GY2/1)砂混りシルト
- 16 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土—植物遺体を含む
- 17 オリーブ黒色(10Y3/1)砂混りシルト
- 18 黒色(7.5Y2/1)粘質土—植物遺体を含む
- 19 オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘質土
- 20 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土
- 21 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土
- 22 黒色(2.5Y2/1)小穂混りシルト—植物遺体を含む
- 23 黒褐色(2.5Y3/1)シルト—焼け土多量に含む
- 24 黄灰色(2.5Y4/1)シルト
- 25 灰色(10Y4/1)シルト
- 26 灰色(7.5Y4/1)シルト
- 27 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト
- 28 オリーブ黒色(10Y3/1)シルト
- 29 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト
- 30 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト
- 31 暗緑灰色(10GY3/1)シルト
- 32 暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト
- 33 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト
- 34 灰色(10Y4/1)細砂
- 35 暗オリーブ灰色(2.5Y4/1)細砂
- 36 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粗砂

第18図 井戸14実測図

した。土師器皿、瓦器碗から14世紀前半～中葉に廃絶したものと考えられる。

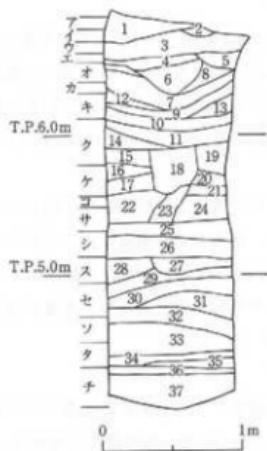
井戸15（Iワ地区）

井戸15は、調査区東端部に位置する。検出面での規模は、東西1.1m、南北1m、深さ2.9mを測る。梢円形を呈する素掘りの井戸である。上部を河川によって削られている。井戸の断面形は、ほぼ垂直である。堆積土は37層に分層できた。上層は黒色、オリーブ黒色、中層はオリーブ黒色、灰色、暗オリーブ灰色、下層は灰色、オリーブ黒色を中心とする色調で上層は粘質シルト、粘土、中層は粘土、下層は粘土を主体とした堆積物である。井戸の底面の高さはT.P.4.4mである。遺物は土師器、瓦器、須恵器、陶磁器、弥生土器、手づくねのミニチュア土器が出土した。土師器皿、瓦器碗から14世紀前半～中葉に廃絶したものと考えられる。

井戸16（Fル地区）

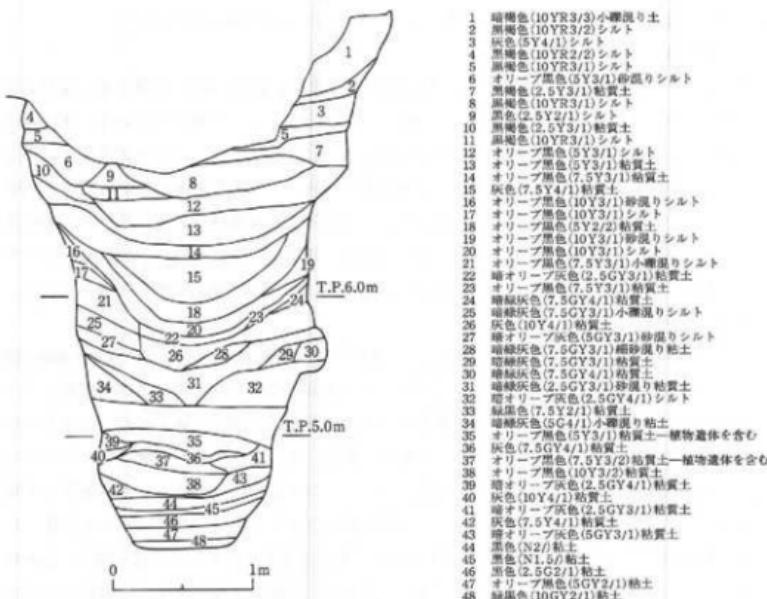
井戸16は、調査区のほぼ中央部に位置する。検出面での規模は、一辺2.6m、深さ3.8mを測る円形を呈する素掘りの井戸である。井戸4のすぐ東側に位置する。南および北東側にピットがたくさんあり、この建物のすぐ南東および北に位置し、建物に付属するものと考えられる。堆積土は大きく26層に分層できた。上層は黒褐色、オリーブ黒色、中層は暗オリーブ灰色、暗緑灰色、下層はオリーブ黒色、灰色、暗オリーブ灰色、灰色を中心とする色調で上層はシルト、砂混じりシルト、粘質シルト、中層は粘質シルト、下層は粘質シルトを主体とした堆積物である。井戸の底面の高さはT.P.4.2mである。遺物は、第6層、12～13層、15層から出土した。土師器が最も多く、次いで瓦器、須恵器、陶磁器、サヌカイト、骨となっている。土師器皿、瓦器擂鉢から15世紀前半～中葉に廃絶したものと考えられる。

- ア 單純灰色(10GY4/1)シルト
イ 單純灰色(7.5GY4/1)シルト
ウ 單純灰色(10GY4/1)シルト
エ 單純灰色(10GY4/1)シルト
オ 緑灰色(10GY5/1)シルト
カ オリーブ黒色(7.5YS3/1)シルト
キ 單純灰色(10GY4/1)シルト
ク オリーブ黒色(7.5Y2/2)シルト
ケ 單純灰色(5BG4/1)シルト
コ 單純灰色(10GY4/1)シルト
サ 單純灰色(7.5GY4/1)細砂
シ 單純灰色(10CY4/1)細砂
ス 單純灰色(5G3/1)細砂の混りシルト
セ 單純灰色(10G4/1)細砂混じシルト
ソ オリーブ灰(5GY3/1)細砂
タ 單純灰色(10GY4/1)細砂混り
チ 單純灰色(5GY4/1)細砂シルト



- 9 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土
10 暗オリーブ灰(2.5GY2/1)粘土
11 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土
12 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
13 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土
14 オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土
15 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土
16 オリーブ黒色(10GY3/1)
砂混じシルト
17 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
18 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土
19 灰色(10Y4/1)粘土
20 灰色(7.5Y4/1)粘土
21 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
22 オリーブ黒色(5GY2/1)粘土
23 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土
24 灰色(7.5Y4/1)粘土
25 暗オリーブ灰(2.5GY4/1)粘土
26 灰色(7.5Y4/1)粘土
27 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
28 暗オリーブ灰(2.5GY4/1)粘土
29 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土
植物遺体を含む
30 單純灰(7.5Y4/1)粘土
31 灰色(10Y4/1)粘土
32 灰色(7.5Y4/1)粘土
33 オリーブ黒色(5Y2/2)粘土
34 オリーブ黒色(10Y2/2)粘土
35 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土
36 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
37 灰色(7.5Y4/1)粘土

第19図 井戸15実測図



第20図 井戸16実測図

溝

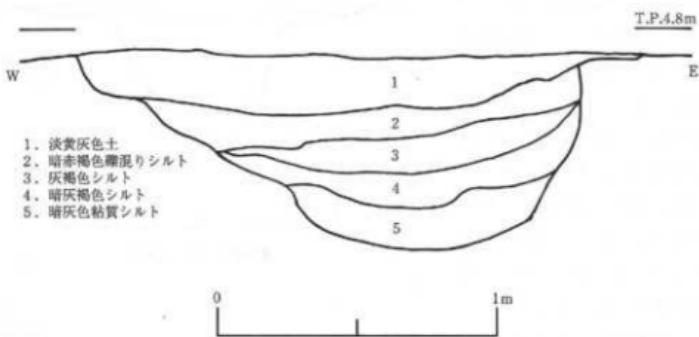
調査区全体で大小合わせて計238条を検出した。大半が両端ないし一端が調査区外に延び全長のわかるものは少ない。基本的には東西方向、南北方向に延びるものが多いがL字形に曲がるものもある。出土遺物が少なく時期のわからないものが多いが、明らかになったものは12世紀中葉から16世紀前葉までのものである。以下、主要な溝について記述する。

溝2 (Hヨ～H示)

溝2は、調査区中央部南寄りに位置する。東から西に向かいほぼ東西方向に延びる。東端は土坑71によって切られている。検出面での規模は、全長約9m、幅0.2～0.8m、深さ3～8cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差は20cmである。遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から12世紀前半から中葉以前に埋没したものと考えられる。

溝22 (Cイ～Bチ)

溝22は、調査区西部を南北に継ぎ、「く」字形に屈曲して西側に方向を変える。南東コーナーは土坑6によって一部を切られている。検出面での規模は、全長約13.5m、幅1.5～2.5m、深さ66～45cmを測る。溝の断面形は皿状を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差

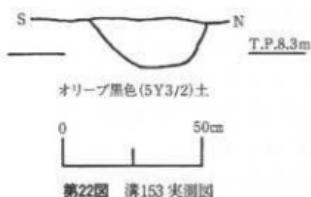


第21図 溝22実測図

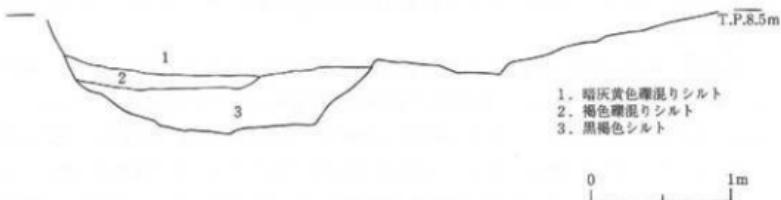
は28cmである。溝内の堆積土は大きく5層に分層できた。上層は淡黄灰色砂質シルト、中層は暗赤褐色礫混りシルト、灰褐色シルト、下層は暗灰褐色シルト、暗灰色粘質シルトである。出土遺物は土師器皿が一番多く以下瓦器、須恵器、弥生土器である。土師器皿・瓦器塊から12世紀中葉から後半に埋没したものと考えられる。

溝153（Gヌ～Hヌ）

溝153は、調査区中央部南端部分に位置する。東から西に向かいわずかに北に振るように延びる。検出面での規模は、全長約12m、幅0.4～0.5m、深さ14～20cmを測る。溝の断面形はV字形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差は23cmで西側が低くなっている。溝内の堆積層はオリーブ黒色土の單一層である。出土遺物は土師器皿が一番多く以下瓦器、須恵



第22図 溝153実測図



第23図 溝192実測図

器、弥生土器、陶磁器である。土師器皿から16世紀前半～中葉に埋没したものと考えられる。

溝192（Iニ～ホ）

溝192は、調査区東端部に位置する。南から北に向かい東に振るよう延びるが途中で消滅する。検出面での規模は、全長約5.3m、幅3.9～4.2m、深さ12～52cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。

検出した範囲内での溝底面の比高差はほとんどない。

溝内の堆積層は大きく3層に分層することができる。

第1層は暗灰黄色疊混じりシルト、第2層は褐色疊混じりシルト、第3層は黒褐色シルトである。出土遺物は土師器皿が一番多く以下瓦器羽釜・火舎、瓦、陶磁

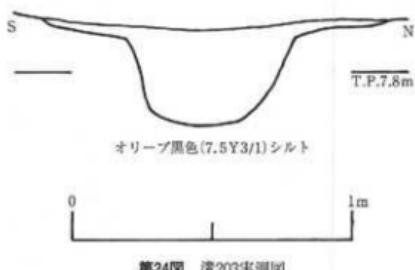
器、須恵器、弥生土器、製塩土器、サスカイト、骨、焼土である。土師器皿、青磁碗から16世紀中葉に埋没したものと考えられる。

溝195（Iニ～ホ）

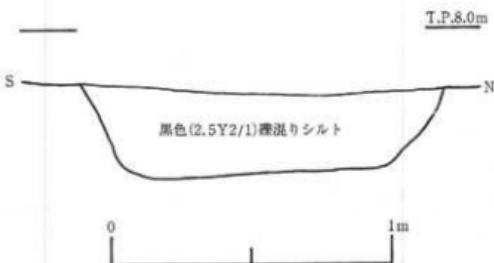
溝195は、調査区中央部南端部分、溝192の東側に位置する。南から北に向かいわずかに東に振るよう延びるが途中で消滅する。検出面での規模は、全長約7m、幅2.7～3.6m、深さ26～56cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差はほとんどない。溝内の堆積層は暗褐色シルトの単一層である。出土遺物は土師器皿が一番多く以下瓦器碗、同皿、陶磁器、須恵器である。土師器皿から16世紀中葉頃に埋没したものと考えられる。

溝203（Iハ～チ）

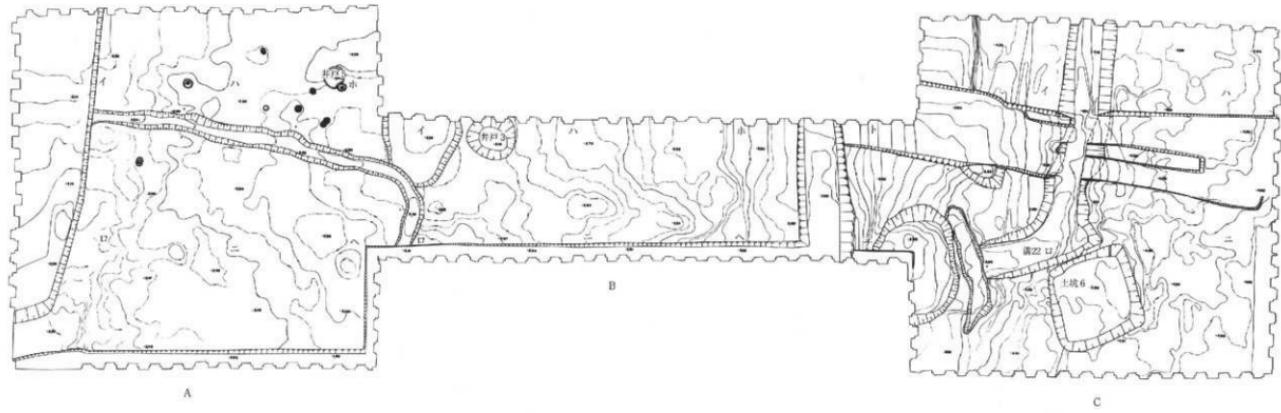
溝203は、調査区東部中央部分に位置する。西から東に向かいわずかに北に振るよう延びる。東端は河川に切られている。検出面での規模は、全長約7m、幅1.8m、深さ22～43cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差は44cmで東側が低くなっている。溝内の堆積層はオリーブ黒色シルトの単一層である。出土遺物は土師器皿が一番多く以下瓦器碗・羽釜・火舎、須恵器、陶磁器、瓦、弥生土器である。瓦器碗、土師器皿から14世紀中葉に埋没したものと考えられる。



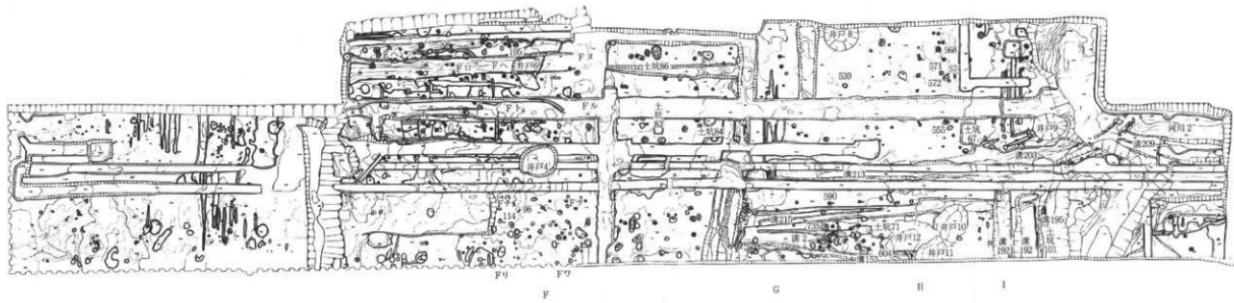
第24図 溝203実測図



第25図 溝195実測図



第26圖 中世遺構平面圖



第27圖 中世遺構平面圖

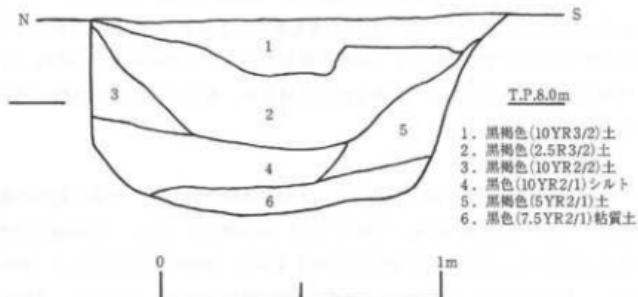
溝209（Iチ～Jニ）

溝209は、調査区東端部中央部分に位置する。東から西に向かいわずかに北に振るように延びる。検出面での規模は、全長約8.4m、幅0.65～1m、深さ14～20cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差は22cmで西側が低くなっている。溝内の堆積層は黒色礫混じりシルトの單一層である。出土遺物は土師器皿が圧倒的に多く以下瓦器碗・小皿、須恵器甕・鉢、陶磁器、瓦、弥生土器、サヌカイト、焼土である。瓦器碗、土師器皿から13世紀前半に埋没したものと考えられる。

溝213（Gワ～Hカ）

溝213は、調査区中央部に位置する。西から東に向かいわずかに北に振るように延びるが、大半が埋設管によって破壊されている。西側を溝151・152によって切られている。検出面での規模は、全長17m、幅1.7～1.3m、深さ48～37cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差は20cmで東側が低くなっている。溝内の堆積層は6層に分層できる。第1層は黒褐色細礫混じり土、第2層は黒褐色細礫混じり土、第3層は黒褐色細礫混じり土、第4層は黒色細礫混じりシルト、第5層は黒褐色細礫混じり土、第6層は黒色粘質土である。

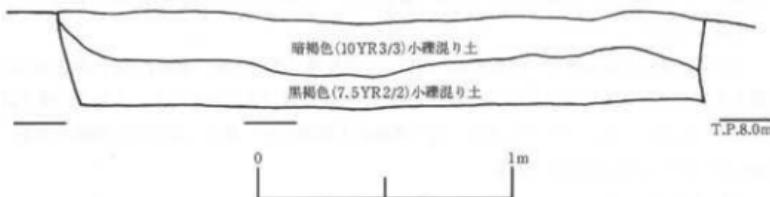
出土遺物は
土師器皿が
一番多く以
下瓦器碗・
羽釜・火舎、
須恵器、陶
磁器、巴文
軒丸瓦、弥
生土器であ
る。



第28図 溝213実測図

溝215（Gカ～ヨ）

溝215は、調査区中央部南端部分に位置する。北から南に向かいわずかに西に振るように延びる。西側を溝218に、途中溝2、溝153によって切られている。検出面での規模は、全長2.5



第29図 溝215実測図

m、幅0.4~1.2m以上、深さ18cmを測る。溝の断面形はU字形を呈する。検出した範囲内で溝底面の比高差はほとんどない。溝内の堆積層は2層に分層できる。上層は暗褐色小礫混じり土、下層は黒褐色小礫混じり土である。出土遺物は土師器皿が一番多く以下瓦器椀・須恵器・陶磁器・弥生土器・石製品である。土師器皿・瓦器椀から14世紀中葉頃に埋没したものと考えられる。

土坑

土坑は調査区全域で見つかり、大小合わせて計112基を検出した。平面形は隅丸長方形、長方形、楕円形が多い。出土遺物が少なく、ほとんど細片のため時期の決定できないものが多い。

土坑6（Cロ～ニ）

土坑6は調査区西部南寄りに位置する。検出面での規模は東西2.6m、南北3.0m、深さ42cmの隅丸長方形を呈する。断面は逆台形を呈する。底面は東側がやや高く西に傾斜し最も深いのは西端部である。土坑内の埋土は上層が茶褐色細礫混じりシルト、下層が青灰色シルトである。出土遺物は土師器が一番多く次いで瓦器・須恵器・弥生土器・陶磁器である。

土坑12（Eチ～リ）

土坑12は調査区中央部南寄りに位置する。北側は少し削られている。検出面での規模は東西1.75m、南北1.2m以上、深さ12cmの隅丸長方形を呈する。断面は皿状を呈する。底面は東側がやや高く西に傾斜し最も深いのは西端部である。土坑内の埋土は黒色（7.5YR1.7/1）細礫混じりシルトである。出土遺物は土師器が一番多く次いで瓦器椀・羽釜・須恵器・弥生土器である。

土坑18（Fロ）

土坑18は調査区中央部に位置する。北側を溝65で切られ、南側は道路の擁壁によって破壊されている。土坑18が埋まつた後でピット179が掘られている。検出面での規模は東西1.75m、南北1.9m以上、深さ2cmの隅丸長方形を呈する。断面は皿状を呈する。底面はほぼ平坦面をなす。土坑内の埋土は黒褐色（5YR3/1）砂混じりシルトである。遺物が出土しなかつたため時期は不明である。

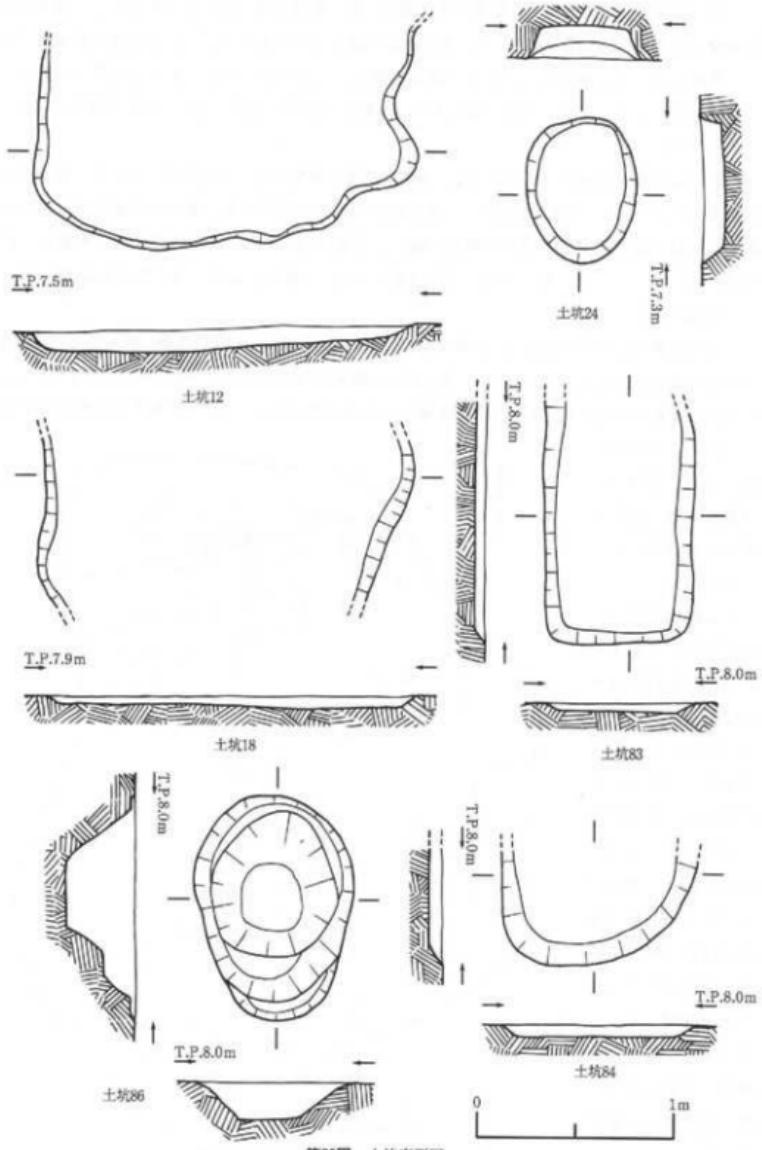
土坑24（Fニ）

土坑24は調査区中央部南よりに位置する。検出面での規模は東西0.5m、南北0.7m、深さ16cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦面をなす。土坑内の埋土黒褐色（5YR3/1）粘質シルトである。遺物が出土しなかつたため時期は不明である。

土坑67（Hワ）

土坑67は調査区東部中央に位置する。検出面での規模は東西1m、南北1.7m、深さ18cmの隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦面をなす。土坑内の埋土は黒褐色（2.5Y3/2）シルトである。出土遺物は土師器皿が一番多く次いで瓦器椀・羽釜・陶磁器・弥生土器・須恵器である。

土坑71（Hリ～ヌ）



第30圖 土坑実測図

土坑71は調査区東部南寄りに位置する。溝2を切り東側は井戸12に切られている。検出面での規模は東西1.7m以上、南北1m、深さ21cmの隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦面をなすが西側は傾斜が緩く、東側は急である。土坑内の埋土は灰オリーブ色(5Y5/2)シルトの單一層である。遺物は土師器、瓦器、弥生土器が少量出土した。

土坑83(Gハ)

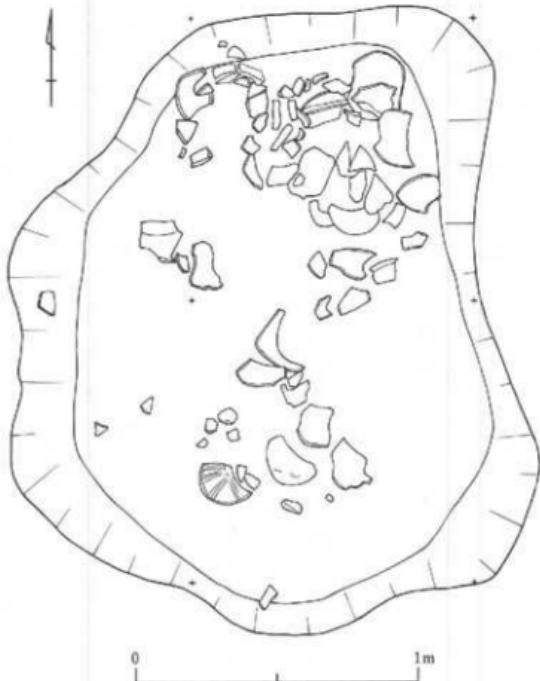
土坑83は調査区東部中央に位置する。北側は道路の擁壁によって破壊されている。検出面での規模は東西0.7m、南北1.2m以上、深さ12cmの長方形を呈する。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦面をなすが南側は傾斜が緩く、北側は急である。土坑内の埋土は黒褐色(10YR 2/3)シルトの單一層である。遺物は弥生土器、土師器、瓦器、須恵器が少量出土した。

土坑84(Gチ)

土坑84は調査区中央部南寄りに位置する。北側は道路の擁壁によって破壊されている。検出面での規模は東西1m、南北0.6m以上、深さ11cmの隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦面をなすが南側は傾斜が緩く、北側は急である。土坑内の埋土は黒褐色(10YR 2/3)シルトの單一層である。遺物は土師器、瓦器、弥生土器が少量出土した。

土坑86(Gロ)

土坑86は調査区中央部北端に位置する。検出面での規模は東西0.8m、南北1.1m、深さ36cmの楕円形を呈する。断面形は中央部が高く南北両端が深くなる。北側の傾斜は緩く、南側は急である。北側の底面はほぼ平坦面をなす。土坑内の埋土は黒色細緻混じりシルトである。遺物は土師器、瓦器、弥生土器、須恵器が少量出土した。



第31図 土坑102実測図

土坑101（Iニ～ホ）

土坑101は調査区東南部に位置する。東側は溝195、西側は溝192によって削られている。検出面での規模は東西0.5m以上、南北2.6m以上、深さ32cmの梢円形を呈する。断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦面をなす。土坑内の埋土は3層に分層できる。第1層はにぶい黄褐色(10YR3/3)シルト、第2層は黒褐色(2.5Y3/2)細礫混じりシルト、第3層は(10YR3/2)シルトである。出土遺物は瓦器が一番多く次いで土師器、陶磁器、須恵器、弥生土器である。

土坑102（Iト）

土坑102は調査区東端部北寄りに位置する。検出面での規模は東西1.4m、南北1m、深さ29cmの隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形を呈する。底面はやや丸味をもつて凹凸がみられ、中央部分が最も深い。土坑内の堆積層は2層に分層できる。上層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトで厚さ9cm、下層は灰色(7.5Y4/1)砂混じりシルトで厚さ20cmである。出土遺物は瓦器椀・羽釜が一番多く次いで土師器皿、陶磁器、弥生土器、須恵器、石器である。

河川SX02（Iイ～Jハ）

河川は調査区の東北端に位置する。東から西に向かい北に方向を変えて延びる。両端は調査区外へ延びる。検出面での規模は、全長約21m、幅は上場6.2m以上、下場2.8m以上、深さは東端で58cm、西北端で50cm、最深部で84cm以上を測る。検出した範囲内での底面の東端と西北端との比高差は32cmである。溝の断面形は逆台形を呈する。河川内の堆積層は北西端で7層、東端で24層に分層できるが大きく分けると7層に区分できる。第1層は灰色(10Y4/1)砂質シルト、第2層はオリーブ灰色(10Y4/2)細粒砂、第3層は灰色(7.5Y4/2)シルト、第4層は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂、第5層は灰色(10Y3/1)細粒砂、第6層は暗オリーブ灰色(2.5G3/1)極細粒砂、第7層は暗オリーブ灰色(5GY4/1)疊混じり極細粒砂である。出土遺物は土師器皿が圧倒的に多く以下瓦器椀・羽釜・小皿・擂鉢・陶磁器・須恵器練鉢・甕・杯・土師器羽釜、瓦、弥生土器、サヌカイト、石製品、金属器、獸骨、焼土である。東端でウシ、ウマなどの獸骨が折り重なるように出土した。出土遺物で一番多いのは13世紀代のものであり土師器皿・羽釜、瓦器椀、石鍋を模したとおもわれる香爐、青磁・白磁といった輸入陶磁器などがあるが、12世紀のものも含まれる。しかし、最終的に機能しなくなったのは土師器皿、瓦器羽釜から15世紀前半頃と考えられる。

ピット

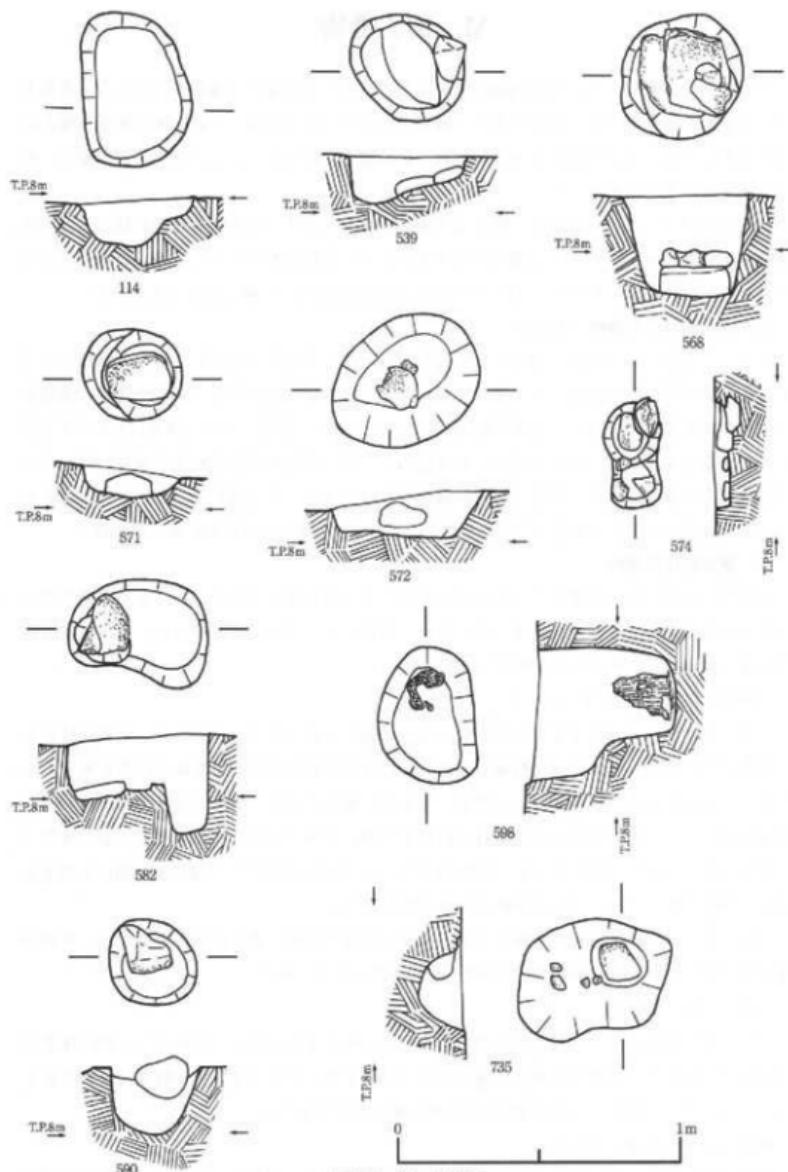
掘立柱建物の柱穴と思われるピットを調査区全域で800個検出した。ピットの分布密度には粗密があり、A地区～E地区西半はあまり存在せず、E地区東半～F地区西半北部、G地区～H地区西半南部、H地区東半～I地区西半北部には多く存在する。ピットが密に存在する周辺には必ず井戸があり、集落の建物として井戸が付属することがわかる。

ピットの平面形態は円が一番多く見られるが、他に梢円形、隅丸長方形、台形がある。大きさは20～30cmのものが最も多いが10cm未溝のものや土坑と言つていいような95cmに及ぶものもある。深さは10～20cm台が最も多く、10cm未溝のものが36個、30cm台が40個、40cm台が

13個、50cm台が6個、70cm台が1個、80cm台が2個である。ピットの中には根石をもつものが20個ある。根石をもつものはEヘ地区で1個、Fヘ地区で1個、Fチ地区で4個、Gチ地区で1個、H口地区で1個、Hニ地区で3個、Hリ地区で1個、Hヌ地区で1個、Hヲ地区で5個、Hワ地区で1個、Hヨ地区で1個で、H地区とFチ地区に多い傾向がある。根石は花崗岩の自然石で、Fヘ地区的95は石2個を置く。いずれも台形をしており北側のものは上辺7cm、下辺15cm、高さ14cm、厚さ4cm、南側のものは上辺7cm、下辺12cm、高さ11cm、厚さ5cmである。Fチ地区的114は西向きに尖った隅丸の二等辺三角形で、底辺の長さ8cm、最大幅12cm、高さ20cm、厚さ7cmで、その下に長さ24cm、幅14cm、厚さ11cmの台形をした石を置く。96は上辺20cm、下辺25cm、高さ18cm、厚さ11cmの台形をした石を置く。H口地区的539は五角形をした尖頭形の石と台形の石を置く。五角形のものは基部幅8cm、最大幅17cm、長さ33cmで、台形の方は上辺4cm、下辺12cm、高さ16cmである。Hニ地区的590は掘り方の北西寄りに上辺8cm、下辺17cm、高さ15cm、厚さ7cmの台形の石を置く。735は掘り方の北西寄りに上辺10cm、下辺12cm、高さ13cmの台形の石を置く。Hヌ地区的604は掘り方の中央に長径21cm、短径14cmの卵形をした石を置く。Hヲ地区的568は掘り方の中央に三角形の石を、その北東側に台形の石を置く。三角形の石は底辺15cm、高さ11cm、厚さ6cm、台形の石は上辺6cm、下辺10cm、高さ6cm、厚さ6cmである。571は掘り方中央のやや東寄りに上辺8cm、下辺15cm、高さ13cm、厚さ8cmの台形の石を置く。石は中央部が高く周辺部が低くなっている。比高差は2~3cmである。572は掘り方中央のやや南西寄りに上辺12cm、下辺15cm、高さ13cm、厚さ8cmの台形の石を置く。石は中央部が高く周辺部が低くなっている。比高差は4cmである。574は掘り方中央のやや南西寄りに尖頭形の石と長方形の石を置く。尖頭形の石は長さ12cm、幅6cm、厚さ2cm、長方形の石は縦6cm、横3cm、厚さ2cmで石の上面は平らである。Hワ地区的555は掘り方中央東寄りに小さな石を7個を置く。Hヨ地区的671は掘り方中央から北東寄りに2個の石を置く。

根石を持つものも持たないものもその建物の規模、建物の方向が問題となるが、配列がもう一つ明確ではないため復元するのは困難である。柱通りが真っ直ぐではないが、可能性としてEホ・ヘ地区～Fホ・ヘ地区にかけて桁行10.8m(6間)、梁間2.7m(1間半)の東西方向の細長い長屋風の建物を推定することができる。建物のすぐ東側には井戸6がある。

この建物の南約4mの地点でも東西方向の建物を想定することができる。Eト地区～Fハ地区にかけて桁行7m(4間)、梁間2m(1間)の東西方向の細長い建物を想定することができる。建物の東及び北側には庇が付くものと考えられ、溝68・70・34は雨落ち溝と考えられる。建物の南東3mには井戸4がある。またFチ～ワ地区でも桁行5.4m(3間)、梁間2m(1間)の東西方向の建物を推定することができる。Hニ～ヌ地区にかけては桁行4.5m(2間半)、梁間2.7m(1間半)の東西方向の細長い建物を想定することができる。東側1~4mに井戸10~12がある。Hト～ヲ地区にかけては桁行8.2m(4間半)、梁間6m(3間半)の東西方向の細長い建物を想定することができる。北西6mに井戸8、南東1mに井戸9がある。



第32図 ピット実測図

V. 出土遺物

今回の調査では、コンテナ約200個分の旧石器時代から近代までの遺物が出土した。遺物の内訳は旧石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式土器・瓦器・国産陶器・輸入磁器・石器と中世に属す木製品がある。また、動植物遺存体も出土している。遺物の量は、中世に属すものが最も多かった。

地区を分けずに、古い時期から順に出土遺物の概要を記す。個々の遺物の詳細については、観察表を参照されたい。また、縄文・弥生土器のうち、在地産としたのは、胎土に角閃石を含み茶褐色を呈するものである。以外の土器は、他地域産のもので搬入品と考えている。

1. 旧石器時代の遺物（第33図 1～8）

ナイフ形石器と横形削器が出土した。海岸に堆積した砂層から出土したが、二次堆積によるものかわらず、風化をまったく受けおらず保存状態は非常に良好である。同時に微細なチップなども出土しており、さほど原位置を動いていないと考えられる。海進に伴いAT火山灰の一部が侵食されていることから、検出地のすぐ側に存在する包含層から侵食に伴い洗い出されたものが出土したと考えてよい。産地分析の結果は、原産地不明（1）1点を除きすべて二上山産サスカイトを用いているとのことである。いずれも後期旧石器時代に属す。

2. 縄文時代の遺物

前期から中期初頭と晩期末の土器が出土している。隣接地の調査では、後期や晩期中頃の土器も少量見られるが、今回は出土していない。前期から中期に属すものは、いずれも縄文海進に伴う海岸部分に堆積した土層から出土した。

前期の土器（第34図 1・2・5）

（2・5）は、北白川下層ⅡC式ないしⅡ式に属す土器である。（2）は、波状口縁をもつ深鉢の口縁部で、外面には羽状縊文を施す。口縁端部直下の外面に2条の凸帯をめぐらし、凸帯上にも羽上の刻みを施す。口縁端部にも同様の刻みを施す。外面に多量の煤が付着する。他地域産。（5）は、水平口縁の深鉢の口縁部で外面は無文である。口縁端部直下から体部にかけて3条以上の凸帯をめぐらす。凸帯上には、LRの縊文を施す。口縁端部上面にも縊文を施す。外面全体に厚く、口縁部内面にうすく煤が付着する。

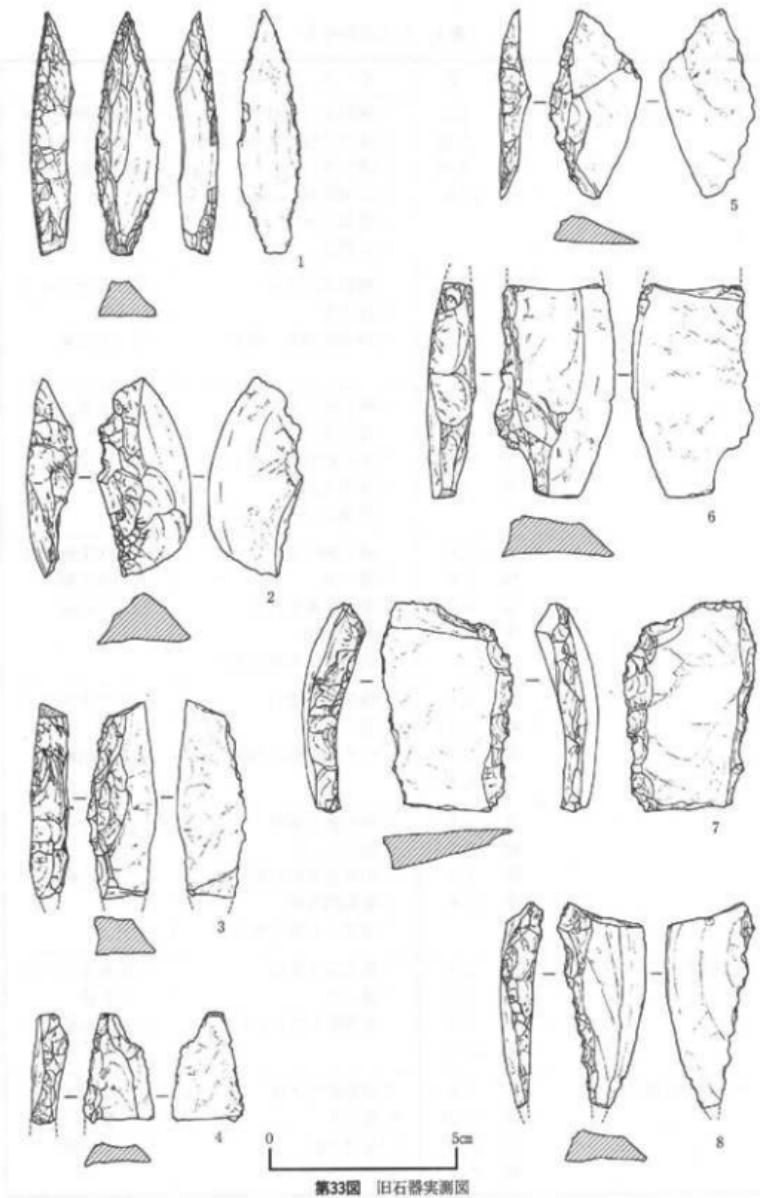
（1）は、大歳山式に属す深鉢の体部である。外面に直線と曲線の凸帯を巡らす。外面全体に厚く煤が付着する。器壁の厚さが約4mmと薄手の土器である。

中期の土器（第34図 3・4）

（4）は、鷹島式ないし同型式に近い船元I式に属す土器である。キャリバー状口縁部の頭部付近の破片で、体部上半から口縁部にかけてC字形の爪形文を施す。外面に煤が付着する。（3）は、出土層から見て晩期末か中期初頭に属すと考える。

晩期の土器（第34図 6～9）

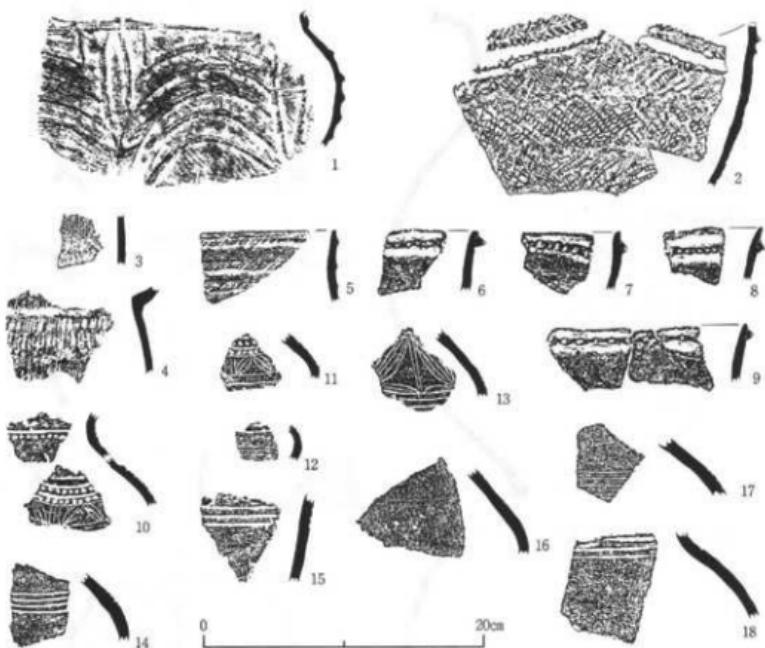
後世の溝などから出土した。口縁部の細片である。（7）は、鉢の可能性がある。外面にめぐ



第33図 旧石器実測図

表1 旧石器観察表

器 形	番号	法 量	器 形 の 特 徴	備 考
ナイフ形石器	1	長 6.5 幅 1.65 厚 0.95 重 10.5	○横形剥片素材 ○基部は綾形に細部調整 ○背つき ○中央断面形台形 ○基部に表皮をもつ ○完形品	○暗灰黒色サヌカイト製 ○原産地不明
	2	長 5.35 幅 2.5 厚 1.2 重 13.0	○横形剥片素材 ○背つき ○中央断面形三角形	○灰色サヌカイト製 ○二上山産
	3	長 (5.25) 幅 1.8 厚 0.95 重 9.9	○横形剥片素材 ○背つき ○中央断面形四角形 ○基部欠損 ○先端部に表皮をもつ	○灰色サヌカイト製 ○二上山産
	4	長 (2.9) 幅 1.8 厚 0.7 重 3.8	○横形剥片素材 ○背つき ○中央断面形台形 ○基部欠損 ○先端部に表皮をもつ	○暗灰黒色サヌカイト製 ○二上山産
	5	長 5.0 幅 2.45 厚 0.75 重 6.8	○横形剥片素材 ○背つき ○中央断面形片凸形	○灰色サヌカイト製 ○二上山産
	6	長 (5.6) 幅 3.2 厚 1.0 重 21.8	○横形剥片素材 ○背つき ○中央断面形台形 ○先端部欠損 ○基部に表皮をもつ	○灰色サヌカイト製 ○二上山産
横形削器	7	長 5.6 幅 3.5 厚 0.9 重 22.8	○横形剥片素材 ○背つき ○中央断面形片凸形	○暗灰色サヌカイト製 ○二上山産
ナイフ形石器	8	長 (5.5) 幅 2.35 厚 0.8 重 8.7	○横形剥片素材 ○背つき ○基部欠損	○灰色サヌカイト製 ○二上山産



第34図 楪文・弥生土器実測図

らされた凸帯の断面形は、三角形を呈し、刻みも軽い。（6）は口縁端部上面が面をもつ。凸帯は口縁部直下に付く（6・9）とやや下がった位置に付く（7・8）がある。いずれも晩期末のいわゆる長原式に属す。全て在地産。

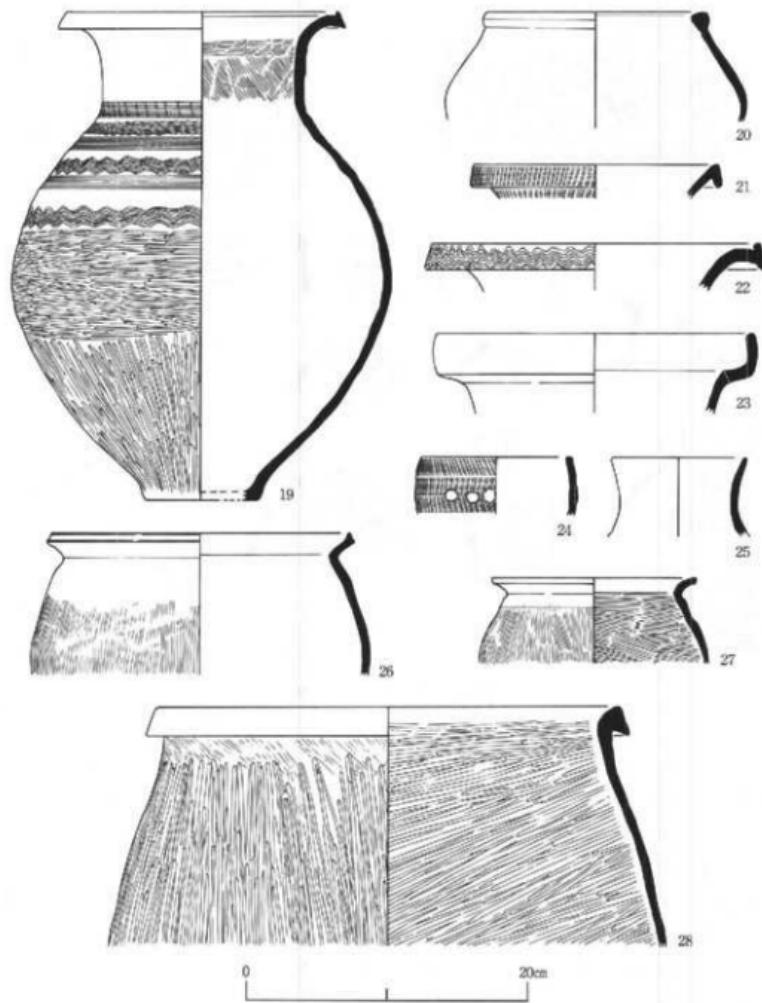
3. 弥生時代の遺物（第34~40・45・46図）

前期・中期・後期の土器と少量の石器が出土しているが、量は多くない。明確な木製品は今回の調査では出土しなかった。石器は、古墳時代の土器を説明した後に同時代の石製品とまとめて説明するが、個々については観察表を参照されたい。

前期の土器（第34図 10~18、第38図 62）

13層中および上部の遺構包含層より、少量の壺と甕の体部細片が出土した。木葉紋を施す壺（10・12・13、11は10と同一個体）や体部上位に3条の篦描き直線紋を施す甕（15）がある。（14）は4条の篦描き沈線を施す壺の体部である。（10・13）は他地域産である。（12）は小型の壺である。頸部に削り出し凸帯をもつ壺（62）も認められる。

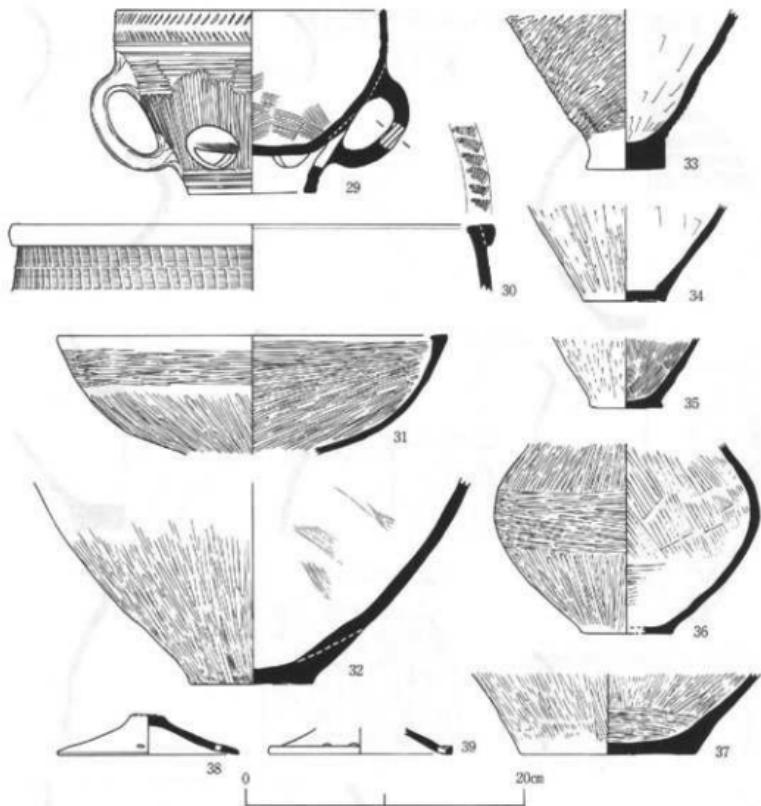
いずれも畿内第I様式中段階の後半に属す。（12・14・15~18・62）は在地産。



第35図 SD196出土弥生土器実測図

中期・後期の土器（第35～40図）

溝・土壙などの遺構と後世の遺構や包含層から出土している。畿内第II～IV様式まで見られるが大半は第III～IV様式に属す。出土した器種は壺・長頸壺・台付鉢・鉢・甕・甕蓋・高杯である。遺構、包含層出土品の順に説明する。

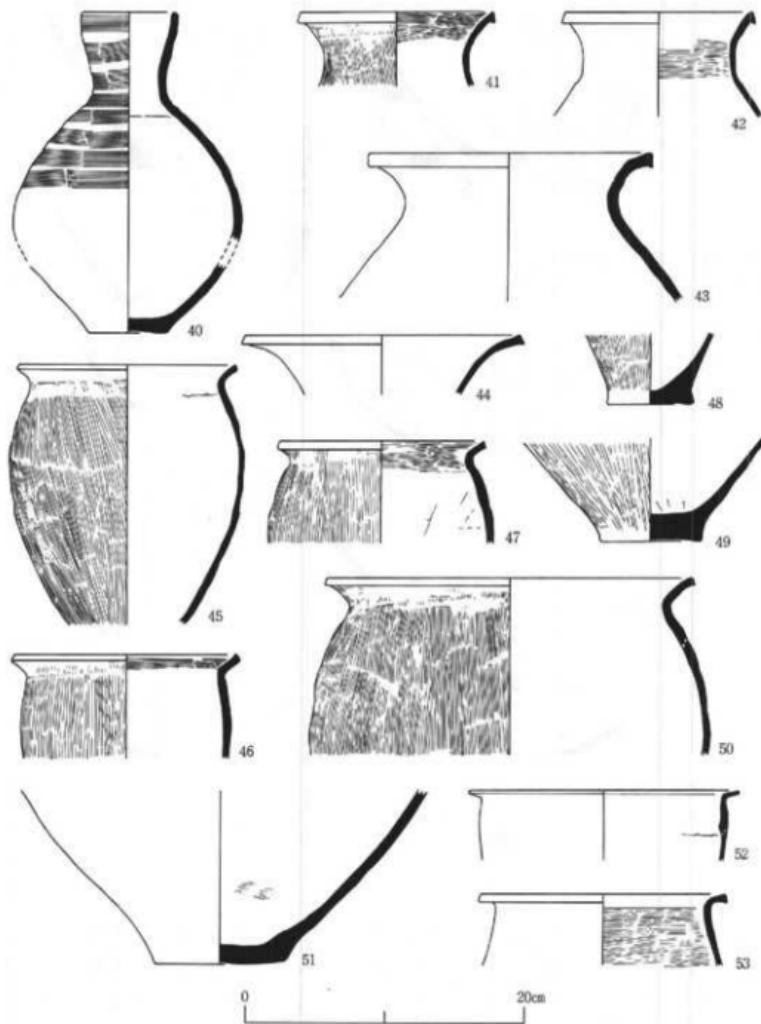


第36図 SD196出土弥生土器実測図

SD196出土土器（第35・36図）

壺・壺蓋・甕・鉢・把手付台付鉢・高杯などがある。(19)の壺と(29)の把手付台付鉢は、ほぼ完形に復元できた。(19)は頸部から体部にかけて上から廉状文・波状文・直線文・波状文・直線文・波状文の順に飾る。(23)は受け口状口縁の壺である。壺は、体部外面にハケメ(26・27)とヘラミガキ(28)とタタキを施す(33)がある。(29)は従来、完形に復元できるものがほとんどなかったものである。(20)は無文の段状口縁をもつ鉢である。(31)は内外面をヘラミガキで仕上げるものである。

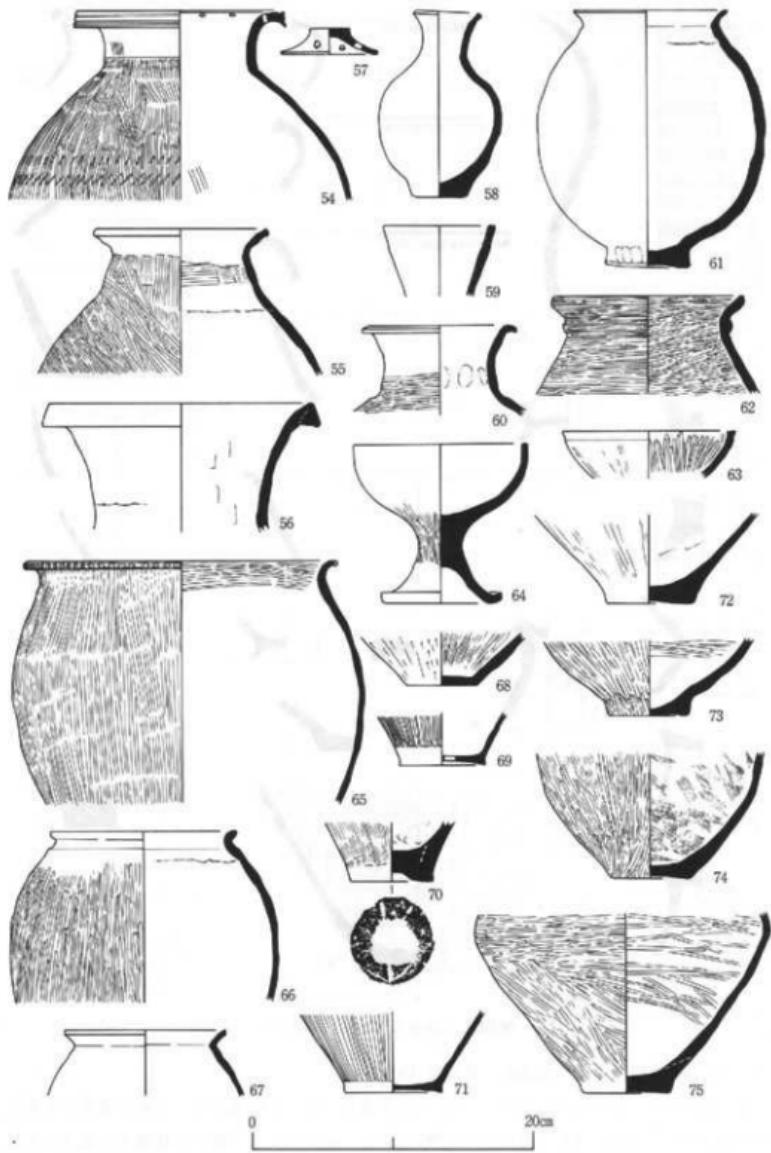
畿内第IV様式の中でも新しい時期の資料が中心で、少量の(33)のような、畿内第V様式前半に属するものが含まれる。(20・22・27・32・38)は他地域産。



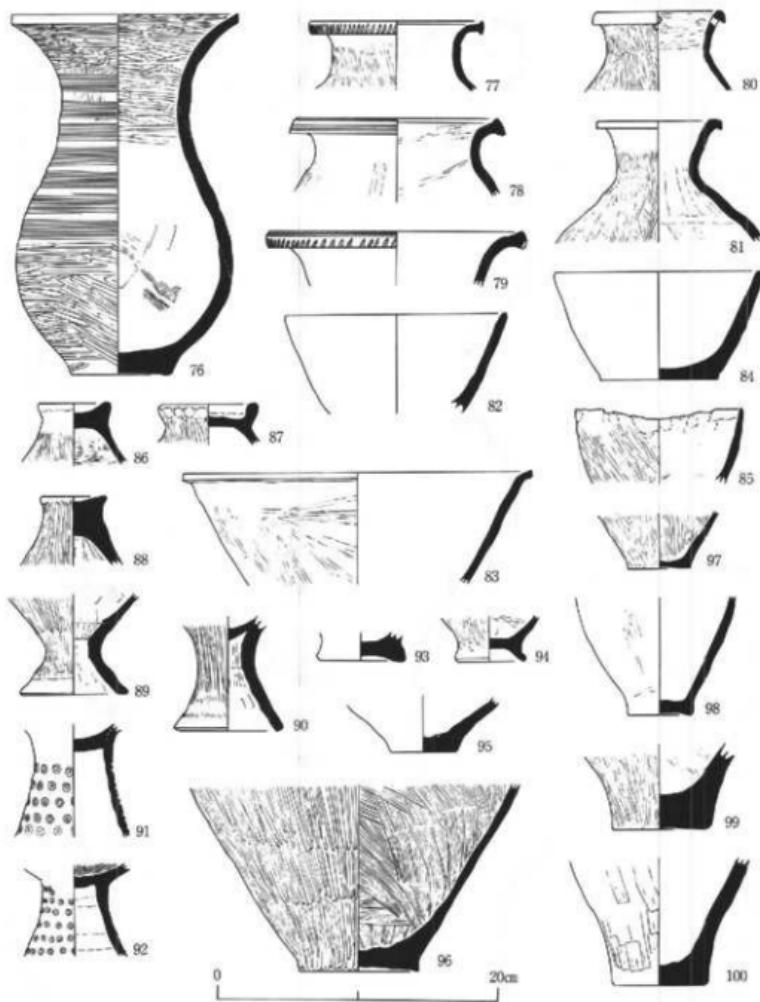
第37図 SD214出土器実測図

SD214出土土器（第37図）

壺と甕がある。(40)は他地域産の壺で口縁部から体部中央にかけて直線文を施す。畿内第Ⅲ様式に属す。(41~43・45・48~51)は在地産。



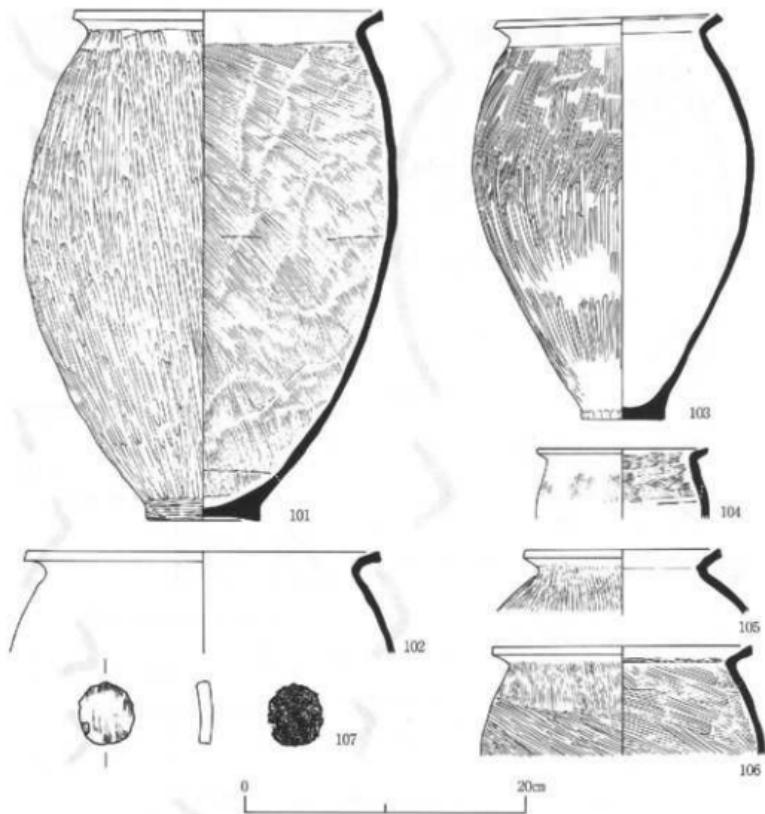
第38図 遺構（土壤・清）弥生土器実測図



第39図 包含層出土赤生土器実測図

その他の遺構出土土器（第38図、第40図 101）

壺・壺蓋・壺・高杯などがある。（58）の小型壺と（61）の短頸壺は、方形周溝墓の供獻土器と考えられ、（101）は棺に転用された壺である。（64）のように畿内第Ⅱ様式に属すのも見られるが大半は第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式に属す。（54・55・58・61・64）は他地域産。



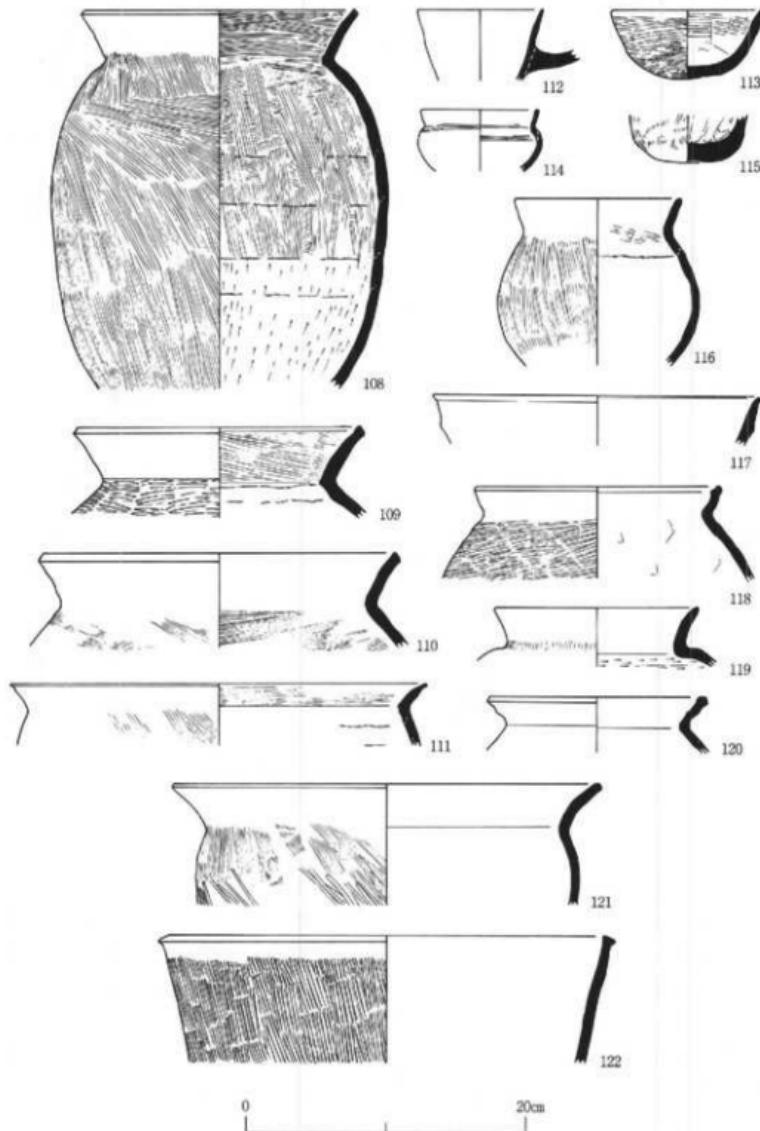
第40図 墓棺墓・包含層出土弥生土器・土製品実測図

包含層出土弥生土器・土製品（第39図、第40図 102～106）

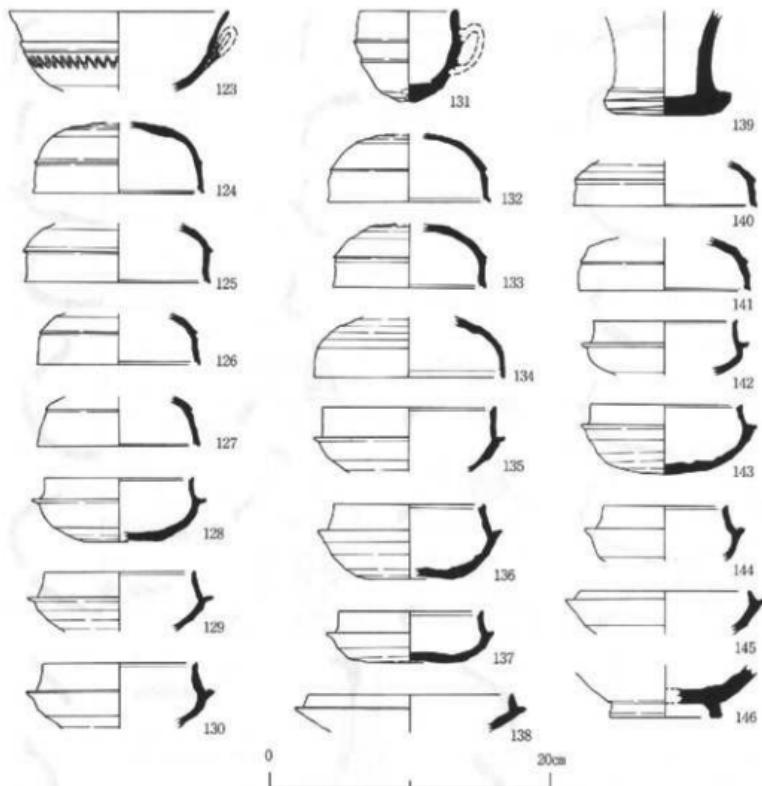
弥生土器 壺・甕・甕蓋・鉢・高杯などがある。壺（76）はB地区、甕（103）はA地区で出土し完形に復元できた。出土地から見て西側の方形周溝墓などに対する供獻土器の可能性がある。（89～92）は円盤充填の手法で脚部と杯部を接合する高杯・台付鉢の脚部である。（85）は在地産の鉢であるが他に比して雑な作りである。

（76）のように畿内第Ⅱ様式に属すものも見られるが大半は第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式に属す。畿内第Ⅱ様式に属すものは主としてA・B地区で出土した。（77・79・86・89・90・92・93・99・102・103・105）は他地域産。

土製品 円板状土製品が1点出土した。土器の破片を転用したものである。



第41図 遺構 (SD102) 包含層出土土器・韓式土器実測図



第42図 遺構（溝他）出土須恵器実測図

4. 古墳時代の遺物（第41～46図）

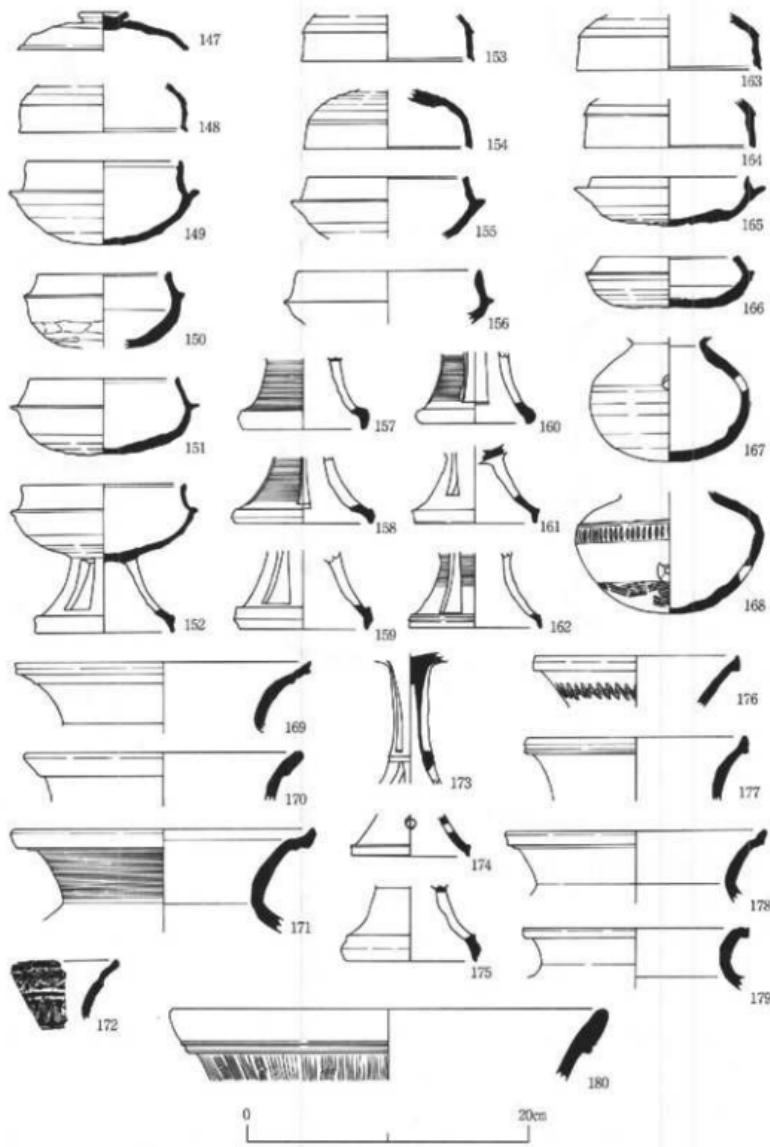
中期後半から後期に属する土器と石製品などが遺構と包含層（中世遺構）から出土した。

遺構出土遺物 比較的まとまった資料が出土したのはSD102である。韓式土器（122・208）須恵器（123～129など）製塙土器（185など）を図示した。韓式土器の竈（208）は初源期の形態を示す。須恵器はTK208から23に属す。

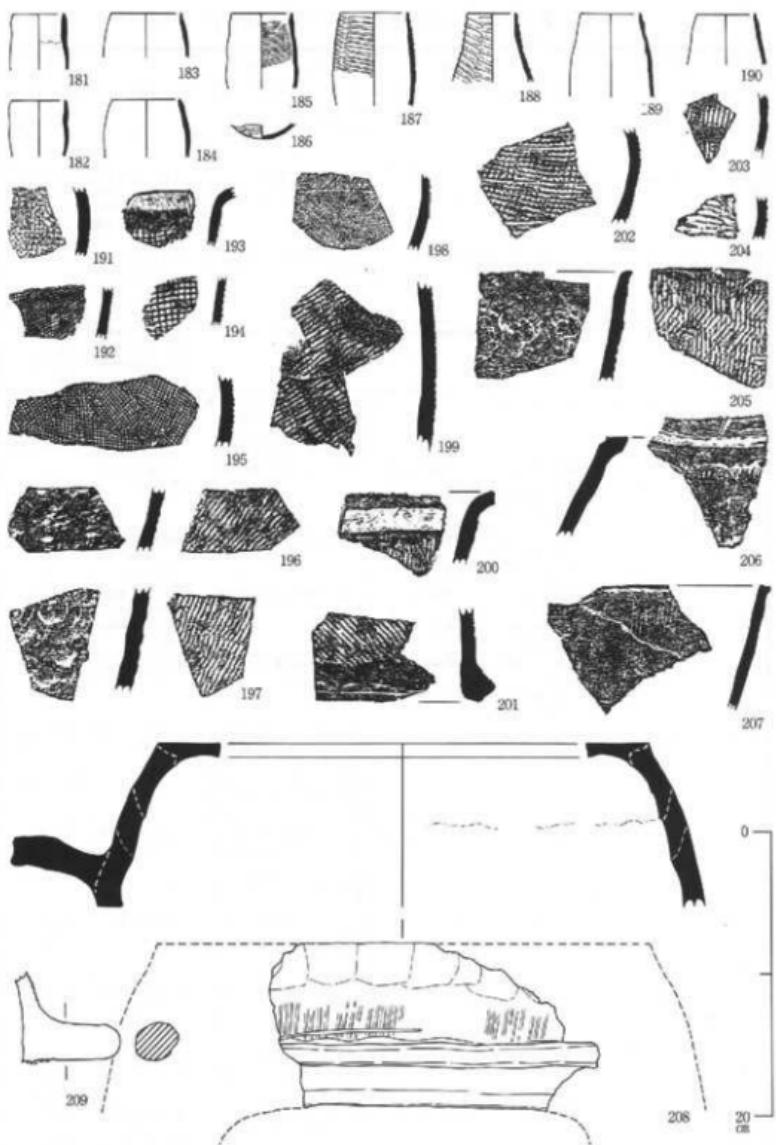
包含層出土遺物 土師器・須恵器・韓式土器・製塙土器などが出土した。須恵器は、TK216（150）からTK10（145）に属するものがある。

石器・石製品

弥生時代に属する打製石器は石鏃・打製石劍・石小刀・削器など、磨製石器は大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧が出土した。古墳時代に属するものは滑石製双孔円板（18）1点がある。



第43図 包含層出土須恵器実測図



第44図 造構(津) 包含層出土製塙土器・韓式土器実測図

表2 縄文～古墳時代土器・土製品観察表

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	参考
縄文土器	1	厚 0.4	○丸底をもつ侈部片	○手岐竹管を施した突部を直線、無縫で文様等とする ○軽土帶3.8cm	○内外面共黒色N2 シルト	○人縄灰色砂質 シルト ○外周縁付着 ○白川下單Ⅱ (大庭山式)
	2	厚 0.7	○波状口縁	○羽状純文地に、口縁部に2帯の第 1突部、口縁部に羽状に削目を施す	○内面に赤い黄褐色 10YR 4/3・黒褐色 2/2、外周黒褐色 10YR 3/1・黄褐色 4/2	○A縄灰色地 羽状りシルト ○外周縁付着 ○白川下單Ⅱ
侈部	3	厚 0.4	○はば直線にのせる侈部片	○外側に純文、内面はナデ調整を施す	○内面黒褐色10YR 4/1、外周黒褐色 10YR 5/3・黒褐色 3/1、外周黒色1.7 /1	○A縄灰色シルト ○後削末(鹿島) ○鳥
	4	厚 0.6	○キャリバー状の口縁部の侈部付近の 破片	○侈部上半から口縁部にかけて、C 字形の爪形文を施す	○内面に赤い黄褐色 10YR 4/3・黒褐色 3/1、外周黒色1.7 /1	○A块縁灰色 淡りシルト ○外周縁付着 ○鳥
深鉢	5	厚 0.6	○水平口縁の口縁部	○口縁部直下から侈部にかけて3条 以上の突部をめぐらし、突部に Lの縦文を施す ○口縁部直下にも横文を施す	○内面に赤い黄褐色 10YR 4/3・黒褐色 3/1、外周黒色1.7 /1	○A縄灰色地 羽状りシルト ○外周縁付着 ○白川下單Ⅱ
	6		○侈部から口縁部にかけて直線的に上 方にのげる ○外周口縁部の直下に削目のある突 部を施す	○内外面共に風化のため詳細不明	○内外面共暗褐色10 YR 3/4	○SD 159 ○地底 ○遺算里群-V
8	7		○侈部から口縁部にかけて丸味をもつ ○外周口縁部の直下に削目のある突 部を施す	○内外面共に風化のため詳細不明	○内面赤褐色7.5 YR 4/4・外周黒褐色 10YR 3/1	○SD 196 ○地底 ○遺算里群-V
	8		○侈部から口縁部にかけて直線的に上 方にのげる ○外周口縁部のやや下に削目のある 突部を施す	○内外面共に風化のため詳細不明	○内面に赤い褐色5 YR 6/4・外周褐色 10YR 4/1、外周褐色 10 YR 4/4	○A堆区から北 へ50m採取 ○在地底 ○遺算里群-V
板状土器	9		○侈部から口縁部にかけて直線的に上 方にのげる ○外周口縁部の直下に削目のある突 部を施す	○内面風化のため詳細不明、外周板 状工具によるナデ 調整	○内外面共褐色7.5 YR 4/3	○SD 159 ○地底 ○遺算里群-V
	10	串10・11・ 13d同一 全体	○全体部片	○外側にヘラ彫沈縫と円形竹管文を 一單位としその後、木の裏文様を ヘラで描く ○全体部横に1条のケズリダク突部 ○内面板状工具による横方向のナデ 調整	○内外面共灰白色 2.5 Y 8/2	○黒灰色粘土・ 黒褐色小標識 リ粘土 ○弥生I様式
表	11		○侈部片	○外側にヘラ彫沈縫と円形竹管文を 一單位としその後、木の裏文様を ヘラで描く ○内面板状工具による横方向のナデ 調整	○内外面共灰白色 2.5 Y 8/2	○第7層 ○弥生I様式
	12		○侈部片	○外側にヘラによる沈縫と木の裏文 様を描く ○内外面共に調整は風化のため詳細 不明	○内外面共暗褐色10 YR 3/3	○第8層 ○在地底 ○弥生I様式
	13		○侈部片	○外側にヘラによる沈縫と木の裏文 様を描く ○内外面共に調整は風化のため詳細 不明	○内外面共暗褐色 2.5 YR 2/2	○第8層 ○在地底 ○弥生I様式
	14		○侈部片	○外側に4条のヘラ彫沈縫 ○内面板状工具によるナデ、内面 ヘラミガキ調整	○内外面共に赤褐色 10YR 6/3	○黒灰色粘土 ○在地底 ○弥生I様式
表	15		○侈部片	○外側に3条のヘラ彫沈縫 ○内外面共に風化のため詳細不明	○内外面共黒褐色 10YR 3/1、外側に赤い 褐色10YR 5/4	○暗灰色砂質 シルト ○在地底 ○弥生I様式 ○内面縁付着

部 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	特 法 の 特 徴	色 調	備 考
誕生 I 様	16		○体部片	○外因ヘラによるきのうの体部と本の革文様を描く ○内外表面にハラミガキ調査	○内面淡黄色2.5Y7/3、外面上にぶい黄褐色の10YR5/4	○黒灰色粘土 ○在地産 ○誕生 I 様式 ○外因無理
	17		○体部片	○外因4条のヘラ彫比線 ○内面軟状工具によるナゲ調査、外表面方向のハケメ(6cm)調査	○内外表面にぶい黄褐色10YR5/3	○第8番 ○在地産 ○誕生 I 様式
	18		○体部片	○外因(3)柔のヘラ彫比線 ○内外表面に風化のため詳細不明	○内面黑色7.5YR2/1、外面上にぶい褐色7.5YR5/3	○第5番 ○在地産 ○誕生 I 様式 ○外因無理
誕D	19	口 19.2 高 34.25 底 8.0	○太く短い棒状の頭部から外反する口縁部。口縁部は上方に肥厚する ○体部は丈の高い様子を呈する	○外因原体部端に彫痕箇度次、以下は直接状文・底線文の繰り返しの文様 ○調査は外表面頭部にナゲ?、体部中段に横方向、下位から底部に縦方向のハラミガキ調査。内面頭部に横、斜方向のハケメ(文様と同様体各4cm)調査	○内外表面にぶい黄褐色10YR7/3	○SD196 ○在地産 ○外因黒度
無頭窓 A 3	20	口 15.5 高 (7.7)	○口縁部の外間に粘土を貼付けて段状 ○口縁とする	○内外表面に風化のため詳細不明 (ミガキ調査?)	○内外表面共白色10YR8/2	○SD196 ○外因黒度
巣A	21	口 17.2 高 (2.4)	○胸斗状の口縁部。口縁部は下方に拡張する	○外因口縁部凹状頭部・翼部に重複文(風化のため詳細不明)、内面風化のため詳細不明	○内外表面にぶい褐色7.5Y5/4	○SD196 ○在地産
巣B	22	口 23.2 高 (3.4)	○外反する口縁部から。口縁部は上下に拡張する	○口縁部拡張部に衝撃波状文(8cm)、 ○内外表面口縁部は風化のため詳細不明	○内面淡黄色2.5Y8/3、外面上にぶい黄褐色5YR5/4	○SD196
巣G	23	口 22.3 高 (5.6)	○外反する口縁部から。口縁部は上方に肥厚する	○口縁部内外表面に板状工具によるナゲ調査、頭部内外表面に風化のため詳細不明	○内外表面共白10YR5/3	○SD196 ○在地産
細網窓 B	24	口 10.6 高 (4.1)	○口縁部は直口し、やや内弯する	○外面上に弱めの衝撃波状文(10/1.2cm)、凹形文等が貼り付けられる	○内外表面にぶい黄褐色10YR2/3	○SD196 ○在地産
粗網窓	25	口 8.4 高 (5.6)	○体部からゆるやかに立ち上がる複数の口縁部をもつ	○内外表面風化のため詳細不明	○内外表面共褐色5YR5/6・黄褐色2.5Y5/1	○SD196 ○在地産
大柄巣 B	26	口 21.0 高 (10.0)	○内傾気味の体部から。「く」の字形に外反する口縁部。口縁部はつまみ上げる	○外因体部横方向のハケメ(5cm)調整、外表面口縁部から内面風化のため詳細不明	○内外表面共赤褐色5YR5/8	○SD196 ○在地産
巣B	27	口 14.5 高 (6.0)	○内傾気味の体部から。「く」の字形に外反する口縁部。	○外因横方向、内面横方向のハケメ(7cm)調査	○内外表面にぶい黄褐色10YR7/4	○SD196
大型巣 B	28	口 32.6 高 (17.0)	○内傾する体部から。「く」の字形に外反する口縁部。口縁部は下方に拡張する	○外因ハケメ(6cm)のち縦方向のヘラミガキ調査、内面斜方向のヘラミガキ調査	○内外表面共褐色10YR4/4	○SD196 ○在地産
把手付 箕	29	口 19.3 高 13.2 底 9.0	○体部の形状が半球形をなし、「ハ」の字形に広がる台部をもつ。反方にリング状の把手をもつ	○外因口部に羽状のヘラ彫判定点文、1条の凹縫文、体部に横、縱方向のヘラミガキ調査、台部に3条の凹縫文。内面ハラミガキ調査 ○台部に造りしし ○把手はハケメアリズム	○内面・外面1/2にぶい褐色7.5YR5/4、外面1/2黒色7.5YR1.7/1	○SD196 ○在地産 ○外因黒度
鋸 A 3	30	口 34.6 高 (4.8)	○体部上縁を折り返すことによって口縁部を段状に成形	○口縁部上縁に彫痕箇度文(8cm)、外因体部横調査文(底文)、内面風化のため詳細不明	○内外表面にぶい黄褐色7.5YR5/4	○SD196 ○在地産
高軒 C	31	口 28.0 高 (8.6)	○浅い碗状の杯部をもち、口縁部上縁に面をもつ	○外因口縁部横方向、外因体部と内面に横方向のヘラミガキ調査	○内外表面にぶい黄褐色10YR5/4	○SD196 ○在地産 ○外因黒度
垂皮部	32	底 8.6 高 (14.85)	○平底	○外因縫方向のヘラミガキ。内面ハケメ調整	○内面共白色10YR8/2・褐灰色4/1、外因浅黃褐色7.5YR8/6	○SD196
巣C	33	底 5.6 高 (11.5)	○平底	○外因タキ、内面軟状工具によるナゲ調査	○内外表面にぶい黄褐色10YR5/4	○SD196 ○在地産

器 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
弥生土器	34	底 5.8 高 (7.0)	○やや上げ底味の底部	○外表面方向のヘラケズリ後ヘラミガキ調整、内面風化のため詳細不明	○内面にぶい黄褐色 10YR5/3、外面 褐色7.5YR4/6	○SD196 ○在地産 ○外側黒身
	35	底 5.0 高 (5.0)	○平底	○外表面方向のヘラケズリ、内面ハケメ調整	○内外表面にぶい黄褐色10YR5/4	○SD196 ○在地産 ○外側黒身
豐底部	36	底 6.4 高 (13.7)	○平底	○外表面のち横方向のヘラミガキ、 内面斜方向のハケメ (5/cm) 調整	○内面灰褐色2.5YR 6/2、外表面7.5 YR4/3	○SD196 ○在地産 ○外側風塵
	37	底 12.4 高 (5.6)	○平底	○内外表面共にヘラミガキ調整	○内外表面灰褐色7.5 YR4/6	○SD196 ○在地産
豐臺	38	口 12.8 高 2.9	○深形 ○つまみ径2.1cm	○口縁部に縦孔、 ○内外表面共に風化のため詳細不明	○内外表面灰白色 7.5YR8/2	○SD196
	39	口 13.0 高 (1.9)	○深形 島	○口縁部に縦孔、 ○内外表面共に風化のため詳細不明	○内外表面灰褐色 7.5YR3/4	○SD196 ○在地産
細腰部 B	40	口 6.6 高 (23.0) 底 5.4	○中央部が上げ底の底部 ○側面は最大径部が器体中央よりやや下にある算盤三形 ○縁部はやや反く、口縁部は直口しわざりに内寄する	○外表面口縁部から修理部中央に衝撃痕 線文 (12.1.3cm)、内面風化のため詳調不明	○内外表面深褐色5 YR8/4・浅黃褐色 7.5YR8/3	○SD214
盤D	41	口 13.9 高 (5.3)	○大く低い筒状の腰部から、外反する 口縁部。口縁部は下方に内厚する	○外表面方向。内面口縁部横方向の ハケメ (7/cm) 調整	○内外表面浅黃褐色 7.5YR8/4	○SD214 ○在地産
	42	口 13.4 高 (7.5)	○大く低い筒状の腰部から、内反する 口縁部。口縁部は下方に肥厚する	○外表面風化のため詳調不明、内面腰 部横方向のハケメ (6/cm) 調整	○内外表面浅黃褐色 7.5YR8/4	○SD214 ○在地産
	43	口 20.0 高 (10.6)	○大く低い筒状の腰部から、外反する 口縁部。口縁部は下方に肥厚する	○内外表面共に風化のため詳調不明	○内外表面灰色5YR 7/6・浅黃褐色7.5 YR8/3	○SD214 ○在地産
盤A	44	口 19.6 高 (4.3)	○脚状にひらがる口縁部、口縁部は 下方にやや肥厚	○内外表面共に風化のため詳調不明	○内外表面浅黃褐色 7.5YR8/4	○SD214
腹B	45	口 15.4 高 (18.6)	○全体部の高・丸突をもち、口縁部 は「く」の字形に外反する。口縁部 はやや面をもつ	○外表面方向。内面口縁部横方向の ハケメ (6/cm) 調整、内面風化のため詳調不明	○内外表面浅褐色5YR 7/6・淡黃褐色10 YR8/3	○SD214 ○在地産
	46	口 15.9 高 (7.4)	○直角的な体部から、口縁部は「く」 の字形に外反する。口縁部はやや 面をもつ	○外表面方向。内面口縁部横方向の ハケメ (5/cm) 調整	○内外表面10YR6/3	○SD214
	47	口 14.6 高 (7.3)	○内寄する体部から、口縁部は「く」 の字形に外反する。口縁部は面をもつ	○外表面方向。内面口縁部横方向の ハケメ (5/cm)、内面体 部横方向のハケメによるナヂ調整	○内外表面にぶい黄 褐色10YR6/4・ ぶい黄褐色5/4	○SD214
豐底部	48	底 5.9 高 (5.1)	○やや上げ底の底部	○外表面方向のハケメ (5/cm)、内 面風化のため詳調不明	○内外表面明赤褐色 5YR5/6	○SD214
	49	底 7.0 高 (7.4)	○上げ底の底部	○外表面方向のヘラミガキ。内面体 部横方向のハケメによるナヂ調整	○内面浅黃褐色7.5 YR8/3、外面に ぶい黄褐色5YR7/4	○SD214 ○在地産
大型甌 B	50	口 26.2 高 (12.6)	○丸突をもつ体部から、「く」の字形に 外反する口縁部、口縁部は面をもつ	○外表面方向のハケメ (10/cm)、内 面風化のため詳調不明	○内外表面明赤褐色 5YR5/8	○SD214 ○在地産 ○外側黒身
亞腹部	51	底 9.3 高 (12.4)	○中央がやや上げ底風味の底部	○内外表面共に風化のため詳調不明	○内外表面浅褐色5 YR8/4・橙色7/6	○SD214 ○在地産
腹B	52	口 19.2 高 (5.0)	○底縫的な体部に、鋸く外折する口縁 部、口縁部はやや丸くおさめる	○内外表面共に風化のため詳調不明	○内外表面明赤褐色 5YR5/8	○SD214
	53	口 17.4 高 (5.1)	○直角的に内寄する体部に、鋸く外折 する口縁部、口縁部は面をもつ	○外表面風化のため詳調不明、内面腰 部横方向のハケメ (6/cm) 調整	○内外表面明赤褐色 5YR5/8	○SD214
盤E	54	口 14.8 高 (13.3)	○前後の腰部から外反する口縁部。口 縁部は上口に肥厚し面をもち、腰 部面文を2条割り ○口縁部に縫をじるための縫孔を卓 つ	○外表面方向のハケメ (5/cm) 調整、 体部中央にヘラ割れ点々、内 面ハケメのナヂ調整	○外表面灰白色7.5 YR8/2・浅黃褐色 8/3、内面白色N 7/・灰褐色N 7/・外面黑色N 2/	○SD139 ○外側風塵
	55	口 12.2 高 (10.4)	○作部から腰部にかけて内傾し、口縁 部は「く」の字形に外反する。口縁 部はやや丸く納める	○外表面方向のハケメ (8/cm) の ち斜方向のヘラミガキ調整、内面 腰部に横方向のハケメ調整	○内外表面にぶい黄 褐色10YR6/3	○SD188 ○外側風塵
盤A	56	口 18.4 高 (9.3)	○脚状の口盤部から、口縁部は外 方に内折し肥厚する	○外表面風化のため詳調不明、内面工 具跡あり	○内外表面10YR4/ 6	○SD189 ○在地産

器 形	番号	法 量	形 素 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
赤生目 蓋	57	口 8.8 高 1.9	○笠形 ○つまみ径 2.8cm ○相対する位置に 2 個一対の穿孔	○内外両面に風化のため詳細不明	○内外両面 7.5YR 4/6	○SD216 ○在地蔵
	58	口 4.4 高 13.2 底 3.9	○平底 ○缺刻をなす底部から縦斗状に広がる 口縁部。口縁部はそのまま面をも って終わる	○内外両面に風化のため詳細不明	○内外両面橙色 5YR 7/8	○SD158 ○免形
水差	59	口 7.9 高 (10.0)	○漏斗状に広がる口縁部。口縁部は 上方に面をもって終わる	○内外両面に風化のため詳細不明	○内外両面にぶい根 色 7.0TR 7/4	○SD159 ○在地蔵
垂 A	60	口 (10.0) 高 (6.3)	○漏斗状に広がる口縁部。口縁部は 外斜面、面をもつ	○口縁部と内面風化のため詳細 不明、外表面側風化方向のヘリミガ キ調整	○内外両面にぶい根 色 10YR 5/3	○SD106 ○在地蔵
粗頭腹	61	口 11.0 高 18.3 底 5.7	○中央部が上げ瓶の底部 ○体部は彫影をなし、僅く外折する口 縁部。口縁部はやや尖り球体	○内外両面に風化のため詳細不明	○内外両面青色 5YR 7/8・淡黄褐色 7.5 YR 8/4	○SD206 ○外頭尾足 ○口付形
垂	62	口 13.4 高 (6.9)	○口縁部に窓をもち、口縁部は「く」 の字形に外反し面をもつ	○内外両面に横方向の窓をナタミガ キ調整	○内外両面褐色 7.5 YR 4/3	○SD158 ○在地蔵 ○生木 1種式
高杯 C	63	口 12.3 高 (3.4)	○浅い輪状の杯部。口縁部は上方に 面をもって終わる	○外表面化のため詳細不明、内面輪 方向のヘリミガキ調整	○内外両面青色 5YR 7/6	○SD226 ○在地蔵
	64	口 12.1 高 11.3	○浅い輪状の杯部。口縁部は上方に 面をもって終わる ○「ハ」の字形に広がる輪部	○口縁部が底部に向かうヘリミガキ 外反は内外両面とも風化のため詳細 不明	○内外両面青色 5YR 8/8	○SK15-1-4 ○在地蔵
大型壺 A	65	口 22.0 高 (17.0)	○丸底をもつ体部から、口縁部は僅く 外折する。口縁部は尖り球体に終 る	○外表面方向、内面輪部後方のハ ケメ 15/cm 調整、内面両部風 化のため詳細不明	○内面灰白色 7.5YR 2/2、外表面褐色 5YR 8/3	○SD158 ○在地蔵 ○外頭尾足
	66	口 13.2 高 (12.0)	○丸底をもつ体部から、口縁部は僅く 外折する。口縁部は尖り球体に終 る	○外表面方向のヘリミガキ調整、内 面両部風化のため詳細不明	○内外両面褐色 10 YR 4/6	○SD159 ○在地蔵
壺 B	67	口 11.4 高 (4.7)	○「く」の字形に外反する口縁部、口 縁部はやや上方につまみ上げる	○内外両面にナガ調整	○内面輪部にぶい根 色 10YR 4/3、外 面黑色 1.7/1	○SD139 ○在地蔵
	68	底 4.8 高 (3.8)	○平底	○外表面底部坂道方向のヘリケツナ 調整、内面輪方向のヘリミガキ調整	○内外両面にぶい根 色 7.5YR 7/4	○SD216 ○在地蔵
壺底部	69	底 6.2 高 (3.6)	○上げ瓶の底部 ○底部中央穿孔	○外表面方向のヘリミガキ調整、内 面底部ナガ調整	○内外両面白木色 5 YR 7/2・灰オリ ブ色 6/2・オリ ブ黒色 3/1	○SD139 ○在地蔵 ○外表面付着
	70	底 5.7 高 (4.2)	○中央が上げ瓶の底部	○外表面方向のハケメ調整、内面工 具跡、外表面底部木の灰化痕	○内面灰白色 2.5 Y 8/1、外表面褐色 5YR 8/4	○SD215 ○在地蔵
	71	底 6.9 高 (5.7)	○上げ瓶の底部	○外表面底部方向のヘリミガキ調 整、内面風化のため詳細不明	○内外両面にぶい根 色 7.5YR 5/3・灰 黒色 4/2・黒色 1.7/1	○SD139 ○在地蔵 ○内面底部付着
	72	底 6.0 高 (6.3)	○中央が上げ瓶の底部	○内外両面に風化のため詳細不明、 内面工具跡、外表面ヘリミガキ	○内外両面青色 7.5YR 8/2	○SD139 ○在地蔵
壺 C	73	底 5.5 高 (5.4)	○平底	○内面横方向、外表面方向のヘリ ミガキ調整	○内外両面赤褐色 5 YR 4/8・褐色 2.5 YR 4/4	○SD159 ○在地蔵
	74	底 5.4 高 (8.8)	○中央が上げ瓶の底部	○内面ハケメ調整、外表面方向のヘ リミガキ調整	○内外両面にぶい根 色 10YR 6/3	○SD189 ○在地蔵 ○外頭尾足
	75	底 6.0 高 (12.8)	○中央が上げ瓶の底部 ○直線的に外方にひらく体部中央で組 曲し、内傾する	○内外両面にヘリミガキ調整	○内外両面赤褐色 5 YR 4/8	○SK15-1 ○生頭尾足
	76	口 16.1 高 25.8 底 7.0	○上げ底 ○大高な壺形の体部から副斗状の長い 口縁部。口縁部は面をもつ	○外表面方向のハケメ (9/cm) の ち口縁部と底部にヘリミガキ調整、 体部に鶴鉢真文 (8/1.2cm)、 円凸口縁部横方向のヘリミガキ、 底部部ハケメ調整	○内外両面にぶい根 色 7.5YR 5/4・灰 白色 7.5YR 7/7 ○はげ穴	○B 黒灰色小瘤 混り底土 ○在地蔵 ○はげ穴
壺 D	77	口 12.4 高 (5.0)	○太く深い筒状の腹部から、外折する 口縁部。口縁部は上下に肥厚し、 下端に刃を施す	○外表面方向のハケメ (7/cm) 調 整、内面風化のため詳細不明	○内面にぶい根 色 7.5 YR 7/3、外表面 青褐色 10YR 6/2	○A 第 4 種 ○外表面付着

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
骨盤部	78	口 12.2 高 (6.0)	○想い骨部の腰部から、外寄する口縁部。 ○口縁部に3条の凹溝文	○内外面共風化のため詳細不明	○内外面共明赤褐色 2.5YR5/8	○B第7層 ○在地産
	79	口 18.3 高 (3.9)	○深伏状の口縁部。口縁部は下方に 肥厚し、下端に削りを施す	○内外面共風化のため詳細不明	○内外面共浅黄褐色 7.5YR8/3	○A第8層
	80	口 8.9 高 (5.7)	○深伏状の口縁部から、口縁部は下方に 肥厚する ○口縁部に種で締めるための縫孔を穿 つ	○外張方向、内面口縁部横方向の ハラミガキ調整、内面体部板状工具によるナダ調整	○内外面共褐色 7.5 YR4/3	○A第7層 ○在地産
	81	口 8.0 高 (6.7)	○深伏状の口縁部から、口縁部は水平に 削り、さらに口縁部は下方に 肥厚する	○外張斜・瓶方向のハケメのもへら ミガキ調整、内面縁部シボリメ、 体張方向のハケメ調整	○内面灰褐色Y4/1・ 淡褐色5YR8/4、外 面淡褐色Y8/4	○A西壁延地区 シルト ○在地産
鉢B	82	口 15.8 高 (7.0)	○半球体の体部から直口する口縁部	○内外面共ナグ調整	○内外面共淡黃褐色 10YR8/2・黒褐色 3/1	○B第7層 ○在地産 ○内外面共黒道
	83	口 24.9 高 (8.0)	○半球体の体部から、口縁部は外反す	○外面ハラミガキ調整?、内面風化のため詳細不明	○内外面共暗褐色10 YR3/3	○B暗紅灰色粘土質 ○在地産 ○外側黒斑
	84	口 14.8 高 8.4 底 7.7	○平底 ○半球体の体部から直口する口縁部	○内外面共ナグ調整	○内外面共よい褐色 2.5YR5/3・明 褐色7/1	○B第7層 ○在地産 ○外側黒斑
	85	口 11.8 高 (5.4)	○半球体の体部から直口する口縁部	○外張斜方向のハケメのもへらミガ キ調整、内面ハケメ調整	○内外面共浅黄色 2.5Y7/3	○B第7層 ○在地産 ○内面黒斑
壺	86		○天井部中央につまみ部分をもつ。つ まみの上面は凹む ○つまみ径4.7cm	○つまみ部内面板状工具による凹む ○内外面共ナグ調整	○内外面共淡褐色5 YR8/4	○A西壁 ○在地産 ○内外面黒斑
	87		○天井部中央につまみ部分をもつ。つ まみの上面は凹む ○つまみ径6.4cm	○つまみ部内面剥離 ○外張斜方向のハラミガキ調整、内 面風化のため詳細不明	○内面灰褐色7.5Y4/ 1、外張斜褐色7.5 YR4/4	○A第8層 ○在地産
	88		○天井部中央につまみ部分をもつ。つ まみの上面は凹む ○つまみ径6.4cm	○全面一定方向のハラミガキ調整	○内外面共よい褐色 2.5YR7/3	○A第10層 ○在地産
高杯轉 部	89	幅 7.4 高 (7.2)	○「ハ」の字形に広がる握脚部	○外張斜方向のハラミガキ調整、内 面板状工具によるナダ調整	○内外面共灰白色 7.5Y8/1・淡褐 色5YR8/4	○A北壁摸乳
	90	幅 6.9 高 (8.2)	○なだらかに「ハ」の字形にひろがる 握脚部 ○円板充填法	○外張斜部底方向のハラミガキ調整、 握脚部ハラミガキ充填、内面握脚部シ ボリメ、握脚部板状工具によるナダ 調整	○内外面共灰白色 2.5Y8/2	○A第8層
鋸脚部	91		○鋸に付属 ○円板充填法	○鋸部外面全体に沿管押捺文、内面 ナダ調整	○内外面共よい灰 褐色10YR7/3	○A第8層 ○在地産
	92		○鋸に付属 ○円板充填法	○鋸部外面全体に沿管押捺文、内面 風化のため詳細不明	○内外面共灰白色 7.5Y8/2	○A第8層
裏底部	93	底 6.0 高 (2.1)	○中央が上げた底部	○外面ナグ調整、内面風化のため詳細 不明	○内面淡黃褐色2.5Y 8/3、外張斜褐色5 YR7/6	○A土壤基底Y 3/2
	94	底 4.7 高 (3.3)	○上げ底の底部	○外面ハケメのもへらミガキ調整、 内面ハケメ調整	○内外面共よい灰 褐色10YR7/3	○A第8層 ○在地産 ○外側黒斑
茎・鋸 底部	95	底 4.6 高 (3.7)	○平底	○内外面共ナグ調整	○外側によい褐色 7.5YR5/3、内面 淡褐色2.5Y7/3	○B第7層 ○在地産 ○外側黒斑
裏底	96	底 8.5 高 (13.5)	○上げ底の底部	○外張斜方向のハラミガキ調整、内 面ハケメ (6/cm) 調整	○外側によい褐色 10YR7/3、内面によ い褐色5.5YR6/4	○A第8層 ○在地産 ○内外面共黒斑
	97	底 4.35 高 (4.0)	○中央が上げ底の底部	○内外面共風化のハケメ (7/cm) 調整	○内外面共暗褐色 7.5YR7/3	○A第8層 ○在地産 ○内外面共黒斑
	98	底 4.4 高 (8.5)	○上げ底の底部	○外面ハケメ調整、内面風化のため 詳細不明	○内外面共赤色10 YR5/8	○A西壁暗灰色 シルト ○在地産 ○内面灰青

器 形	番号	法 量	形 素 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
你生土器 要部	99	底 6.6 高 (6.1)	○やや上げ底の底部	○外表面方向のヘラミガキ調整、内面風化のため研磨不明(ハケメ?)	○内外面共灰白色 2.5YR8/2	○B上部擦毛り ○外面黒塵
	100	底 6.4 高 (9.0)	○平底	○外表面方向のヘラケメリ調整、内面削状工具によるナダ調整	○外面上部にぶい黄 褐色10YR7/2、内面 にAV-背景色10YR 7/3	○B第7層 ○在油底 ○外面風化
大甌B	101	口 21.8 高 36.5 底 8.0	○上げ底 ○丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部はやや上方につまり上げ底をもつ	○外表面側から体部底方向、底部横方向のヘラミガキ調整、内面斜方向のハケメ (11/cm) 調整	○外表面共ぶい黄 褐色10YR6/3	○B ○在地底 ○外面風化付着
	102	口 25.0 高 (7.0)	○肩部のある体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○内外表面共風化のため評難不明	○内外面共詰黄色 2.5Y8/3	○A東屋崩灰色 瓶砂利シルト
要B	103	口 15.6 高 28.8 底 5.8	○平底 ○中央がはるる体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○外表面方向のハケメ (6/cm) 調整のちヘラミガキ調整、内面ナダ調整	○内外面共灰白色 2.5Y8/2・褐色 2/1	○A第7層 ○内外面風化付着
	104	口 12.0 高 (5.0)	○内側する体部から、外折する口縁部。口縁端部は底をもつ	○外表面方向、内面横方向のハケメ 調整	○内外面共黒褐色10 YR3/2	○A第9層 ○在地底 ○外面風化付着
	105	口 13.8 高 (4.6)	○肩部のはるる体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○外表面方向のハケメ (5/cm) 調整、内面ナダ調整	○外表面共ぶい黄 褐色10YR7/3	○A第9層 ○外表面風化
	106	口 18.4 高 (7.7)	○丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○外表面方向のハケメ (5/cm) のちヘラミガキ調整、内面斜方向のハケメ 調整	○内外面共ぶい黄 褐色10YR5/4	○B第8層 ○在地底
土製円 瓶	107	長 4.4 幅 3.8 厚 0.8	○土器からの軽用品 ○端縁を打ち欠いただけの簡単なつくり	○外表面方向の細かいハケメ 調整、内面風化のため評難不明	○外面上部にぶい褐色7.5 VR5/4、内面にぶい 黄褐色10YR6/3	○灰黑色粘土 ○在地底
土 器	108	口 19.4 高 (27.1)	○丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○外表面方向、内面口縁部横方向、体部側のち肩部分のハケメ (8/cm) 調整、内面斜削下位へカケメリ調整	○内外面共ぶい黄 褐色10YR7/3、一 般褐色7.5YR7 /6	○B土器壁毛り ○在油底 ○外表面黒塵
	109	口 20.2 高 (6.0)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○内外表面共風化のため評難不明 (ハケメ調整?)	○内外面共灰白色 2.5Y8/2	○A純色彩色 り土
	110	口 25.0 高 (6.7)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底をもつ	○内外表面共風化のため評難不明 (ハケメ調整?)	○内外面共ぶい黄 褐色10YR4/3	○在地底
	111	口 29.8 高 (4.4)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は底にながらやや高くおきめる	○内外表面共風化のため評難不明 (ハケメ調整?)	○内外面共ぶい黄 褐色7.5YR7/4	○B純色彩色 混カシルト ○在地底
把手付 体	112	口 9.0 高 (5.0)	○外方に直口に広がる口縁部 ○1cmに断面円形をなす把手が付く	○内外表面共風化のため評難不明	○内外面共青色5Y 7/6	○B暗オーブ 灰色小窓混り土
钵	113	口 10.8 高 4.9	○半球形をもつ体部から、直口にして口縁部は上方にのげる。	○内外表面共にハケメ (5/cm) 調整	○内外面共褐色7.5 YR4/3	○SD215 ○在地底
小型盆	114	口 8.4 高 (4.4)	○丸味をもつ体部から、直口にして口縁部は上方にのげる。	○内外表面共に数段の横方向のヘラミガキ調整	○外面上部にぶい 黄褐色 7.5YR7/4、内 面淡褐色5YR8/4	○A暗オーブ 灰色小窓混り 土 ○在地底
高部	115	底 7.8 高 (3.4)	○半球形をもつ体底部	○外表面ハケメ調整、外表面部・内面 ナダ調整	○外面上部にぶい 黄褐色 10YR7/3、内面 灰褐色10Y5/1	○C暗褐色 壁上部
甌	116	口 11.8 高 (12.0)	○球形をもつ体部から。口縁部はなだらかに「く」の字形に外反する	○外表面部・内面調節ハケメ (7/cm) 調整、内面体部風化のため評難不明	○内外面共青色 5YR5/8	○SD215 ○在地底 ○内外面風化付着
	117	口 23.6 高 (3.5)	○外方にひらく口縁部。口縁端部は外折し、上面に凹みをもつ	○内外表面にコナダ調整	○外表面帶色7.5YR7/6、 内面淡褐色7.5 YR8/4	○C
	118	口 17.4 高 (6.0)	○内側する体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は内面に肥厚する	○外表面横方向のヘラミガキ調整、内面体部板状工具によるナダ調整	○内外面共灰白色 7.5Y8/2	○C類焼

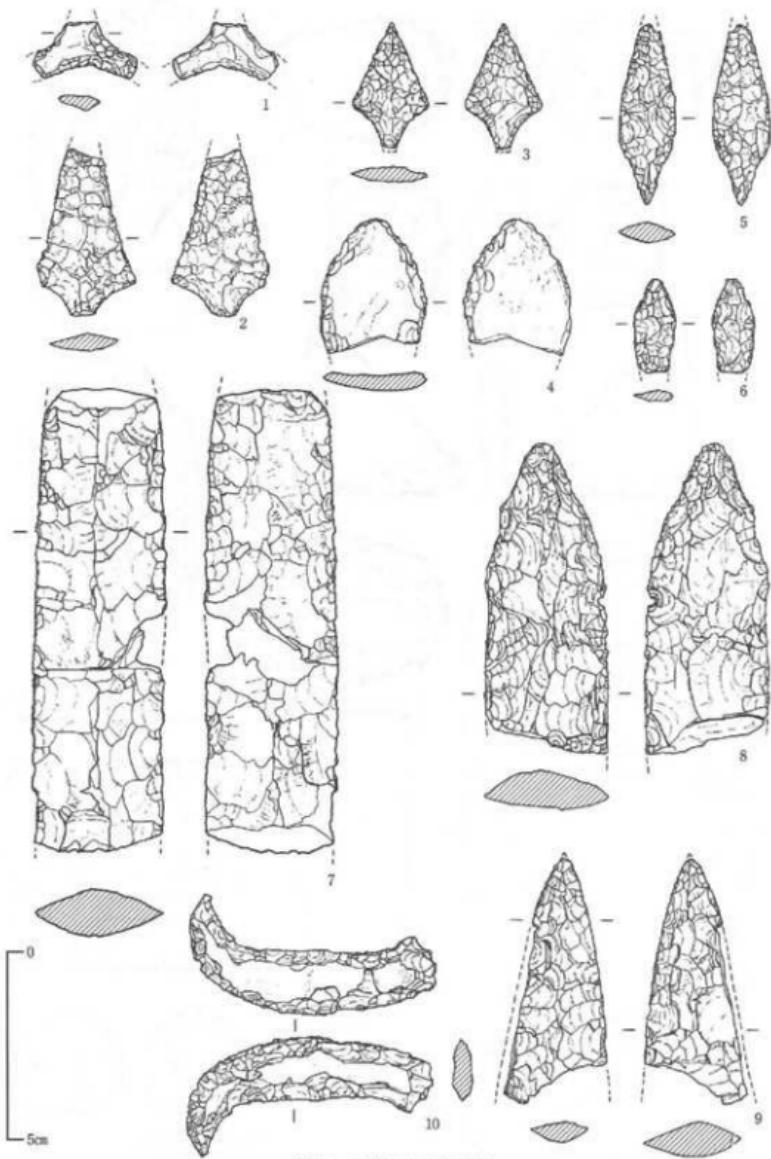
部 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備考
上 頭 部	119	□ 14.4 高 (4.2)	○臂が張る体勢から、屈曲して外方に ひろがる口縫部	○外面頭部にハケメ (5/cm) 調整。 内面体部曲方向へのハケズリ調整	○内外面共底白色 5 Y8/2	○B暗緑灰色 裏りシルト ○在地底
	120	□ 15.3 高 (3.9)	○「く」の字形に外反する口縫部	○内外面共に風化のため詳細不明	○外面上に深い黄色 10YR7/4、内面 黒褐色3/1	○B第5層 ○内面縫合着
	121	□ 20.6 高 (8.7)	○丸味をおびる体勢から、などらかに 「く」の字形に外反する口縫部	○外側ハケメ (12/cm) のちハタキ調整、内面風化のため詳細不明	○内外面共底色 7.5 YR4/4	○B暗緑灰色 裏りシルト ○在地底
顎	122	□ 31.4 高 9.0	○直角的に外方にひびの体部から口縫 部	○外縫合方向の平行タタキ (4/cm) 調整、内面風化のため詳細不明	○内外面共底色 7/5 YR4/4	○SD102 ○在地底
頬骨部	123	□ 15.6 高 (5.8)	○外上方へ直線的にひびの口縫部から。 口縫部は丸くおさめる ○口縫部に明確な残縫をもち、その 横斜下に縫接部状況をめぐらす	○外縫合部に回転ヘタケズリ調整	○外縫合底色 5.7Y6/1 ・底色8/1、内面 底色N7/	○SD102 ○外自然輪
	124	□ 7.0 高 6.5	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く丸い	○外側天井部に回転ヘタケズリ調整 (右端)	○外縫合底色 5.7Y6/1 ・内面底色N6/	○SD102
前 頭	125	□ 13.2 高 (4.2)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く丸い	○外側天井部に回転ヘタケズリ調整 (左端)	○内外面共底色N6/ Y8/2	○SD102
	126	□ 11.7 高 (3.6)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く丸い	○外側天井部に回転ヘタケズリ調整	○外縫合色 7.5Y6/1 ・5/1、内面底 色10R5/1・暗赤 色4/1	○SD102
	127	□ 11.6 高 (3.6)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く丸い		○内外面共底白色 7.5Y7/1-底色6/1	○SD102
	128	□ 10.6 高 4.5	○口縫部に内嵌する凹面をもち、受 部は屈くほほ水平で縫部はやや尖り 気味	○外縫合部1/2に回転ヘタケズリ 調整 (右端)	○内外面共底白色N 7/	○SD102
把手付 無縫高 仰	129	□ 10.8 高 (4.2)	○たなあがりは比較的高く内傾し、口 縫部は丸くおさめる ○受部は水平で、縫部はやや尖り気味	○外側受部下より回転ヘタケズリ 調整 (左端)	○内外面共底色 5.7Y7/4、外面 底色5.7Y8/1	○SD102
	130	□ 10.9 高 (4.6)	○たなあがりは比較的高く内傾し、口 縫部は丸く尖り気味 ○受部は屈くほほ水平で縫部は丸くお さめる	○外側受部下より回転ヘタケズリ 調整 (右端)	○外縫合底色 N8/、内 面底色N7/	○SX02
	131	□ 7.0 高 6.5	○直角形をもつ直部から、直口する口 縫部。口縫部は丸くおさめる	○外縫合部手持ちヘタケズリ調整、 内面底部ヒビ直痕		○SX01
杯 盖	132	□ 11.7 高 (4.8)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く丸い	○外側天井部回転ヘタケズリ調整 (右端)	○内外面共底色N6/ Y8/2	○SD102
	133	□ 11.0 高 (4.4)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く尖り気味	○外側天井部回転ヘタケズリ調整 (左端)	○内外面共底色N4/ Y8/2	○SD102
	134	□ 13.5 高 (4.3)	○形態化した種類が付く ○口縫部内面に化粧状の段をもち、 丸くおさめる	○外側天井部回転ヘタケズリ調整 (右端)	○内外面共底白色N 7/	○SE04
	135	□ 12.3 高 (4.6)	○たなあがりは高く直立し、口縫部は 内嵌する凹面をもつ。受部は水平	○外縫合部回転ヘタケズリ調整 (右 端)	○外縫合底色 N6/、内 面底色N5/	○SD102
杯 身	136	□ 10.8 高 5.3	○たなあがりはやや高く、口縫部は 内嵌する凹面をもつ。受部はやや上 外方への、尖くおさめる	○外縫合部回転ヘタケズリ調整 (左 端)	○内外面共底白色N 7/	○SD46 ○内面縫合着
	137	□ 10.3 高 3.6	○口縫部は内嵌する凹面をもつ ○受部は屈く水平、縫部は尖る	○外縫合部回転ヘタケズリ調整 (右 端)		○外縫合部オーリーブ 色5GY6/1・暗 緑灰色10GY4/1、 内面底色N6/
	138	□ 14.6 高 (2.7)	○たなあがりは屈くやや内傾する ○受部は屈く水平、縫部は尖る		○外縫合底色 N7/、 内面底色N6/	○SD196
	139	底 8.90 高 (7.4)	○ほぼ平らな底部から、体部はだら かに外反しながら上方へひび	○外縫合部回転ヘタケズリ調整 ○縫跡1ヶ所に円孔 (2×2 cm)	○外縫合部底色 5 Y 4/1、外縫合部、 内面底色N8/	○SX02 ○外縫合部自然 輪
杯 脚	140	□ 12.2 高 (3.2)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く抜けを欠き、形だけのもの	○外縫合部回転ヘタケズリ調整 (右端)	○内外面共底白色N 7/	○SD102
	141	□ 12.3 高 (3.7)	○口縫部に内嵌する凹面をもち、後 は屈く尖り気味	○外縫合色 2.5GY6/1、内面 底色N7/	○SD102 ○外自然輪	

器形	番号	法量	形態の特徴	社法の特徴	色調	備考
杯身	142	口 10.3 高 (3.8)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、た ちあがりは外等気味 ○受部は水平、端部はやや尖り氣味	○外面底部凹板ヘラケズリ調整 (右 廻り)	○内外面共灰白色N 7/	○SD102
	143	口 10.7 高 5.0	○口縁端部に内傾する凹面をもち、た ちあがりは内傾する ○受部は水平、端部はやや尖り氣味	○外面底部凹板ヘラケズリ調整 (左 廻り)	○外面灰白色N6/ 内 面灰白色N7/	○SX01
	144	口 8.8 高 (3.9)	○たちあがりは比較的なく、口縁端部は内傾する 明瞭な段差なし ○受部は切らず外上方へのび、端部はや や尖り氣味	○外面底部凹板ヘラケズリ調整	○内外面共灰白色N 8/	○SD102
	145	口 12.1 高 (3.0)	○たちあがりは鋭く内傾する。受け部 は鋭くやや外上方へのび、端部はや や尖り氣味	○外面底部凹板ヘラケズリ調整	○内外面共灰白色N 7/	○SD23
	146	底 6.6 高 (3.7)	○高台状の脚部 ○「ハ」の字形に広がる脚柱部、端部 は面をもつ	○外脚部脚柱ヘラケズリ調整、内 面底脚柱ナデのちナデ調整	○内外面共灰白色N 7/	○SX02
高脚盃	147		○つまみは咎高が低く箇平、中央が凸 形をなす ○模様は腰く尖り氣味 ○U脚部欠失、つまみ幅0.3cm	○外蓋及脚部凹板ヘラケズリ調整 (右廻り)	○外面灰白色N7/、 内面灰白色N6/	○A赫褐色移 り粘土
杯蓋	148	口 11.9 高 (3.4)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、腰 は鋭く尖り氣味	○外面天井部凹板ヘラケズリ調整	○外面オリーブ色 7.5Y5/2、内面灰 白色N8/	○B暗オリーブ 灰色小窪泥引 土 ○外面自然釉
杯身	149	口 11.0 高 6.05	○たちあがりが長く直立気味、口縁端部 は内傾する裏面をもつ ○受部はやや外上方へのび、端部は尖 り氣味	○外面底部凹板ヘラケズリ調整 (右 廻り)	○外面灰白色N7/、 内面灰白色N6/	○C第4号
	150	口 9.6 高 (5.2)	○口縁端部に内傾する裏面をもつ ○受部は鋭く水平、端部は丸味をもつ ○受部は水平、端部はやや丸味をもつ	○外面底部凹板ヘラケズリ調整 (右 廻り) ○内面頂部ナデの一部に、工具によ るナデ調整	○外面口縁部 - 内 面灰色N6/、外面底 部灰白色10Y8/1	○B第5号
	151	口 10.6 高 5.4	○たちあがりが長く内傾し、口縁端部は やや丸味をもつ ○受部は水平、端部はやや丸味をもつ	○外蓋底部凹板ヘラケズリ調整 (右 廻り)	○内外面共灰白色N 7/	○B第5号 ○完形
有蓋高 杯	152	口 11.5 高 10.5 幅 9.7	○脚部は「ハ」の字形に内反し、端部 面に凹凸とも段差をなす ○杯身は口縁端部に内傾する凹面をもつ ○受部は水平、端部は尖る	○杯身外蓋底部凹板ヘラケズリ調整 (左廻り) ○脚部に長方形のスカシ窓を3方向 に穿つ	○内外面共灰白色N 8/	○出土地不明
杯蓋	153	口 12.3 高 (3.3)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、腰 は鋭くやや尖る	○外面天井部凹板ヘラケズリ調整	○内外面灰白色N6/	○B暗緑灰白色 泥引シルト
	154	口 12.0 高 (4.2)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、腰 は鋭くやや尖る	○外面天井部凹板ヘラケズリ調整 (右廻り)	○外面灰白色N5/、 内 面灰白色N7/	○B暗緑灰白色 泥引シルト
杯身	155	口 11.4 高 (4.4)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、受 部は水平、端部はやや丸味をもつ	○外面底部凹板ヘラケズリ調整 (左 廻り)	○内外面共灰白色N 7/	○B暗オリーブ 灰色小窪泥引 土
	156	口 13.0 高 (3.8)	○U脚部は内傾し、端部は丸味をもつ ○受部は鋭く水平、端部は丸味をもつ		○外面 - 内面口縁部 灰白色N6/、内面底 部灰白色N7/	○C第4号 赤色土
高脚 盃	157	幅 8.5 高 (8.0)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、脚 端部はカギ形に屈曲する	○外面凹板クシナダ調整 ○3方向からなる長方形スカシ窓と 思われる	○内外面共灰白色N 7/、外蓋一部灰白 色N8/	○深澤 ○外面自然釉
	158	幅 9.8 高 (4.7)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、脚 端部はカギ形に屈曲する	○外面凹板クシナダ調整 ○4方向からなる長方形スカシ窓と 思われる	○外面オリーブ灰 色2.5GY5/1、内 面明オリーブ灰 色5GY7/1	○E第2号 ○外面自然釉
	159	幅 10.1 高 (5.5)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、脚 端部はカギ形に屈曲する	○4方向からなる長方形スカシ窓と 思われる	○内外面共灰白色N 7/	○B暗オリーブ 灰色小窪泥引 土 ○外面自然釉
	160	幅 7.4 高 (5.0)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、脚 端部はカギ形に屈曲する	○外面凹板クシナダ調整 ○4方向からなる長方形スカシ窓と 思われる	○内外面共オリーブ 灰白色2.5GY6/1	○C

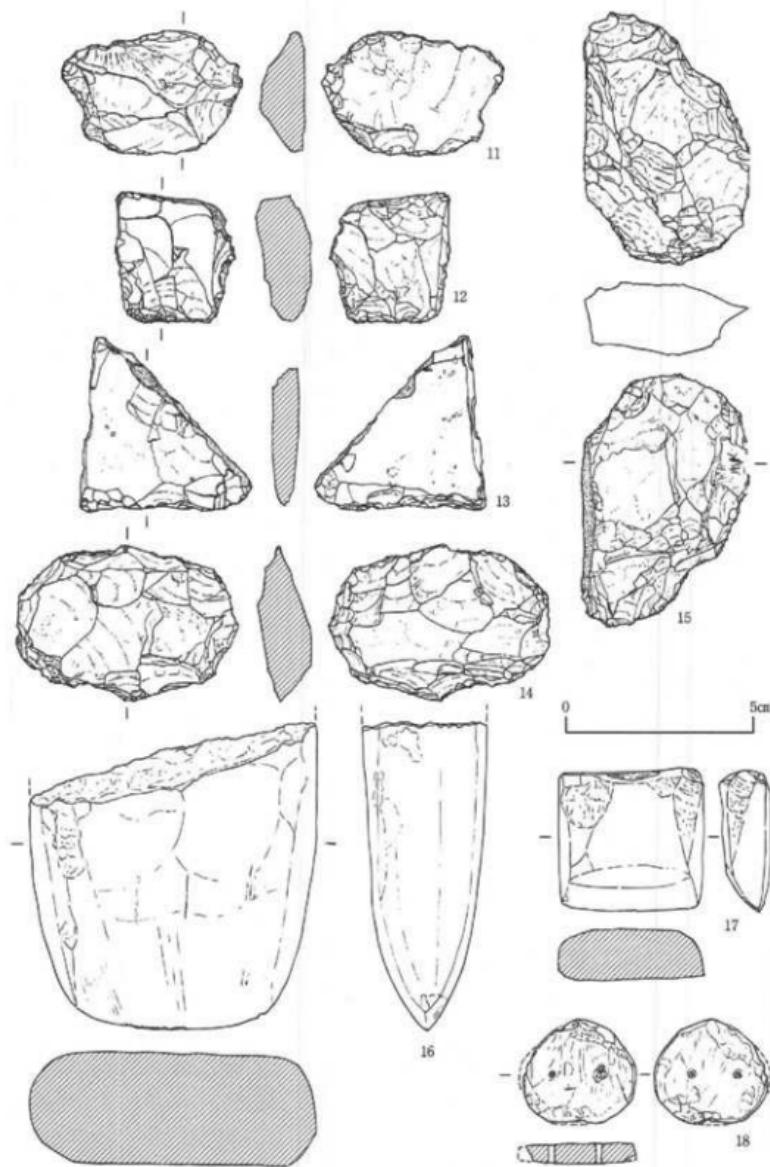
部	番号	法量	形態の特徴	挂法の特徴	色調	備考
高杯脚部	161	幅 8.6 高 (5.5)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、基部はカギ形に屈曲する	○3方向からなる長方形スカシヒと思われる	○内外面共灰白色N7/	○A四隅黒面
	162	幅 10.3 高 (5.3)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、基部はカギ形に屈曲する	○外面回転クシナダ調整 ○3方向からなる長方形スカシヒと思われる	○内外面共灰白色N4/	○B暗オリーブ 灰色小擦り土 ○外面自然地
杯底	163	口 13.15 高 (3.9)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、後は極く丸い	○外面天井部に回転ヘラケズリ調整	○内外面共灰白色N6/	○C第5層 ○外面自然地
	164	口 11.2 高 (3.5)	○口縁端部に内傾する凹面をもち、後は極く丸い	○外面天井部回転ヘラケズリ調整	○外面口縁部暗オリーブ2.5GY1/1、 天井部オリーブ色 2.5GY6/1、内面 灰白色N8/	○A明オリーブ 灰色小擦り土 ○外面自然地
杯身	165	口 11.1 高 3.5	○たちあがり届く。口縁端部丸味をもつ ○底部上方へのび、端部やや尖り気味	○外面底面部回転ヘラケズリ調整(右 側)	○内外面共灰白色N7/	○SD22
	166	口 9.8 高 3.6	○たちあがり届く内傾し、口縁端部丸味をもつ ○底部水平、やや尖り気味	○外曲度局部回転ヘラケズリ調整(右 側)	○内外面共灰白色N6/	○側面 ○外面自然地
邊	167	底 11.4 高 (8.8)	○形容をなす形容。2/3の位置に円孔を穿孔	○外面底面部回転ヘラケズリ調整のち ナダ調整	○内外面共灰白色N7/、 外側一部灰白色N8/	○若緑灰色彩 混り土
	168	底 13.4 高 (6.6)	○半球体をなす形容。1/3の位置に円孔を穿孔	○外面底部最大径部に構造点立、 底部タキ調整	○内外面共灰白色N7/	○白擦灰色彩 混りシルク ○外面質自然輪
裏	169	口 21.0 高 (5.1)	○大きく外弯する口縁部。口縁端部は下方に肥厚し、凹面をもつ。外側に1条の凸線がある	○内外面共回転ナダ調整	○内外面共灰白色N7/	○B暗部底色 混りシルク
	170	口 19.2 高 (3.4)	○大きく外反する口縁部。口縁端部は外方に折り返し段とする	○内外面共回転ナダ調整	○内外面共灰白色10 Y8/1	○C第5層
裏	171	口 21.4 高 (7.4)	○ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚し、凹面をもつ。上方へとみ上げる	○外裏部回転クシナダ調整	○外側オーリーブ灰 2.5GY5/1、内面 オーリーブ灰2.5 GY6/1	○B暗緑灰色彩 混りシルク ○外面質自然輪
	172	口 9.3 高 (4.2)	○ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は外側に凹面をもつ ○外側口縁部に1条の凸線がある	○凸面の上下に構造波状文(34mm/ 1.1cm)	○内外面共オーリーブ 灰5GY5/1	○E特土
舟杯	173	高 (9.35)	○長脚2段スカシ。スカシ座は3方向	○回転ナダ調整	○内外面共灰白色N8/	○C
	174	高 8.3 高 (3.0)	○「ハ」の字形にひろがる脚部から、 基部は下方に肥厚し、凹面をもつ ○脚部に4方向からなる円孔を穿孔	○回転ナダ調整	○内外面共灰白色N8/	○B暗緑灰色彩 混シルク
	175	高 9.4 高 (5.3)	○「ハ」の字形に外反する脚柱部、基 部はカギ形に屈曲する	○回転ナダ調整	○外側灰白色N6/、内 面灰白色N7/	○鉛鉄
裏	176	口 14.4 高 (3.7)	○なだらかに淵半径に外反する口縁部。 口縁端部は下方に肥厚し、凹面をもつ	○脚部に構造波状文(9mm/ 1cm)	○内外面共オーリーブ 灰2.5GY6/1	○A明オリーブ 灰色砂
	177	口 15.5 高 (4.5)	○なだらかに淵半径に外反する口縁部。 口縁端部は下方に肥厚し、凹面をもつ	○回転ナダ調整	○内外面共灰白色N7/	○B暗緑灰色彩 混シルク
	178	口 18.3 高 (5.2)	○なだらかに淵半径に外反する口縁部。 口縁端部は屈曲し上方につまみ上げ る	○回転ナダ調整	○外表面オーリーブ灰 2.5GY4/1、内 面オーリーブ灰 2.5GY7/1	○A暗オリーブ 灰色小擦り
	179	口 16.0 高 (4.4)	○外側する狭い脚部に、屈曲して外反 する口縁部。口縁端部は上方につま みあげる	○回転ナダ調整	○外側灰色10YR1.7 J1、内面オーリーブ 灰2.5GY4/1、内 面オーリーブ灰 2.5GY7/1	○A暗青灰色彩 シルト
	180	口 30.8 高 (5.0)	○外方に直線的にのげる口縁部。口縁 部は外方に折り曲げて、段とする	○外裏部に構造波状文を縱方向に 施す	○外側オーリーブ灰 色2.5GY7/1、内 面灰白色N7/	○E第5層 ○磁の可逆性もあり
土器部	181	口 3.6 高 (3.9)	○やや丸味をもつ体部から、屈曲して 上方に直線的にのげる口縁部。口縁 部はやや内傾する	○内外面共化成のため詳細不明	○内外面共灰白色 2.5Y8/2	○暗オリーブ灰 色小擦り土

部	番号	法	形態の特徴	法の特徴	色	備考
土質部 製造土器	182	口 高 (3.9)	○や丸味をもつ体部から、延長して上方に直線的にびる口縁部。口縁部はやや内傾する	○内外面共風化のため詳細不明	○内外面共灰白色7.5 Y4/1	○B第5層
	183	口 高 (3.1)	○丸味をもつ体部から口縁部につづく、口縁部やや上方にたらかる	○内外面共風化のため詳細不明	○内外面共赤褐色 2.5YR7/4・浅褐色5YR8/4	○SD213
	184	口 高 (4.1)	○丸味をもつ体部から口縁部につづく	○内外面共風化のため詳細不明	○内外面共灰白色 2.5Y8/2	○SD265
	185	口 高 (5.3)	○丸味をもつ体部から、口縁部は上方にめぐる	○外底風化のため詳細不明、内面横方向のハメ調整	○内外面共灰白色 2.5GY8/1	○SD102
	186		○丸味をもつ述べ部	○外墨タキ、内面ナゲ調整	○淡黄色5Y8/3	○ET土
	187	口 高 (5.5)	○丸味を持つ述べ部から口縁部につづく	○外墨タキ、内面風化のため詳細不明	○内外面共浅黃褐色 10YR7/1	○SD102
	188	口 高 (4.8)	○内傾する体部から口縁部はなだらかに上方にたらかる	○外墨タキ、内面ナゲ調整	○内外面共泥褐色5 YR8/4・浅黃褐色7.5YR8/6	○SD102
	189	口 高 (5.8)	○内寄する体部から口縁につづく	○内外面共にナゲ調整	○内外面共泥褐色5 YR8/4・灰白色 7.5Y8/2	○SD102
	190	口 高 (3.6)	○内寄する体部から口縁につづく	○内外面共に風化のため詳細不明	○内外面共橙色5YR 7/8	○SD102
機式土器	191		○体部片	○外面格子目タキ、内面板状工具によるナゲ調整	○内外面共青褐色 7.5YR8/3	○B端オーリーブ 灰色小標記り土
	192		○体部片	○外面格子目タキ、内面ナゲ調整	○内外面共棕褐色5YR 7/8	○A端オーリーブ 灰色小標記り土
	193		○部片	○外面格子目タキ、内面ロコナゲ調整	○内外面共浅黃色 2.5Y7/3	○A
	194		○体部片	○外面格子目タキ、内面ナゲ調整	○内外面共浅黃色 2.5Y7/3	○A
	195		体部片	○外面格子目タキ、内面ナゲ調整	○外底赤褐色2.5 YR7/4・内面灰 色7.5Y6/1	○B端オーリーブ 灰色小標記り土
土器部 瓶	196		○体部片	○外面平行タキ、内面あて具痕	○内外面共橙色7.5 YR7/6	○出土地不明
	197		○体部片	○外面平行タキ、内面あて具痕	○内外面共橙色7.5 YR7/6	○B端オーリーブ 灰色小標記り土
陶質部 壺	198		○体部片	○外面縦文タキ・沈線、内面ナ ゲ調整	○内外面共灰白色N 7/	○B第5層
土器部 瓶	199		○体部片	○外面平行タキ、内面板状工具によるナゲ調整	○外面橙色5YR7/6, 内面にぶい穂色 7.5YR6/4・灰白 色10YR8/2	○暗緑色沙面 リシルト
	200		○口縁部	○外面部平行タキ、口縁部ヨコ ナゲ調整	○内外面共にい黄 褐色10YR7/3	○B端オーリーブ 灰色小標記りシルト
	201		○突き口部	○外面部平行タキ、口縁部ヨコ ナゲ調整	○外側橙色5YR7/6, 内面にぶい穂色 7.5YR6/4・灰白 色10YR8/2	○B端オーリーブ 灰色小標記りシルト
陶質部 壺	202		○口縁部	○外面部平行タキ、口縁部ヨコ ナゲ調整	○外側橙色5YR7/6, 内面にぶい穂色 7.5YR6/4・灰白 色10YR8/2	○SD16
	203		○体部片	○外面格子目タキ・沈線、内面板 状工具によるナゲ調整	○内外面共灰白色N5/	○B第5層
機式土器	204		○体部片	○外面浅い格子目タキ・カキメ、 内面同様ナゲ調整	○内外面共灰白色N5/	○C第4層

基 形	番 号	注 意	基 惠 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 壁 部	205		○口縁部	○外表面平行タキ、内面あて丸直	○内外面真裡色7.5 YR7/6	○B暗オリーブ 灰色小織毛り 土
	206		○口縁部	○外表面平行タキ、口縁部ヨコナデ 調整	○外表面真裡色5YR7/6、 内面にぶい緑色 7.5YR6/4・灰白 色10YR8/2	○SD46
	207		○口縁部	○外表面方向の平行タキ、口縁部 ヨコナデ調整	○外表面灰青色2.5Y 7/2、内面黄灰色 2.5Y5/1	○B第5刷
瓶	208	○吹き口径36.2cm ○「ハ」の字形に内接する口縁部から。 口縁部は内折し面をもつ。既次の 吹き口ともち離部は四む		○外表面平行タキ・ヘラ模沈刷、内 面口縁部直方向のヘラケズリ、体 部ナガ溝壓	○内外面共にぶい黄 緑色10YR6/4・明 赤緑色5YR5/6	○SD102
瓶把手	209		○外面円形	○外表面部タキ調整、把手部ナゲ 調整	○外表面真裡色5YR7/6、 内面にぶい緑色 7.5YR6/4・灰白 色10YR8/2	○B第5刷



第45図 弥生時代石器実測図



第46図 弥生時代石器・古墳時代石製品実測図

表3 弥生時代・古墳時代の石器・石製品観察表

器 形	番号	法 量	器 形 の 特 徴	備 考
石鎌	1	長 (1.5) 幅 (2.8) 厚 0.4 重 1.4	○凹基無茎式 ○中央断面形片凸形 ○基部欠損	○ SX02 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山産
	2	長 (4.5) 幅 2.6 厚 0.5 重 5.1	○凸基無茎式 ○中央断面形両凸形 ○先端部欠損	○ SD196 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山産
	3	長 (3.3) 幅 2.05 厚 0.45 重 2.0	○凸基有茎式 ○中央断面形両凸形 ○基部欠損	○ SD159 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山製
	4	長 (3.65) 幅 2.85 厚 0.45 重 5.7	○中央断面形両凸形 ○基部欠損	○ SD196 ○暗灰色サヌカ イト製
	5	長 (4.8) 幅 1.5 厚 0.5 重 3.1	○凸基有茎式 ○中央断面形両凸形 ○先端部欠損	○ SD159 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山産
	6	長 (2.5) 幅 1.1 厚 0.3 重 1.0	○中央断面形両凸形 ○基部欠損	○ SK53 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山産
石槍	7	長 (12.3) 幅 3.6 厚 1.5 重	○両端部欠損、中央部折 損	○出土地不明 ○暗灰色サヌカ イト製
	8	長 (8.3) 幅 3.8 厚 1.2 重 36.4	○基部欠損	○暗オリーブ灰 色小礫混り土 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山産
	9	長 (6.55) 幅 (2.75) 厚 0.95 重 12.7	○中央断面形両凸形 ○片側側縁・基部欠損	○ SD159 ○暗灰色サヌカ イト製 ○二上山産

器 形	番号	法 量	器 形 の 特 徴	備 考
石小刀	10	長 6.6 幅 1.75 厚 0.6 重 8.8	○全周縁側縁細部調整 ○完形品	○SD188 ○暗灰黒色サヌカイト製 ○二上山産
細部調整剥片	11	長 3.3 幅 4.9 厚 1.2 重 19.1		○SE13 ○暗灰色サヌカイト製
楔形石器	12	長 3.5 幅 3.25 厚 1.4 重 21.2	○背部に表皮をもつ ○表面風化している	○13-h 第5層 ○灰色サヌカイト製
削器	13	長 4.7 幅 4.6 厚 1.05 重 22.7	○表面風化している	○SX02 ○灰色サヌカイト製
	14	長 4.15 幅 6.0 厚 1.3 重 34.5		○SX02 ○暗灰色サヌカイト製
	15	長 4.5 幅 6.8 厚 2.2 重 70.8	○背部にサヌカイト表皮をもつ	○SD196 ○暗灰色サヌカイト製
蛤刃石斧	16	長 (8.25) 幅 (7.7) 厚 3.2 重 329.0	○両刃 ○基部欠損	○SD145 ○緑灰色斑れい岩製
扁平片刃石斧	17	長 (3.85) 幅 3.9 厚 1.3 重 39.3	○基部欠損	○暗オリーブ灰色小礫混り土 ○灰緑色変質輝綠岩製
小孔円板	18	長 2.8 幅 (3.0) 厚 0.55 重 7.6	○径 1mmの穿孔 2ヶ所あり。1ヶ所失敗穴あり。	○緑黒色砂混じりシルト ○暗緑色珪質頁岩製

5. 中世遺構出土遺物

平安時代から室町時代に至る各時期のものが出土している。調査で出土した土器の整理は、各遺構毎の埋土、堆積土から取り上げられた出土品を中心に種類、器種に分けてその変化を考察する方法で行なった。遺構面が浅く、堆積土があまりなく、新旧遺構の重複もはなはだしいため先行する遺構の遺物が混入したりして、遺構の遺棄あるいは放棄された時期よりもかえって多く含んでいるものさえある。このことから遺構単位の出土遺物ではあるが時間幅の短い同時性をもつたものとは言いがたい。

調査で検出された遺構の中で遺物が多く出土したのは井戸、溝、土坑、河川である。ここに収載した遺物は、全出土遺物からすればほんの一部である。遺構によっては同一種類、同一器種が多量に検出しているものもあり、遺構の遺物組成の概要と特徴を捉えられるように取捨選択したものである。

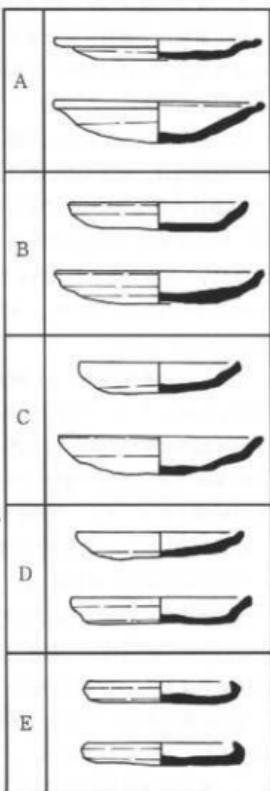
出土した中世遺物は土師器、瓦器、須恵器、陶器、磁器である。土器の種類を示す用語は焼成技法、胎土などの違いにより区分した。土師器は、縄文土器、弥生土器の系譜を引くもので焼成温度が600~800度前後の酸化焰によって焼かれたもので、赤褐色、褐色のやわらかい土器である。須恵器は、大陸伝来の技術によってつくられた青灰色、灰色をしたかたい土器で、窯を用いて1000度以上の高温で還元焰によって焼かれたものである。胎土は、耐火性のある淡水性粘土を用いている。瓦器は器表に炭素を吸着させるが、その過程で還元化するため、器壁の断面が灰白色を呈する。だだ、炭素の吸着が不充分で黒色にならないものでも製作技法が同一であれば瓦器に含めた。陶器は須恵器から発展したもので高火度の酸化焰焼成を行なったものである。

土師器は、出土量が多い遺物である。皿が圧倒的に多数を占めている。一応の基準として、口径が8cm以下は小皿、10cm前後は中皿、11cm以上は大皿とした。したがって、その呼称は、大皿A・B、中皿B・C、小皿C・D・Eとなる。

A型式は、体部は若干内湾しながら立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を内側に肥厚させるものである。中皿、小皿に属するものが多く、規格性に富んでいる。全体的に作りが丁寧である。

B型式は、底部と体部の屈曲が明瞭で、体部上半が2回

表4 土師器皿分類表



のヨコナデにより、2段に屈曲し、体部下半は、指頭圧痕により凹んでおり、口縁端部は丸くおさめているものである。

C型式は、丸い底部からゆるやかに外上方に立ち上がり、口縁部は外反気味に開き、端部を尖らせて終るもの。

D型式は、口縁部のヨコナデによって稜をもち、端部を尖らせるもの。器高が低く、小さなものが多い。ヨコナデのため底部と体部との境に稜がつくもの。

E型式は、平坦な底部から体部をわずかに立ち上がらせ端部を尖らせているもの。

それぞれの遺構ごとに記述する。

井戸2出土遺物（第47図1）

出土遺物は土師器小皿である。体部がゆるやかに外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。口径8.0cm、器高1.4cm。12世紀後葉頃に属する。

井戸3出土遺物（第47図2）

出土遺物は土師器小皿である。やや上げ底気味の底部から体部がゆるやかに立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。口径8.0cm、器高1.3cm。12世紀後葉頃に属する。

井戸4出土遺物（第48図）

出土遺物は、土師器皿・羽釜、白磁碗、瓦器擂鉢である。

土師器皿は、ゆるやかに外上方に開く体部をもち、上げ底を呈するものが主流を占める。20~28は所謂へそ皿と称されているものである。29~43は底部の突出のゆるやかなものである。内底面底縁に沿って時計回りのナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。口縁端部は肥厚し尖りぎみにおさめるものとあまり肥厚しないものとがある。口径6.2~8.0cm、器高1.6~2.1cmの小皿、口径8.1~10.9cm、器高1.5~2.8cmの中皿、口径11.0~12.6cm、器高1.3~3.0cmの大皿がある。

50、51は白磁碗である。口縁端部は玉縁状を呈する。体部内外面はヨコナデ調整を施す。52は、口縁部を「く」の字形に外反し、口縁端部を内側に折り返す大和型の土師器羽釜である。

53は瓦器擂鉢である。口径29.9cm、高さ13.4cmで、体部は底部より直線的に外上方へ開く。口縁端部は面をもつ。器壁は厚く体部中央で1cm前後である。体部外面はユビオサエ、内面と口縁部はヨコナデで、内面擂目は2cm幅で8条の櫛である。

時期は土師器皿から14世紀中葉と考えられる。

井戸6出土遺物（第47図3~8）

出土遺物は、土師器小皿、瓦器香炉・羽釜、青磁碗、瀬戸焼おろし皿がある。

3の土師器皿は体部が内弯しながら立ち上がる。体部外面は強いヨコナデのため外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。

4の瓦器香炉は、平らな底部から内弯して立ち上がる体部をもつ。口縁部は外折し、端部はつまむように尖って終わる。

5、6の青磁碗体部は内弯して立ち上がる。高台は削り出し高台で、底部は体部の器壁に

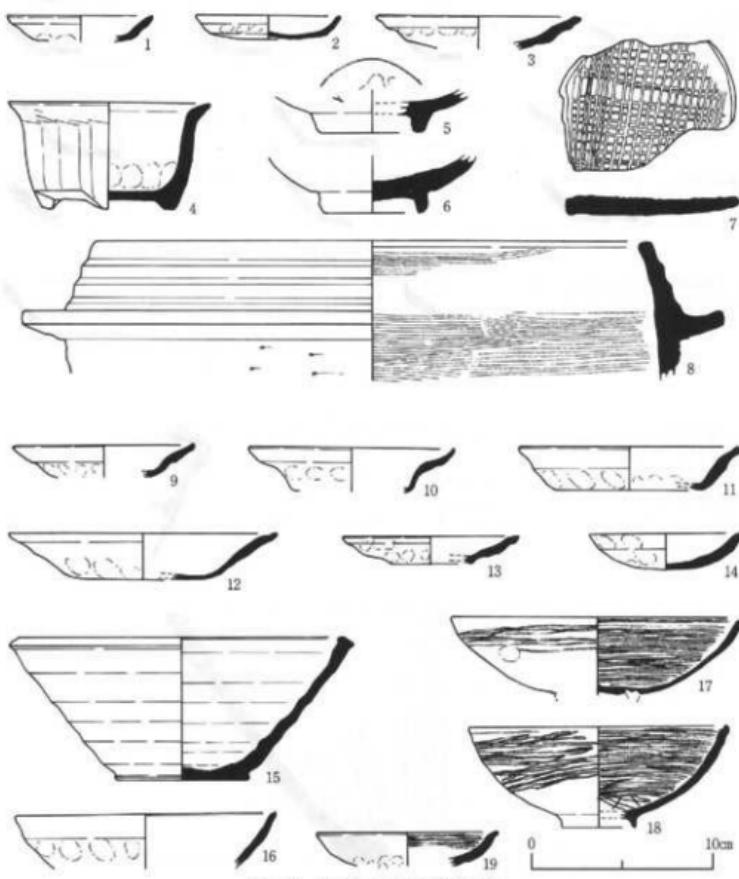
比べて厚手である。6は細かな貫入が見られる。

8は内傾する口頭部の外面に段を3段めぐらす。鉢は水平よりやや上向きにつける。端部は面をもつ。口頭部外面と鉢はヨコナデを施す。口頭部、体部内面はハケメ、体部外面はヘラケズリである。

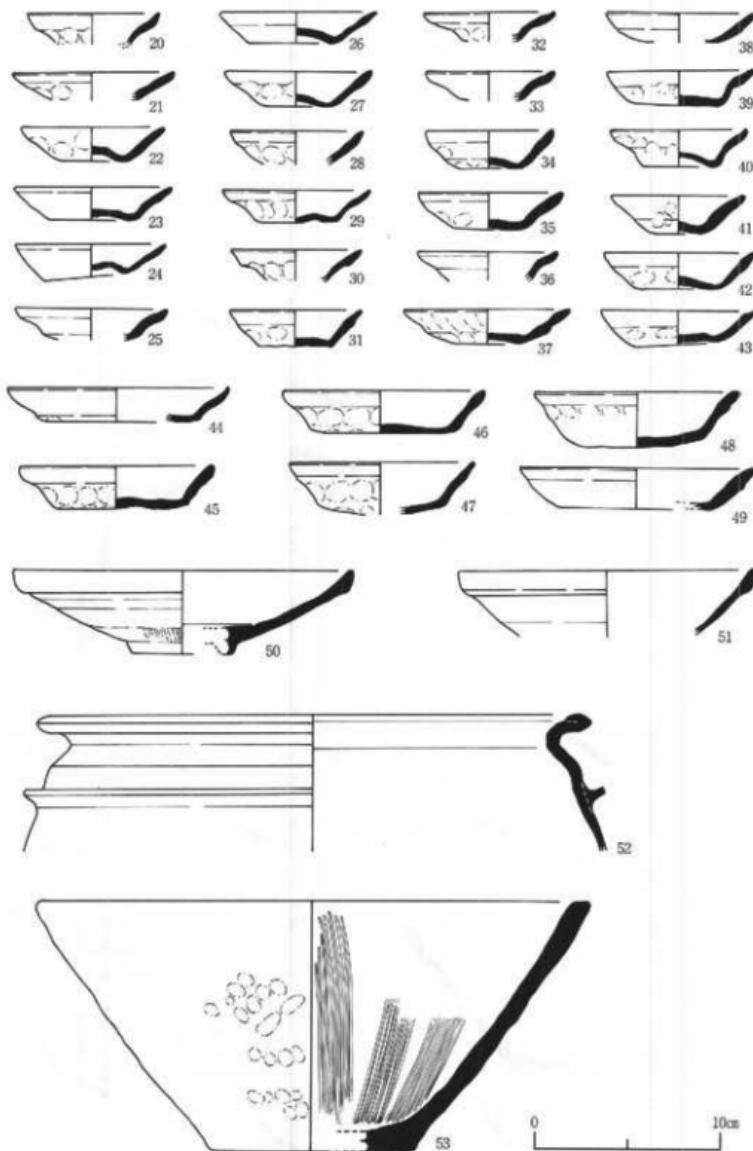
時期は青磁碗、瓦器羽釜から16世紀前半と考えられる。

井戸8出土遺物（第32図9～11）

出土遺物は、土器器皿である。9、10は体部がラッパ状に大きく開いて直線的、あるいは若干外反しながら立ち上がり、口縁端部に至る。体部外面下半は指頭圧痕が明瞭で、それに



第47図 井戸2～11出土遺物実測図



第48図 井戸4 出土遺物実測図

より凹む。口縁部はヨコナデを施す。

時期は土師器皿から14世紀後半と考えられる。

井戸9出土遺物（第47図12）

出土遺物は、土師器皿である。口径14.8cm、器高2.5cmの大皿である。体部がラッパ状に大きく開いて直線的に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は若干外反する。体部外面下半の凹みはゆるやかである。口縁部は緩やかなヨコナデを施す。

時期は土師器皿から15世紀末～16世紀前半と考えられる。

井戸10出土遺物（第47図13）

出土遺物は、土師器皿である。13の土師器皿は口径9.8cm、高さ1.5cmの中皿で、体部が内弯しながら立ち上がる。体部外面は強いヨコナデのため外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。

時期は土師器皿から14世紀末～15世紀前半と考えられる。

井戸11出土遺物（第47図14～19）

出土遺物は、土師器皿、東播系の須恵器捏鉢、瓦器椀・小皿である。

14の土師器皿は口径8.4cm、高さ2.0cmの中皿で、底部から体部へ丸みを見せて続くが、形態は非常にいびつで雑な作りである。全体に器壁が厚く、体部外面には指頭圧痕が多く認められる。体部内面は時計通りにナデ上げるが雑である。褐色系である。

東播系須恵器捏鉢15の体部は外上方に直線的に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し、上端は外傾する面をもつ。口縁部、体部はヨコナデを施す。底部外面には、糸切り痕が見られる。

16～18は瓦器椀である。大和型瓦器椀の特徴として、口縁部内端面に1条の沈線を巡らし、体部外面の分割性ミガキ調整、見込みに螺旋状暗文が施されている。口径14.4～16.2cm、器高5.2～5.5cm。16は外面のミガキが見られない。17は炭素の吸着が不十分なため浅黄色を呈する。器壁は薄く、外面の分割性ミガキ調整も粗く条線状に残された各ミガキ痕跡の間隔があいている。高台は接合部からはずれているが接合面の幅は1cmあり接合後周辺部を丁寧にヨコナデしている。見込みには螺旋状の暗文を施す。18は焼成もよく、堅敏である。見込みにジグザグ状の暗文を施したあと、底部から口縁部にかけてレコード圓線状のヘラミガキを施している。19は小皿である。見込みにジグザグ状の暗文を施し、口縁部内面にはレコード圓線状のヘラミガキを施している。底部外面には指頭圧痕が多く認められる。

時期は土師器皿、瓦器椀から12世紀前半～中葉と考えられる。

井戸12出土遺物（第49・50図54～107）

出土遺物は、土師器皿・羽釜、瓦器椀・小皿である。土師器皿は中皿と大皿とがあり、丸底氣味の底部から口縁部までなだらかに内弯しながら続くもの（54・55・60～63・73・82・83・88～90）、丸底氣味あるいは平底の底部から口縁部が屈曲して外上方に伸びるもの（56～59・64～72・74～79・84・85・92）がある。口縁部のナデは幅が0.5cm前後と狭くナデが弱いもの（54～60・90～92）、幅が1～1.2cmと広くナデが弱いもの（61～63・82・83）、幅が1～

1.2cmと広くナデが強いため外反するもの（64～67・84・85・88・89）、幅が広く強いナデのため段を形成するもの（68～72）、2本指によるナデのため外面に稜を形成するもの（73～79・81・86・87）がある。76、77の底部は上げ底気味である。80は内弯しながらゆるやかに外上方に開く脚付の皿である。口縁部は丁寧なヨコナデで端部は丸く納める。截頭円錐形をした低い脚部をもつ。脚部はヨコナデを施す。

93は口縁部を「く」の字形に外反し、口縁端部を内側に短く折り返す大和型の土師器羽釜である。胎土は長石、石英、金雲母を含みやや粗い。体部、口縁部ともヨコナデ調整で平滑に仕上げられている。鰐の先端部は丸くおさめる。

94～103は瓦器椀、104～107は瓦器小皿である。いずれも大和型である。口縁部内端面に1条の沈線を廻らし、体部外面の分割性ミガキ調整、見込みはナデを施したあとにジグザグ状（98・99・104～106）、螺旋状（100・101）、格子状暗文（102・103）が施されている。体部内面と底部内面のミガキ調整は先に底部を施したあと体部の底面側から口縁部に向けてされている。瓦器椀は口径14.8～18.0cm、器高5.7～6.1cm。瓦器皿は口径9.1～9.4cm、器高1.9cm。98、100は体部外面にジグザグ状の3分割ミガキ調整を施す。103の底部内面はハケメ調整を施している。

時期は土師器皿・羽釜、瓦器椀から12世紀前半～中葉と考えられる。

井戸14出土遺物（第51図 108～116）出土遺物は、土師器皿・小壺、瓦器椀・火舎である。

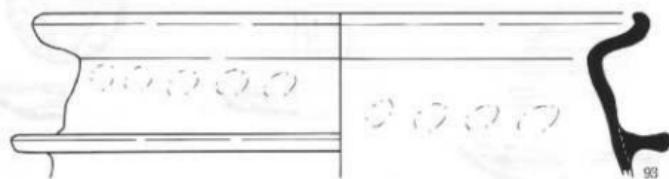
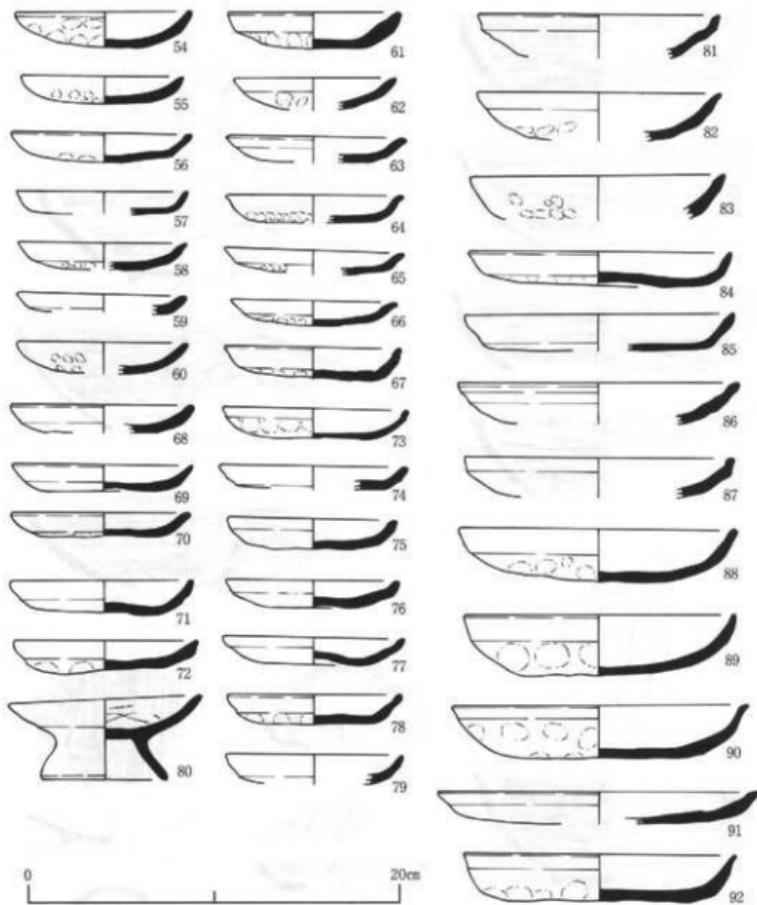
土師器皿108、109は、中央部がやや上げ底気味の底部からゆるやかに短く外上方に立ち上がる。108は内底面周縁に沿って時計回りのナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。110～113は体部がラッパ状に大きく開いて直線的、あるいは若干外反しながら立ち上がり、口縁端部に至る。体部外面下半は指頭圧痕が明瞭で、それにより凹む。110、111は口縁部外面は幅1cm、内面は内底面周縁に沿って時計回りのナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。112、113は体部全体を右廻りにナデ上げている。底部は一方向に丁寧にナデしている。114は和泉型の瓦器椀である。高台が完全に消失し、内面のミガキも粗くなり2～3回程度である。器形も皿状である。口径10.8cm。器高2.7cm。115は手づくねのミニチュアの壺である。胎土には金雲母を多く含む。

116は瓦器火舎である。平底の底部から直線的に外上方に伸びる体部をもつ。体部内外面上半は幅4mmのヘラミガキ、下半はヘラによる調整である。口縁部は丁寧にヨコナデを施し、端部は丸く納める。断面も含め全体に煤が付着していることから廃棄後に付着したものと考えられる。

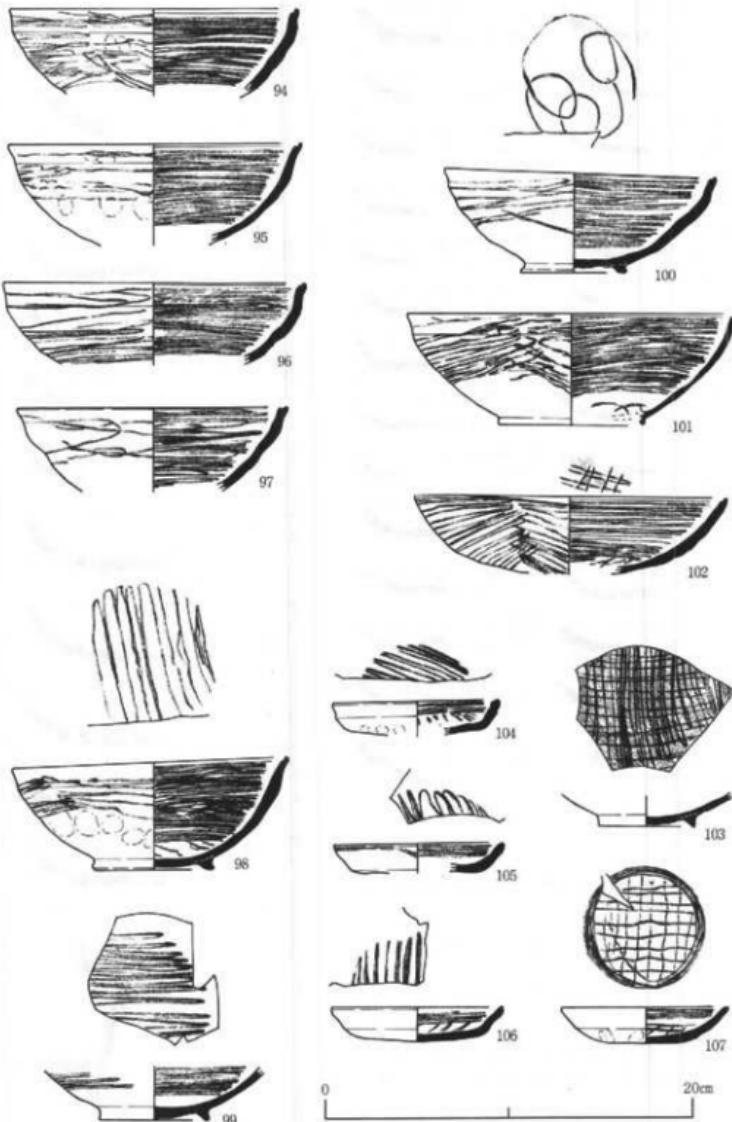
時期は土師器皿、瓦器椀から14世紀前半～中葉と考えられる。

溝43出土遺物（第52図 307）

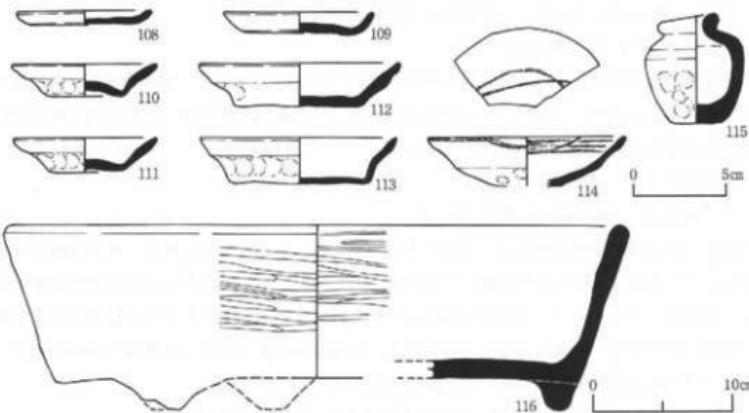
出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿である。307は体部がラッパ状に大きく開いて直線的、あるいは若干外反しながら立ち上がり、口縁端部に至る。体部外面下半は指頭圧痕が明瞭で、それにより凹む。口縁部及び底部はハケメ様のナデを施す。



第49図 井戸12出土遺物実測図



第50図 井戸12出土遺物実測図



第51図 井戸14出土遺物実測図

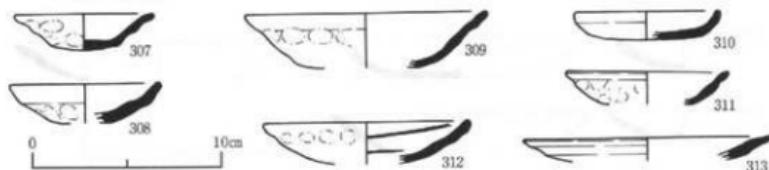
溝51出土遺物（第52図 308・309）

出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿である。308は口縁部が内脣するものである。端部はナデのため外反する。309は底部と体部の屈曲が明瞭で、体部はラッパ状に開いて立ち上がりそのまま口縁端部に至る。体部下半は指頭圧痕が明瞭で、それにより凹む。口縁部はヨコナデを施す。

溝108出土遺物（第52図 310～312）

出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿である。310は平底の底部から口縁部までなだらかに内脣しながら続くが立ち上がりが短いものである。口縁部外面は2本指によるナデのため端部外面に面をもつ。口縁端部は丸く納める。体部及び底部内面は右方向の丁寧なナデである。311は体部がラッパ状に大きく開いて直線的、あるいは若干外反しながら立ち上がり、口縁端部に至る。体部外面下半は指頭圧痕が明瞭で、それにより凹む。口縁部及び底部はハケメ様のナデを施す。

312は瓦器椀である。和泉型で高台が完全に消失し、内面のミガキも粗くなり2～3回程度



第52図 溝43・51・108・145出土遺物実測図

である。器形も皿状である。口径10.9cm。器高2.2cm。

溝145出土遺物（第52図 313）

出土遺物は土師器皿、瓦器椀・皿である。313は土師器大皿である。平底の底部から口縁部までなだらかに内彎しながら立ち上がるものである。口縁部外面は強いナデのため外反する。口縁端部は丸く納める。白色系の皿である。

溝153出土遺物（第53図 117～124）

出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿である。

117、118は丸底気味の底部から口縁部までなだらかに内彎しながら続く。外面は幅1cmのヨコナデ、内面は底部も含め右廻りの丁寧なヨコナデをしてナデ上げる。119は上げ底を呈する。底部は一方向のナデ、体部と口縁部は右廻りのヨコナデでナデ上げる。120～124は平底の底部から口縁部が屈曲して外上方に伸びる。口縁端部内面は凹む。底部は一方向のナデ、体部と口縁部は内底面周縁に沿って右廻りのヨコナデでナデ上げる。

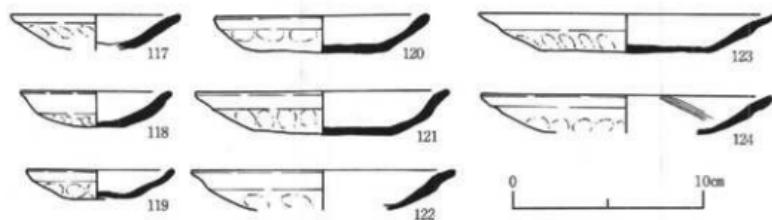
土師器皿から16世紀前半～中葉にかけて埋没したものと考えられる。

溝192出土遺物（第54図 125～147）

出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・羽釜、青磁碗である。125は丸底気味の底部から口縁部までなだらかに内彎しながら続く。126～136は上げ底気味で内底面周縁に沿って時計回りのナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。137・138は平底の底部から口縁部が屈曲して外上方に伸びる。口縁部のヨコナデが強いため外反する。139～141の底部は一方向のナデ、体部と口縁部は内底面周縁に沿って時計回りのナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。

142・143は大和型、144は和泉型の瓦器椀である。143は内底面にナデを施したあと縮約した連続輪状文を施し、後に底部から口縁部にかけてレコード圓線状の粗いヘラミガキを施している。144は高台が完全に消失し、内面のミガキも粗くなり4～5回程度である。器形も皿状である。底部および体部外面は指頭圧痕が目立つ。内面および口縁部はヨコナデである。口径13.2cm。器高3.0cm。

145・146は瓦器羽釜である。体部は半球形で、口縁部は内傾する。145は口縁部外面に2条の凹線、146は2条の沈線をめぐらす。口縁端部は面をもつ。肩部に幅の狭い鉢を水平よりや



第53図 溝153出土遺物実測図

や上向きにめぐらす。口縁部外面と鉢はヨコナデ、口縁部・体部内面はハケメである。

147は青磁碗である。体部は内彎して立ち上がる。削り出し高台で、底部は体部の器壁に比べて厚手である。体部外面には蓮弁文が退化した垂下状沈線が見られる。内外面とも貫入が見られる。

土師器皿、青磁碗から16世紀中葉頃に埋没したものと考えられる。

溝195出土遺物（第55図 148～162）

出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿である。

148・149は上げ底気味で右廻りにヨコナデを施す。底部は一方向のナデを施す。150・151は平底の底部から口縁部が屈曲して外上方に伸びる。口縁部のヨコナデが強いため外反する。152～154は幅が広く強いナデのため体部外面に段を形成する。155・156は上げ底気味で内底面周縁に沿って時計回りのナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。底部は一方向のナデを施す。157は体部外面下半に指頭圧痕が目立つ。159は上げ底気味で内底面周縁に沿ってナデ上げる。底部は一方向のナデを施す。

160は瓦器小皿である。口径8.7cm。器高1.2cm。見込みにジグザグ状の暗文を施し、口縁部はヨコナデを施しミガキは見られない。底部外面には指頭圧痕が多く認められる。161は大和型、162は和泉型の瓦器椀である。161は口縁部内端面に1条の沈線を巡らし、体部外面に粗くて細い分割性ミガキ調整、体部内面に粗いミガキ調整を施す。口径14.2cm。162は高台が完全に消失し、内面のミガキも粗くなり4～5回程度である。器形も皿状である。底部および体部外面は指頭圧痕が目立つ。内面および口縁部はヨコナデである。口縁部のヨコナデが顕著でそのため口縁部が外反する。口径12.4cm。器高3.2cm。

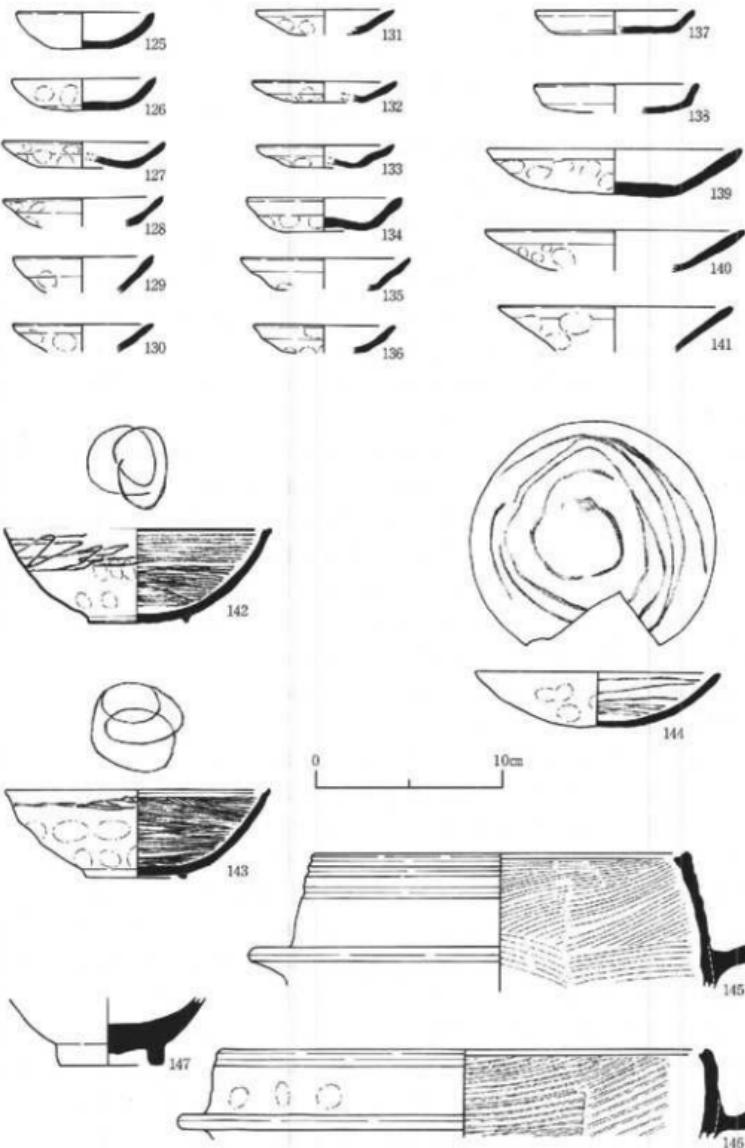
土師器皿から16世紀中葉頃に埋没したものと考えられる。

溝203出土遺物（第56図 163～176）

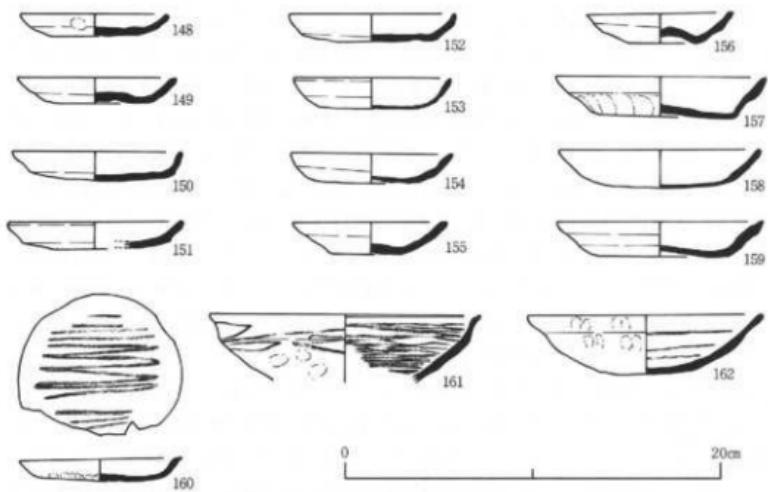
出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿、白磁碗である。163～166は平底の底部からゆるやかに内彎しながら口縁部に至る。163は体部内外面を丁寧にヨコナデ調整を施す。166は口縁部のヨコナデが強いため外面に段を形成する。167はゆるやかに外上方に開く体部をもち、上げ底を呈する。体部下半は指頭圧痕が明瞭で、それにより凹む。口縁部はヨコナデを施す。

168～172は大和型、173～175は和泉型の瓦器椀である。168は内底面にナデを施したあと、独立して見込みに縮約した連続輪状文を施し、底部から口縁部にかけてレコード圓線状の粗いヘラミガキを施している。168～170のヘラミガキの幅は狭くて繊細な感じである。体部外面には粘土の接合痕が右上がりに見られ、またそれに平行するように指腹部の圧痕が見られ、製作手法がわかる。外面のミガキは不規則で雑然としたものとなっている。171はヘラミガキの幅はやや太く、内面のミガキは簡単な螺旋状で14～15本程度である。172は見込みはナデを施したあとにジグザグ状暗文を施す。173～175は高台が完全に消失し、内面のミガキも粗くなり2～3回程度（174・175）である。器形も皿状である。口径10.7～11.2cm。器高1.8～2.8cm。

瓦器椀、土師器皿から14世紀中葉頃に埋没したものと考えられる。



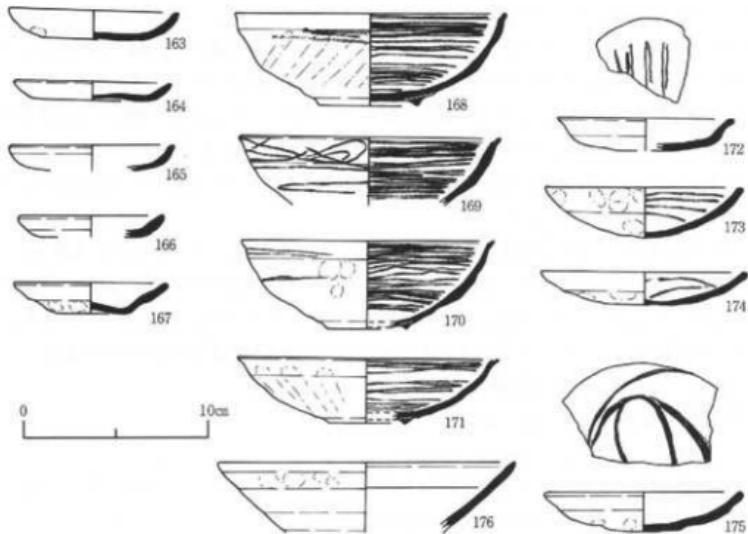
第54圖 漢192出土遺物實測圖



第55図 溝195出土遺物実測図

溝209出土遺物（第57～59図 177～220）

出土遺物は、土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿である。177～184・192・193は平底の底部から



第56図 溝203出土遺物実測図

口縁部までなだらかに内弯しながら続くが立ち上がりが短いものである。177~179・182は白色系土器で口縁部を丁寧にナデ、口縁部は尖りぎみに納める。180・181・183・192は褐色系土器でナデにより口縁端部を丸く納める。192は内底面にハケ様の一方向のナデを施す。体部外面下半には指頭圧痕が目立つ。193はナデが強いため外面に段を形成する。185・186・194~196・197は立ち上がりがやや長くなったものである。橙色系で口縁部にゆるいヨコナデを施す。194は右廻りにナデ上げている。195は口縁端部外面に面をもつ。197の口縁端部は内側に肥厚させる。187~189は口縁部のヨコナデが強いため外面に段を形成する。190・191は底部との境界付近から強くヨコナデするため境界に稜線が明瞭となったものである。198は平底から屈曲して外反しながら外上方に伸びる。口縁端部はさらに水平近く屈曲し、上方につまみ上げられ丸く納める。橙色系である。199は平底の底部から口縁部が屈曲してまっすぐ外上方に伸びる。胎土には砂粒を割合多く含む。

200・201は大和型の羽釜である。口縁部を「く」の字形に外反し、口縁端部を内側に短く折り返す大和型の土師器羽釜である。胎土は長石、石英、金雲母を含みやや粗い。体部、口縁部ともヨコナデ調整で平滑に仕上げられている。鍔と胴部との接合面は幅が広い。接合面に対応する。内面は凹凸が見られる。200の鍔の先端部はやや肥厚し丸くおさめる。201の外面に煤が付着しているが廃棄後に付着したものと考えられる。

202~207・212~214は大和型、208~211・215は和泉型の瓦器である。見込みの暗文は202~204が連結輪状文、205~207が縮約した連続輪状文、208が格子文、209が平行線文である。207には胎土の悪化に伴う耐火性の消失による火ぶくれが見られる。208の内面のミガキは丁寧であるが、外面は分割を意識してはいるが乱雑である。器壁は厚い。210は体部外面に口縁部と平行の水平方向に指腹部の圧痕が2段見られる。212~214は見込みにナデを施したあと、ジグザグ状暗文を施す。212は暗文の線幅が細く間隔が粗い。213は暗文の線幅が太く間隔が割合密である。214は密な暗文を施す。底部外面にはすべて掌文が顕著である。215は口縁部に幅1cmの粘土紐の接合痕が残る。見込みはジグザグ状であるが大和型のようなきれいなものではなく雑然としたものである。

216~220は東播系須恵器捏鉢である。体部は外上方に直線的に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し上下に拡張されるもの(216、219、220)、下方にやや拡張されるもの(217)、上方にやや拡張されるもの(218)がある。上端は外傾する面をもつ。口縁部、体部はヨコナデを施す。216の底部外面には、ヘラによる調整が見られる。220の体部内面は左上がりのナデを施す。

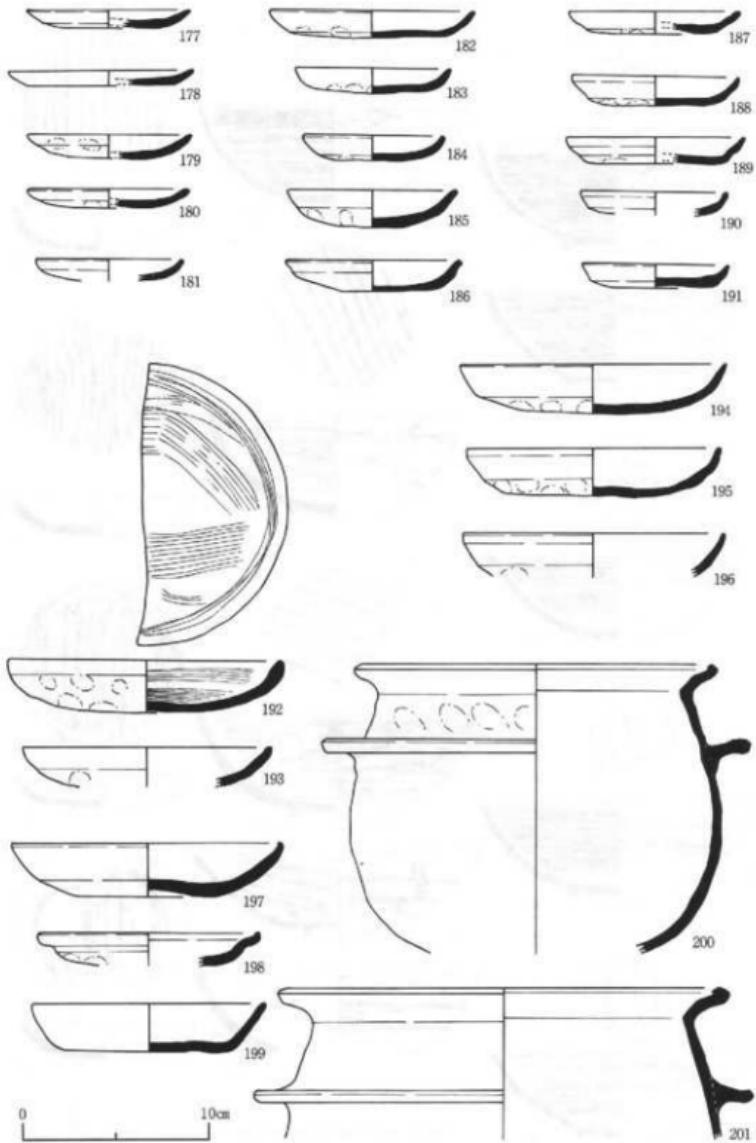
瓦器椀、土師器皿から13世紀前半に埋没したものと考えられる。

溝215出土遺物（第60図 221~225）

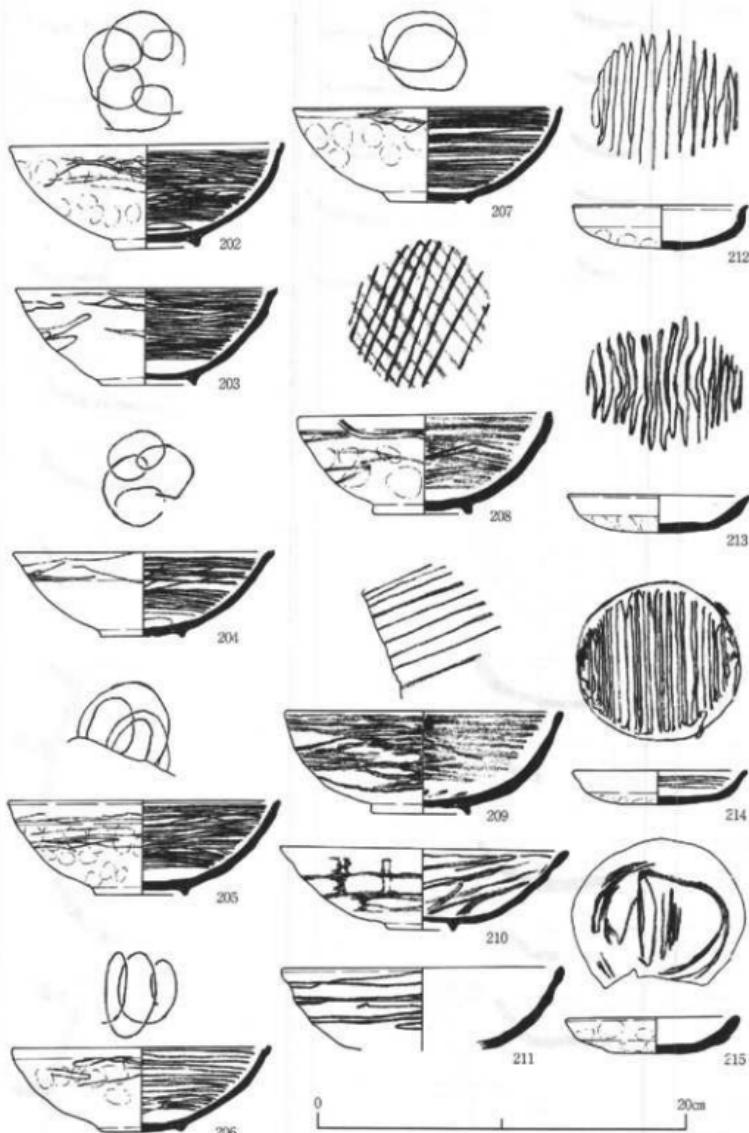
出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿である。

221~223はやや上げ底気味の底部から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。口縁部はヨコナデを施す。223はヨコナデが強いため外反する。

224~225は大和型の瓦器椀である。口縁部内端面に1条の沈線を巡らし、体部外面は分割



第57圖 溝209出土遺物実測図

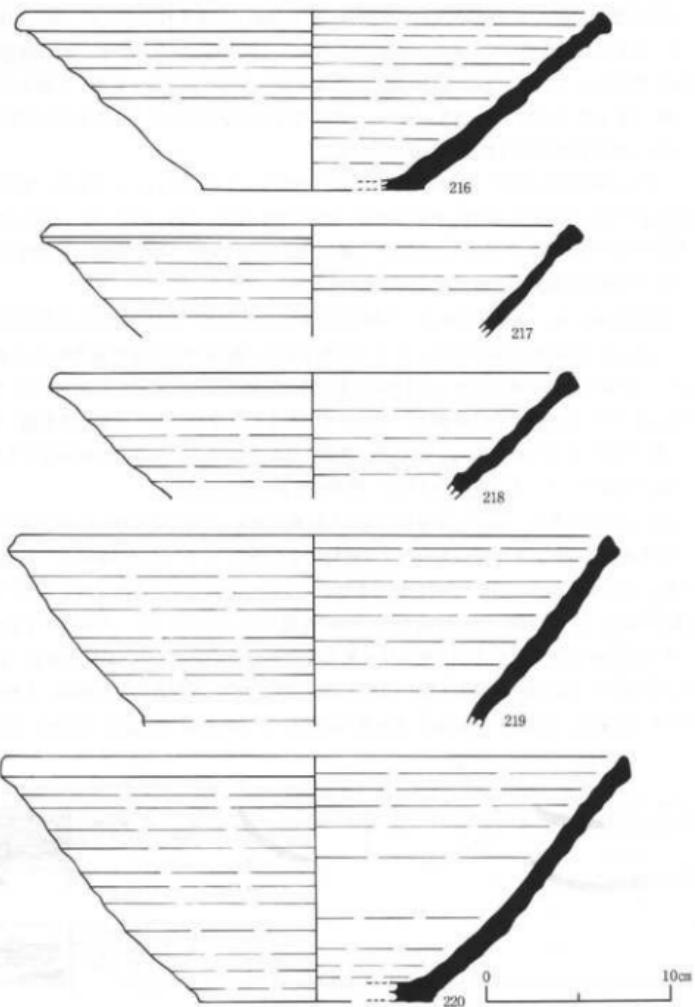


第58図 溝209出土遺物実測図

性のミガキ調整を施す。瓦器椀は口径13.8~14.2cm。

土師器皿、瓦器椀から14世紀中葉頃に埋没したものと考えられる。

河川出土遺物（第61~64図 226~306）



第59図 溝209出土遺物実測図

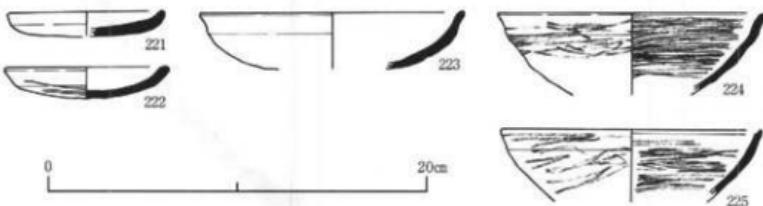
出土遺物は、土師器皿・羽釜、瓦器椀・香炉・羽釜・擂鉢、白磁碗、青磁碗である。

226~269は土師器皿である。226~232・254・255は平底の底部から口縁部までなだらかに内彎しながら続くが立ち上がりが短いものである。口縁部外面にゆるいナデを施すもの(226・227・269)、強いナデを施すもの(228~232・258~260)、口縁部が外反するもの(233~239・254~257・265)、口縁部のヨコナデが強いため外面に段を形成するもの(240・241・262)、ナデがほとんど目立たないもの(242~245・267)、2本指によりナデるため口縁端部外面に面ができるもの(246~250・261・268)、立ち上がりがやや長くなり屈曲して外上方に直線的に伸びるもの(251・252・263・266)、上げ底で外反しながら立ち上がるもの(253・264)がある。232の内面には有機質が付着している。

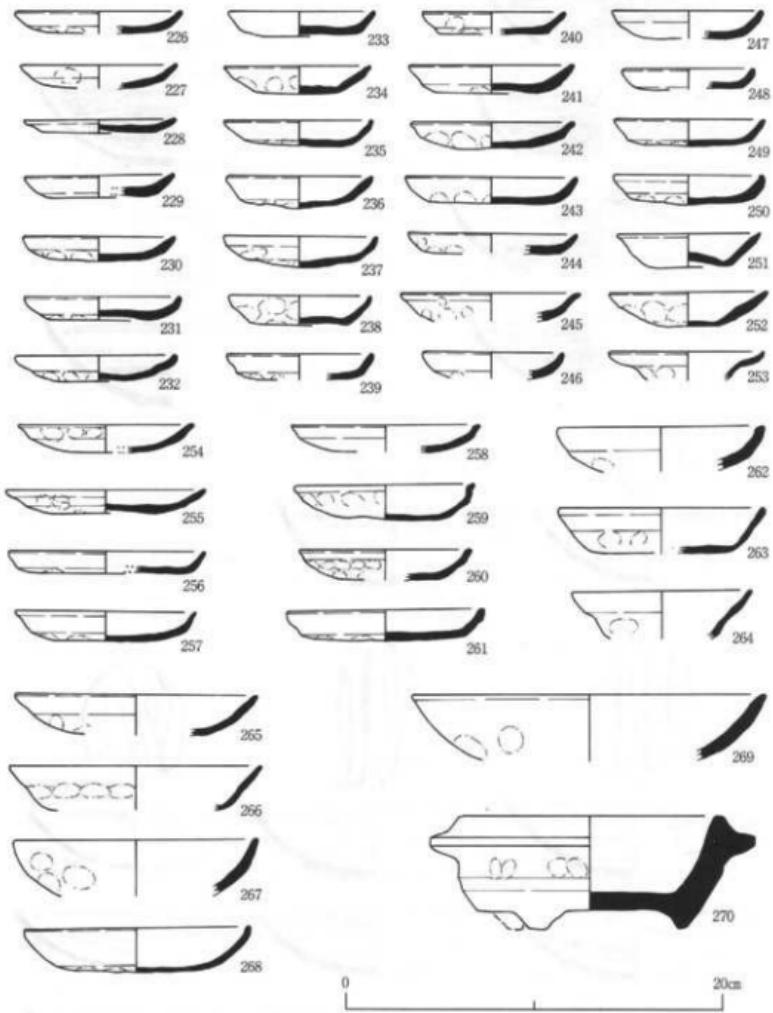
252の口縁端部3箇所に煤の付着が見られ灯明皿として用いられていたものと考えられる。褐色系土器、橙色系土器が大半を占める。230~232・234~246・249・250・252・253の体部外面下半には指頭圧痕が目立つ。187~189は190・191は底部との境界付近から強くヨコナデするため境界に稜線が明瞭となったものである。

270は石鍋を模したものである。平底の底部からやや内彎しながら外上方に伸びる体部をもつ。底部には逆台形の脚が3方につく。口径14.1cm、高さ6.0cmの完形品である。口縁部直下に水平に伸びる鈎をめぐらす。口縁端部及び鈎先端部はヨコナデにより面をもつ。色調は黄橙色及び灰白色を呈すが、瓦器として製作されたものと思われる。胎土には長石、石英、金雲母、角閃石が多く含まれる。口縁部、鈎部、体部内面はヨコナデ、体部外面下半はヘラ様のもので調整しているが顕著ではない。煤等の付着は見られない。

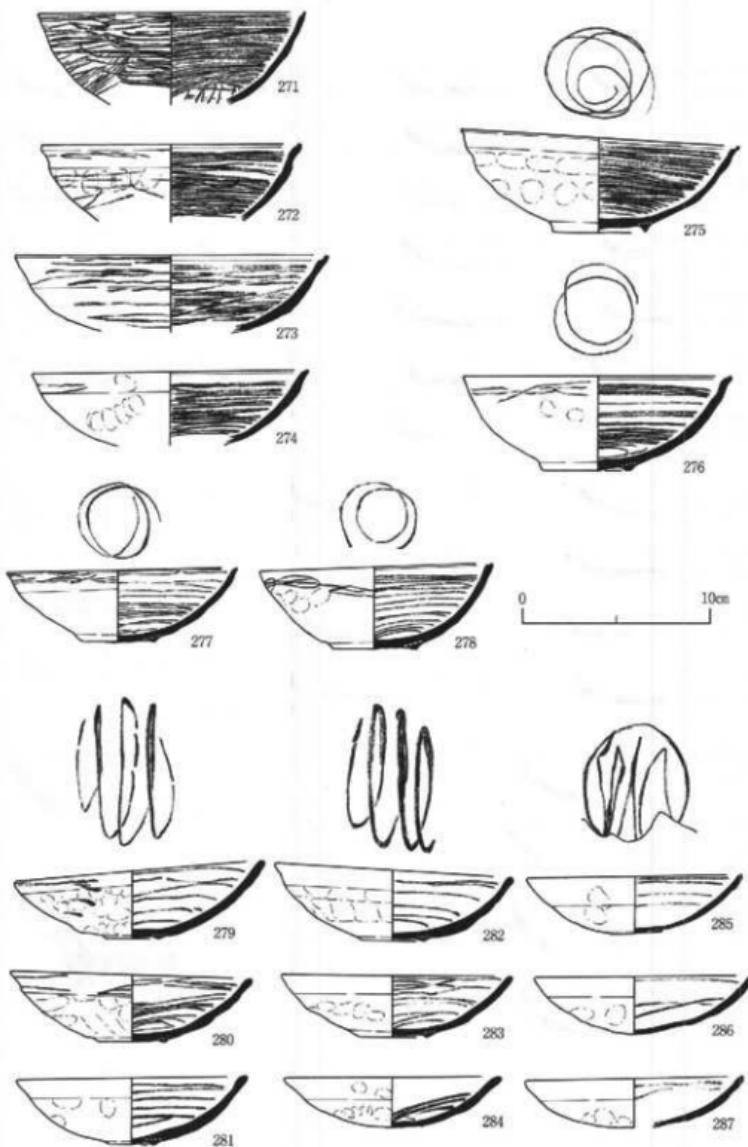
271~278は大和型、279~287は和泉型の瓦器椀である。271は見込みにジグザグを交差させた格子状暗文を、275~278は縮約した連続輪状文を施す。275の体部内面のミガキは口縁部から始まり底部に至る。271の体部外面はきれいで丁寧な分割ミガキ調整である。272~274の口縁端部はヨコナデが強いため外反する。275の体部外面には水平方向に指腹部の圧痕が4段見られる。276~278には胎土の悪化に伴う耐火性の消失による火ぶくれが見られる。279~282・285の見込みは螺旋状、280・281・283・284・286・287は渦巻状暗文である。大和型の口径12.4~16.8cm、器高3.9~5.6cm。和泉型の口径11.7~13.4cm、器高2.7~4.3cm。279~286の



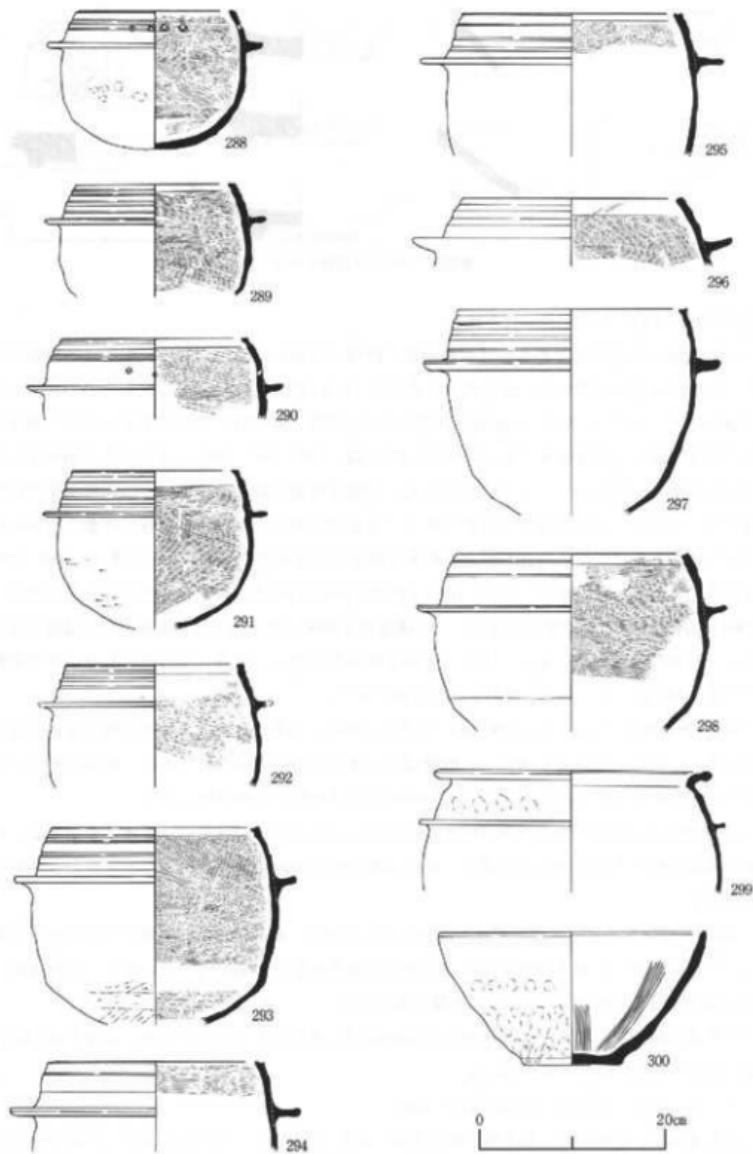
第60図 溝215出土遺物実測図



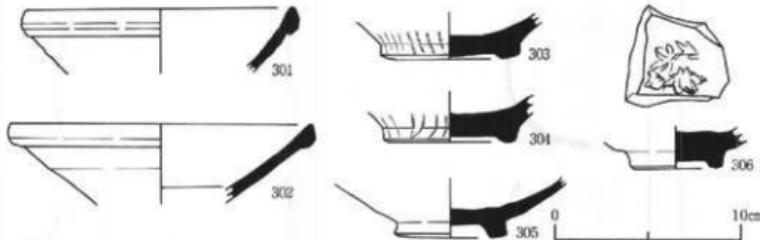
第61図 河川出土遺物実測図



第62圖 河川出土遺物實測圖



第63図 河川出土遺物実測図



第64図 河川出土遺物実測図

体部外面には指腹部の圧痕が見られる。

288~298は瓦器羽釜である。寸胴な胴部に内傾する長い口縁部をもつ。体部は半球形である。口縁部外面は凹線に近い段をめぐらすもの(288・291・295~298)、凹線をめぐらすもの(289・290・293)がある。口縁端部は面をもつ。肩部に幅の狭い鉢を水平よりやや上向きにめぐらす。鉢の先端は丸味をもって終るもの(288~290・295~297)、尖りぎみに納めるもの(291・298)、面をもつもの(293)がある。口頭部外面と鉢はヨコナデ、口頭部・体部内面はハケメである。体部外面下半は指オサエによる凹凸が少し見られるが特に調整は加えられていない。器面は炭素の吸着が悪いため灰色あるいは褐灰色を呈するものが多い。288、290は口縁部に2個1対の紐穴をもつ。紐穴は直径0.5cmで外面から棒状のもので穿孔している。299は口縁部を「く」の字形に外反し、口縁端部を内側に短く折り返す大和型の土師器羽釜である。色調は浅黄橙色である。胎土は砂粒を含みやや粗い。体部、口縁部ともヨコナデ調整で平滑に仕上げられている。鉢の先端部は面をもつ。

300は瓦器擂鉢である。口径28.6cm、高さ14.2cmで、体部は底部よりやや内湾しながら外上方へ開く。口縁端部は丸く納める。器壁は厚く体部中央で1cm前後である。体部外面はユビオサエ、内面と口縁部はヨコナデで、内面擂目は2.1cm幅で7条の櫛である。

301~305は白磁碗である。体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部は玉縁状を呈する。施釉は内面全体と体部外面上半に施す。高台は削りだし高台で低く断面逆台形を呈し、外側に張り出す。

306は青磁碗である。体部は内湾しながら立ち上がる。底部は体部の器壁に比べて厚手である。内底面周縁に沈線状の凹みを設け、内側に蓮花を描く。施釉は全面に施す。高台は削りだし高台で低く断面逆台形を呈し、外側に張り出す。

時期は土師器皿・羽釜、瓦器碗から13世紀代が大部分を占めるが、完全に埋没するのは瓦器羽釜から15世紀前半と考えられる。

ピット、土坑出土遺物（第65図 314~326）

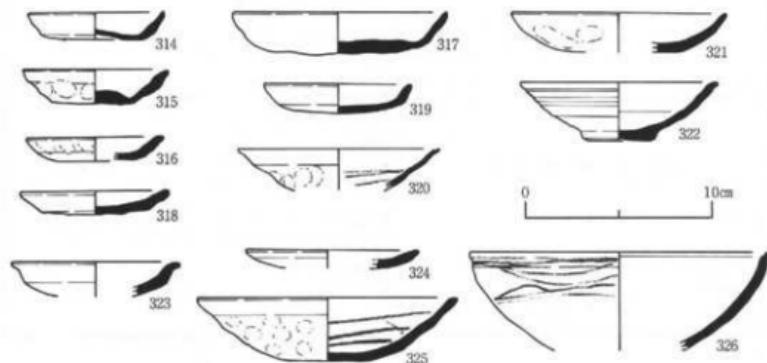
出土遺物は、土師器皿、瓦器碗・皿である。314・315はピット397、316はピット519、317はピット671、318はピット689、319はピット715、320はピット737、321・322は落ち込み3、

323は土坑7、324は土坑67、325は土坑79、326は土坑80から出土した。

314・315・317～319・321・323・324は土師器皿である。314は中央部がやや上げ底気味の底部からゆるやかに短く外上方に立ち上がる。口縁部は強いナデのため外反する。315はやや上げ底ぎみの底部から屈曲して体部がラッパ状に大きく開いて直線的、あるいは若干外反しながら立ち上がり、口縁端部に至る。底部は一方向のナデ、体部と口縁部は内底面周縁に沿って右廻りのヨコナデでナデ上げる。体部外面下半は指頭圧痕が明瞭で、それにより凹む。口縁端部3カ所に煤の付着が見られる。317～319は丸底気味あるいは平底の底部から屈曲して短く外上方に伸びる体部をもつ。口縁部は強いナデのため外反する。321・323・324は口縁部までなだらかに内弯しながら続くものである。口縁部及び体部内面のナデは丁寧である。323は口縁部のナデが強いため外反する。

316・320・325・326は瓦器である。316は瓦器小皿である。口径7.4cm。器高1.3cm。見込みの暗文は不明である。口縁部はヨコナデを施しミガキは見られない。底部外面には指頭圧痕が多く認められる。和泉型である。320・326は口縁部内端面に1条の沈線を巡らし、体部内面にミガキ調整を施す大和型の瓦器碗である。320の内面ミガキ調整は粗いが326は密で丁寧である。320の体部外面にはミガキ調整は見られないが、326は分割性ミガキ調整を施す。325は和泉型の瓦器碗である。高台が完全に消失し、内面のミガキも粗くなり3～4回程度である。器形も皿状である。底部および体部外面は指頭圧痕が目立つ。内面および口縁部はヨコナデである。口縁部のヨコナデが顕著でそのために口縁部が外反する。口径14.0cm。器高3.3cm。

322は白磁碗である。体部は内弯しながら立ち上がり口縁端部は尖り気味に納める。施釉は内面全体と体部外面上半に施す。高台は削りだし高台で低く断面逆台形を呈する。体部内面中位に1条の沈線を巡らす。



第65図 ピット・土坑出土遺物

表5 中世遺物観察表

井戸2~11

器 形	番号	法 量	形 素 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土器類	小皿C 1	口 8.0 高 (1.4)	●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる	●口縁部1回ヨコナギ、底部エビ調整	灰白色10YR8/2	●SE02 ●褐色系
	小皿D 2	口 8.0 高 1.3	●横ナゲのために底部と口縁部との境に棱がつく ●右まわりヨコナギ	●内底部一定方向のナゲ調整	にぶい黄褐色10YR7/3 7/3	●SE03 ●灯明皿・褐色系
	中皿C 9	口 10.0 高 (1.8)	●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる		後黄褐色10YR8/3、 にぶい褐色7.5YR7/4	●SE06 ●褐色系
	13	口 9.8 高 1.5	*		にぶい褐色7.5YR7/4、後黄褐色10YR8/3	●SE10 ●褐色系
	14	口 8.4 高 2.0	*			●SE11
	大皿C 3	口 11.4 高 (1.8)	●丸味をもつ底部からならかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる ●右まわり		褐色7.5YR5/6、浅 黄褐色10YR8/3	●SE06 ●褐色系
	10	口 11.2 高 (2.4)	*		にぶい黄褐色10YR7/3	●SE06 ●褐色系
	11	口 12.2 高 2.4	*		にぶい黄褐色10YR7/3、 浅黄褐色10YR8/3	●SE06 ●褐色系
	12	口 14.8 高 2.5	*			●SE09
	五 番	香炉 4	口 11.1 高 5.9	●平底から内凹しながら立ちあがる底部、口縁部は外折し端部はつまむように尖って終わる ●外底底部には逆台形の脚部が3箇所つく	●外底面方向のヘラケズリのちハラ ミガキ調整、内面と外底底部はナ ゲ調整	灰白色7.5YR8/2、 明褐色7.5YR7/1
陶 器	羽釜 8	口 30.6 高 (7.6)	●内底弧度の口縁部、口縁部は強いや コナギによって段をもつ	●内面ハケメ(5/cm)調整、外面脚 下より横方向のヘラケズリ調整	浅黄褐色10YR8/3、 黒色10YR2/1	●SE06 ●脚下床付看
	16	口 14.4 高 (2.8)			灰色7.5Y6/1	●SE11
	17	口 16.2 高 (4.3)	●高台欠失	●内面審みハラミガキ。口縁端部に 1条の沈線	浅黄色2.5Y8/3	●SE11
	18	口 14.4 高 5.5 底 2.0		●内面見込みに格子状、外周部に 分割性のあるハラミガキ調整	灰色N5/1	●SE11
	19	口 10.0 高 1.8	●丸味を帯びた底部から内凹弧度に外 方へ広がる口縁部、口縁端部は外折 し異なる	●内面口縁部横方向のヘラミガキ、 見込みジグザグ状のヘラミガキ調整	暗灰色N3/1	●SE11
磁 器	青磁碗 5	底 5.6 高 (1.15)	●外周高台部に脚状の段をもつ	●外周高台内無施 ●内面見込み、外周部筋にヘラによ る文様がみられるが破片のため辨 別不明	明緑灰色5G7/1、暗 面灰白色N8/1	●SE06
	6	底 5.4 高 (3.0)	●高台前面には三角形	●外周高台内無施 ●内面裏井掛筋には細かな入がみ られる	オリーブ灰色5GY6/ 1、背面灰白色7.5Y 7/1	●SE06
青 磁	刻皿 7		●平底	●外周底部に静止糸切り痕。内面に ヘラによる格子状のスリメリガ施さ れる ●外周底部無施	浅黄色5Y7/3、背面 灰白色7.5Y8/1	●SE06
白 磁	家機承 持鉢 15	口 17.8 高 7.8	●平底 ●口縁部上端と下端をそれぞれ内外に 引き出す	●外周底部糸切り	灰色7.5Y6/1、灰白 色10Y7/1	●SE11

井戸ー4

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
土器部	小皿C 20	口 6.2 高 (1.7)	●口径6.2cm~7.9cm、器高1.6cm~2.1cm ●丸味をもつ底部分からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、縁部をやや尖らせて終わる	●口縁部1回ヨコナデ、底部ユビ調整 ●(22・35・38)右端ヨコナデ	にぶい褐色7.5YR7/4 浅褐色7.5YR8/3	●褐色系
	22	口 7.8 高 (1.9)			灰白色5Y8/1	●褐色系
	27	口 8.0 高 1.9			灰白色10YR8/2、浅 黄色10YR8/3	●褐色系
	28	口 7.2 高 (1.9)			灰白色5Y8/2	●訂明無 ●褐色系
	29	口 7.9 高 1.8			灰黄色2.5Y7.5/2	●褐色系
	30	口 7.0 高 (1.7)			灰褐色10YR6/2、 淡赤褐色2.5YR7/3	●褐色系
	31	口 7.1 高 2.0			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
	32	口 7.1 高 (1.6)			にぶい黄褐色10YR 7/2、7/3	●褐色系
	33	口 6.9 高 (1.6)			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
	34	口 6.9 高 2.1			にぶい黄褐色10YR 7/2、7/3	●褐色系
	35	口 7.7 高 2.1			にぶい黄褐色10YR 7/2、灰白色10YR8/2	●褐色系
	36	口 7.5 高 (1.6)			浅褐色7.5YR8/3	●褐色系
	38	口 8.0 高 (1.6)			灰黄色2.5Y7/2	●褐色系
	39	口 8.0 高 1.9			灰黄色2.5Y7/2	●褐色系
	40	口 7.3 高 2.1			灰黄色2.5Y8/4	●褐色系
	41	口 7.2 高 2.1			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
中皿C	21	口 8.7 高 (1.5)	●口径8.1cm~10.9cm、器高1.5cm~ 2.8cm ●平底からやや丸味をもつ底部	●(46・47)見込みの仕上げナデ調整 ●(42・43・45)定形、右端ヨコナデ	灰白色2.5Y8/2 にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	23	口 8.6 高 1.8			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
	24	口 8.2 高 2.0			にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	25	口 8.2 高 (1.7)			にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	26	口 8.5 高 1.7			にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	37	口 8.9 高 1.9			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
	42	口 8.1 高 2.0			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
	43	口 8.3 高 2.0			にぶい黄褐色10YR 7/3、にぶい黄色7.5 YR7/3	●褐色系
	45	口 10.5 高 2.3			灰黄色2.5Y7/2、淡 黄色2.5Y8/3	●褐色系
	46	口 10.9 高 2.3			灰黄色2.5Y7/2	●褐色系
	47	口 10.0 高 (2.8)			灰白色2.5YR8/2	●褐色系
	44	口 11.9 高 1.5	●口径11.0cm~12.6cm	●(48・49)右端ヨコナデ	灰白色5Y7/2	●褐色系

番号	番号	法量	形态の特徴	枝法の特徴	色調	備考
土留壁 大型C	48	口 11.0 高 3.0		●(48) 完形	にぼい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	49	口 12.6 高 2.3			灰黄色2.5Y7/2	●褐色系
内面 鏡	50	口 18.4 高 2.5 底 5.4	●外側高台は無機 ●口錐部に玉縁をもつ	●(51)は内面の見込みに沈眠状の段 をもつ ●(50)外側高台盤にハケメ調整	灰白色2.5GY8/1	
	51	口 16.0 高 (2.5)			灰白色2.5GY8/1	
土留壁 羽根	52	口 30.0 高 (7.4)	●内傾する体部から外折する口錐部。 口錐底部は内側に折り返す ●体部の導は過化気味	●外側面下端よりハケメ調整	灰白色5Y8/1、オリーブ黒色5Y3/1	●外側羽付着
外壁 錐形	53	口 29.9 高 13.4 底 11.0	●体部は浅鉢形に大きく開き、口錐部 は上方に面をもつ	●外側はユビナサニ調整、内面は錐 日 (8 / 2cm)	灰色N4/	

井戸12

器 形	番 号	法 量	形 番 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 筋 器	54	□ 8.6 高 1.9	●丸柱をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、底部は丸柱をもつ	●口縁部1回ヨコナギ、底辺ヨコ調整 ●右側のヨコナギ調整	灰白色10YR8/2	●褐色系
	56	□ 8.7 高 1.5	●口縁部はやや尖らせて終わる	●見込み一定方向のナデ調整	浅黃橙色7.5YR8/4	●褐色系
	58	□ 9.2 高 1.4	●口縁部は外反し、やや尖らせて終わる		浅黃橙色7.5YR8/3	●褐色系
	60	□ 9.3 高 (1.7)		●右側のヨコナギ調整	灰白色7.5YR8/2	●白色系
	61	□ 8.4 高 1.9		●完形	灰白色10YR8/2、浅 黃橙色10YR8/3	●褐色系
	62	□ 8.8 高 (1.7)			浅黃橙色7.5YR8/4	●褐色系
	63	□ 9.6 高 (1.4)			橙色5YR7/6	●褐色系
	64	□ 9.8 高 (1.5)			淡黃色2.5Y8/3	●褐色系
	66	□ 9.0 高 1.4				●褐色系
	68	□ 10.0 高 (1.5)			灰白色2.5Y8/2、明 赤褐色2.5YR5/6	●褐色系
中 盆 C	69	□ 9.7 高 1.5		●完形	にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	70	□ 9.7 高 1.3			浅黃橙色7.5YR8/4	●褐色系
	71	□ 9.9 高 1.9		●完形	浅黃橙色7.5YR8/3	●褐色系
	73	□ 10.0 高 1.6			灰白色10YR8/2	●褐色系
	75	□ 10.2 高 (1.2)	●工具によるナデ調整		浅黃橙色10YR8/4	●褐色系
	77	□ 9.8 高 1.5			にぶい黄褐色10YR7 /2、明褐色10YR5/2	●褐色系
	79	□ 9.5 高 (1.6)	●丸柱をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、底部をやや尖らせて終わる	●完形	にぶい黄褐色7.5YR7 /4	●褐色系
	86	□ 9.7 高 1.6	●横ナデのために底部と口縁部との接 に接がつく		灰白色10YR8/2	●褐色系
	87	□ 9.3 高 (1.2)			浅黃橙色10YR8/3	●褐色系

部 形	番号	法 量	形 異 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 縁部	59	□ 9.2 高 (0.9)	●横ナデのために底部と口縁部との境に稜がつく		灰白色2.5Y8/2	●褐色系
	65	□ 9.0 高 (1.4)	浅黄褐色10YR8/4		●褐色系	
	67	□ 9.5 高 1.8	浅黄褐色2.5YR8/3		●褐色系	
	72	□ 9.9 高 1.8	灰白色2.5Y8/2 ~ 7 /1		●褐色系	
	74	□ 10.2 高 (1.2)	浅黄褐色2.5YR8/4		●褐色系	
	76	□ 9.4 高 1.4	灰白色2.5YR8/2 ~ 8 /1		●橙色系	
	78	□ 9.4 高 1.6	浅黄褐色10YR8/3		●褐色系	
	81	□ 13.0 高 (2.3)	にぶい黄褐色10YR 7/3		●橙色系	
大皿C	82	□ 13.2 高 (2.6)	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる		浅黄色2.5Y8/3	●橙色系
	83	□ 13.8 高 (2.3)			灰白色10YR8/2	●白色系
	86	□ 15.2 高 (2.2)			灰白色10YR8/2	●橙色系
	87	□ 14.6 高 (2.1)			浅黄褐色2.5YR8/3	●橙色系
	88	□ 15.0 高 2.0			淡橙色5YR8/3, 明晦 灰色7.5YR7/2	●褐色系 ●灯明皿
	89	□ 14.8 高 3.3			浅黄褐色10YR8/3	●褐色系 ●灯明皿
	90	□ 15.9 高 2.9			浅黄褐色2.5YR8/3	●橙色系
	94	□ 14.3 高 1.9	●横ナデのために底部と口縁部との境に稜がつく	●完形	淡黄褐色2.5YR8/3, 暗 色5YR6/6	●褐色系
	95	□ 14.3 高 (2.0)	●右邊ヨコナタ調整		にぶい黄褐色10YR7 /2, 暗灰色10YR5/2	●褐色系
大皿D	91	□ 17.4 高 (1.7)	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる		浅黄褐色10YR8/3	●橙色系
	92	□ 14.7 高 2.5			浅黄褐色2.5YR8/3	●橙色系
	98	□ 10.4 高 4.5 幅 6.9	●口径が中皿Cタイプの直に、台が付いたもの ●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる ●「フ」の字形に外反する口縁部、端部はやや尖り気味に終わる	●底内面にヘラミガキがみられるが、詳細は不明	浅黄褐色2.5YR8/3	●褐色系
	99	□ 33.4 高 (8.8)	●底部が「U」の字形に大きく外反し、口縁部は内側に大きく折り返す ●脚は断面がややくびれたU字形を呈する	●脚内面には接番のための椭円形の ユビ重張が残る	にぶい黄褐色10YR 7/3	●内面脚付筋
瓦 蓋	94	□ 15.8 高 (4.6)	●丸味をもつ底部から、口縁部は組合 し上方へのげる ●底部欠失	●外表面は分割性のあるミガキ調整、 内面は密な連続繊維ミガキ調整	灰褐色N5/	
	95	□ 16.0 高 (5.5)	●外表面は高いミガキ調整、内面は密な 連続繊維ミガキ調整	灰褐色N5/		
	96	□ 16.6 高 (4.4)	●外表面はやや低いミガキ調整、内面 はハケメ (11/cm) 調整のち密な 連続繊維ミガキ調整	暗灰色N3/		
	97	□ 14.8 高 (4.6)	●外表面は高いミガキ調整、内面は密 な連続繊維ミガキ調整	灰褐色N4/		

部 形	番 号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
瓦 輪	98	口 15.1 高 6.1 底 6.4	●底部には「ハ」の字形にひろがる高台をもつ	●外側は長いミガキ調整、内面は密な連続面研磨ミガキ調整 ●内面見込みにはジグザグ状ミガキ調整	灰褐色N5/	
	99	底 6.0 高 (2.9)	●口縁部欠失 ●底部には「ハ」の字形にひろがる高台をもつ	●内面見込みにはジグザグ状ミガキ調整	暗褐色N5B4/1	
	100	口 14.8 高 5.7 底 5.8	●丸棒をもつ体部から、口縁部は組合し上方へのびる ●底部には「ハ」の字形にひろがる高台をもつ	●外側はやや粗いミガキ調整、内面は密な連続面研磨ミガキ調整 ●内面見込みには織合状ミガキ調整	灰褐色N4/	
	101	口 18.0 高 6.0 底 7.9		●外側は分割性のあるミガキ調整、内面は密な連続面研磨ミガキ調整 ●内面見込みには格子状ミガキ調整	暗褐色N3/	
	102	口 17.0 高 (4.2)	●高台欠失	●外側は分割性のあるミガキ調整、内面はハナメ (15.1/cm) 調整のち密な連続面研磨ミガキ調整 ●内面見込みには格子状ミガキ調整	灰褐色N4/	
	103	底 5.1 高 (1.9)	●口体部欠失	●内面底部ハナメ (15.1/cm) 調整のち、ジグザグ状ミガキ調整	灰褐色N4/	
小皿	104	口 9.2 高 (1.8)	●平齿と思われる底部から、逆曲して外上方にのびる口縁部。口縁部はややつまみ上げる	●外側は口縁部ヨコナギ、体底部はユビオサニ調整、内面見込みにはジグザグ状のミガキ調整	灰褐色N4/	
	105	口 9.3 高 (1.6)	●口縁部は丸くおさめる	●外側口縁部ヨコナギ、体底部はユビオサニ調整、内面見込みにはジグザグ状のミガキ調整	灰褐色N6/	
	106	口 9.4 高 1.9	●口縁部はややつまみ上げる		灰褐色N7/～N3/	
	107	口 9.1 高 1.9	●丸棒をもつ底部からそのまま口縁部につづく	●外側は口縁部ヨコナギ、体底部はユビオサニ調整、内面見込みには格子状ミガキ調整	灰褐色N4/	

井戸14

部 形	番 号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 器 盤	小皿C 110	口 7.9 高 1.8	●丸棒を持つ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、周辺部をやや尖らせて終わる	●口縁部1回ヨコナギ、底部ユビ調整 にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系	
	111	口 7.8 高 2.9			にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
小皿D	108	口 7.4 高 0.8	●平底から口縁部のヨコナギによって機をもち、立ちあがる	●右側面のヨコナギ	にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
中皿C	112	口 10.9 高 2.3	●丸棒を持つ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、周辺部をやや尖らせて終わる		にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系 ●灯明皿
	113	口 10.7 高 2.5		●右側面のヨコナギ	浅黄色2.5Y7/3	●褐色系
中皿D	109	口 8.2 高 1.2	●平底から口縁部のヨコナギによって機をもち、立ちあがる		浅黄色2.5Y8/2.5	●褐色系
皿	115	口 3.3 高 6.0 底 2.7	●Lニチュア	●ほぼ完形	灰褐色7.5Y4/1	
瓦 輪	114	口 10.8 高 (2.7)	●高台をもたない丸底	●内外面共にヘラミガキ調整	灰褐色N6/	
火鉢	116	口 44.0 高 13.3	●体部が直線的に外上方にのび、口縁部が丸棒をもつ ●3方向からなる追合形の脚部をもつ	●内外面共に横方向のヘラミガキ調整	灰褐色N2/	●内外面黄褐色付近

井戸153

器 形	番号	法 量	形 細 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 瓶 頭	小瓶C 118	口 8.0 高 1.9	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、腹部はやや丸くおさめる	●口縁部1回ヨコナデ、底部ユビ調整	外側褐色2.5YR6/6、内面にぼい褐色5YR6/4	●褐色系
	119	口 7.8 高 1.6			灰白色10YR8/2	●褐色系 ●完形
中瓶C	117	口 9.0 高 (1.9)	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、腹部はつまみあげる		灰白色2.5Y8/1、黄灰色2.5Y4/1	●白色系
大瓶C	120	口 11.4 高 1.9	●やや平らな底部から外方にひろがる口縁部、口縁部は丸くおさめる		灰白色10YR8/2	●褐色系
	121	口 13.5 高 2.3			灰白色10YR8/2	●白色系
	122	口 14.0 高 (2.1)			外側褐色5YR4/1、内面灰白色7.5YR8/2	●白色系
	123	口 15.6 高 2.0			灰白色2.5Y8/2	●白色系
	124	口 15.4 高 (2.0)	●口縁部在籠のヨコナデ	●内面一部ハケメ (5 / 0.7cm) 調整	にぼい褐色7.5YR7/3	●褐色系

溝192

器 形	番号	法 量	形 細 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 瓶 頭	小瓶C 125	口 7.4 高 2.0	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、腹部はつまみ上げる	●口縁部1回ヨコナデ、底部ナガ調整	淡黄色10YR8/3	●褐色系
	126	口 7.8 高 1.8	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、腹部はつまみ上げる	●底部はユビオサエ調整	灰白色7.5Y8/1	●白色系
	129	口 7.5 高 (1.9)	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	灰白色7.5Y8/1	●白色系
	130	口 7.5 高 (1.5)	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	灰白色7.5Y8/1	●白色系
	131	口 7.4 高 (1.4)	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	灰白色2.5Y8/2	●白色系
	132	口 7.7 高 1.1	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	浅黃褐色2.5YR8/3	●褐色系
	133	口 7.4 高 1.2	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	灰白色10YR8/2	●白色系
	136	口 7.6 高 (1.5)	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	灰白色10YR7/1、にぼい褐色10YR7/3	●褐色系
	127	口 8.8 高 1.3	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整 ●右籠のヨコナデ	灰白色7.5YR8/1	●白色系 ●不明显
	128	口 8.5 高 (1.6)	●底部欠失	●底部はユビオサエ調整	灰白色7.5YR8/1	●白色系
小瓶D	134	口 8.4 高 1.9			淡棕色5Y8/3	●褐色系
	135	口 9.1 高 (1.8)	●底部欠失		浅黃褐色2.5YR8/3	●褐色系
	137	口 8.5 高 1.2	●横ナデのために底部と口縁部との間に縦がつくもの	●右籠のヨコナデ	浅黃褐色2.5YR8/3	●褐色系
大瓶C	138	口 8.8 高 (1.6)	●横ナデのために底部と口縁部との間に縦がつくもの		灰白色2.5Y8/2	●白色系
	139	口 17.7 高 2.6	●小さな平底から、外方にのびる口縁部	●口縁部は1回ヨコナデ、底部ユビオサエ調整	灰白色7.5YR8/1	●褐色系

器 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 器 部	140	□ 13.9 高 (2.2)	●底部欠失 ●直線的に外方へのびる口縁部、底部はや丸くおさめる	●口縁部1回ヨコナダ	浅黄褐色10YR8/2	●橙色系
	141	□ 12.5 高 (2.3)			灰白色10YR8/2	●橙色系
瓦 器	142	□ 14.5 高 4.9 底 7.3	●丸窓の底部から、そのまま外上方へのびる口部	●外面は粗いミガキ調整、内面は密な道筋彫りミガキ調整 ●内面見込みには渦巻状ミガキ調整	黑色NZ/	
	143	□ 14.2 高 2.6 底 5.2	●丸窓の底部から、そのまま外上方へのびる口部	●外面は粗いミガキ調整、内面は密な道筋彫りミガキ調整 ●内面見込みには渦巻状ミガキ調整	灰褐色N5/	
	144	□ 13.2 高 3.0	●高台を持たない丸窓	●外面はエビオサニ調整、内面は粗い渦巻状ミガキ調整	灰褐色N4/、灰白色N 7/	
羽 器 G	145	□ 20.0 高 (7.2)	●直線的に内傾気味の口縁部、底部には凹面をもち、やや斜い構が少しく	●外表面口縁部に凹線文、内面にハケヌ (5/cm) 調整	外表面灰色N4/、内面 灰褐色5Y8/1、7/1	
	146	□ 25.0 高 (4.7)		●外表面口縁部に凹線文、内面にハケヌ (4/cm) 調整	灰白色5Y8/1、7/1	
唐 器	147	高 3.5 高 (4.0)	●厚みのある豊壁をもち、高台は斜面 円角	●外表面豊壁の文様をもつ ●内面と高台裏付から外側にかけて 輪を施し、両内面は磨拭	オリーブ灰色10Y6 /2	●蘆原窯系

溝195

器 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 器 部	148	□ 7.9 高 1.2	●丸窓をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、底部はや丸くおさめる	●口縁部1回ヨコナダ、底部ユビ調整 ●石削りヨコナダ	浅黄褐色7.5YR8/3、 にぶい橙色2.5YR6 /3	●定形 ●橙色系
	156	□ 7.8 高 1.6		●右端ヨコナダ	灰白色7.5Y8/1	●白色系 ●定形
中 温 C	149	□ 8.4 高 1.5		●見込み一定方向のナダ調整	浅黄褐色7.5YR8/4	●橙色系
	151	□ 10.0 高 1.6		●左端ヨコナダ	浅黄褐色7.5YR8/3	●橙色系
	152	□ 8.9 高 1.5			浅黄褐色7.5YR8/3	●橙色系
	153	□ 8.3 高 1.7			灰白色2.5Y8/2	●白色系
	154	□ 8.5 高 1.6			灰白色5Y8/2	●定形 ●白色系
	155	□ 8.1 高 1.7		●右端ヨコナダ	灰白色10Y8/1	●白色系 ●定形
	158	□ 10.6 高 2.1			灰白色10YR8/2	●白色系
	159	□ 9.0 高 1.6	●横ナダのために底部と口縁部との境に食がつく	●右端ヨコナダ	浅黄褐色7.5YR8/3	●定形 ●白色系
大 温 C	157	□ 11.1 高 2.2			にぶい黄褐色10YR 7/3	●定形 ●白色系
	159	□ 11.0 高 1.9		●見込み一定方向のナダ調整 ●左端ヨコナダ	にぶい黄褐色10YR 7/4	●白色系
瓦 器	160	□ 8.7 高 1.2	●平底から、屈曲して外上方にのびる口縁部。口縁部は外折するようにつまみだされる	●内面見込みにジグザグ状のミガキ調整	灰色N6/	●定形
	161	□ 14.2 高 (3.6)	●底部欠失	●外面は粗いミガキ調整、内面は密な道筋彫りミガキ調整	灰色N6/	
	162	□ 12.4 高 3.2	●丸窓の底部から、そのまま外上方へのびる口部	●外面はユビオサニ調整、内面は粗い渦巻状ミガキ調整	灰色N5/	

満203

器 形	番 号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土器部 小皿C	166	口 7.9 高 (1.2)	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部はやや丸くおさめる	●口縁部1回ヨコナデ、底部ユビ調整	淡黄色7.5YR 8/3	●褐色系
	163	口 9.2 高 1.6			灰白色2.5Y 8/2	●灯明皿 ●白色系
	164	口 8.7 高 1.0			にぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	165	口 9.0 高 (1.4)			橙色7.5YR 7/6, に ぶい黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	167	口 8.3 高 1.7			にぶい橙色7.5YR 7/ 3	●褐色系
玉器 鉢	168	口 14.7 高 5.0 底 5.4	●丸味をもつ底部から、内弯しながら口縁部までつづく底部には「ハ」の字形にひがむ高台をもつ	●内面には渦巻状のミガキ調整、外 面はユビ調整	灰色N5/	
	169	口 14.2 高 (4.7)	●底部欠失	●外面口体部に付いたミガキ調整、内 面は複数な通路線ミガキ調整	灰色N5/	
	170	口 13.7 高 6.8 底 4.3		●内面には渦巻状のミガキ調整、外 面は軽いミガキ調整とユビ調整	灰色N4/	
	171	口 14.2 高 3.5 底 4.2	●底部一部欠失	●内面には渦巻状のミガキ調整、外 面はユビ調整	灰色N5/ 6/	
	173	口 10.7 高 2.8	●丸底から内弯しながら口体部につづ く。口操作部は丸くおさまる	●内面には軽い渦巻状のミガキ調整、 外側はユビ調整	灰色7.5Y 6/1	
	174	口 11.2 高 1.8			灰色N4/	
	175	口 10.8 高 2.0			灰色N4/ 6/	
	172	口 9.6 高 (1.8)	●丸底から内弯して外上方にのげる口 縁部。口操作部は外折するようにつけ み出される	●内面見込みにジグザグ状のミガキ 調整	灰色10Y 6/1	
	176	口 15.1 高 (3.9)	●直線的に外方へ広がる口体部。口縁 部は丸くおさめる ●底部欠失	●内面口縁部近くに細い沈線が1条 みられる	明緑灰色7.5GY 8/1	

満209

器 形	番 号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土器部 小皿C	181	口 7.9 高 (1.1)	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、端部はやや丸くせわる	●口縁部1回ヨコナデ、底部ナデ調整	灰黄色2.5Y 7/2	●褐色系
	184	口 7.6 高 2.4		●底部ユビ調整	灰白色7.5Y 8/1	●白色系
	190	口 7.9 高 (1.3)			灰白色2.5Y 8/2	●褐色系
	191	口 7.9 高 1.3			灰白色10YR 8/2	●白色系 ●灯明皿
	177	口 8.8 高 1.1		●右通りのヨコナデ	灰白色10YR 8/1	●白色系
中皿C	178	口 10.0 高 0.8			灰白色2.5Y 8/1	●白色系
	179	口 8.9 高 1.3		●内面底部一定方向のナデ調整	灰白色2.5Y 8/1	●白色系 ●褐が見られる
	180	口 8.7 高 1.1			橙色7.5YR 7/3	●橙色系

部	形	番号	法 量	恐 懼 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 筋 部	中皿C	183	□ 8.3 高 1.3	●丸味をもつ底部分からゆるやかに立ちあがり。口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる		に近い橙色7.5YR7 /3	●褐色系
		185	□ 9.1 高 2.0		●右置りのヨコナデ	浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系 ●形態
		186	□ 9.4 高 1.7		●左置りのヨコナデ	浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系 ●面が見られる ●完形
		187	□ 9.2 高 1.2			灰黄色2.5Y6/2	●褐色系
		188	□ 9.0 高 1.6			に近い橙色7.5YR7/2 浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
		189	□ 9.6 高 1.6			灰白色2.5Y8/2、灰 白色5Y8/1	●褐色系
		190	□ 12.0 高 (1.8)	●口縁部が「て」の字状にちかい形態	●口縁部にヨコナデを2回施す	橙色2.5Y7/1、灰 色2.5Y7/1	●褐色系
大皿B	大皿C	182	□ 11.0 高 1.5			灰白色2.5Y8/2	●白色系
		192	□ 14.9 高 2.8	●丸味をもつ底部分からゆるやかに立ちあがり。口縁部は外反しながら開き、端部をやや尖らせて終わる	●口縁部1回ヨコナデ、底部スピノ 要 ●内面クリヤーによるナデ調整	灰黄色2.5Y6/2	●褐色系 ●明瞭
		193	□ 13.3 高 (2.2)		●右置りのヨコナデ	褐灰色10YR5/1、灰 白色5Y7/1	●褐色系 ●面が見られる
		194	□ 14.4 高 2.7			淡黄褐色7.5YR8/3、 灰白色7.5YR8/2	●褐色系 ●明瞭 ●ほぼ完形
		195	□ 13.6 高 2.6			灰白色2.5Y8/1	●褐色系
		196	□ 14.2 高 (2.3)			灰白色10YR8/2、淡 黄褐色10YR8/3	●褐色系
		197	□ 14.6 高 2.9			褐灰色10YR4/1	●褐色系
		199	□ 12.4 高 2.2		●外底部分に工具痕が見られる	に近い黄褐色10YR 7/3	●褐色系 ●完形 ●明瞭
		200	□ 18.9 高 (15.5)	●口縁部が「く」の字型に大きく外反し、口縁部は内側に屈曲する ●脚部がややくびれた「U」字形をもつ	●口縁部と脚部をヨコナデする以外 は、ナデ調整	褐赤褐色2.5YR7/3、 灰白色2.5Y8/2	
羽 根	横	(25)	□ 23.4 高 (8.0)			灰白色2.5Y8/2、黑 色2.5Y2/1	●内外面傷付等
		202	□ 14.9 高 5.6 底 4.3	●丸味をもつ底部分から、内弯しながら口縁部までづぶく、口縁部内面には1条の沈窓をもつ ●「ハ」の字形に広がる、断面逆台形の高台をもつ	●外周口部に軽いミガキ調整、内 面にははば密な逆鉛錠模様ミガキ調整 ●内面見込みに3回からなる縮施状 態文が見られる	粗灰色N3/	
		203	□ 14.1 高 5.3 底 5.0	●丸味をもつ底部分から、そのまま外上 方へのびる口作部、口縁部上方には1条の浅い沈窓をもつ ●「ハ」の字形に広がる、断面逆台形の高台をもつ	●外周口部に軽いミガキ調整、内 面にははば密な逆鉛錠模様ミガキ調整 ●内面見込みに3回からなる縮施状 態文が見られる	灰色N4/	
		204	□ 14.3 高 4.5 底 4.5			灰色N4/	
		205	□ 14.8 高 5.2 底 4.9	●丸味をもつ底部分から、内弯しながら口縁部までづぶく、口縁部内面には1条の沈窓をもつ ●「ハ」の字形に広がる、断面逆台形の高台をもつ	●外周口部に軽いミガキ調整、内 面にははば密な逆鉛錠模様ミガキ調整 ●内面見込みに3回からなる縮施状 態文が見られる	灰色N5/	
		206	□ 14.1 高 4.6 底 4.4	●丸味をもつ底部分から、内弯しながら口縁部までづぶく、口縁部内面には1条の沈窓をもつ ●「ハ」の字形に広がる、断面逆台形の高台をもつ	●外周口部に軽いミガキ調整、内 面にははば密な逆鉛錠模様ミガキ調整 ●内面見込みに3回からなる縮施状 態文が見られる	灰色N4/	

器 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
瓦器 瓶	207	口 14.6 高 5.1 底 4.3		● 外部口作部に低いミガキ調整、内面はやや低い口縁端部ミガキ調整 ● 内面見込みに2回からなる模様紙糊文が見られる	灰色10Y3/1、灰色N5/	
	208	口 17.8 高 7.5 底 5.4	● 先端をもつ底部から、内厚しながら口縁部までづく、口縁端部は丸く研める ● 「人」の字形に広がる、瓶面三角形の高台をもつ	● 内外裏口体部に太く粗いミガキ調整 ● 内面見込みに横子状端文が見られる	灰色N4/	
	209	口 15.1 高 5.6 底 5.0	● 丸底をもつ底部から、内厚しながら口縁部までづく、口縁端部は丸く研める ● 「人」の字形に広がる、瓶面三角形の高台をもつ	● 内外裏口体部に太く粗いミガキ調整 ● 内面見込みに平行線状端文が見られる	灰色N5/	
	210	口 15.7 高 4.5 底 3.7	● 丸底をもつ底部から、そのまま外上方へのびる口体部、口縁端部は丸く研める ● 「人」の字形に広がる、瓶面三角形の高台をもつ	● 内外裏口体部に太く粗いミガキ調整 ● 内面見込みに平行線状端文が見られる	明褐色5YR7/2	
	211	口 15.3 高 (4.4)	● 丸底をもつ底部から、内厚しながら口縁部までづく、口縁端部は丸く研める ● 高台欠失	● 内外裏口体部に太く粗いミガキ調整 ● 内面見込みに横子状端文が見られる	灰白色10Y8/1	
	212	口 9.5 高 2.4	● やや丸味を帯びた底部から、唇曲して口縁部は上方に立ちあがり、口縁端部は外折し尖り気味	● 外面底部はユビ調整、内面見込みは14回以上のジグザグ状端文	灰色N5/	● 完形
實 溶 水 瓶 鍋	213	口 9.9 高 2.0	● 平底から外方へ広がる口縁部、口縁端部はやや尖り気味	● 外面底部はユビ調整、内面見込みは頭頂以上のジグザグ状端文	灰色N6/～5/	● 完形
	214	口 9.4 高 1.8	● 平底から外方へ広がる口縁部、口縁端部はやや尖り気味	● 外面底部はユビ調整、内面見込みは25回以上のジグザグ状端文、内面口縫接縫方向のミガキ調整	灰色N4/	● 完形
	215	口 9.4 高 2.0	● やや丸味を帯びた底部から、内厚しながら口縁部につづく、口縁端部は丸く研める	● 外面はユビ調整、内面見込みは2回以上のジグザグ状端文、内面口縫接縫方向ココナメ調整	灰色N4/	● ほぼ完形
	216	口 31.0 高 12.0	● 口縁端部表面がほぼ方形を呈する	● 内外裏口に同様ナデ調整のち、内外体部はナデ調整 ● 外面底部に板状工具による一定方向のナデ調整	灰色7.5Y6/1	
	217	口 26.2 高 (6.1)		● 内外裏口に同様ナデ調整	灰色N6/、青灰色5FB6/1	
	218	口 27.5 高 (6.9)			灰白色N8/、灰色N4/	
土 壁 等	219	口 30.8 高 (10.3)	● 口縁端部を上方に引き出す		灰色N5/	
	220	口 33.4 高 13.3 底 12.7	● 口縁端部を更に上方に引き出す	● 内面底部未調整	灰色N5/	● 内面押付着
	221	口 8.8 高 1.7	● 丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、縁部は丸味をもつ	● 口縁部1回ヨコナデ、外面底部に糊文か?	灰白色5Y7/1、灰オリーブ5Y6/2	● 白色系 ● 灰白色
中 盆 C	222	口 8.4 高 1.3	● 槍子のために底部と口縁部との境に後がつく	● 口縁部1回ヨコナデ、底部ナデ調整	にSLV!真緑色10YR7/2	● 白色系
	223	口 14.0 高 (3.0)	● 丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、縁部は丸味をもつ	● 口縁部1回ヨコナデ、底部ナデ調整	にぶい緑色7.5YR7/4	● 緑色系

器 形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
土 壁 等	中盆C	口 8.8 高 1.7	● 丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、縁部は丸味をもつ	● 口縁部1回ヨコナデ、外面底部に糊文か?	灰白色5Y7/1、灰オリーブ5Y6/2	● 白色系 ● 灰白色
	中盆D	口 8.4 高 1.3	● 槍子のために底部と口縁部との境に後がつく	● 口縁部1回ヨコナデ、底部ナデ調整	にSLV!真緑色10YR7/2	● 白色系
	大盆C	口 14.0 高 (3.0)	● 丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、縁部は丸味をもつ	● 口縁部1回ヨコナデ、底部ナデ調整	にぶい緑色7.5YR7/4	● 緑色系

番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
瓦器 碗	224 口 16.2 高 (4.4)	●丸味をもつ底部から、そのまま外上方へのびる口脚部。口縁部上方には1条の沈溝をもつ	●外側口部に分離性のある低いミガキ調整、内面は滑な連続面ミガキ調整	磁灰色N3/	
	225 口 13.8 高 (5.8)	●丸味をもつ底部から、そのまま外上方へのびる口脚部。口縁部上面には1条の沈溝をもつ	●外側口部に高いミガキ調整、内面は密な連続面ミガキ調整	淡白色2.5Y7/	

落ち込み02

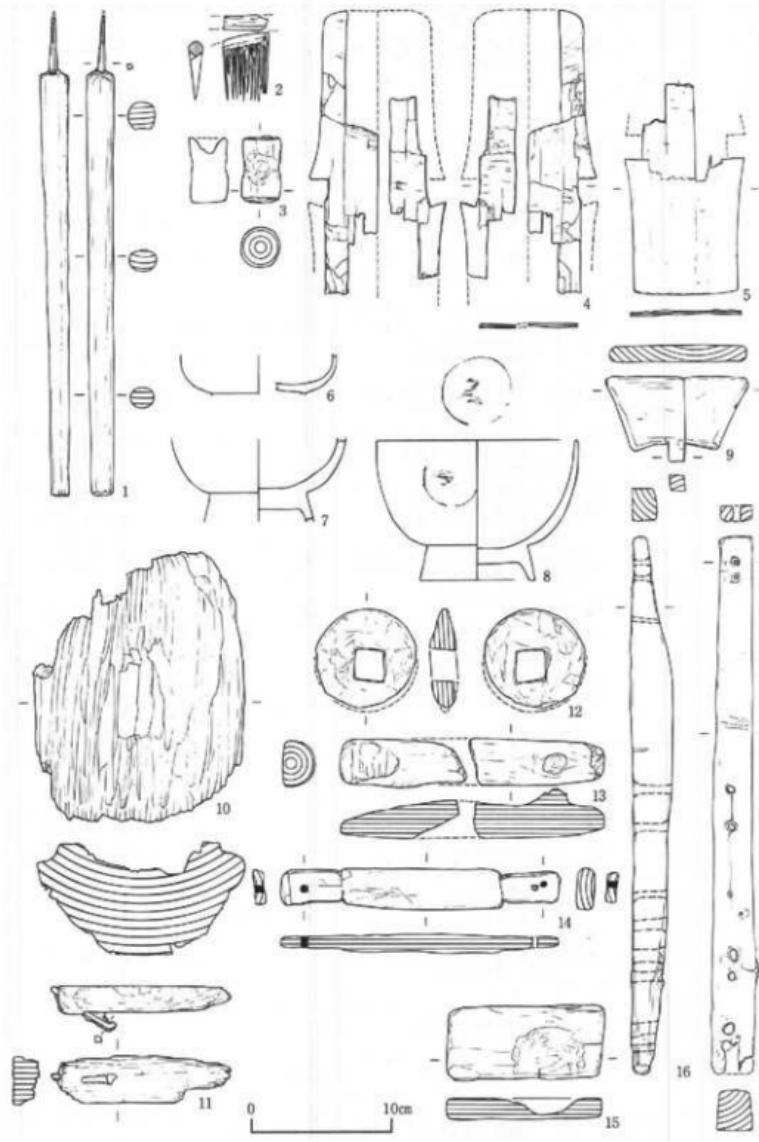
番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
土器 小皿C	229 口 8.0 高 1.2	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、脚部をやや尖らせて終わる	●口縁部1周ヨコナダ、底部ユビ調整	浅黄褐色7.5YR8/3、 黄褐色7.5YR7/8	●褐色系
	234 口 7.8 高 1.5			浅黄褐色10YR8/3	●褐色系
	235 口 7.8 高 1.4	●右翫ヨコナダ		浅黄褐色10YR8/3	●褐色系
	236 口 7.7 高 1.8	●右翫ヨコナダ		浅黄色2.5Y8/3	●褐色系
	239 口 7.8 高 (1.4)			浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
	240 口 7.6 高 1.2			褐色2.5YR6/6、浅 黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
	246 口 7.5 高 (1.4)			浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
	247 口 8.0 高 1.5			浅黄褐色10YR8/3、 に赤い褐色5YR7/4	●褐色系
	250 口 8.0 高 1.6			浅灰褐色7.5YR8/3	●褐色系
	251 口 7.7 高 1.8	●右翫ヨコナダ		灰白色2.5Y8/2	●褐色系 ●はげ定形
	233 口 7.8 高 1.5	●横ナダのために底部と口縁部との境に後がつく		に赤い褐色7.5YR7 /3、灰色10YR6/1	●褐色系
	236 口 7.6 高 2.6			浅黄褐色10YR7/3	●褐色系
	248 口 7.0 高 1.1			灰褐色5YR6/2・7/2	●褐色系
	249 口 8.0 高 1.3			浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
中皿C	226 口 8.9 高 1.2	●丸味をもつ底部からなだらかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、脚部をやや尖らせて終わる		浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
	227 口 8.3 高 (1.6)			に赤い黄褐色10YR 7/3	●褐色系
	228 口 8.1 高 0.8	●丸味をもつ底部からなだらかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、脚部をやや尖らせて終わる		灰白色2.5Y8/2	●褐色系
	230 口 8.1 高 1.3			浅黄褐色7.5YR8/3	●褐色系
	231 口 8.3 高 1.3	●右翫ヨコナダ		に赤い褐色5YR7/3	●褐色系
	232 口 8.7 高 1.5	●右翫ヨコナダ		浅黄褐色10YR8/3、 灰白色10YR8/2	●褐色系 ●打明皿 ●定形
	237 口 8.1 高 1.7			浅黄褐色10YR8/3	●褐色系
	241 口 8.8 高 1.5			に赤い黄褐色10YR 7/3	●褐色系

器	形	番号	法 盤	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
上 縦 器	中腹C	245	口 高 9.6 1.5	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、底部をやや尖らせて終わる		淡黄褐色10YR8/3、 淡黃褐色7.5YR8/4	●褐色系
		252	口 高 8.4 1.8			淡黃褐色7.5YR7/3	●褐色系 ●灯明皿
		253	口 高 8.3 (1.5)			にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系
		254	口 高 10.3 1.5			淡黃褐色10YR8/3	●褐色系
		255	口 高 10.6 1.3			にぶい褐色7.5YR7 /3	●褐色系
		257	口 高 9.6 1.5			淡黃褐色7.5YR8/3	●褐色系
		258	口 高 9.9 (1.5)			にぶい褐色5YR7/4、 淡黃褐色7.5YR8/3	●褐色系
		259	口 高 9.5 1.9	●右側ヨコナダ		にぶい黄褐色10YR 7/2	●褐色系 ●完形
		260	口 高 9.2 (1.6)			にぶい褐色7.5YR7 /4	●褐色系
		261	口 高 10.5 1.6			淡黃褐色10YR8/3	●褐色系
		264	口 高 9.6 (2.5)			にぶい褐色7.5YR7 /4	●褐色系
		262	口 高 8.7 1.4	●後ナダのために底部と口縁部との間に種がつく		灰白色2.5Y8/2、淡 褐色2.5Y8/3	●褐色系
大腹C		243	口 高 9.2 1.4			淡黃褐色2.5YR8/4	●褐色系
		244	口 高 9.0 (1.1)			灰白色7.5YR9/2	●白色系
		256	口 高 10.4 1.2			灰白色10YR8/2	●白色系
		262	口 高 11.0 (2.4)	●丸味をもつ底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部は外反しながら開き、底部をやや尖らせて終わる		淡黃褐色7.5YR8/3	●褐色系
		263	口 高 11.0 2.4			灰白色2.5Y8/2	●褐色系
		265	口 高 12.8 (2.2)			淡黃褐色10YR8/3	●褐色系
		266	口 高 13.4 (2.3)			淡黃褐色2.5Y8/3、淡 褐色5YR8/3	●褐色系
		267	口 高 13.0 (2.0)			淡黃褐色7.5YR8/3	●褐色系
羽茎		268	口 高 12.0 2.4			灰白色10YR8/1	●褐色系 ●灯明皿
		269	口 高 18.7 (3.5)			灰白色10YR8/2	●白色系
		270	口 高 14.1 6.0	●平底から緩曲して外方に広がる口縁部。口縁部上方に筋をもつ ●外側口縁部に溝、底部に3脚からなる逆台形の脚部をもつ	●口縁部ヨコナダ、体部ナダ、見込み一定方向のナダ、外側底部粗ナダ、脚部ナダつけ	黃褐色7.5YR7/8、 灰白色2.5Y8/2	●はざ完形

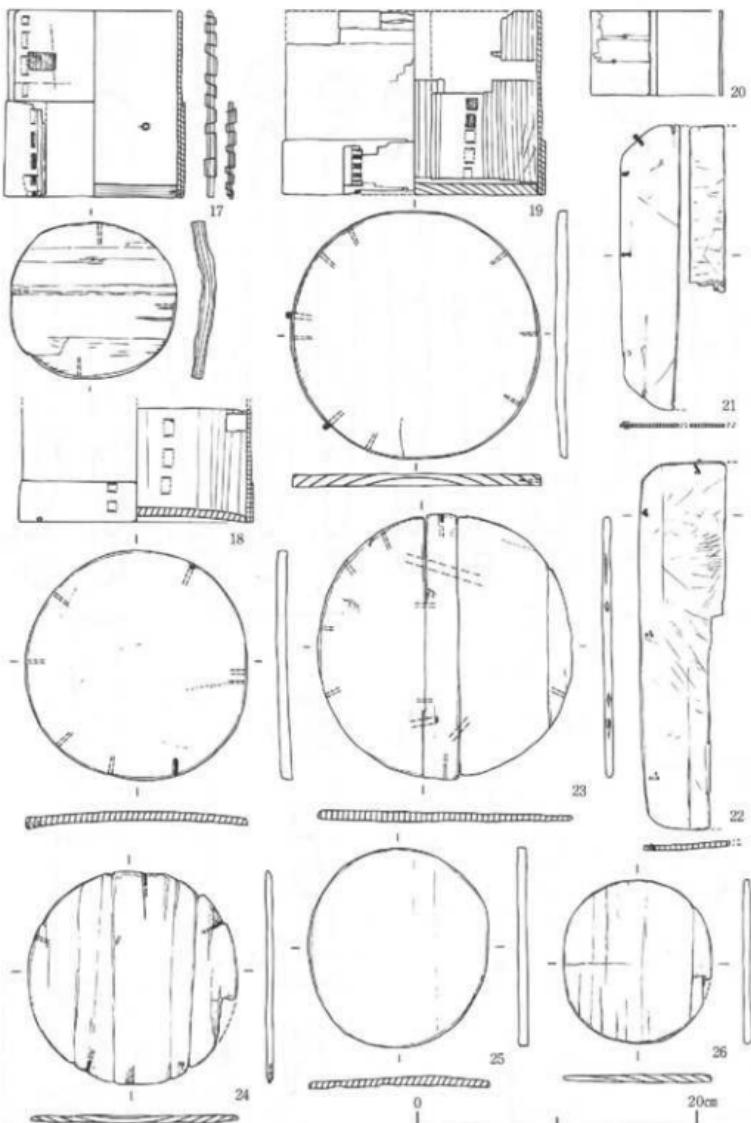
河川他

器 形	号 号	法 量	形 症 の 特 徴	枝 法 の 特 徴	色 調	備 考
瓦 壁	271 272 274	□ 14.1 高 (4.8)	●内骨気味に立ちあがる口部部 ●高台欠失	●外表面は分割式、内面は重な連続彫 彫状ミガキ調整 ●内面見込みには格子状ミガキ調整	灰色N5f	●河川
	275 276		●口径14.4~15.0cm ●丸味をもつ底部から内側しながら口 縫部につづく、口縫底部は外折し 条の波度をもつ	●外表面は低いミガキ調整、内面は連 続彫彫状ミガキ調整 ●(275) 見込みには2層からなる同 心円状ミガキ調整	(272) 灰色N4/ (273) 灰色N5/ (274) 灰白色N8f	●河川
	277 278		●口径12.4~12.6cm ●丸味をもつ底部から内側しながら口 縫部につづく、口縫底部は外折し 条の波度をもつ	●外表面は低いミガキ調整、内面は連 続彫彫状ミガキ調整 ●(277) 見込みには2層からなる同 心円状ミガキ調整	灰色N4f	●河川 ●完形
	279 281	□ 12.2 高 4.1 底 3.4	●口径12.4~13.4cm ●丸味をもつ底部から内側しながら口 縫部につづく、口縫底部は丸味をも って終わる ●退化気味の高台をもつ	●外表面は低いミガキ、内面は連続彫 彫状ミガキ調整 ●(279) 見込みには3層のジグザグ 状ミガキ調整	灰色N4f	●河川 ●(279~280) 完 形
	282	□ 12.0 高 4.1 底 3.4	●丸味をもつ底部から内側しながら口 縫部につづく、口縫底部は丸味をも って終わる ●退化気味の高台をもつ	●外表面は低いユビオサエ、内面は低い 連続彫彫状ミガキ調整 ●内面見込みには3層のジグザグ状 ミガキ調整	暗灰色N3f	●河川 ●完形
	283 285		●口径11.7~12.5cm ●丸味をもつ底部から内側しながら口 縫部につづく、口縫底部は丸味をも って終わる ●退化気味の高台をもつ	●外表面は低いユビオサエ、内面は低い 連続彫彫状ミガキ調整	灰色N4f	●河川 ●(283) 完形
	284 286 287		●口径11.7~11.9cm ●高台を作らない丸底から外方にひら ぐる口縫部、口縫底部は丸味をも って終わる	●(284~286) 外表面は低いユビオサエ 内面は見込みまでつづく低い連続 彫彫状ミガキ調整	(284) 灰色N4/ (286) 暗灰色N3/ (287) 暗灰色10YR8/1	●河川
羽 翼 G	288	□ 16.8 高 15.0	●丸味から内側しながら立ちあがる体 部、口縫部は内側し、口縫底部は面 をもち凹む ●口縫底部に2層の極穴をもつ	●外表面口縫部に2条の凹縫文。体部 はユビオサエ、内面口部部はハケメ (5cm) 調整、底部はナゲ調整	オリーブ黒色7.5Y3 /1	●河川 ●外面部付着
	289	□ 17.0 高 15.0	●内側しながら立ちあがる体部、口縫 部は内側し、口縫底部は強く内側 に引き出され、上方には面をもち凹 む ●口縫底部に2層の極穴をもつ	●ハケメ(7/cm)	黑色2.5Y2/1、灰白 色7.5Y8/1	●河川 ●内外面部付着
	290	□ 19.8 高 (8.6)	●内側しながら立ちあがる体部、口縫 部は内側し、口縫底部は強く内側 に引き出され、上方には面をもち凹 む ●口縫底部に2層の極穴をもつ	●外表面口縫部に3条の凹縫文。内面 体部はハケメ(4/cm)	黑色N2f、灰色7.5Y 6/1	●河川 ●内外面部付着
	291 292 297		●口径17.8~23.8cm ●丸味から内側しながら立ちあがる体 部、口縫部は内側し、口縫底部は強 く内側に引き出され、上方には面 をもち凹む	●外表面口縫部に2~3条の凹縫文。 体部ハケメ調整、内面はハケ メ調整	(291) 灰色N4/ (292) 灰白色7.5Y8/1 (297) 灰黄褐色10YR 3/1	●河川 ●葉付着
	292 296		●口径19.0~23.6cm ●内側しながら立ちあがる口部部、口 縫部は面をもち凹む	●外表面口縫部に2~5条の凹縫文。 内面体部はハケメ調整	(292) 灰白色7.5Y8/1 (296) 灰白色10YR8/1	●河川 ●葉付着
	294	□ 21.6 高 (9.6)	●直線的に内側する口部部、口縫部 は強く内側に引き出され、上方には 面をもち凹む	●外表面口縫部に3条の凹縫文。 内面口縫部はハケメ(4/cm)調整、体 部はナゲ調整	灰色N6f~N5f	●河川
	296 298		●口径23.4~24.8cm ●内側しながら立ちあがる口部部、口 縫部は面をもち凹む	●外表面口縫部に2条の凹縫文。内面 はハケメ調整	(296) 灰色N4/ (298) 灰褐色7.5YR 7/2	●河川 ●(296) 内外面 部付着
羽 翼 C	299	□ 30.0 高 (15.1)	●内側する体部から「C」の字形に外 折する口縫部、口縫底部は内側に引 き出す ●前は粗く退化気味、前面U字形	●外表面に嘴の接着に対する捺可形 ユビ压板が見られる	淡青褐色10YR8/4	●河川

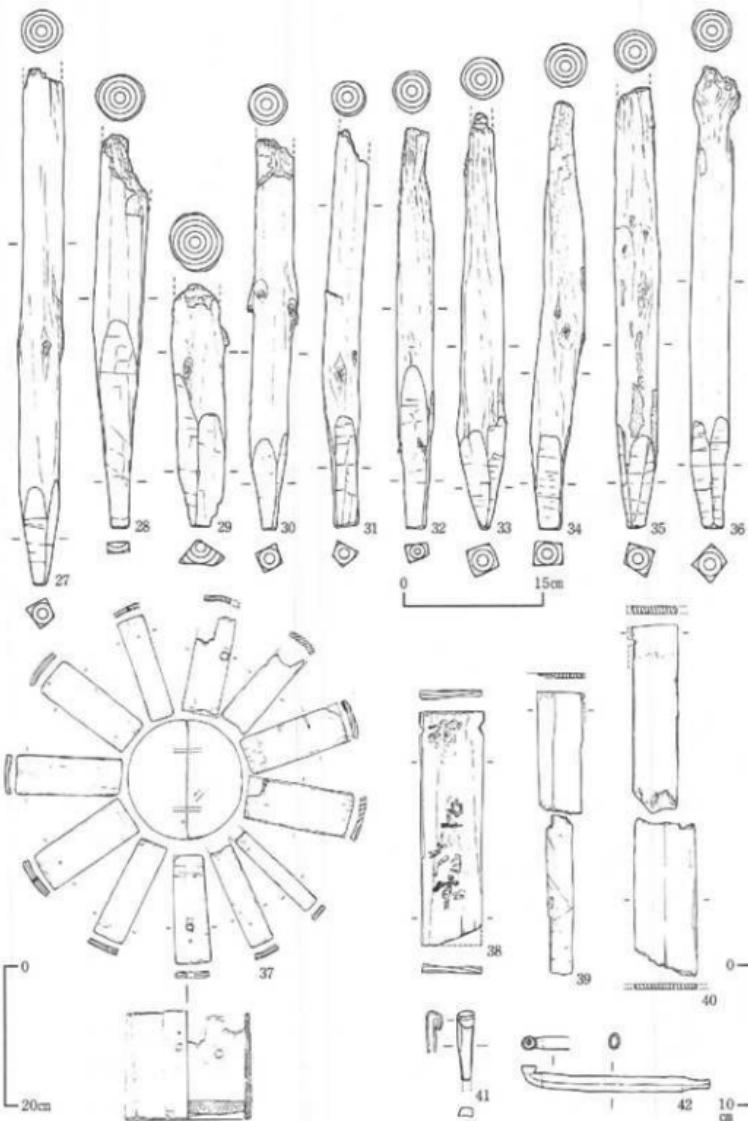
器形	骨号	法 番	形 売 の 特 徴	往 法 の 特 徴	色 调	番 号	
瓦 器	300	口 28.6 高 14.2 底 10.6	●内面気球に立ちあがる体部から口縁部につき。口縁部はほぼ丸く切れる。平底。	●外面部はビュオサノ開脚、底部に一部工具痕が見られる ●内面は7cm/2.1cmの幅目	暗灰色N3/1、灰色N4/1	●河川	
白 器	301	口 14.5 高 (3.4)	●口縁部に玉縫をもつ	●内外面に施脚	灰白色2.5GY8/1	●河川	
	302	口 16.3 高 (4.3)	●口縁部に玉縫をもち、見込みに1条の施縫を施す	●内面と外面部口縁部に施脚、また外面上には他の底下が見られる	明オリーブ灰色2.5GY7/1	●河川	
	303		●底径7.2~7.5cm	●両台は灰く渋し、外面部台盤にハケメ調整が見られる	灰白色10Y8/2-8/1	●河川	
	304		●底の高台				
	305	底 6.6 高 (6.0)	●両台は施縫で傾斜	●高台は外面部を直し、内面を斜めに削り出したもの	浅黄色2.5Y8/3	●河川	
青 器	306	底 4.9 高 (2.2)	●両台は灰く傾斜	●両台は外面部を直し、内面を斜めに削り出し、盤台は軽くV字、見込みには花文が施されている ●外面部にむかづく細網運舟が残存	オリーブ灰色10Y6/2	●河川	
土 器	小皿C	307 308	●口徑7.3~8.0cm ●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ち上り、口縁部は外反しながら開き、底盤は丸く切れる	●(307) 工具によるナゲ調整 (308) にぶい黄褐色10YR7/3 (308) にぶい褐色7.5YR7/1	(307) にぶい黄褐色10YR7/3 (308) にぶい褐色7.5YR7/1	●(307) 濃43 ●(308) 濃51 ●褐色系	
	小皿D	310	口 7.7 高 1.5	●横ナデのために底部と口縁部との境に接がつく	●工具によるナゲ調整	にぶい黄褐色10YR7/3	●濃108 ●褐色系
	中皿C	311	口 8.6 高 (1.7)	●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ち上り、口縁部は外反しながら開き、底盤は丸く切れる	●口縁部1回ヨコナデ、底盤ユビ調整	灰白色10YR8/1	●濃108 ●白色系
	大皿C	309 313	●口徑12.8~13.2cm ●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ち上り、口縁部は外反しながら開き、底盤は丸く切れる	●口縁部1回ヨコナデ、底盤ユビ調整	(309) 明褐灰色7.5YR7/2 (313) 灰白色10YR8/2	●(309) 濃51 ●褐色系 ●(313) 濃145 ●白色系	
瓦 器	312	口 10.9 高 (2.2)	●両台を併ねない丸底から外方にひろがる口縁部、口縁部は丸味をもつて終わる	●外面部はビュオサニエ、内面は見込みまでつづく軽い連続施縫状ミガキ調整	灰白色N6/-N7/	●濃108	
土 器	小皿C	314 315	●口徑7.3cm ●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ち上り、口縁部は外反しながら開き、底盤をやや尖らせて終わる	●口縁部1回ヨコナデ、底盤ユビ調整	(314) 淡黄色2.5Y8/3 (315) にぶい黄褐色10YR7/3	●SP307 ●(314) 白色系 ●(315) 白色系 ●完形、灯明風	
	小皿D	318 319	●口徑7.9~8.0cm ●横ナデのために底部と口縁部との境に接がつく	*	(318) 淡褐色5YR8/4 (319) 淡黄色2.5Y8/3	●(318) SP689 ●褐色系 ●(319) 淡褐色2.5Y8/3	
	中皿C	325 326	●口徑9.0~9.3cm ●丸味をもつ底盤からゆるやかに立ち上り、口縁部は外反しながら開き、底盤をやや尖らせて終わる	●口縁部は1回ヨコナデ	(323) 淡褐色5YR8/3 (324) 淡黄色2.5Y8/3	●(323) SK7 ●(324) SK67 ●褐色系	
	大皿C	321	口 11.5 高 (2.1)	*	*	淡黄色2.5YR8/3	
	大皿D	317	口 11.5 高 2.2	●横ナデのために底部と口縁部との境に接がつく	*	淡黄色10YR8/3	
瓦 器		320	●直線的に外方へのびる口底部、口縁部をつまみ上げる ●施縫は伴わない	●外面部はナゲ調整、内面は見込みまでつづく粗い連続施縫状ミガキ調整	暗褐色10GY4/1	●SP737	
		325	口 14.0 高 3.3	●両台を併ねない丸底から外方にひろがる口縁部、口縁部は丸味をもつて終わる	*	明褐灰色5PB7/1	●SK79
		326	口 15.9 高 (5.2)	●丸味をもつ底盤から口縁部につづく ●施縫部は上方に1条の沈縫をもつ ●高台欠失	●外面部は粗いミガキ調整、内面は密な連続施縫状ミガキ調整	灰褐色N5/	●SK80
小皿	316	口 7.4 高 1.3	●丸味を帯びた底盤から外方にひろがる口縁部、口縁部はやややつまみ上げる	●口縁部はヨコナデ、底部はナゲ調整、内面底部にはミガキ調整が見られない	灰白色N7/1	●SP519	
白 器		322	●丸味をもつ底盤から外方にひろがる口縁部、口縁部はやや尖り気味に終わる	●内面見込みに1条の段をもつ ●底部下半から底盤にかけて無脚	灰白色10YR/1	●SX3	



第66図 木製品実測図



第67図 木製品実測図



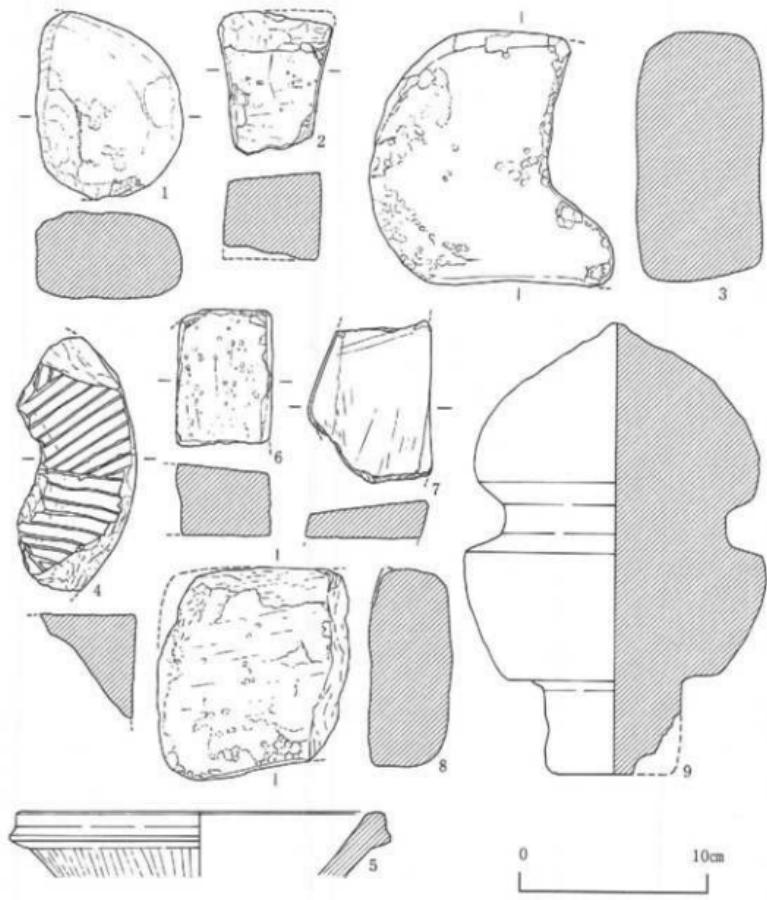
第68図 木製品実測図

表6 中世木製品観察表

器 形	番 号	法 量	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
鎌	1	長 34.1 幅 2.0 厚 1.9	○柄の断面は先端部正方形、基部は梢円形 ○丁寧に削られているためノミ痕は見られない ○完形	○SE16 ○針葉樹
櫛	2	長 (4.8) 幅 (3.25)	○歯の幅0.1cm、厚さ0.1cm ○残存歯数12本 ○歯間が広く、頭髪をすくのにもちいられたと思われる ○両端欠損	○SE04 ○広葉樹
鍤(槌の子)	3	長 (4.8) 幅 2.8 厚 2.9	○丸太の中央に浅く溝が一周する形態 ○溝は粗い削り ○側面は表皮を取り去る程度の加工 ○ノミ原体幅0.45cm ○ほぼ完形	○SX02 ○針葉樹
草履状木製品 (板金剛)	4	長 (20.05) 幅 4.8 厚 0.3	○ワラあるいはイグサで編んだと思われるもの付着、 また圧痕が見られる ○復元幅9.6cm ○遺存状態不良	○出土地不明 ○針葉樹
	5	長 (15.2) 幅 8.45 厚 0.3	○ワラあるいはイグサの圧痕が見られる ○表面剥離 ○遺存状態不良	○SE04 ○針葉樹
漆器椀	6	高台径 6.6 器高 (2.9)	○内外面共に黒色漆地 ○遺存状態不良	○SE04 ○広葉樹
	7	高台径 5.6 器高 (5.9)	○内外面共に黒色漆地に、内面朱色漆で文様 ○器體部厚さ0.55cm、底部1.5cm ○遺存状態不良	○SE06 ○広葉樹
	8	口 14.2 器底 9.9 底 8.2	○内外面共に黒色漆地に朱色漆で文様 ○内面底部、外面部に家紋状の文様 ○遺存状態やや不良	○SE09 ○広葉樹
用途不明	9	長 6.0 幅 10.1 厚 1.2	○表面に刃物キズとノミ状の加工痕が見られる ○完形	○SX02 ○針葉樹
柱根	10	長 (19.4) 幅 (14.9) 厚 (7.9)	○遺存状態不良	○SP598
用途不明	11	長 (12.6) 幅 (3.4) 厚 (1.9)	○1カ所鉄釘貫通、釘はサビ付着 ○遺存状態不良	○淡緑灰色中砂 混りシルト ○針葉樹
	12	長 (7.1) 幅 (7.1) 厚 1.8	○無数の加工痕 ○遺存状態やや不良 ○復元径7.4cm	○SE04 ○広葉樹カシ
	13	長 (18.4) 幅 3.45 厚 2.2	○両端と裏面に加工痕 ○ノミ原体幅1.7cm	○SE04 ○広葉樹
	14	長 19.85 幅 3.0 厚 1.3	○両端に3カ所の木釘穴、うち2カ所木釘残存 ○楕円の把手? ○ノミ原体幅1.5cm ○完形	○SE13 ○広葉樹

器 形	番号	法 量	器 形・技 法 の 特 微	備 考
用途不明	15	長 11.2 幅 (5.25) 厚 1.5	○凹み部は使用の為あるいは、加工痕いずれかは不明 ○遺存状態不良	○SE04 ○針葉樹
	16	長 37.9 幅 3.3 厚 3.0	○釘穴12カ所、うち2カ所鉄釘残存	○SE04 ○針葉樹
柄杓	17	口 12.5 高 13.4 底 12.8	○側板・まわし側板は一重、桜皮で一列止め ○底板は楕円形一枚板、木釘穴4カ所 ○柄を通して穴は方形(2.4×1.3)、円形(0.5×0.7) ○曲物ほぼ完形、柄なし	○SE13 ○針葉樹
曲物	18	口 16.4 高 (8.3) 底 16.45	○側板・まわし側板は一重、桜皮で一列止め ○底板は楕円形一枚板、木釘穴8カ所、刃物キズ7カ所 ○口縁部欠損、ほぼ完形	○SE16 ○針葉樹
	19	口 18.2 高 13.25 底 18.8	○側板・まわし側板は一重、桜皮で一列止め ○底板は楕円形一枚板、木釘穴9カ所 ○ほぼ完形	○SE14 ○針葉樹
	20	口 9.4 高 6.0	○側板一重、一列止め(側面に2カ所穴) ○底板なし ○遺存状態不良	○SE04 ○針葉樹
曲物底板	21	長 20.45 幅 (6.8) 厚 0.2	○方形、折敷の底板? ○桜皮穴7カ所 ○表面に無数の刃物キズ	○SE04 ○針葉樹
	22	長 26.3 幅 (6.2) 厚 0.35	○方形、折敷の底板? ○桜皮穴5カ所 ○表面に無数の刃物キズ	○SE04 ○針葉樹
	23	長 19.0 幅 18.2 厚 0.7	○やや楕円形、完形 ○木釘穴7カ所 ○一枚板のち合わせ板(割れたため) ○裏面に無数の刃物キズ ○遺存状態良好	○SE16 ○針葉樹
	24	長 15.1 幅 15.0 厚 0.5	○ほぼ正円形、ほぼ完形 ○木釘穴5カ所 ○一枚板	○SE09 ○針葉樹
	25	長 14.0 幅 13.0 厚 0.6	○やや楕円形、完形 ○木釘穴なし ○一枚板 ○裏面削りまたは欠損の為か凹凸が見られる	○SE13 ○針葉樹
	26	長 11.6 幅 10.6 厚 0.5	○やや楕円形、ほぼ完形 ○木釘穴なし ○一枚板 ○表面より左側に刃物キズが見られる	○SE13 ○針葉樹
杭	27	長 (56.1) 幅 4.5 厚 4.5	○表面の樹皮を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り	○暗緑褐色シルト ○針葉樹
	28	長 (42.8) 幅 5.3 厚 4.9	○表面の樹皮を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り	○暗緑灰色シルト ○針葉樹

器 形	番号	法 量	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
杭	29	長 (26.4) 幅 5.7 厚 6.3	○表面の小枝を取り去る程度の加工 ○杭先3面取り	○暗緑褐色シルト ○針葉樹
	30	長 (42.4) 幅 4.2 厚 4.3	○表面の小枝を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り	○暗緑褐色シルト ○針葉樹
	31	長 (43.2) 幅 3.7 厚 3.7	○表面の樹皮を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り	○暗緑褐色シルト ○針葉樹
	32	長 43.9 幅 5.1 厚 4.5	○表面の樹皮を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り ○ほぼ完形	○SD22 ○針葉樹
	33	長 (45.4) 幅 4.6 厚 4.5	○表面の樹皮を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り	○SD22 ○針葉樹マツ (ニキ松)
	34	長 46.6 幅 4.55 厚 4.6	○表面の小枝を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り ○ほぼ完形	○SD22 ○針葉樹
	35	長 (48.0) 幅 5.45 厚 4.5	○表面の小枝を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り	○SD22 ○針葉樹
樋	36	長 50.4 幅 4.3 厚 4.5	○表面の樹皮を取り去る程度の加工 ○杭先4面取り ○完形	○SD22 ○針葉樹
	37	口 17.8 高 15.6 底 18.2	○台形をなす12枚からなる側板 ○側板は側面と平面に木釘穴 ○竹製の籠を3カ所で止める ○底板は2枚からなる合わせ板を、竹釘で止める	○SE16 ○針葉樹
木簡	38	長 12.3 幅 3.5 厚 0.45	○「蘇民将来之住宅也」の墨書痕	○SE04 ○針葉樹
	39	長 (15.4) 幅 2.45 厚 0.25	○墨書痕なし ○表面に刃物キズ	○SE04 ○針葉樹
	40	長 (18.8) 幅 3.4 厚 0.4	○墨書痕なし ○裏面全体に刃物キズ	○SE04 ○針葉樹
鉄釘	41	長 (5.0) 幅 1.2 厚 1.1	○頭部はし字状に曲がる ○断面台形	○床土
キセル	42	長 13.45 幅 1.1 厚 0.8	○蘆草を詰める口(火皿)と、火皿の彎曲している部分(瓶首)と、吸い口からなる ○完形	○耕土



第69圖 中世石器實測圖

表7 中世石製品観察表

器 形	番号	法 量	器 形 の 特 徴	備 考
叩き石	1	長 (10.5) 幅 (7.9) 厚 4.65 重 575.9	○片側欠損 ○全面使用	○ SD192 ○緑褐色砂岩製
砥石	2	長 (7.6) 幅 8.1 厚 5.05 重 273.2	○3面砥石面として使用	○ SX02 ○乳灰色凝灰岩 製
	3	長 (13.15) 幅 (13.8) 厚 6.8 重 1723.5	○片側欠損 ○全面砥石として使用	○ S?03 ○淡赤褐色砂岩 製
粉挽き臼 (上臼)	4	復元直径 (17.8) 残存器高 (5.75) 重 411.5	○約1/3残 ○臼目6分画8溝・10溝 のくりかえし ○かすかに同心円状の磨 耗痕あり ○臼溝幅0.5cm	○ SE13 ○淡茶色砂岩製
石鍋	5	復元口径 19.4 残存器高 3.5 体部厚さ 1.2 重 94.6	○体部から口縁部にかけて斜め上方に直線的に立ち上がる ○内面削り後研磨、外面削り痕明瞭 ○煤が付着している	○ SE06 ○灰色滑石製
砥石	6	長 (7.35) 幅 (5.15) 厚 4.2 重 241.2	○2面砥石面として使用	○ SE04 ○黄灰色凝灰岩 製
	7	長 (8.7) 幅 6.7 厚 (2.3) 重 182.3	○3面砥石として使用	○ SE13 ○灰色白雲母— 黑雲母—石英 片岩製
	8	長 (10.4) 幅 11.5 厚 4.55 重 881.0	○片側欠損 ○全面砥石面として使用	○ SD216 ○灰色角閃石— 石英片岩製
五輪塔	9	長 24.3 幅 16.2	○空輪部、ほぼ完形	○ SE14 ○灰色凝灰角砾 岩製

VII. 附編

1. 鬼虎川遺跡第25次調査を主とする河内平野の環境と植生の変遷

金原正明

1. はじめに

鬼虎川遺跡第25次調査において環境と植生の変遷の検討の機会を得たので検討を加える。鬼虎川遺跡第35次調査でも分析を主に検討を行ったが、時期など新たなデータが得られまた周囲の遺跡の資料も増加したので、ここではそれらも加えて整理し検討を加える。なお、以下の高さは何も表記しないものはT.P.であり、O.P.の場合は(O.P.)と記した。

2. 鬼虎川遺跡第25次調査（調査担当者による記録と分析結果より）

埋没した海食崖から西方30m間が調査された。-1.3mまでは更新統であり、-1.4mに火山灰が挟まる。その上を海成から汽水成層(20-31層)が不整合に覆い、最も厚いところで2mの層厚をもつ。海成-汽水成層は東部の海食崖に向かって傾斜して上がりつつ堆積する。海成-汽水成層はシルト、砂、礫からなり、海食崖に近い縁辺部がより粗粒になる。海成-汽水成層は不整合によって下部(29-31層)とそれより上部に分けられる。下部に含まれる材の¹⁴C年代は6660±170 yrs BP(31層)と5300±150 yrs BP(29層)を示す。下部は海食崖に近い縁辺部には分布しない。不整合の存在から、海が退き浸食が行われ再び海進が行われたことが考えられる。下位の29層の¹⁴C年代から、約5300年前より以降の時期が考えられる。

上部では北白川II式、大歳山式、鷹島式の繩文土器が含まれるが、材の¹⁴C年代値が逆転していたり、繩文土器の年代とも一致しないものもあり、再堆積物が多く含まれていると考えられる。上部は少なくとも下部の5300±150 yrs BP以降の堆積物であり、最も新しい年

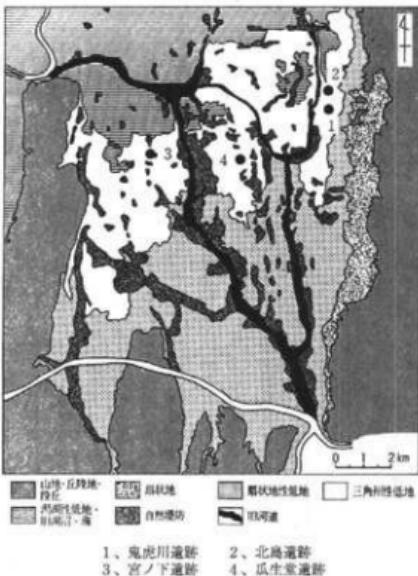


図1 河内平野の地形と遺跡の位置

年代値の 4500 ± 150 yrs BPの頃かそれ以降の堆積の可能性がある。海成一汽水成層の上部は海食崖近くで約+2.0mの高さまで堆積する。海食崖下の海成一汽水成層上部は汀段状の面をもつ部分もあり、西方(沖)に向かって一様に傾斜せず堆積物も入り組む。海食崖には+1.8mないし+2.0mの高さにノッチ状の断面がある。海食崖部には5300年前以前の堆積物は認められず、正確な時期は不明である。海成一汽水成層上部と海食崖の間に堆積物を挟むがノッチによって崩壊した堆積物ともみられ、海食崖の形成が海成一汽水成層の上部に伴うものである可能性もある。

海成一汽水成層より上位はシルトや粘土が堆積し(17—20層)、その上部には上面が第I・II様式の弥生の遺構面となる黒色粘土層(13—16層)が分布する。

珪藻分析では海成一汽水成層下部の29層で内湾指標種や海水藻場指標種が優占し、藻場を伴うやや浅い内湾の環境が示唆される。上部の28層では海水生種が多産し、外洋の影響の大きい内湾の状況が示唆され、海水準の上昇が考えられる。27層以上の海成ないし汽水成層の上部では海水泥質干潟指標種が優占し、海水藻場指標種と内湾指標種が伴われ、藻場を伴う海水一汽水の泥質干潟の環境が示唆される。19層では淡水生種が主体となり陸生珪藻が大半であり、やや湿ったかやや乾いた陸域になったと考えられる。花粉分析では、29層から20層までアカガシ亜属が優占し、29層から27層はエノキ属—ムクノキやモミ属がやや多い。

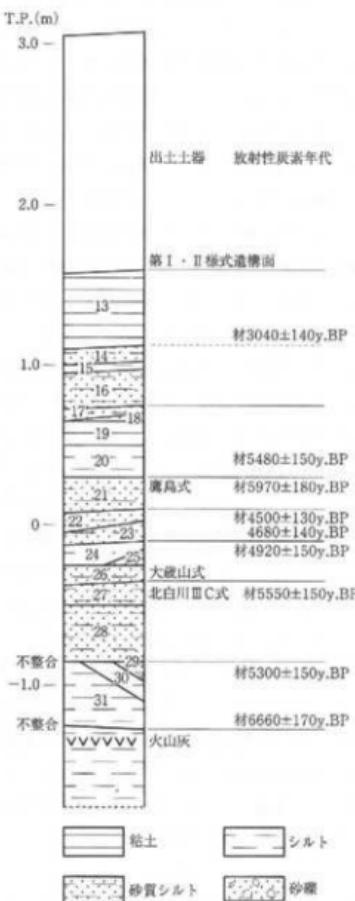


図2 鬼虎川遺跡第25次調査Y=-32.875付近における層序、出土土器、放射性炭素年代値(福永、1989から作成)

3. 鬼虎川遺跡および河内平野の遺跡の近年の調査

(1) 鬼虎川遺跡第32次調査(東大阪市文化財協会、1994、1997より)

埋没した海食崖から西方70m間が調査された。-2.0mまでは更新統であり、火山灰が-2.0

mから西側では-2.3mの深さに挟まれる。海成一汽水成層(14-17層)が不整合に覆い、最も厚い部分で1.2mの厚さをもつ。海成ないし汽水成層の最下部(17層)は砂礫からシルトで構成されるやや粗粒の堆積物であり、その上の下部(16層)は細砂からシルトを主体とする。最下部(17層)と下部(16層)は海食崖の近くには分布しない。上部(14-15層)は砂混じりシルトである。最下部(17層)と下部(16層)は不整合状に堆積しているが明らかでない。海成一汽水成層にはミドリシャミセンガイが含まれ生痕がある。海食崖下には平滑な斜面をもつ構造も確認されている。14層からはヌマガイも出土し淡水化が進んでいる。

最下部(17層)に含まれる材の¹⁴C年代は 5350 ± 100 yrs BP、 5530 ± 110 yrs BP、 6940 ± 160 yrs BP、下部(16層)の材は 3390 ± 140 yrs BP、 4620 ± 180 yrs BP、 5700 ± 210 yrs BP、 5910 ± 180 yrs BP、上部(14-15層) 4700 ± 170 yrs BP、 5060 ± 110 yrs BP、 5100 ± 90 yrs BPである。17層からは北白川下層Ⅱ式、15層から後期、14層から北白川下層式、12層から前期、10層からは元住吉山式の縄文土器が出土している。最下部(17層)では¹⁴C年代と縄文土器の時期がほぼ一致するが、下部(16層)と上部(14-15層)は¹⁴C年代値および土器の時期の逆転や不一致があり、再堆積が著しかったと考えられる。この地点の海成一汽水成層上部は、下部(16層)で得られた最も新しい¹⁴C年代値の 3390 ± 140 yrs BP(縄文後期後半)前後の堆積物と考えるのが妥当ではなかろうか。海成一汽水成層には多くの漂着軽石が含まれ、化学組成から若狭高浜貝層からも同一起源と考えられる漂着軽石があり(西田、1993)、付着するカキの¹⁴C年代は 3830 ± 90 yrs BPが得られている。

海水一汽水成層より上位は、シルトないし粘土がラミナ状に発達し(12-13層)、黒色シルトないし粘土層(11-12層)が堆積する。

海食崖には+1.7mにノッチが認められ、平均海面で現海水準の約1.0mの上昇が考えられている。海食崖はノッチ部分も含め崩壊したとみられる堆積物が堆積している。ノッチの明らかな時期は不明であり、層序関係から15層より以前である。海成ないし汽水成層上部の15層は、約+2.0の高さまで分布し、海水準がノッチより高いこの高さ前後まであったことが考えられる。16層が¹⁴C年代から縄文後期後半と考えられ、より上位の15層は縄文後期後半かそれ以降の堆積物と考えられる。

(2) 鬼虎川遺跡第33次調査(東大阪市文化財協会、1996より)

埋没した海食崖から西方(沖)70m間が連続して、90mから180mまでは4ヶ所が調査された。海食崖から連続する70m間では、-2.0mまでは更新統であり、火山灰が-2.0mから西側では-2.3mの深さに挟まれる。海成一汽水成層(75-77層)が不整合に覆い、最も厚い部分で1.0mの厚さをもつ。海成一汽水成層の最下部(77層)は円礫を多く含む粗粒の堆積物であり、やや不連続に分布する。その上位に細砂で構成される下部(76層)が堆積する。最下部(77層)と下部(76層)は海食崖の近くには分布しない。上部(70-71-75層)は中粗砂であり、生痕があり、海食崖下では平滑な斜面をもつ堆積構造もあるが、単一ではない。

最下部（77層）は栗津SZ-1式～北白川下層I式（約6500年前頃）が、下部（76層）は北白川下層II式～大歳山式（5000～6000年前頃）が、上部の71層は船元I・II式（4500～5000年前）の縄文土器が出土している。海成一汽水成層より上位には62層は黒色と灰色のシルト～粘土の互層、黒色のシルト～粘土が順に堆積する。海食崖には+1.7mに平坦面を伴うノッチ状部がある。平坦面を伴うノッチ状部と海成一汽水成層とは層序関係は直接つながらず、形成時期は不明である。

海食崖から西方（沖）90mから180mにかけては、30mおきに調査されている。90m地点では-2.2m、180m地点では-3.6mまでが更新統であり、火山灰がそれぞれ-3.2mから-5.3mかけて西方に傾斜して分布する。海成一汽水成層の最下部は円礫と細砂が20cm前後の厚さで堆積する。上位には生痕のある細砂ないしシルトが1.5mの厚さから西方の深い部分には2.5mの厚さで堆積する。その上位には上部の粘土が堆積する。この粘土は、海食崖～70mの層序にはなく上部中～粗粒砂が分布する。海食崖から70m～90m間の層序の空白部で変異する。これら海成一汽水成層の上には、黒色と灰色のシルト～粘土の互層、黒色のシルト～粘土が堆積するが、黒色シルト～粘土は90mと120mの地点には欠如する。

（3）鬼虎川遺跡第35次調査（東大阪市文化財協会、1997）

埋没した海食崖から西方（沖）に260mと320mである。新たに¹⁴C年代値が得られており、年代の修正も含めて検討を行う。260mの地点では下位より海成一汽水成層下部の厚さ0.3m前後の砂混じりシルトと厚さ0.8mの粘土が堆積する。砂混じりシルトの下面ないし過半には礫が堆積し、南北方向に集積して配列する。海進が進行する過程の汀の礫列と考えられる。礫にはカキが付着し潮間帯の環境が示唆される。カキの¹⁴C年代は6550±60 yrs BP（補正¹⁴C ageで6930±60 yrs BP）を示し、この時期に-4.5m前後まで海進が行われていたと考えられる。320m地点では最下部には下位から砂混じりシルト質粘土、粘土が堆積する。シルト質粘土のハマグリは、6230±80 yrs BP（補正¹⁴C ageで6650±90 yrs BP）を示す。もぐり込んだと考えられ、より上位の環境を示すと考えられる。ハマグリの生育する2～3mの浅海が推定される。上位は海成一汽水成層下部のシルトが2.0mの厚さで堆積し、生痕が著しい。シルトの最上位と最下位の¹⁴C年代は5700±50 yrs BP（補正¹⁴C年代で5680±50 yrs BP）と5320±60 yrs BP（補正¹⁴C年代で5290±40 yrs BP）である。珪藻分析では海成一汽水成層の最下部と下部は、海生種の内湾指標種群が卓越し、¹⁴C年代で6550±60 yrs BP（補正¹⁴C年代で6930±60 yrs BP）から5320±60 yrs BP（補正¹⁴C年代で5290±40 yrs BP）の間に内湾であったと考えられる。最下位では干潟に生息する種類がやや多く、海進の進行時に干潟化した時期があったと考えられる。最上位では海水泥質干潟指標種が多くなり、干潟が拡大する。約5300年前に海退が開始されたことが考えられる。

海成一汽水成層上部は厚さ0.7～0.8mの粘土が堆積し260m地点より320m地点が厚く層も分かれる。漂着軽石が含まれ、細層をなすか水平点在する。海成一汽水成層より上位は黒色

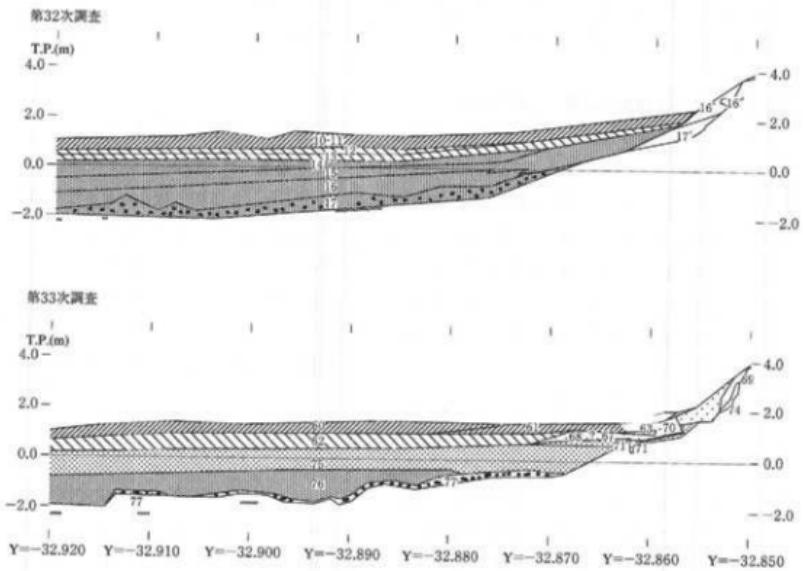
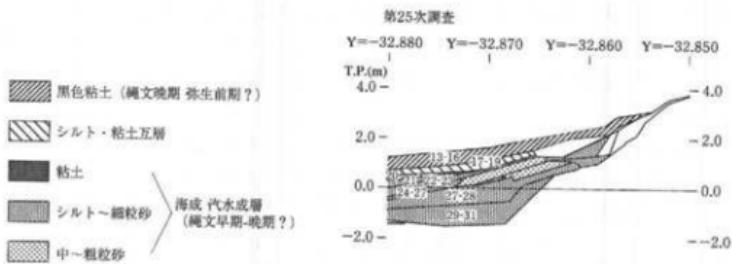


図3 鬼虎川遺跡における河内湾東岸の堆積物分布

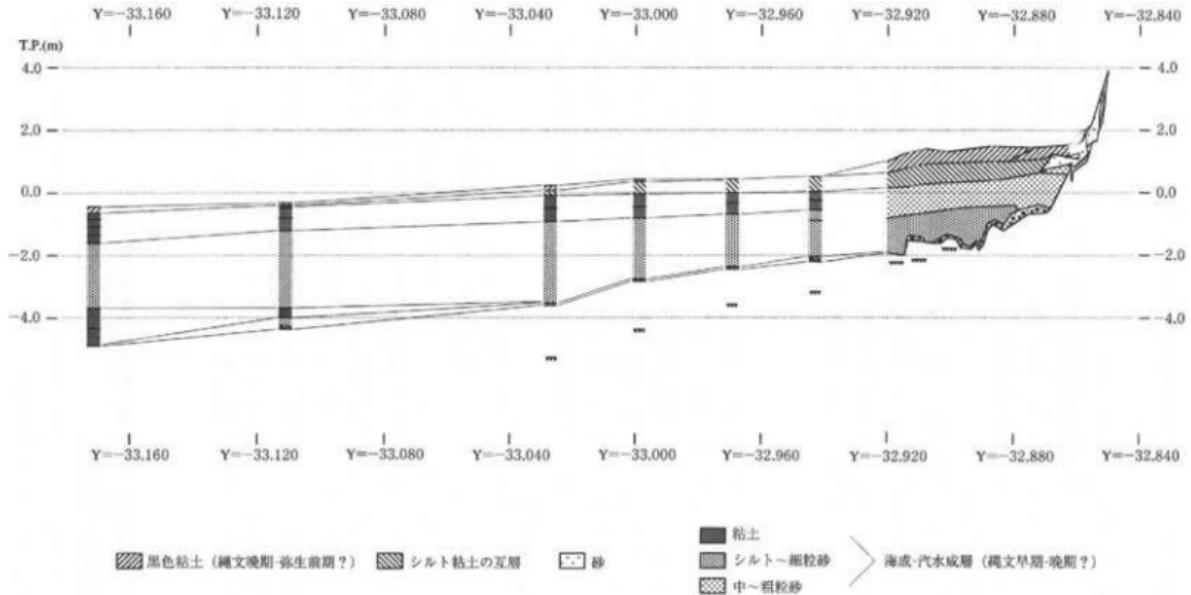


図4 鬼虎川道路第33次調査～第35次調査の海成～汽水成層分布

粘土で320m地点では黒灰色を呈し緑灰色粘土が部分的に挟まれる。

(4) 北島遺跡（東大阪市文化財協会、1996）

-1.9mから-1.1mまで縄文時代後-晚期砂質泥層が堆積し、-1.1mから-0.6mまで縄文時代晚期泥層、-0.6mから-0.3mまで縄文時代晚期-弥生時代前期泥層が堆積する。珪藻分析からは、縄文時代後-晚期砂質泥層は海水泥質干潟指標種が優占し、海水砂質干潟指標種、内湾指標種、海水藻場指標種が伴われる。この時期は砂質干潟、海水藻場、内湾の環境を伴う海水汽水の泥質干潟の環境が考えられる。縄文時代晚期泥層では、珪藻が極めて少ないが、海水生から汽水生の珪藻が出現する。縄文時代晚期-弥生時代前期泥層より上位は淡水生の珪藻が出現し、淡水域ないし陸域の環境が示唆される。よって縄文時代晚期に-0.6mの高さで海水ないし汽水の影響がなくなり、淡水化する。弥生時代中～後期は陸生珪藻が一時的に増加する。

(5) 宮ノ下遺跡（東大阪市文化財協会、1996）

-5.0mから-1.7m前後まで海成の砂、シルト、粘土が堆積する。時期は直上層の¹⁴C年代から約3200年前以前と考えられる。珪藻分析では内湾指標種群が優占し外洋指標種群と海水泥質干潟指標種群が伴われ、海水泥質干潟を伴う内湾の環境が示唆される。-1.7mから約0.0mはシルト～粘土が堆積し、地点が異なるが、¹⁴C年代は 3290 ± 190 yrs BPが得られ、船橋式が出土している。珪藻は汽水泥質干潟指標種および汽水藻場指標種が優占し、汽水の泥質干潟の環境が示唆される。

これらの海成汽水成堆積物を浸食して浸食谷が形成され、シルトないし粘土が不整合に堆積する。底部は約-2.0mにあり、その下部の堆積物で 2300 ± 90 yrs BP～ 3120 ± 90 yrs BPの¹⁴C年代値を示し船橋式が出土している。上部は弥生時代中期初頭である。浸食谷の堆積物の珪藻群集では汽水泥質干潟指標種、汽水藻場指標種および汽水生種が優占し、汽水の泥質干潟の環境が示唆される。弥生時代前期前半は海水・汽水の影響が小さくなる。その上位は+0.2mまで弥生時代中期初頭から後半のシルト粘土が堆積し、珪藻分析では汽水生種ないし汽水泥質干潟指標種が優占し、汽水の泥質干潟の環境が示唆される。+0.2mより上位は弥生時代中期末以降の堆積物が分布し、淡水生止水性の珪藻が優占する。

なお、¹⁴C年代であるが、材と貝が行われており、特に材はかなり古い年代値を示しており、二次堆積とみなされる。

4. 河内平野における海成汽水成層の分布と海水準の変動

(1) 関連する既知の研究の外観

河内平野の海進や海退を含む自然環境の研究は、中野(1981)、野口(1987)、那須(1989)らが珪藻分析あるいは総合的に資料を整理しまとめている。

中野(1981)は瓜生堂遺跡の+1.1m~-7.2m(O.P.)の堆積物の珪藻分析を行い、-7.2m~-2.0mまでは内湾の環境で、-1.0mで汽水域になり、-0.6mで海水の影響をほとんど受けない汽水一淡水域、-0.4mで海水の影響を受ける汽水域、-0.2mないし-0.05mでは内湾の汽水域ないし内湾、+0.35mないし+0.45mで汽水一淡水域、+0.6m以上は淡水域の環境へと変遷することを示した。-7.2mはすでに海進で-2.0mまで続き、-1.0mから海退し-0.6mで海退の最盛期になり、再び海進が行われ0m付近で最盛期となり、上位に向かって海退し+0.6mで海水の影響がなくなる。双方とも60cm前後の厚さの堆積層の小海退と小海進である。小海進は縄文時代晚期から弥生時代前期、小海退は弥生時代前期ないし中期にある。

野口(1987)は亀井遺跡、美園遺跡、山賀遺跡、西岩田遺跡、新家遺跡の珪藻分析を検討している。弥生時代前期までの海域は北部ほど強くなり南部は河川の影響が強くなる傾向をもち、温暖な海産の珪藻が出現し暖海型の海成堆積物が認められるが、不明な点も多いとする。縄文晚期~弥生前期にかけて、北部では冷水性の湖沼種が増加し、南部では渓流性や湿地性の珪藻が増加し、気候の寒冷化とそれに伴う海面低下、海退の影響を考える。弥生中期に泥炭質湿地が形成され、海退の最盛期があり、後期になると湖沼が広がる。

那須(1989)はそれまでの資料をから、縄文海進によって形成された「河内湾」の海面の高さが現在より約1.5~2m高かったこと、縄文後期には汽水域ないし淡水域になったこと、縄文晚期には著しい下剝作用によって浸食谷が形成され連続性のよい黒ボク状の黒色土壌や低湿地部では黒色粘土層が堆積したこと、弥生遺跡の発達と環境の関連などの知見をまとめている。

完新世における海面変化は、太田ほか(1990)が1980~1988における研究をまとめ展望を示している。それによると、相対的海面変化は、10000年前頃の海面の一時的停滞あるいは低下、6000年前頃を中心とする海面高潮期、5000~4000年前頃の「縄文中期の小海退」、3000~2000年前の「弥生の小海退」があり、地盤変動等により潮位や年代に地域差がある。大阪湾沿岸では5000~5500年前頃を中心に高潮期が出現し、大阪湾沿岸および播磨灘では約4500年前頃に海面の低下、播磨灘では3000年前~2000年前の小海退が認められている(前田、1980、成瀬ほか、1985)。

(2) 河内平野の海成一汽水成層の分布と海水準変化、海進、海退

以下に海水準も含め考察するが、海面においては高潮位と低潮位および平均海面がある。現状の研究はほとんどはこれらに考慮していない。考慮しない場合、ノッチは高潮位を示すだろうし、後浜の堆積は高潮位より高いことにもなる。海水の影響を視点とするならば、高潮位が基準となるだろうし、汽水域での海水は満潮では高潮位より奥に影響を及ぼすであろう。ここではこれらを不確定要素として考慮しないで検討を加える。よって、たいていは高潮位が海水準や海面としてとらえられると考えられる。

鬼虎川遺跡の海成一汽水成層は各地点において下部と上部にさらに地点によっては疊の多い最下部が分布する。第25次調査地点では下部と上部は不整合をなし、下部は¹⁴C年代から約5300年前頃から以前の海成層である。第32次調査地点では¹⁴C年代から最下部がそれに対応し、第33次調査地点では土器から最下部ないし下部が対比される。第33次調査の海食崖から西方(沖)90mから180mでは、最下部にノッチと下部に対比されるシルト～細砂が分布する。第35次調査地点は、第33次調査の海食崖から西方(沖)に260mと320mの地点であり、260m地点では疊混じり砂と粘土が堆積し、海成一汽水成層下部と最下部にあたる。最下部の粘土層は沖積層中部海成粘土層に相当すると考えられる。疊に付着のカキの¹⁴C年代から6550±60 yrs BP(補正¹⁴C ageで6930±60 yrs BP)には海進の進行する汀線であったとみなされる。下部は¹⁴C年代から5700±50 yrs BP(補正¹⁴C年代で5680±50 yrs BP)から5320±60 yrs BP(補正¹⁴C年代で5290±40 yrs BP)の堆積である。これらの年代と珪藻分析における内湾指標種と外洋指標種の消長からみて、海面高潮期は6000～5500年前頃であったと考えられる。海食崖にはノッチがあるが、時期が不明瞭であり、層序からはこの時期を含む以降の時期に形成されたノッチとみなされる。

第25次調査と第35次調査では、下部の上位の5300年前頃に干潟化が行われ、海退が進行する。第25次調査地点では下層と上層の不整合から、5300年前以降に浸食が行われる。不整合面の高さからみて、少なくとも-1.0m前後は海退が行われたと考えられが、海進の進行に伴う浸食も考えられる。

第25次調査地点では上部の最下層で外洋の影響のある内湾の環境になり、上部は海水一汽水の泥質干潟の環境になる。各地点とも上部層あるいは層序関係から上部に相当する砂層が海食崖に向かって+2m前後の高さまで堆積する。上部の時期には+2m前後まで潮位が達していたとみなされる。海食崖のノッチは+1.7mから+2.0m付近に位置し、ノッチと上部層との間に堆積物がある。各報告の記載からはこの堆積物の性格は読みとれず不明だが、崖の崩壊した堆積物とも考えられる。これらの状況から、ノッチは海成一汽水成層上部に伴う可能性が高いと考えられる。海成一汽水成層上部の海進時に海食崖が再度浸食されたのではなかろうか。海退時期は、鬼虎川遺跡では5300年前の直後であり、約5000年前頃が最盛期と考えられる。各地点の海成一汽水成層上部は、¹⁴C年代値が逆転したり、土器の時代観と合わないものが多く、再堆積が著しい。海成一汽水成層上部は、第25次調査の最も若い¹⁴C年代からみて下限が約4500年と考えられ、第32次調査では縄文時代後期の土器が含まれることから、縄文時代後期までの堆積物と考えられる。上部の上位ではヌマガイが検出され、淡水化が進行している。第32次調査では下部から最も若い¹⁴C年代で3390±140 yrs BPが得られており、下部ないし下部が部分的に縄文時代後期まで降る可能性がある。第33次調査地点から第35次調査地点にかけては海食崖から90m以遠に海成一汽水成層上部にあたる粘土が堆積し、海食崖から70m付近まで海成一汽水成層上部の様相が異なる。鬼虎川遺跡からは、5300年前頃～4500年前頃に海退、4500年前頃から3000年頃に海進が行われたことが考えられた。

海成一汽水成層の上位には、特徴的なシルト粘土の互層がありその上部に縄文時代晩期から地點によっては弥生時代前期も含む黒色粘土が分布する。シルト粘土の互層と黒色粘土は海食崖に近い所によく発達する。第33次調査の90mより以遠や第35次調査地點では発達が悪く欠如する地點もある。シルト粘土の互層は水域の水位が微妙な増減を繰り返しつつ後退していくときに形成された汀線の堆積物ではなかろうか。鬼虎川遺跡第35次調査地點では、草本花粉の優占による水生植物の急増から海成一汽水成層の上限は-0.6mで縄文時代晩期末である。北島遺跡では珪藻分析から縄文時代晩期に-0.6mで淡水化し、宮ノ下遺跡では海成一汽水成層の上限は船橋式期の-0.1mかややそれより高いかである。縄文時代晩期の船橋式期には-0.1mで海水の影響があるが、晩期末に-0.6mで淡水化し海水の影響がなくなる。瓜生堂遺跡では、-0.6m(O.P.)で海水の影響をほとんど受けなくなり、縄文時代晩期から弥生時代前期の小海退が示唆されている。船橋式以降の縄文時代晩期に海水準の低下が認められる。

宮ノ下遺跡では船橋式期の堆積層から約-2.0mまで下刻する浸食谷が形成され、内部には船橋式から長原式、弥生時代中期初頭までの土器と貝層を伴う汽水泥質干潟の堆積物で埋積される。宮ノ下遺跡では船橋式の時期に下刻が行われ浸食谷が形成される。海水準の低下に伴われる下刻と考えられる。船橋式の時期の中で埋積が行われ汽水城になることから、下刻後海水準が上昇が進んだと考えられる。浸食谷の上位に弥生時代中期初頭～後半の汽水泥質干潟の堆積物が分布し、+0.2mより上位で淡水成の弥生時代中期末以降の堆積物になる。宮ノ下遺跡からみると、船橋式期には-0.1m前後の海水準が推定され、同じ船橋式期に海水準の低下が行われ、下刻により浸食谷が形成される。浸食谷の深さの約-2.0mであるが、鬼虎川遺跡や北島遺跡では縄文時代晩期末に-0.6mまで海水の影響がある。河内平野で黒色粘土なし黒ボク状土壤が形成されはじめる時期と一致する。これらの現象は船橋式期という单一の短い期間において生じたものかどうかその時期のを含む期間の変化の一つなのか今後の類例の調査を待たねばならない。宮ノ下遺跡浸食谷には汽水泥質干潟の堆積が堆積し海水準の上昇が考えられる。海水準の上昇は弥生時代中期で+0.2mで最高となり、中期末以降は低下する。瓜生堂遺跡では-0.2～+0.05m(O.P.)前後で内湾の汽水城ないし内湾の環境であり、弥生時代前期から中期の小海進が示唆される。+0.35～+0.6m(O.P.)にかけて汽水泥質干潟から淡水城へと変化する。また、瓜生堂遺跡では弥生時代前期の包含層が-1.5m付近にまで分布し、中期の遺構面が-0.7mか-0.8mまで分布する。弥生時代では前期は縄文時代晩期から続く低海面であるが、前期から中期の間に海面が上昇し、中期には低下が進んだと考えられる。

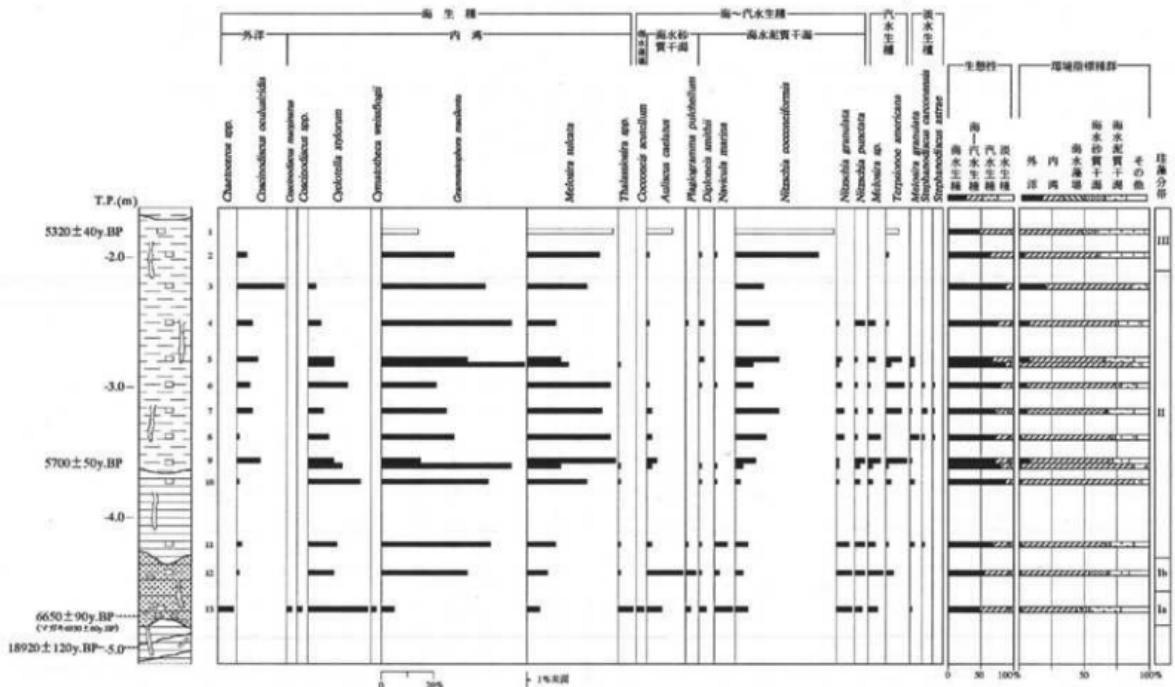


図5 鬼虎川遺跡第35—1次調査第2ピット北壁における主要珪藻ダイアグラム(古環境研究所) ^{14}C 年代は補正値

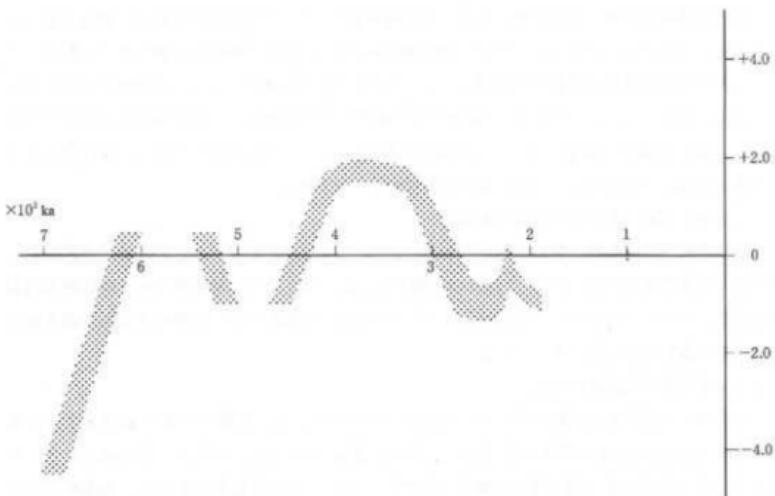


図6 河内平野（河内湾）における相対的海面変化

（3）河内平野（河内湾）における完新世の相対的海面変化

以上の層序や海成一汽水成層の上限の年代や海岸部の海浜砂層の分布から、推定される河内平野（河内湾）における完新世の相対的海面変化をまとめると、

1) 7000~5300年前頃の海面上昇

鬼虎川遺跡の約7000年前に約-4.5まで海水準が上昇する。海面高潮期の最盛期は外洋指標種を伴う内湾指標種の珪藻が優占する約6000年前から約5500年前と考えられる。いわゆる「縄文海進」である。この時期の堆積物である海成一汽水成層最下部と上部は、海食崖下の海浜部で上部が浸食され、上限が不明である。最高部で+0.5m前後の高さであり、高潮期の高さは+0.5m以上であったとみなされる。鬼虎川遺跡の海成一汽水成層最下部の粘土からは沖積層中部海成粘土層に相当すると考えられる。海食崖およびノッチの形成は、この時期ではなく、以後の海進によって形成された可能性が高い。

2) 5300~4500年前頃の海面低下

鬼虎川遺跡では海成一汽水成層下部が浸食され、上部には二次堆積が多く含まれる。この時期の海成一汽水成層は欠如し、海面低下による浸食が行われたと考えられる。下部の上限と上部の下限の時期から、5300~4500年前頃が推定される。「縄文中期の小海退」にあたる。浸食の下限から-1.0m以上の海面低下の可能性がある。

3) 4500~3000年前頃の海面上昇

鬼虎川遺跡の海成一汽水成層上部は二次堆積を多く含み、土器や¹⁴C年代は一致しなかったり逆転したりする。逆転したり古い二次堆積を除けば、4500~3000年前頃と考えられる。この海面上昇の最盛期は堆積物の発達から、+2.0mの上昇が考えられる。海食崖では+1.7mから+2.0m付近にノッチないし平坦面を伴う海浜砂層が堆積する。海食崖近くには最下部ないし下部の堆積物が発達せず、上部の海面上昇によるノッチの可能性が高く、海食崖もこの上部の海進による浸食によって形成された可能性がもたれる。

4) 3000年前頃~弥生時代前期の海面低下

宮ノ下遺跡では船橋式期に下刻が行われて-2.0mの浸食谷が形成される。鬼虎川遺跡、北島遺跡、瓜生堂遺跡では-0.6mで海水の影響がほとんどなくなる。最盛期は縄文時代晚期の船橋式期とみられ-0.6m以下の海面低下が考えられる。海面低下期は約3000年前頃の縄文時代晚期から弥生時代前期と考えられる。

5) 弥生時代前期以降の変化

弥生時代の前期から中期にかけて、海面の上昇があり、瓜生堂遺跡では0.0m付近で最盛期になり+0.6mで海水の影響がなくなり、宮ノ下遺跡で+0.2mで中期末に淡水域になる。弥生時代から弥生時代中期の間に小海進が行われ、弥生時代中期以降淡水化し、海水準の低下が推定される。

5. 河内平野の植生、環境、農耕の変遷

(1) 亜寒帯針葉樹林の時代（約20000~19000年前）

鬼虎川遺跡ではKTR-I帯とKTR-II帯にあたる。KTR-I帯は寒冷種のマツ属単維管東亜属（ゴヨウマツ類）、トウヒ属、草本ではカヤツリグサ科、シダ植物胞子が中心に出現し、モミ属、ツガ属の針葉樹とハンノキ属、カバノキ属の広葉樹およびヨモギ属の草本が伴われる。亜寒帯針葉樹林が分布し、寒冷でやや乾燥した気候が推定される。KTR-II帯ではカヤツリグサ科が増加し、コナラ属アカガシ亜属やコナラ属コナラ亜属の広葉樹が増加する。上位からの生痕が著しく擾乱が考えられ、コナラ属アカガシ亜属などの広葉樹花粉は上部からの混ざり込みとみなされる。草本のカヤツリグサ科が多く分布しトウヒ属やゴヨウマツ類の亜寒帯針葉樹林が分布し、寒冷で乾燥した気候であった。

鬼虎川遺跡第33次調査では、ATとみなされる火山灰層が西方に向かって傾斜して分布し、更新統が西方に傾斜していることが示唆される。

(2) 照葉樹林の時代（約7000~縄文時代晚期）

約19000年前から縄文時代早期（約7000年前）までの地層は欠如する。KTR-III帯では樹木花粉の占める割合が高く、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）が優占する。河内湾の周囲の陸地には、カシ類を主とする照葉樹林が分布していた。

IIIa亜帯とIIIb亜帯は縄文時代早期から前期中頃にあたる。IIIa亜帯ではニレ属一ケヤキ、エノキ属ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、トチノキの落葉広葉樹が伴われる。IIIb亜帯は落葉

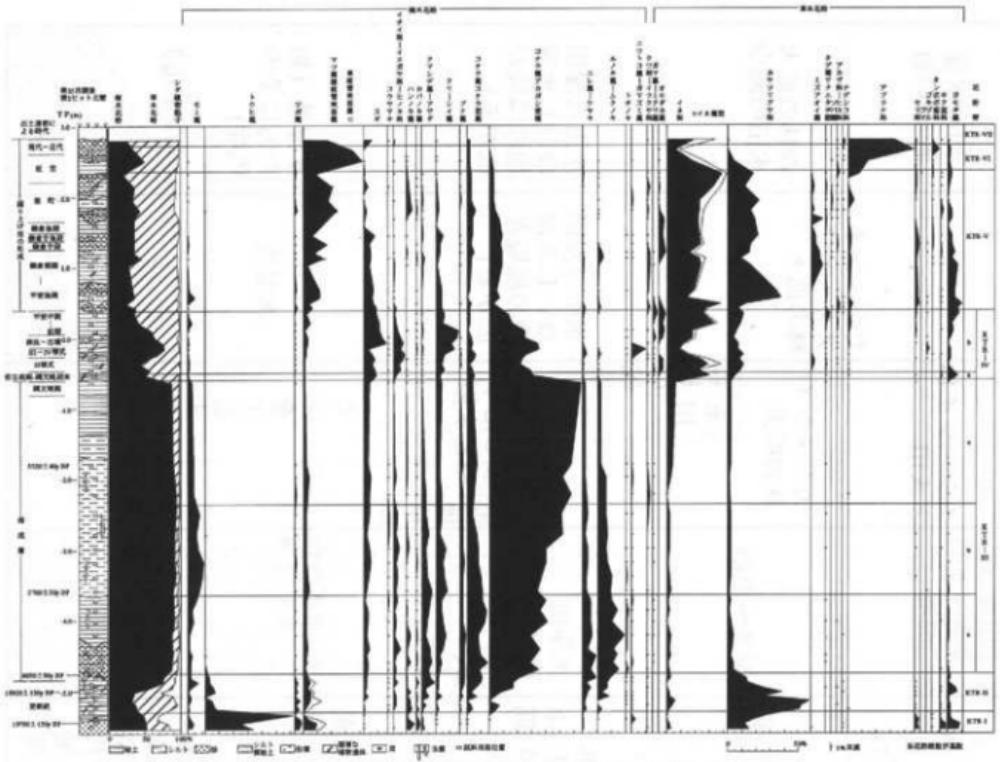


図7 鬼虎川遺跡第33次調査第2ピット北壁の花粉ダイアグラム

時代	宮ノ下遺跡	瓜生堂・巨摩・若江北遺跡	鬼虎川遺跡 第35次調査	北島遺跡
古墳時代	水田ないし湿地～池沼の環境	カシ・シイ林と水田		水田(水湿地の環境)
後期	湿地～池沼	カシ・シイ林の拡大 水田 森林の破壊	カシ・シイ・スギ・ヒノキ林の拡大	森林の拡大 水田の減少
弥生時代中期	水湿地 汽水の影響	比較的乾燥した草原と水田 湿地草原	水田(湿田ないし水湿地の環境が広がる)	水田(湿田ないし水湿地の環境が広がる)
前期内	海水～汽水の影響 貝塚形成	カシを中心とする森林 湖沼	水湿地	水湿地(相対的にやや乾燥) 〔淡水化〕
縄文時代晚期	[開析谷形成] 水湿地 干潟		干潟	干潟

図8 河内平野の遺跡における古環境変遷

広葉樹が減少し、針葉樹であるモミ属が増加する。

縄文時代前期後半から晩期にあたるⅢc亜帯ではコナラ属アカガシ亜属が極めて卓越し、カシ類を主とする照葉樹林が最も卓越する。鬼虎川遺跡25次調査および北島遺跡の下部の花粉層序はⅢb亜帯からⅢc亜帯ないしⅢc亜帯に対比される。

(3) 照葉樹と草本の時代（縄文時代晩期末～平安時代中期）

縄文時代晩期末であるKTR-Ⅳa亜帯では、にイネ科、カヤツリグサ科を主とする草本花粉が急増し、樹木はへ減少する。ガマ属一ミクリ属の水湿地草本も伴われ、干渴であった河内湾が、急速に淡水の水湿地へと移り変わり、草本が繁茂したのである。乾燥したところにはヨモギ属などの草本が生育する。

弥生時代になるとKTR-Ⅳb亜帯で特徴であるイネ属型が出現しだし、稲作が行われ出す。弥生時代中期にはイネ属型を含むイネ科花粉が高率になり、稲作のピークをむかえる。弥生時代末から古墳時代はやや森林が多くなる。KTR-Ⅳ帯の特徴としてスギ、イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科、クリーシイ属がやや増加し気候の軽微な変化と森林への人為干渉がうかがえる。温帯針葉樹林と照葉二次林が増加したと考えられる。時期が経るとややマツ属複雜管束亜属が増加するが、同様の植生が平安時代中期まで継続する。

縄文時代晩期から弥生時代にかけてはいくつかの遺跡で連続して追うことができる。鬼虎川遺跡と北島遺跡では縄文時代晩期に干渴から水湿地の環境になり、水生植物が繁茂する。南北に連なる瓜生堂・巨摩・若江北遺跡では北部には湖沼（干渴の可能性がある）、南部にはカシ主とする森林が分布する。弥生時代前期には湖沼が湿地と水田へと変化する。これらの遺跡では弥生中期になると水田が拡大し営まれる。宮ノ下遺跡では縄文晩期から弥生時代中期にかけて浸食谷が形成され干渴ないし海水・汽水の影響のある浅水域から水湿地の環境が統き、水生植物が生育する。鬼虎川遺跡、北島遺跡、瓜生堂・巨摩・若江北遺跡ではカシ・シイを主とする森林が拡大する。弥生時代後期から古墳時代にかけては森林が増加するという傾向がある。同時期の宮ノ下遺跡では湿地～池沼の環境になり海水の影響がなくなる。また、古墳時代には各遺跡とも水田が拡大したと考えられる。

(4) 平安時代後期～室町時代

KTR-V帯では、マツ属複雜管束亜属（ニヨウマツ類）が増加し、イネ属型が出現率が増加し、ソバ属やアブラナ科の栽培植物が連続的に出現する。森林植生ではマツの二次林が成立し増加する。水田や畑作の集約性がやや高くなる。ミズアオイ属などの水湿地草本の花粉も比較的安定して出現するが、伴って調査した種実同定では、ヒシやオニバスの浮葉植物、マツモ属やフサモ属の沈水植物が検出され、1～2m内外の冠水した環境が考えられる。この時期には掘り上げ田が営まれだし、この環境変化に対応した開発であったとみなされる。

(5) 近世～近代

近世にあたるKTR-VI带ではアブラナ科が急増し、アブラナ科の集約的栽培が行われ出す。近世における菜種油の需要に伴う商用作物としてのアブラナの栽培に対応すると考えられる。マツ属複数管束亞属が増加し、森林植生ではマツ林の造林が行われる。

近代にあたるKTR-VII带ではスギが増加し、近現代の植林による造林を反映する。

6. おわりに

本稿では鬼虎川遺跡を主とする河内平野（河内湾）の海成一汽水成層を検討し海水準の変動を検討し、また植生、環境、農耕の変遷を考察した。問題となったのは、堆積物の時期であり、出土した土器や得られている¹⁴C年代から単純に年代が断定できなかつたことであった。特に海成一汽水成層は材などの再堆積が著しく¹⁴C年代値が土器編年と一致しなかつたり逆転したりしていた。逆に土器が¹⁴C_{zz}年代より古い形式を示すことも多々あった。また、珪藻分析は分析者によりあるいは同じ分析者でも報告によりまとめ方や解析が異なり、推定される環境にやや大きな差違が認められた。今後これらの点に留意して調査を行い、記録をとることが必要であろう。

参考引用文献

- 財団法人東大阪市文化財協会（1994）西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書。
財団法人東大阪市文化財協会（1997）鬼虎川遺跡第35—1次発掘調査報告書。
西田史朗（1993）若狭高浜貝層の漂着絆石—化学組成からみた起源の推定—、高浜貝層、福井市自然史博物館専報。
財団法人東大阪市文化財協会（1996）鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告書。
財団法人東大阪市文化財協会（1996）北島遺跡の耕作地跡と古環境、一寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1発掘調査報告書。
財団法人東大阪市文化財協会（1996）宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書。
財団法人東大阪市文化財協会（1996）布施駅北口駐車場及び寝屋川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書。
中野武登（1981）瓜生堂遺跡の珪藻分析、瓜生堂遺跡Ⅲ、瓜生堂遺跡調査会。
野口寧世（1987）珪藻遺体群による古環境の考察、河内平野遺跡群の動態Ⅰ、大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター。
那須孝悌（1989）活動の舞台：概論、弥生文化の研究、第1卷、弥生人とその環境、雄山閣出版。
太田陽子・海津正倫・松島義章（1990）日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題、第四紀研究、29。
太田陽子・松島義章・広森鶴（1982）日本における完新世海面変化とそれに関する現状と問

- 題, 第四紀研究, 21.
- 梶山彦太郎・市原実 (1986) 大阪平野のおいたち, 青木書店.
- 前田保夫 (1980) 海成層の上, 下限よりみた大阪湾および播磨灘の繩文海進. 井関弘太郎編「完新世における旧海水準の認定とその年代に関する研究」昭和53, 54年度文部省科学研究費助成金(総合研究A)報告書, z
- 成瀬敏郎・小野間雅巳 (1984) 播磨灘西部, 黄島・前島・大田府島にみられる完新世後期の海水準変化. 第四紀研究, 22.
- (財) 大阪文化財センター (1995) 巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—4次—.
- (財) 大阪文化財センター (1982) 巨摩・瓜生堂.
- 安田喜憲 (1990) 気候と文明の推定, 朝倉書店.

2. 鬼虎川遺跡第25次試料花粉及び珪藻分析報告

はじめに

鬼虎川遺跡は、東大阪市弥生町、西石切町二丁目、室町に所在する縄文時代から古墳時代の複合遺跡である。地理的にみると、生駒山より西に向かって派生する低位段丘に隣接した低湿な平野部に立地する（図9）。本遺跡は、弥生時代中期初頭から中期末の集落跡を中心としており、当時の河内地域の拠点的集落の一つと考えられている。また、第32次までの発掘調査によって、縄文海進に伴う海食崖の存在、古墳時代中期末から後期の集落跡の存在なども明らかになってきている。さらに今回の調査地点である第25次の発掘調査区などでは、弥生時代包含層より下位の河内湾から河内潟ないし湖の頃に堆積したと考えられる地層から、縄文時代前期末から縄文時代晚期の土器が検出されている（福永、1989）。

今回の調査では、この縄文時代の土器を包含する堆積物について珪藻分析・花粉分析を行い、河内湾から河内湖へ変化したと考えられる時期における本遺跡周辺水域の環境と後背山地の植生変遷について検討した。

1. 試料

試料は、第25次調査A地区西壁断面にあらわれた基本層序の第13層～第29層より採取された15点である（図10）。試料を採取した層位の堆積層の記載については、福永（1989）によるものがある。その概略を以下に示す。

第13層～第16層は、層厚80cm前後で、黒色を呈し、第13層が粘土、以下シルトないし砂混じりシルト層である。このうち、第13層は、その上部に第畿内I・II様式の弥生土器を僅かに含む。この堆積層は東大阪市内の平野部では一般的に存在し、アシなどの植物遺体を多量に含むことから、河内湾ないし河内湖の段階の堆積層と考えられている。第29・30次調査では、この層の下部から縄文時代前後の縁帶文土器、上部から長原式土器が出土しており、縄文時代中期以降、晚期までの間に堆積した層と考えられている。第13層出土木片の¹⁴C年代は、 3040 ± 140 y. B. P. (Gak-12257) を示す。

第17層～第20層は、縁がかった灰色ないし褐色を呈する、シルトを中心とする層である。本地点の西約800mの水走遺跡では、これに相当する層の上部から完形に近い中津式土器が単独で出土しており、縄文時代後期中頃までに堆積した層と考えられている。第20層出土木片の¹⁴C年代は、 5480 ± 150 y. B. P. (Gak-12256) を示す。

第21層は、厚さ20cm前後の淡緑灰色砂混じりシルトである。縄文時代中期初頭の鷹島式に属する土器1点、シカ・イノシシなどの獸骨などが出土しており、この時期の堆積土と考えられている。

第22層～第23層は、厚さ20cm前後の暗灰色を呈する砂混じりシルトである。本層からはシカなどの動・植物遺体を出土するが、土器は出土していない。第22層出土木片の¹⁴C年代は、

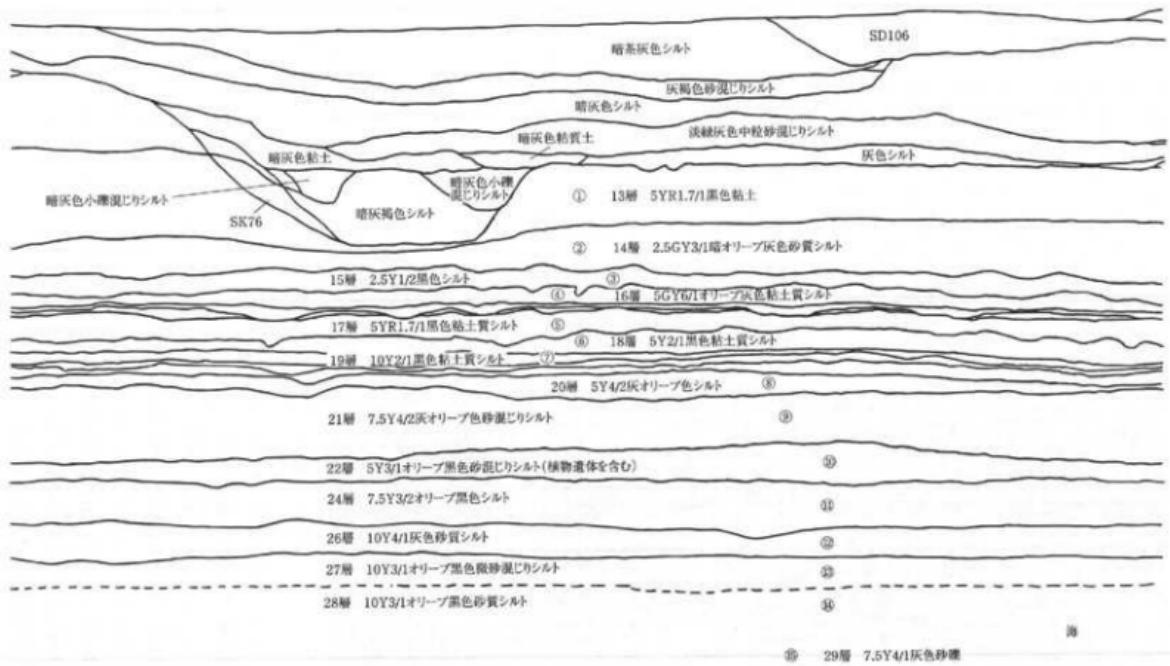


図9 鬼虎川遺跡の位置 ● 遺跡の位置

4500 ± 130 y. B. P. (Gak-12253) と 4680 ± 140 y. B. P. (Gak-12255) を示す。

第27層～第28層は、厚さ20cm弱の暗緑褐色微砂混じりシルトであり、遺跡東部では淡灰褐色粗砂に変わる。本層からは北白川下層II式に属する土器が小量出土したほか、シカ、イノシシ、トチの実などの動・植物遺体と不明土製品が1点出土している。第27層出土木片の¹⁴C年代は、 5550 ± 150 y. B. P. (Gak-12249) を示す。当該時期の海底面と考えられている。

第29層～第31層は、厚さ50cm前後の暗い灰色から緑灰色を呈する粗砂から砂混じりシルトである。第29層出土木片の¹⁴C年代は、 5300 ± 150 y. B. P. (Gak-12250) を示す。第31層下面が、縄文海進の海底面と考えられている。



①～⑯：試料番号

図10 鬼虎川遺跡(KTR25A)西壁断面と試料採取位置(本断面と堆積層の記載は発掘担当者による。なお、各層の土色は、試料採取層位については標準土色粘に基づく土色が記載されていたので、それを採用した。また、15層～19層については、土質の記載がなかったので分析試料の土質を示した)

2. 珪藻分析

2-1. 分析方法

湿重約7gについて、過酸化水素と塩酸により試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置した後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4~5回繰り返す。次に、L字形管分離で砂質分を除去し、検鏡し易い濃度に希釈、カバーガラス上に滴下し、乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下、乾燥させる。次に、スライドガラスに貼り付け、永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお珪藻殻が半分以上破損したものについては、同定・計数を行っていない。

珪藻の形態及び生態については、K. Krammer & Lange-Bertalot (1986)などを参考にした。

検出された珪藻化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水性、海水~汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し、表10に示した。なお、ハイフォンで結んだ分類群は、双方の区別が不明瞭であった種である。

堆積環境の変遷を検討するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成した。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、2%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示した（図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料のうち1%以下の種を、○印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と、淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示した。また、産出した珪藻化石が、現地性あるいは他の場所から運搬堆積した異地性の化石であるかを判断する基準の一つとして、殻の破損していないものを完形殻、破損したものを非完形殻として表示した。

珪藻の各生態性（塩分・pH・流水）に対する適応性の詳細については、まとめて表8・9に示した。

2-2. 分析結果

15試料分析した結果、試料番号⑦（第19層）以下の試料については、珪藻化石が多産した。試料番号⑥（第18層）以上の試料は産出量が少なく、1枚のプレパラートあたり20個体未満であった。本地点から産出した種群は、46属・110種・19変種・種不明（属レベルまで同定できたもの）32の計161分類群であった（表10）。

産出傾向は、最下位から試料番号⑧（第20層）までは海水生あるいは汽水生の群集が多産しているが、試料番号⑦（第19層）では海水生あるいは汽水生の群集は減少し、淡水生種が大半を占めるようになる（図11）。多産した海水生・汽水生種等は、ほとんどが内湾で浮遊生

活するもの、または沿岸の汽水域で海藻等の海底の基物に付着生活する種群であった。

2—3. 考察

珪藻化石群集の産出種の相違とその産出傾向から、KT-I・II・IIIの3つの珪藻化石群集帯を設定した。以下に各帯海の特徴と、そこから推定される環境について述べる。

I 帯（試料番号⑫～⑬：第29層～第20層）

層相は、黒色または灰色のシルト～砂混じりのシルトである。その時代は、出土土器および¹⁴C年代から縄文時代前期から縄文時代後期中頃までの堆積物と考えられている。珪藻化石は、本帯を通して海水～汽水生種のCoccineis scutellum、Cyclotella striata-stylorum、汽水生種のNitzschia granulata等が多産しているのが特徴である。そのうち海水～汽水生種のCyclotella striata-stylorumは内湾で浮遊生活する種群であり、特に湾奥部の河口付近に特徴的に認められる例が多い。また、海水～汽水生種のCoccineis scutellumおよび汽水生種のNitzschia granulataは、塩分濃度が12パーセント以上の水域の海藻、泥底等に付着する泥質干潟の指標種群とされる（小杉、1986）。

また、試料番号⑭（第28層）については、とくに分帶していないが、海水生種のGrammatophora oceanicaが多産している点で試料番号⑮（第27層）以上の試料とは異なる。本種は、沿岸域に広く分布する種たされる（Hustedt, 1959）。

以上より、第28層では沿岸域に特有な種が多産していることから沿岸海域であったと考えられる。また第27層以上は、外洋に認められる種は少なく大半が湾奥部の汽水域、特に砂質または泥質の干潟に認められる群集であることから沿岸水の影響を受けるような砂質から泥質の干潟であったと思われる。その時代は、¹⁴C年代測定から第20層が5480±150 y. B. P. であり、第27層～第28層は5550±150 y. B. P. とされる。また、上位の第17層～第20層において本遺跡では土器が出土していないが、本地点に近い水走遺跡では第17層～第20層相当層上部から中津式土器が出土していること、第21層～第28層からは、鷹島式、大歳山式、北白川下層II式土器が出土していることから、これらの堆積層の時代は縄文時代前期末から縄文時代後期中頃までと考えられる。これは、梶原・市原（1986）の河内湾IIの時代（約5,000～4,000）に相当し、沖積作用の盛んな時期であったとされる。梶原・市原（1986）によれば、この時期に本遺跡周辺は潮干帯であったと考えられており、今回の珪藻分析の結果とよく一致している。

II 帯（試料番号⑰：第19層）

層相は、黒色の粘土質のシルトである。本試料を採取した堆積層の年代は、縄文時代後期中頃までと考えられている。産出した珪藻化石は、淡水生種を主体とした群集で構成される。淡水生種の群集組成は、大半が陸生珪藻（小杉、1986）で占められ、それらに伴って流水不定性種、流水不明種が産出する。陸生珪藻とは、水域以外の比較的乾いた環境にでも生育することのできる種群であり、コケ、土壌の表層、木の幹の表面等に特徴的に認められるもの

である。また、流水不定性種および流水不明種は、便宜上淡水生種として扱ったが、汽水域に生育する群集の可能性が高い。

したがって第19層の頃、本地点周辺はⅠ帯の頃の干潟が直接海水の影響を受けなくなり、比較的乾いた状態になったものと考えられる。このような本地点の環境変化は、河内湾Ⅱの時代から河内潟の時代への地形変化にともなう本地域の陸化を示唆する。このことについては、今後、本遺跡周辺地域の地形発達史を編むことによって明らかにされるであろう。

Ⅲ帶（試料番号⑥～①：第18層～第13層）

層相は、黒色または灰色の粘土～シルトである。本堆積層の年代は、縄文時代後期中頃から縄文時代晩期末までと考えられている。産出した珪藻化石は、量的には非常に少なく最も多い試料でも17個体であった。群集は、大部分が淡水生種で構成される。淡水生種のなかでは、陸生珪藻および流水不定性種が大半を占めている。

本帶は、珪藻化石の産出量が少なく堆積環境について検討することは難しい。しかしながら、僅かに産出する珪藻化石の中では陸生珪藻が多いことから、比較的乾いた状態であった可能性がある。

本帶が堆積した時期は、河内潟（第18・17層）から河内湖（第16層以上）と考えられている（福永、1989）。しかし、土器等の遺物が検出されていないこと、また¹⁴C年代測定によって比較的古い値が得られていることなど、時代については不明瞭な点が多い。したがって、現段階においては、時代および環境について詳細に述べることは差し控えたい。今後、本遺跡および周辺地域の本帶相当層からの遺物が発見されることが期待される。

表 8 珪藻の生態分類

塩分濃度に対する区分	塩分に対する適応性	生育環境 (例)
海水性種 ： 真淡水種 (Euthalobous)	塩分濃度10.0‰以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、海水湖
	海水生種、塩分濃度 3.0～9.0‰に出現するもの	一般海岸 (《大陸棚及び大陸棚以外の海岸》)
汽水生種： 中性生種 (Mesohalobous)	汽水生種：塩分濃度 0.5～3.0‰に出現するもの	河口・内溝・沿岸・海水湖・湖
	海水生種：塩分濃度0.5‰以下に出現するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・島)
淡水生種： 貧淡水種 (Bilophthalobous)		

表 9 淡水生種の各生態に対する適応性

塩分・pH・流水に対する区分	塩分・pH・流水に対する適応性	生育環境 (例)
塩分に対する適応性	真淡水性種 (Halophilous)	小量の塩分があるがよく生育するもの
	糞便-不活性種 (Indifferent)	小量の塩分があつてもこれによく耐えきことができるもの
	糞便-適活性種 (Haloholobous)	小量の塩分にも耐えきることができないもの
	広域適活性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現する種類
pHに対する適応性	真酸性種 (Acidobiotic)	pH 7.5以下に出現、pH 5.5以下で最もよく生育するもの
	糞便性種 (Acidophilous)	pH 7付近に最高、pH 5付近で最もよく生育するもの
	pH-不定性種 (Indifferent)	pH 7付近で最もよく生育するもの
	糞アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH 7付近に出現、pH 7以上で最もよく生育するもの
流水に対する適応性	真アルカリ性種 (Alkalibiotic)	pH 8.5以上の流水水域のみに出現するもの
	真正止水性種 (Limnehalotic)	止水のみに出現するもの
	停止止水性種 (Limenehalous)	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの
	流水不定性種 (Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの
海水に対する適応性	海水性種 (Theobiotic)	海水に特徴的であるが、止水にも出現するもの
	真成水性種 (Benthobiotic)	成水域にのみ出現するもの
陸生性種	糞突性種 (Aerophilous)	糞突の環境 (aerial habitats) 多少煙突があれば土壤肥厚中やコケの表面に生育可能である。 特に土壤中に生育するものについての環境をSoil habitatsといふ。
		○土壤肥厚中、○岩や樹木上のコケに付着 ○コケに付着、○木の根元のコケに付着 ○漂れた苔の表面に付着、○葉の裏面に付着 ○水辺のコケに付着、○泥の表面で漂ったコケや茎の上に付着、○石灰岩上に生えたコケに付着などさまざまな生活形態がある。

(区分・適応性は田中・吉田・中島、1977 福利機械学術調査報告書 II p.111-135を基に一部削除、環境については加筆し作成した)

表10 鬼虎川遺跡(KTR 25A)西壁断面における珪藻分析結果

Marine water Species	9	8	9	8	9	8	9	9	7	13	16	23	26	35	38
Marine & Brackish water Species	9	7	8	7	8	7	8	7	7	13	16	23	26	35	38
Brackish water Species	9	7	8	7	8	7	8	7	7	13	16	23	26	35	38
Fresh water Species	17	7	11	5	11	10	8	9	111	116	85	15	23	25	34
Total Number of Species	17	8	11	5	13	11	16	219	181	191	188	187	176	232	166

LEADER

R.R. : 127°5' 29" E 30°5' 30" N
 Lat : 30°5' 30" N Long : 127°5' 29" E
 Elevation : 1020m + 1030m
 Depth : 1020m + 1030m
 1000m + 1000m
 Min : 1020m + 1030m
 Max : 1020m + 1030m
 Min : 1020m + 1030m
 Max : 1020m + 1030m
 Depth : 1020m + 1030m

• 植生生物 • 耐汚濁生物 • 耐海水生物

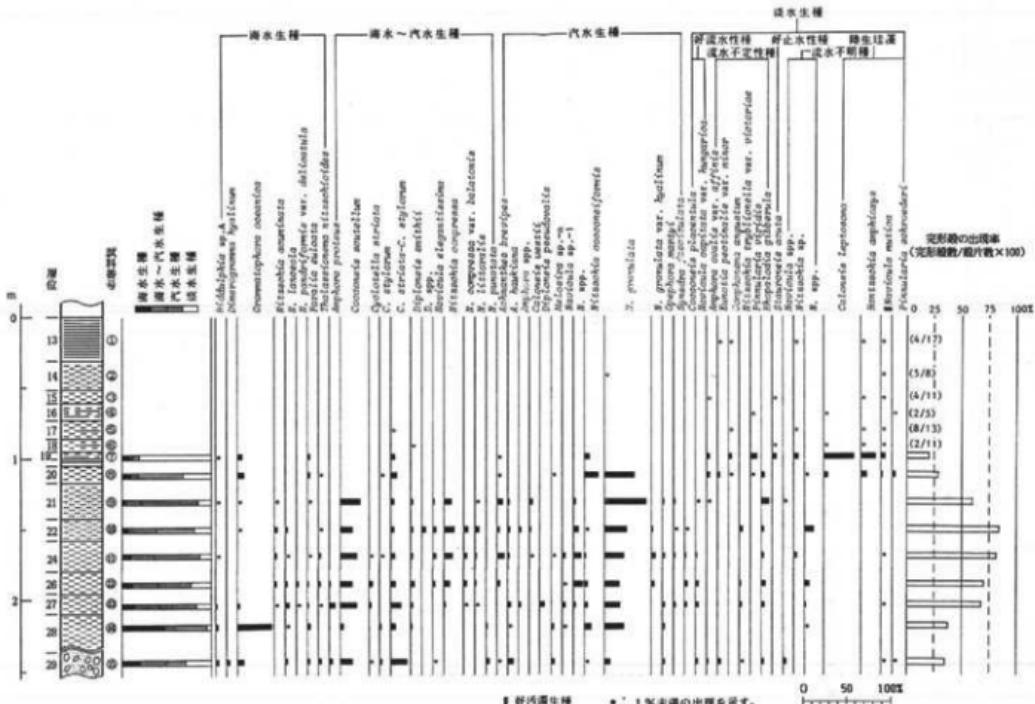


図11 鬼虎川遺跡(KTR 25A) 西壁断面における主要珪藻化石群集の変遷 (各種産出数グラフ及び海水・汽水・淡水出水の帯グラフは全体基数として表示した。なお、いずれも100個体以上検出された試料について記した。)

3. 花粉分析

3—1. 分析方法

湿重約15 gの試料について、HF処理→重液分離 (ZnBr₂:比重2.2)→アセトリシス処理→KOH処理の順に物理・化学処理を行い、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類 (Taxa) の同定・計数を行った。

結果は一覧表と花粉化石群集の変遷図に示した。この際、図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が花粉・胞子数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出した。

3—2. 結果

花粉・胞子化石は、試料番号⑧～⑯ (第20層～第29層) では良好に出現した (表11)。その上位の試料番号①～⑦ (第13層～第19層) では、化石の保存が良くなく種類の同定が困難な化石が大半を占め、試料番号①～③ (第13層～第15層) では化石数も少なかった。そのため、試料番号①～⑦の試料については、計数結果を統計的に扱うことを控えた。

試料番号⑯～⑧ (第29層～第20層) の花粉化石群集の変遷は、試料番号⑫ (第26層) の層準で若干の変化を示すものの、急激な変化は示さない (図12)。いずれの層準も花粉化石群集の構成比は、木本花粉が90%前後と高率を占める。各種類では、木本花粉のアカガシ亜属が高率に出現し、特に試料番号⑫～⑧ (第26層～第20層) では優占する。このほか、コナラ亜属、クリ属—シイノキ属を伴う。試料番号⑯～⑬ (第29層～第27層) ではエノキ属—ムクノキ属の出現頻度が高い。

3—3. 考察

遺跡周辺の植生は、第29層～第20層の堆積期間を通じて大きく変化することなく、アカガシ亜属を中心とし、マキ属、シイノキ属などを伴う照葉樹林が成立していたと推定される。また、コナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属といった落葉樹の種類も、当時の森林を構成する要素であったと思われる。

大阪湾周辺地域では、照葉樹林が約7,500～6,500年前頃に急速な気候暖化によって落葉広葉樹林と交代し、その後安定して存続したことが明かにされている(前田, 1977)。今回の第29層出土木片の¹⁴C年代が5300±150 y. B. P.、第22層が4500±130 y. B. P.と4680±140 y. B. P.の値を示し、また第27・26層からそれぞれ縄文時代前期の北白川下層II式土器と大歳山式土器が、第21層から縄文時代中期の鷹島式土器が出土していることから、今回の結果は年代的に落葉広葉樹林から照葉樹林に交代した後の植生を反映していることになる。また、上記したコナラ亜属などの落葉広葉樹の種類は、照葉樹林に交代する以前に成立していた落葉広葉樹林から残存した種類とも考えられる。

また、第19層～第13層の頃の植生については、花粉化石の保存状態が悪く、推定することはできない。ただし、近隣の上小阪遺跡や若江遺跡では、弥生時代とされる堆積層においてアカガシ亜属が高率に出現する花粉化石群集が認められている（未公表）ことから、本地域の植生は、基本的に弥生時代の頃までカシ類などから照葉樹林であったことが示唆される。

一方、調査地点近辺は、第29層～20層の頃は先述した珪藻分析によると泥質の干潟であつたことが推定されている。本層準の花粉化石群集の構成比で草本花粉の占める割合が極端に少なかつたのは、このことに起因する可能性がある。すなわち、当時の低地は草本類の生育するような状態ではなかったことを意味しているのかもしれない。また、第19層～第13層では、上記したように花粉化石の保存状態が悪く、植生について触れることはできないが、花粉が分解するような状態、すなわち酸化状態になったことが示唆される。このことは、第19層の頃に本地点が陸化したと推定されることと調和的な結果といえよう。

表11 鬼虎川遺跡(KTR25A) 西壁断面における花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	層位																	
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	
木本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属(トドリ)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
コブシ属・マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スティルベイスクガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クマシダ属-アサガホ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
コナラ属-カガシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クリ属-アシノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カラスザンショウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
コクサギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブナ属-モドキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツツジ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アオキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ディカカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミクリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミクリ属近似種	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サンエタデ科-ウナギツカミ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バツ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セキセキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
他のキク類科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明花粉	2	-	9	45	65	53	56	12	3	4	6	4	1	7	2				
シダ類胞子	1	1	19	76	7	37	2	9	1	7	3	5	3	3	7				
合計	木本花粉	0	0	0	31	49	38	34	365	290	298	287	321	295	316	403			
草本花粉	2	0	0	18	27	11	9	23	20	10	11	16	12	25	11				
藻類	2	0	9	45	65	53	56	12	3	4	5	4	1	7	2				
シダ類胞子	1	1	19	76	7	37	2	9	1	7	3	5	3	3	7				
総花粉・胞子	5	1	28	170	148	139	101	410	314	319	207	346	311	361	423				

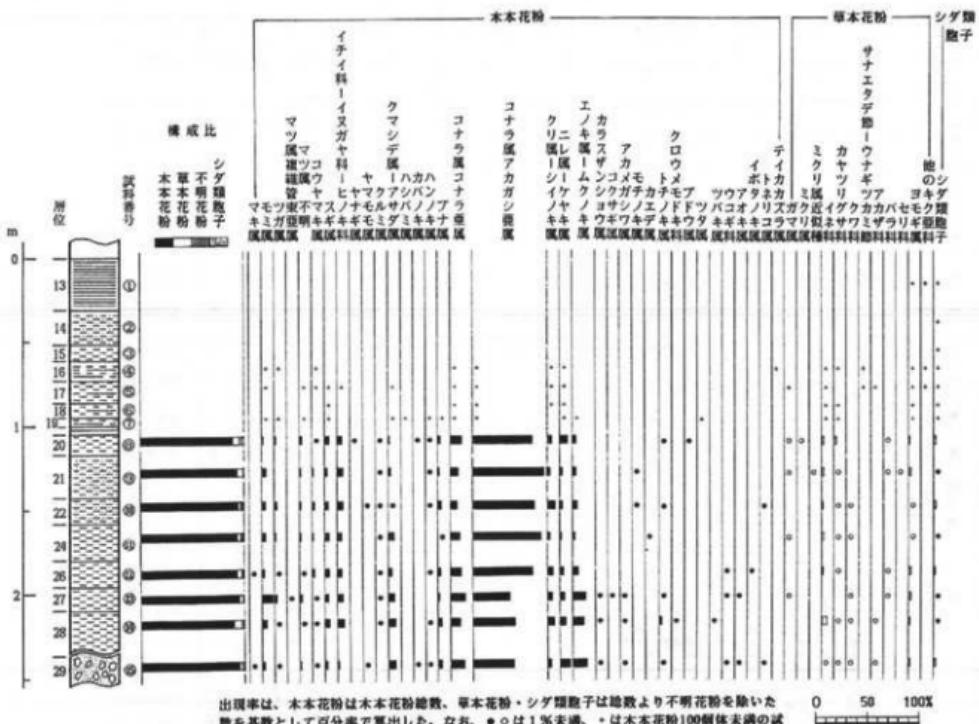


図12 白虎川遺跡(KTR 25A)西壁断面における花粉化石群集の変遷

4. まとめ

鬼虎川遺跡第25次調査A地区西壁断面において、珪藻分析・花粉分析を行った結果、以下のことが明かとなった（図13）。

1. 第28層堆積時は、沿岸水の影響を受けるような泥質の干潟であった。

これは、梶山・市原（1985）の河内湾Ⅱの時代に相当すると考えられる。

2. 第27層堆積以後第20層までは、泥質の干潟であった。

この時期も下位の28層に引き続き河内湾Ⅱの時代と考えて差し支えない。

3. 第19層が堆積する頃には、それまでの干潟の状態は継続していたと考えられるが、海水の影響を受けることはなく、陸化したと考えられる。このことから、本地点を含む周辺地域が、しばしば乾燥する状態に置かれたことが示唆される。

4. 河内湾から河内湖の時代とされる第18層～第13層は両化石とも巣状が悪く、堆積環境および植生については推定できなかった。しかしながら化石の保存状況等から比較的乾いた状態であったことが示唆された。

5. 第29層～第20層の頃の周辺の森林植生は、カシ類を中心とする照葉樹林であった。

なお、本地域の海水準変動については、検討の余地が残されている。すなわち、今回の第28層において認められた大洋から沿岸海域に生育する珪藻の増加が海水準の変動と関連する変化の否か、また第29層堆積以前の海水準の変動については不明である。今後、試料採取間隔を細かく行うとともに、第29層以下についても分析対象として、本地域における詳細な海進・海退に関する検討を行う必要がある。

引用文献

- 福永信雄（1989）鬼虎川遺跡出土の繩文土器、p. 1-8.
- Husted, F. (1959) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, vol. 7, Leipzig, Part 2, 845p
- 市原実（1978）大阪平野の発達史、アーバンクボタ、久保田鉄工株式会社、p. 2-15.
- 梶山彦太郎・市原実（1986）大阪平野のおいたち、青木書店、p. p. 138.
- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—、植物学研究、第1号、p. 9-44.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用、第四期研究、第27卷、第1号、p. 1-20.
- 前田保夫（1977）大阪湾の自然史—潛面でとらえた海と森の変遷—、科学、Vol. 47, No. 9, p. 514-523.
- 田中宏之・吉田武雄・中島啓治（1977）奥利根地域の珪藻類、奥利根地域学術調査報告書Ⅱ、p. 114-135.

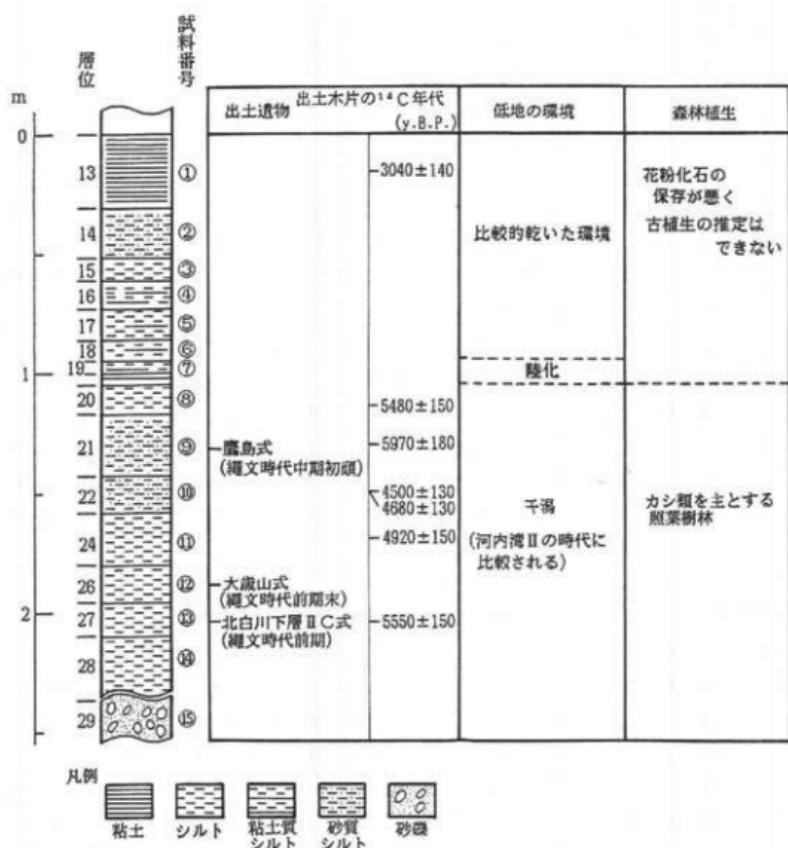


図13 鬼虎川遺跡(KTR25A)西壁断面地点における珪藻化石・花粉化石からみた低地の環境と森林植生
(出土遺物・ ^{14}C 年代は、福永(1989)に基づく)

3. 鬼虎川遺跡25次調査出土石器の材質鑑定報告

1. 鑑定試料

試料は、鬼虎川遺跡25次調査において出土した石器・礫等の257個である。

目的は、それらの岩石を鑑定し岩石名を決定することにある。

2. 鑑定方法

- ① 257個の岩石試料は主に肉眼観察を行い岩石名を決定した。さらに薄片を作製し顕微鏡観察の必要な試料3点（第46図-16・第69図-7他1点）については1・2の試料No.を付し以下の方法で鑑定した。
- ② 薄片（プレパラート）を作製し偏光顕微鏡による観察を行って目的に対応した。薄片の作製については、試料の代表的な部位を切断して岩片を得た。岩片を研磨盤上で30ミクロン程度の厚さに研磨して顕微鏡の光源が透過するように調整し薄片とした。この薄片を鏡下試料とした。

3. 鑑定結果

鑑定結果は、依頼資料のリスト表毎に岩石分類一覧（表12-1）に示し、個々の試料については、岩石名一覧（表12-2）を作製した。以下、リスト表毎に記す。

また、薄片作製鑑定試料については、試料毎に記載した。

3-1. 肉眼鑑定結果

- ① KTR-25

試料13個

岩石分類では堆積岩が8個、火成岩が2個、変成岩2個、その他1個である。岩石としては砂岩（珪質～石英質砂岩、凝灰質砂岩）が4個、凝灰岩が3個等である。

3-2. 薄片作製顕微鏡鑑定結果

試料は以下のとおりである。

試料No. 岩石名（岩石分類）

1. 試料 太型蛤刃石斧（第46図-16）

岩石名：斑れい岩（斑れい岩）

2. 試料 砥石（第69図-7）

岩石名：白雲母—黒雲母—石英片岩（結晶片岩）

試料No. 1

岩石名：斑れい岩

組 織：完晶質

主成分鉱物

斜長石：長柱状 ($0.4 \times 0.1\text{mm}$) で多量存在する。自形で双晶している。一部は短柱状粗晶で径 1.2mm 程度となっている。粗晶となっている斜長石の内部にはカオリナイトの小葉片が生成されている。

角閃石：淡緑色を呈し、他形～半自形の外郭 (径 $0.3 \sim 0.6\text{mm}$) を有するが、内部は角閃石の小葉片の集合体となっている。多色性は弱く、一部は緑泥石および炭酸塩鉱物に変質している。

副成分鉱物

カオリナイト：比較的大型の斜長石中に二次的に生成された鉱物で、小葉片状に存在する。

セリサイト：カオリナイトと同様に斜長石中に二次的に生成されている小葉片状鉱物である。カオリナイトより複屈折が大きい。

炭酸塩鉱物：角閃石の一部が変質生成したもので、微晶質の集合体で存在する。

不透明鉱物：透過顕微鏡下で不透明鉱物が散在している。不透明鉱物の多くは粒状 (0.05 mm) で、磁鉄鉱と思われるが、一部に柱状でイルメナイトと思われるものも存在する。

試料No. 2

岩石名：白雲母—黒雲母—石英片岩

組 織：片理構造を有する。

主要鉱物

石 英： $0.05 \sim 0.08\text{mm}$ 大の等粒状。最も多量に存在する。

黒雲母：伸長方向に $0.1 \sim 0.15\text{mm}$ の葉片が配列し、片理構造を形成している。多色性が強い（淡黄褐色～褐色）。一部は淡緑色の緑泥石に変質している。石英に次いで多く存在する。

白雲母：針状 ($0.07 \times 0.01\text{mm}$) で配列し、黒雲母とともに片状構造を形成している。黒雲母と比較すると、結晶は小型で、最も少ない。

副成分鉱物

ジルコン：微粒で微晶に存在する。黒雲母中に存在するものはハローを作っている。

磁鉄鉱：微粒で散点的に不透明鉱物として存在する。

表12—1 岩石分類一覧

		岩 石 名	数	
火 成 岩	深	花崗閃綠岩(黒雲母-角閃石花崗閃綠岩)	1	
	成	閃綠岩(細粒閃綠岩)		
	岩	斑れい岩(細粒斑れい岩, 変質斑れい岩)		
火 成 岩	半	石英斑岩	1	
	深	ひん岩		
	成	輝綠岩(変質輝綠岩)		
火 山 岩	ア	アブライト		
	火	流紋岩		
	山	安山岩		
堆 積 岩	砂	砂岩(珪質~石英質砂岩, 凝灰質砂岩)	4	13
	頁	頁岩~粘板岩(凝灰頁岩)	1	
	シルト	シルト岩		
	チャート	チャート(結晶)		
	凝灰	凝灰岩	3	
	輝灰	輝灰角礫岩		
	輝灰	輝綠凝灰岩		
變 成 岩	黒	黒色千枚岩	2	
	緑	緑色片岩		
	緑	緑泥石片岩		
	角	角閃石片岩		
	石	石英片岩(緑簾石-石英片岩, ザくろ石-石英片岩)		
	緑	緑雲母-石英片岩		
	黒	黒雲母-石英片岩(白雲母-黒雲母-石英片岩)	1	
	白	白雲母-石英片岩		
	角	角閃石-白雲母-石英片岩(白雲母-角閃石-石英片岩)		
	閃	角閃石-石英片岩	1	
	紅	紅簾石-白雲母-石英片岩		
	ゾイ	ゾイサイト片岩		
そ の 他	滑	ホルンフェルス	1	
	角	滑石		
	集	角礫岩		
	塊	集塊岩		

表12—2 岩石名一覧

*印 謹微鏡鑑定

N o .	採取地・器種・その他	岩 石 名
第46図-18	小孔円板	珪質頁岩
第46図-17	偏平片刃石斧	変質輝綠岩
第46図-16	大型蛤刃石斧	* 斑れい岩
第69図-1	叩き石	砂岩
第69図-8	砥石	角閃石-石英片岩
	砥石	凝灰岩
第69図-2	砥石	凝灰岩
第69図-6	砥石	凝灰岩
第69図-3	砥石	砂岩
第69図-7	砥石	* 白雲母-黒雲母 -石英片岩
第69図-4	粉挽き臼	砂岩
第69図-5	石鍋	滑石
第69図-9	五輪塔	凝灰角礫岩

4. 鬼虎川遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析

薦 科 哲 男、 東 村 武 信
(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で16年前から、蛍光X線分析法により研究を始めた。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目指して研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行っている^{1, 2, 3)}。

サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量元素組成には異同があると考えられるため、微量元素を中心元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からぬという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

鬼虎川遺跡から出土したサヌカイト遺物のうち、弥生時代中期の7点および旧石器時代の24点について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、励起用の⁵⁵Fe、¹⁰⁹Cdの放射性同位元素とSi (Li) 半導体検出器を組み合わせたエネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行う。⁵⁵Fe線源で励起したとき、K、Ca、Tiが¹⁰⁹Cd線源で励起したとき、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの元素がそれぞれ分析される。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Fe/Sr、Rb/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地など、合わせて25ヶ所の調査を終えている。図14にそれらの地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれら

は数ヶの群に分かたれる。

これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると31の原石群に分類できる。その結果を表13に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にはほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約 $2/3$ が表14に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表15に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。表16に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表14、15のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心とした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表15のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を表17に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、表16の試料番号19863番の遺物ではK/Caの値は0.238で、二上山群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、0.243±0.009である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.5σ 離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を探ってきて分析すると、平均値から 0.5σ のずれより大きいものが61ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.5σ 以上離れると確率は61%であると言える。だから、二上山群の平均値か

ら0.5σしか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約12σである。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を探ってきて分析したとき、平均値から12σ以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを見簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に61%、金山東群に百億分の一%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表13のすべての原石群について行い、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、二上山群の原産地だけとなり、二上山産地または和泉・岸和田原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した7ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくとも分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならぬ。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相間を考慮した多変量統計的手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4) 5)}。鬼虎川遺跡より出土した遺物の産地推定を表17に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料、例えば0.6cmとすると、原石試料との面積比は1/25になる。このため原石試料と同じ測定精度で、遺物から元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行ったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離D²の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でのD²の値が原石群の中で最も小さなD²値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。

鬼虎川遺跡出土の31点の遺物の中で信頼限界の0.1%に達した遺物は17点で、10点はマハラノビスの距離D²の値によって石材の原石産地は判定され、これらの方法で判定できなかったサスカイト遺物は4点であった。この結果、原石産地の明らかになった27点の遺物は全てに二上山群の原石と判定された。

ここで二上山群の組成の原石は、和泉・岸和田原産地の中にも見られるが、もし和泉・岸

和田原産地から原材料を採取して作られたものならば、分析の結果は、表15に近い頻度分布で、各原石群が現われるはずである。鬼虎川遺跡の産地分析の結果を見ると、判定されたもの全て二上山群に帰属され、和泉・岸和田原産地に多数みられる岩屋第一群とか和泉群の組成の遺物が一点もみられない。このことは、鬼虎川遺跡の遺物が岩屋原産地および和泉・岸和田原産地から供給された可能性が考えられないと言うことを示している。したがって、鬼虎川遺跡出土の二上山群の原料は二上山原産地よりの原石であると判定された。

参考文献

- 1) 薫科哲男・東村武信 (1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (II)。考古学と自然科学, 8 : 61-69
- 2) 薫科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (III)。(IV)。考古学と自然科学, 10, 11 : 53-81 ; 33-47
- 3) 薫科哲男・東村武信 (1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16 : 59-89
- 4) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9 : 77-90
- 5) 東村武信 (1980), 考古学と物理化学。学生社



図14 サヌカイトの原産地

表13 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	产地	分析回数	K/Ca ±σ	Ti/Ca ±σ	Fe/Sr ±σ	Rb/Sr ±σ	Y/Sr ±σ	Zr/Sr ±σ	Nb/Sr ±σ
岐阜県 下呂	下呂	56	1.475±0.041	0.248±0.010	0.745±0.011	0.283±0.005	0.029±0.005	0.442±0.010	0.040±0.008
奈良県 二上山	二上山	57	0.243±0.009	0.227±0.010	4.389±0.145	0.212±0.008	0.055±0.010	0.582±0.016	0.180±0.010
大阪府 和泉	和泉	15	0.433±0.011	0.337±0.011	3.741±0.074	0.299±0.007	0.075±0.010	0.659±0.007	
兵庫県 岩屋第一 第二	岩屋第一 第二	17 19	0.576±0.018 0.482±0.017	0.269±0.009 0.269±0.007	3.559±0.096 3.369±0.070	0.369±0.006 0.337±0.007	0.056±0.010 0.044±0.008	0.800±0.023 1.038±0.023	
香川県 五色台 金山	国分寺 蓮光寺 白峰 法印谷	32 20 57 34	0.408±0.016 0.418±0.013 0.486±0.015 0.348±0.013	0.259±0.008 0.255±0.009 0.267±0.007 0.244±0.009	3.558±0.061 3.541±0.060 3.349±0.070 4.590±0.121	0.304±0.009 0.303±0.007 0.338±0.009 0.283±0.011	0.040±0.011 0.043±0.013 0.041±0.012 0.066±0.013	0.937±0.026 0.941±0.022 1.033±0.023 1.105±0.026	
	金山山西 金山東	34 37	0.367±0.014 0.437±0.016	0.223±0.009 0.230±0.006	4.691±0.124 4.496±0.050	0.291±0.016 0.320±0.012	0.064±0.008 0.064±0.009	1.035±0.023 1.133±0.030	
	本五色台	57	0.785±0.031	0.129±0.008	2.015±0.052	0.495±0.014		0.648±0.025	
	冠高麗 冠山東 山飯	58 38 34	0.564±0.023 0.266±0.016 1.067±0.114	0.534±0.020 0.385±0.033 0.523±0.034	2.940±0.068 1.497±0.043 2.018±0.066	0.188±0.006 0.047±0.005 0.259±0.007	0.025±0.010 0.004±0.007 0.019±0.007	0.421±0.011 0.357±0.043 0.493±0.012	0.017±0.013 0.248±0.011
	多久第一 第二 第三 老松寺 西有田	53 23 8 26 22 17	0.734±0.045 0.726±0.051 0.811±0.040 0.624±0.029 0.546±0.022 0.387±0.017	0.417±0.011 0.420±0.018 0.369±0.013 0.320±0.011 0.319±0.008 0.352±0.006	4.696±0.194 5.235±0.372 5.270±0.200 5.255±0.137 5.525±0.101 6.728±0.154	0.503±0.026 0.531±0.018 0.635±0.016 0.538±0.027 0.484±0.014 0.306±0.014	0.051±0.010 0.061±0.017 0.069±0.015 0.051±0.010 0.051±0.012 0.172±0.384	0.807±0.020 0.815±0.029 0.788±0.039 0.637±0.019 0.597±0.014 0.480±0.021	
長崎県 大牟 龜岳 牟田第一 第二 川瀬 福井第一 第二 越前尾第一 第二	牟田 川瀬 福井 越前尾	13 17 29 13 38 15 25 45 12	0.943±0.034 0.976±0.038 0.697±0.088 0.531±0.044 0.436±0.017 0.563±0.013 0.460±0.010 0.337±0.026 0.553±0.110	0.142±0.006 0.157±0.007 0.375±0.017 0.354±0.018 0.310±0.006 0.344±0.009 0.334±0.008 0.255±0.009 0.407±0.023	1.674±0.014 1.675±0.017 4.617±0.151 7.530±0.387 4.190±0.089 7.578±0.141 7.106±0.100 4.037±0.123 5.290±0.872	0.246±0.004 0.244±0.004 0.324±0.119 1.068±0.091 0.219±0.007 1.163±0.032 0.918±0.018 0.171±0.012 0.340±0.040	0.023±0.006 0.017±0.006 0.215±0.028 0.334±0.034 0.081±0.007 0.356±0.013 0.286±0.010 0.053±0.007 0.079±0.010	0.432±0.009 0.441±0.006 0.579±0.049 0.942±0.060 0.739±0.029 0.996±0.024 0.845±0.018 0.383±0.018 0.610±0.059	0.064±0.007 0.069±0.006 0.316±0.035 0.508±0.043 0.048±0.007 0.594±0.024 0.437±0.015 0.071±0.013 0.115±0.021
	阿蘇	9	0.889±0.070	0.559±0.031	2.693±0.164	0.294±0.013	0.003±0.008	0.996±0.038	

本：ガラス質安山岩

又：平均値 σ：標準偏差値

表14 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
タ	5	8	国分寺群に一致
タ	4	6	蓮光寺群に一致
タ	3	5	金山東群に一致
タ	2	3	和泉群に一致
タ	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

表15 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	タ
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明（どこの原石群にも属さない）

表16 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	タ
	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

表17 鬼虎川遺跡出土のサスカイト製石器、石片分析結果

試料番号	元素比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
⑥ 19862	.284	.229	.217	.575	4.633	.036	.067	.000
⑧ 19863	.238	.228	.202	.589	4.381	.051	.085	.184
⑨ 19864	.212	.227	.202	.568	4.097	.000	.043	.000
③ 19865	.242	.230	.200	.600	4.541	.077	.072	.340
⑤ 19866	.241	.231	.211	.605	4.543	.057	.076	.318
② 19867	.243	.230	.203	.575	4.475	.032	.048	.153
① 19868	.230	.221	.177	.596	4.720	.098	.054	1.302
⑩ 19869	.238	.236	.198	.579	4.408	.090	.081	.000
19870 ①	.240	.233	.202	.572	4.408	.277	.068	.000
19871 ⑥	.275	.201	.213	.575	3.805	.068	.023	.000
19872 ⑤	.245	.221	.191	.557	4.087	.042	.017	.000
19873 ②	.253	.222	.205	.597	4.246	.083	.050	.000
19874 ③	.245	.228	.191	.574	4.284	.068	.014	.244
19875 ⑥	.246	.229	.194	.589	4.315	.000	.069	.000
19876 ④	.239	.229	.209	.581	4.527	.061	.050	.743
19877 ⑦	.242	.229	.218	.606	4.280	.050	.057	.000
19878	.240	.229	.211	.596	4.343	.067	.033	.633
19879	.243	.227	.183	.560	4.620	.036	.053	.112
19880	.240	.228	.204	.568	4.420	.062	.055	.000
19881	.235	.225	.257	.567	4.509	.000	.057	.000
19882	.242	.224	.237	.608	4.796	.184	.101	.000
19883	.242	.229	.234	.504	4.444	.174	.068	.000
19884	.278	.201	.209	.542	3.821	.033	.045	.090
19885	.245	.230	.177	.576	4.585	.045	.073	.809
19886	.274	.200	.225	.560	3.758	.069	.053	.101
19887	.244	.227	.199	.583	4.497	.055	.066	.000
19888	.242	.232	.236	.604	4.500	.070	.047	.728
19889	.239	.225	.206	.593	4.507	.038	.062	.271
19890	.258	.191	.213	.548	3.714	.052	.058	.000
19891	.244	.229	.166	.561	4.647	.080	.072	.000
19892	.239	.228	.207	.529	4.196	.072	.067	.068

表18 鬼虎川遺跡出土のサヌカイト製石器、石片の原材产地推定結果

試料番号	名 称・位 置・層 位	時 代(伴出土器)	原石产地(確率)	判 定	遺 物 品 名	備 考	試 料 提 供 者
19862	KTR-25・SK-53・I・カ	弥生時代中期	二上山 ($D^2=33$)	二上山	石 鏨	第45図-6	東大阪市文化財協会
19863	タ・暗オリーブ灰色小礫混り土	タ	タ (91%)	タ	石 槍	第45図-8	タ
19864	タ・SD-159・H・チ	タ	タ ($D^2=44$)	タ	タ	第45図-9	タ
19865	タ・SD-159・H・オ	タ	タ (12%)	タ	石 鏨	第45図-3	タ
19866	タ・タ	タ	タ (62%)	タ	タ	第45図-5	タ
19867	タ・SD-196	タ	タ (29%)	タ	タ	第45図-2	タ
19868	タ・SX02	タ	タ ($D^2=52$)	タ	タ	第45図-1	タ
19869	タ・暗褐色細砂・B・ロ(SD188)	タ	タ (4%)	タ	石 小 形	第45図-10	タ
19870	KTR-25	旧 石 器			ナイフ形石器	第33図-1	タ
19871	タ	タ	二上山 ($D^2=46$)	二上山	タ	第33図-8	タ
19872	タ	タ	タ (2%)	タ	タ	第33図-5	タ
19873	タ	タ	タ (18%)	タ	タ	第33図-2	タ
19874	タ	タ	タ (26%)	タ	タ	第33図-3	タ
19875	タ	タ	タ ($D^2=42$)	タ	タ	第33図-6	タ
19876	タ	タ	タ (90%)	タ	タ	第33図-4	タ
19877	タ	タ	タ (71%)	タ	横形削器	第33図-7	タ
19878	タ	タ	タ (94%)	タ	フレーク	No 29	タ
19879	タ	タ	タ (0.1%)	タ	タ	30	タ
19880	タ	タ	タ (86%)	タ	タ	31	タ

VIII. まとめ

今回の発掘調査では、考古学的な調査と合わせて自然科学的な調査も併せて実施した。ここでは両者の検討を通して明かになった事柄を、古い時期から順に時代ごとに総括し今後の問題点を指摘することと併せまとめとしたい。

1. 旧石器時代

今回の調査地の西約250mで調査を実施した鬼虎川35-1次調査でトウヒなどの寒冷な気候で成育する花粉が検出された洪積層（約2万年前）は、後期旧石器時代に相当する。今回の調査で包含層から洗いだされて海岸に堆積した層中より二上山産のサヌカイトを用いた国府型ナイフなどの旧石器を検出した。全く摩滅が認められず埋積土の水洗で微細なチップなども同時に出土していることから、ごく近辺にこの時期の居住域が存在することが予想される。C地区とD地区の間で、段丘上面より約1.2m下層（T.P. 4.2m）で土壤（3基）が検出（西ノ辻遺跡第35次調査）されている。遺物が出土していないため、時期は不明ながら現在、本遺跡で確認されている唯一の旧石器時代に属す遺構と考えられる。

鬼虎川35-1次調査で検出された縄文海進に伴う海底直上で、洪積層の段階で成育していたトウヒ属の根張り株が洗い出された状況で検出され、現在の河内平野にこのような森林が成育していたことが明らかになつている。このような自然環境は、人々の生活を十分想像できる。今後、河内平野でも洪積層中より旧石器が出土することが予想される。今回の調査で海底面下より検出した厚さ10cm前後の火山灰は、分析の結果AT火山灰と判明している。約140mの間で比高差3.8mと東から西にかなりの傾斜で堆積していることが判明した。後に実施した鬼虎川35-1次調査などの調査成果もこれを裏付けている。河内地方においてもこの火山灰が、厚さや連続性から旧石器時代の状況を明らかにする鍵層となることが判明した。

2. 縄文時代

縄文海進に伴う海食崖を検出した。海岸で出土した縄文時代前・中期土器は、煤の付着したもののが存在し、摩滅もほとんどみられない。食料とした動・植物遺存体とともに検出された出土状況は、波打ち際に埋没した状態を示していた。これらの土器を残した縄文人は、海上に隣接した低位段丘上に居住していたものと考えられる。ただ、今までの調査では、段丘上で関連する遺構・遺物とともに未発見である。自然（縄文時代中期中頃まで）か人為的によるものか現在不明であるが削平された可能性が高い。

本遺跡で出土している前・中期土器には、現在のところ在地産のものがほとんどみられない。特に船元I・II式の土器は、すべて他地域産で、同時期の縄手遺跡でも同様である。早期の神並遺跡出土土器の大半が、在地産のものであることと比べると異なりは大きい。これが何を意味するかの検討は今後の課題である。

北白川下層IIc式から、大歳山式の土器を出土する大阪府下の遺跡は、摂津の中筋・柱本、河内の恩智・国府・錦織遺跡などが知られる。東大阪市内においては本遺跡以外は知られていない。南北約7km・東西約1kmの本市域の生駒山西麓部において早期の神並遺跡にはじまり、晩期末の鬼塚遺跡まで一部未見の部分はあるが、早~晩期までの各自期のかなりの規模をもった集落址が存在している。府下ではこのような地域は他に存在せず、各遺跡の消長を含め実態を把握することが、近畿地方の縄文社会を知る上に重要なことと考えらる。

縄文海進に伴う河内湾の堆積土中より土器が出土したことにより、考古資料から海進状況の一端が知られた。土層でいえば第32~第37層は、海水が進入してきた初期の堆積土で、この時期周辺に人が居住していた様子はない。出土木材から得られた¹⁴C年代は、6670±170年の年代が与えられ、梶山彦太郎氏らの研究による河内湾Iの時代と考えられる。

北白川下層IIa式・大歳山式の土器を包含する第24~第27層と鷹島式を含む第21層は、同じく河内湾II式の時代と考えられる。河内湾の時代は、第17層の中津式の段階よりやや後で終わり、河内湾に移り変わったものと思われる。

かつて本遺跡の北約1km布市町の地下約6mから出土した一頭分と考えられるマッコウクジラ(¹⁴C年代、5040±130、3090B.C.)は、¹⁴C年代を参考にすると第24~第26層に相当する層に埋没していたものと考えられる。今回、土器やシカ・イノシシの骨とともに出土したクジラの骨もこのように海に乗り上げたクジラを縄文人が採取したものではなかつろうか。

鬼虎川35-1次調査で、海底の上部に近隣に生息していたものが流されて堆積したハマグリをはじめとする多量の貝が出土している。同時に縄文土器の細片が、貝層中より1点獣骨などと共に出土している。河内湾の海岸付近に生息した貝の実態(貝20種・二枚貝27種以上)が明かになっている。これらの貝は、現在の有明海にいるものと類似するということで当時の河内湾の様子を想定することができる。貝の出土状況から海進直後は、マガキが主体でハマグリなどが生息するのは一定期間を経た後であることが明かとなった。これは、海進直後は調査地点付近は浅い水域で、ある程度時間が経てからやや深くなることを示している。

マガキは拳大の殻に付着して出土したが、この様な殻は海底面直上にしか分布せず、海進直後を除き河内湾(調査地周辺)は、一貫して砂浜であったことが判明した。

今回の調査で出土した土器を使用した人々が、貝を探取し食料としたことは十分に考えられる。現在、生駒山西麓においては縄文時代前期から中期に属す貝塚は確認されていないが、存在を推定(過去に存在したが、現在は削平されて消滅したことも含めて)することができる。また、海岸から出土した植物遺存体の中に多量のトチの実がある。一般にトチの実を食用にするのは中期以降と言われるが、前期段階からトチを食料としていた可能性も考えられる。

海進後しばらくして、内灣の環境が安定し今回検出した多くの貝が棲息している。しかし、貝を包含する層の厚さは30cm前後しかなく、今回の調査で出土した縄文土器が、前期と中期前半を中心であることから、かなり早い時期おそらくは中期前半(船元II式)までには、珪藻分析の結果が示す海水~汽水泥質干潟に変化したものと考えられる。したがって、中期後

半からは既に河内潟に変化していた可能性が高い。

山麓部の現状は、縄文時代中期中頃に属す土器は出土例がなく中期後半から継続的に縄文時代の遺物が確認されている。この自然条件の変化が反映していることも考えられる。

後期から晩期にかけては、調査地点が段丘と低湿地をまたぐ範囲にあたるため潟から湖に移る過程の土層が収斂していく状況を明らかにできた。今回の調査地点付近で行われた他の調査で土器も少量出土しているが、従前の調査成果からこの時期の居住域は東に隣接する西ノ辻遺跡を想定する方が妥当と考えられる。

3. 弥生時代

本遺跡に入々が居住を開始するのは、まだ住居址などの遺構は未検出であるが、隣接地の調査および今回出土した土器から、弥生時代前期中頃（畿内第Ⅰ様式中段階の後半）と考えられる。出土した長原式に属す縄文土器と弥生土器は同時に使用されていたと考えられる。縄文土器4点(29%)に対して弥生土器10点(71%)の割合になる。既述したように本遺跡の南東には、弥生文化をいち早く受け入れた鬼塚遺跡が存在する。また、保守的な村として水走遺跡が西に隣接している。土器の形態は、鬼塚遺跡C地点に比して新しい。位置関係と縄文・弥生土器の割合から見て鬼塚遺跡の人々の一部が本遺跡に移り住み小規模な農耕を開始したのではないかと考える。

鬼虎川遺跡の集落（墓域）の東限が段丘崖下になることが明らかになった。従来の調査と今回の調査成果から、段丘崖直下までは方形周溝墓は広がっておらず、中期末の土壙墓が散在していることが明らかになった。

本遺跡における墓域は、2個所が想定できる。1個所は、今回の調査地付近で畿内第Ⅱ～Ⅳ様式に属す方形周溝墓と木棺墓を含む畿内第Ⅳ様式に属す土壙墓群が知られている。他の1個所は遺跡発見の端緒となった遺跡南西部である。南西部の墓域は調査がよんでもいいが、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の土器とともに大型の木棺が採集されており存在は確実である。瓜生堂遺跡においても3個所の墓域が知られており、河内湖東・南辺の大規模集落では墓域が複数存在したことが考えられる。背景に階層差が存在するのではなかろうか。

今回C～J地区とした範囲は段丘上にあたり、西ノ辻遺跡の範囲に含まれる。E～J地区で検出した弥生時代の遺構（方形周溝墓1基・溝2条・土壙2基）は、中期後半から後期の遺物が出土している。検出地点と鬼虎川遺跡の間は約70mしか離れておらず同時期に2つの集落が近接して存在したことを示している。出土遺物のうちで鬼虎川遺跡で出土した畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器は、今回の調査地の西方で行われた調査ではほとんど出土しておらず、時期による遺構の推移を考えるうえで興味深い。

4. 古墳時代

古墳時代の遺構と遺物は、分布密度は高くないが調査地全域で検出された。古墳時代中期

後半～後期後半のものであるが、遺構・遺物とともに中期後半から後期初頭のものが多い。

從来の調査を参照すると、今回の調査地は、この時期の集落の南端付近と考えられる。中期後半の遺物は、段丘崖下で後期に属するものが段丘上で認められることから、初めに低湿地上営まれた集落が時期が下がるに従い東の段丘上に集落範囲を広げたものと推察される。しかし、その東限は東に隣接した西ノ辻遺跡第9次調査で、遺構・遺物ともに検出していないことから今回の調査地のG地区付近が東端と想定される。集落の中心は、今回の調査地の北側に接して行われた第33次調査で竪穴住居や掘建柱建物が検出されており北に広がるものと考えられる。

5. 中世

平安時代中頃（12世紀以前）までの遺構は検出していない。遺物もほとんど確認できなかった。平安時代後期～室町時代の遺構は、井戸・溝・土坑・建物・河川がある。

井戸は12基検出した。時代が確認できたものでは12世紀代が4基、14世紀代が3基、15世紀代が2基、16世紀代が1基で集落の中心が鎌倉時代であったものと考えられる。井戸は、すべて井筒をもたない素掘りのもので、井桁をもつと考えられるのは井戸12である。南側と北側に幅2～4cmの板材が縦方向に打たれて並んでいたり、東側にも板材が少し見られるこどから継板横棟の井戸側があったものと考えられる。井戸側の一辺は0.9mである。

沖積平野部の同時期の井戸では、土層の崩壊を防ぐために曲物、羽釜、桶、板側、瓦などの井筒を置いていて素掘りは数えるほどしか確認されていない。深さも最高が2.4mであり、湧水層が割合浅いこともあって1.3～2m前後のものが多い。それに比べて扇状地の末端付近に位置する西ノ辻・鬼虎川遺跡では素掘りが大半を占め、井戸の掘削も自然河川のなかに築かれたものや掘削を途中で放棄したものを除くと大体3～5.4m、平均3.9m前後となっている。これは土質や湧水層の高さの違いと考えられる。調査時、人力で底まで掘り下げる事が困難だったので、機械を用いて断ち割りを行った。井戸の平面形態は楕円形、隅丸方形、円形である。規模は様々である。井戸の深さは確実なもので2.9m～4.7mで4mを越えるものが4基ある。井戸の底部の高さはT.P. 3m～4.3mである。

溝の大部分は、中世の耕作に伴う鶴溝である。幅30cm前後で南北方向に伸びる。

掘立柱建物を構成する柱穴は、全域に多数存在するが柱通りが悪く建物の復元は困難である。今回検出された井戸との関連や所属時期から見て、12世紀前半から16世紀前半に属するものと考えられる。根石をもつものも少数、認められた。柱穴同士の切り合いは認められる。